市島春城選集（第一卷）

回顧錄

中央公論社版

東京都中野区
大和町二丁目
上井荻〇八
吉

回顧錄

★

市島春城著

中央公論社

¥ 2.50

LICENSED PRODUCT

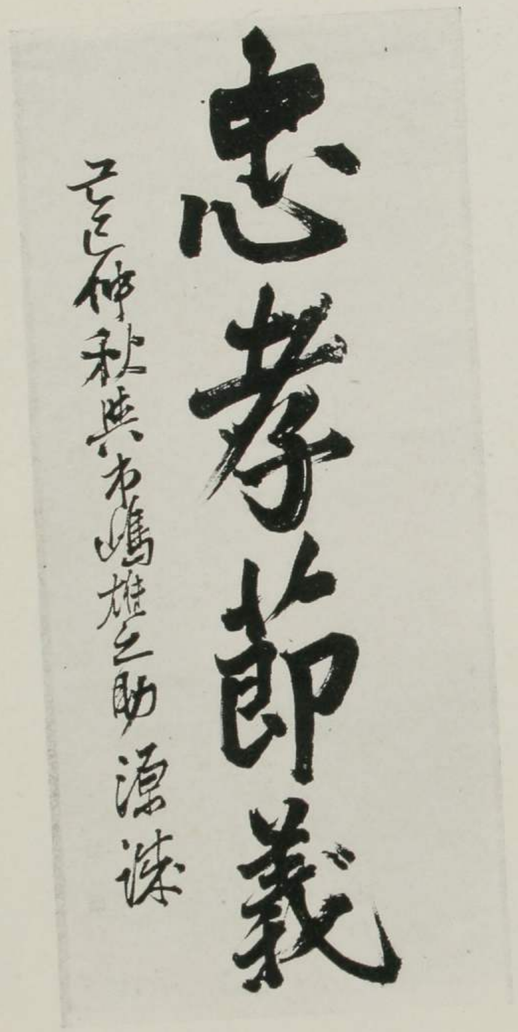
回顧錄

市島春城選集

中央公論社

四復旅

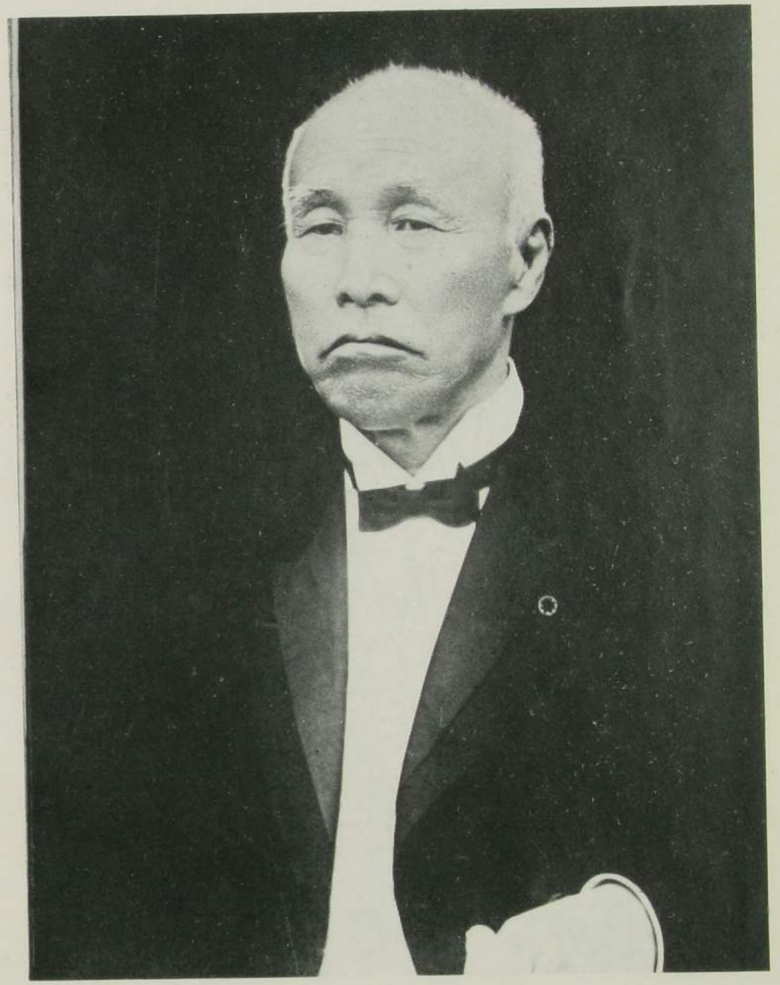
圓顧錄



前原一誠書幅

——本文五頁及二〇頁參看——

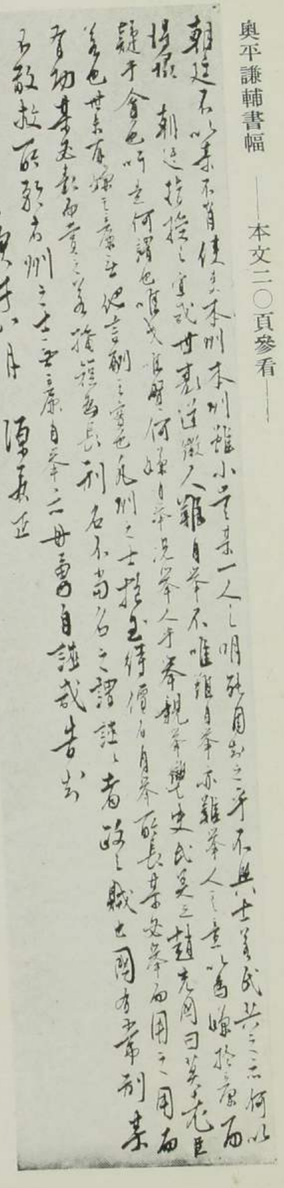
著者壯年時代肖像

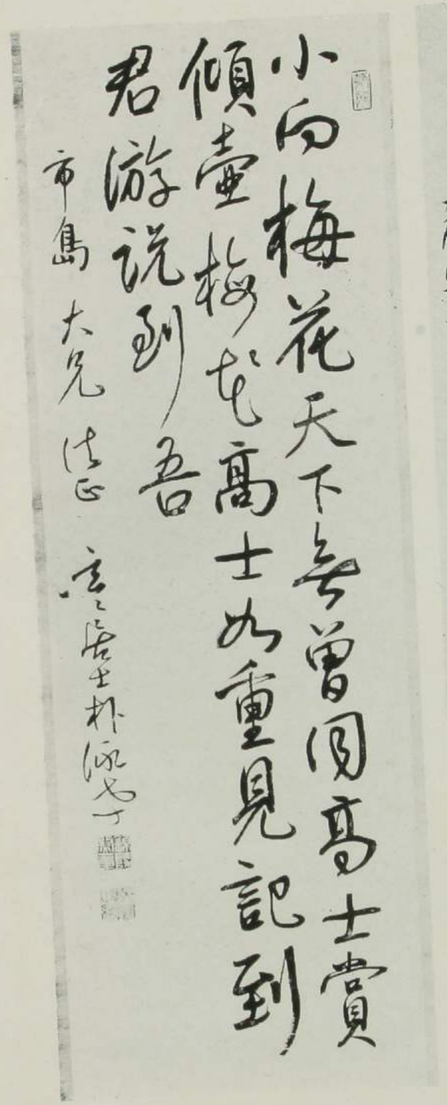


大隈侯肖像

奥平謙輔書幅

——本文二〇頁參看——





朴泳孝侯詩書

——本文一六〇頁參看——

はしがき

自分が隨筆を初めて出したのは大正十年で、「蟹の泡」の小著がそれだ。此書は西洋の文學者の逸事を錄したるもので、其次に我邦の文學者の逸事を「藝苑一夕話」と題して二冊出した。但し此内には賴山陽の逸事を特に省いた。此人に就ては材料が餘りに多く、一冊とするに充分であるので、「隨筆賴山陽」として其後に出版した。

以上は自分が隨筆を出した發端で、爾後は毎年一冊づゝ出すのが幾んど例となつて、左の諸種を出版した。

春城隨筆、隨筆春城六種、春城筆語、春城漫筆、代醉錄、小精廬隨筆、擁爐漫筆、鯨肝錄、文墨餘滴、隨筆早稻田、餘生兒戲

右十一種の外に、高須梅溪氏執筆の「大隈侯一言一行」がある。日本趣味に關

する事項のみを採錄した「春城閑話」がある。此等を併せると十六種にも及んでゐるが、昨年病を得て、「餘生兒戲」を最後として隨筆の筆を全く絶つに至つたが、顧みるに自分の隨筆中數板を重ねたものは「隨筆賴山陽」と「藝苑一夕話」を「文人墨客を語る」と改題して二冊を一冊として出したに過ぎぬ。

自分の隨筆の經歷は大略以上の如くであるが、最近中央公論社から、左の如き順序で自分の隨筆を六冊として發刊したいと需められた。どの書も既に品切となつてゐる折柄、斯かる需めは自分に取つて仕合はせの事ではあるが、紙饑饉の此時機にどうかと一度遠慮しても見たが、重ねて需めらるゝに及んで、遂に其意に任かすことになつた。其六冊の分類は左の如くである。

回顧錄

趣味談叢

人物雜觀

訪書餘錄

雅俗相半錄

隨筆賴山陽

以上六類の隨筆は、「蟹の泡」、「文人墨客を語る」二隨筆を除き、他のあらゆる隨筆より拔摘したもので、學術其他或る種の研究の餘りに成つたものでなく、貧弱なる自家の經驗錄に過ぎない。人物、紀行、趣味談共に、皆折に觸れ體驗したことの隨感隨想で、所謂る閑人の閑筆で、世に裨益ありとは思はない。併し世には、有用の用は誰も知つてゐるが、無用の用と云ふことが無いでもない。若し此の無用の書の中に幾らか用ありと認めらるれば、著者の仕合はせである。

昭和十五年十月

著者識

目次

はしがき……三
幼時の田園生活……九
水禍の思ひ出……一三
幼時見た前原と奥平……二一
忘れられた一人物名和緩氏……二六
揺籃時代の議會……三一
選擧の回顧……三八
記念すべき逐鹿戰……四一
條約改正の斷末……四六
獄窓舊夢談……四六
忽ち識を爲す……四六

新聞界第一の犠牲……四八
入獄……五一
新潟へ護送……五三
險し於し山……五六
地獄と極樂……五八
留置所の一夜……六〇
破獄未遂を見る……六一
護送の奇緣……六三
高田を通過……六四
長野監獄……六四
獄中に書を講ず……六六
獄中の著述……六七
獄中の電信……七〇
外界との交通……七二
寫眞屋となる……七四
書家となる……七七
門下生に博徒の親分……八〇
送別會……八〇
大隈邸の邂逅……八一
相撲興行……八二
演劇……八四
獄中の賭博……八七
死刑……八九
烟草の密入……九〇
一樁事起る……九一
暗室……九二

大隈侯追隨記……九四
所謂侯の大名旅行……九四
侯の旅行の規模……九五
旅行に先だつ準備行動……九六
侯の茶代……九七
大阪の宿屋の勘定……九八
日程の齟齬……九九
大都會に於ける侯の繁劇……一〇〇
侯の經濟演說と軍隊に訓示演說……一〇一
侯の愛嬌……一〇一
旅舍に於ける侯……一〇三
京都と金澤に於ける侯……一〇五
下村大丸に招かれた時の侯……一〇六
村井の長樂館に於ける侯……一〇七
侯の乘用の馬車……一〇八
比叡山に於ける侯……一一〇
賀茂の葵祭見物の侯並に妙心寺と侯……一一一
神戸に於ける侯……一一三
中國筋に於ける侯……一一三
四國に於ける侯……一一五
馬關に於ける侯……一一七
九州に於ける侯……一一八
佐賀に於ける侯……一一九
侯の政治的旅行……一二〇
富山に於ける侯……一二二
新潟に於ける侯……一二三

結　語……一二六
大隈侯の國民葬……一二八
大隈侯國民敬慕會……一三五
震災當時の思ひ出……一三七
足利町の追懷……一三九
酒豪二人の追憶……一四四
意匠を凝らした天神講……一四九
日本女子大學の開校……一五三
侯爵朴泳孝と觀梅……一五九
得月樓の追憶……一六一
横濱に於ける同窓會……一六七
東京に於ける同窓會……一七四
貢進生時代の大學……一八四
神田の文化町……一八八
英學を學びたる最初の新潟學校……一九七
はしがき……一九七
新潟に於ける英學の端緒……一九八
楠本縣令の激勵……一九九
楠本縣令の雄斷と學校の隆盛……二〇二
變則よりも正則……二〇五
本校の建築と分校の設置其の他……二〇七
教師に關するいろ〳〵……二一〇
久保氏の談話……二一三
當時同窓の人々……二一五
その後の新潟學校……二一八
明治初頭文壇の回顧……二二〇

早稲田大學の回顧……二五九
創業期……二五九
發展期……二七四

回顧錄

幼時の田園生活

私は明治八年に東京に遊學してから、爾來今日に至るまで、都會生活を續けてゐるので、家山には頗る緣遠くなつてゐる。時に歸省することもあるが、いつも羇旅匆々で、緣故ある農村などを訪ふ暇もないが、段々老境に入ると、幼年時代のことが思ひ出されて、近頃の歸省には差繰つて農村に足を入れることがある。山河は舊の如くであるが人事の變遷は甚だしく、嘗て親しかりし友達はみな鬼籍に入つて語らう人も無いには失望する。但だ嘗て、村童と遊び戯れた寺院や神社や、網を投じ綸を垂れた河や、擬戰をやつた森や磧が依然としてゐるので、宛ら舊友に會したかにも思はれて無限の感に打たれ、默想沈思すると幼時の追懷がむら〳〵と湧く。

戊辰の戰爭に私の鄕里越後の水原（すゐばら）が戰地となつたので難を避けて、自分は母方の親族の家に寄寓した。其の頃は七八歲の小兒であつた。初めて村の寺子屋に通つたのは此の時である。此の寺子屋は上山と云ふ法印の家で、旣に隱居の身分であつた老僧も書をよくしたが、吾等が習字の師とした人も能書であつた。私は幼少ながら村童よりも何もかも立優つてゐたので、自然塾頭格で、惡戯盛りの三十

人斗りの子供の机を並べた首席にゐた。よく隣村の子供と擬戰をやつたが、私は勿論大將であつた。戊辰の戰亂は避難地にまで及んで近く砲聲を聽いた位だから、少年が擬戰に耽つたのも無理はなかつた。亂後會津の儒者で今泉岫雲と云ふ人が、私の母方の庵室にしばらくゐたが、私が毎日遊び半分に訪うて敎を受けた。其の頃の思ひ出の一二を語ると、母方の親族は村内の素封家で時々雲水僧が泊つた。兎もすると十數人の僧が來泊したこともあつた。此等の僧に飯を强ひることが一興で、私も進んで給仕をやり、飯を山盛りにして幾杯も喰はせたものだ。夜分寢る時に困つたことは、宿屋でないから、ク、リ枕が足らない。そこで枕代りに大きな材木を蒲團の下に置いて寢かした。それでも雲水連は不足を云はなかつたが、吾等の惡戲は彼等が漸く寢靜まると、材木の一端を鐵槌で打つ。其の響で彼等は一齊に愕然目を覺ました。それが此の上もない愉快なことであつた。亦或る時、他日自分の師となつた肥田野竹塢と云ふ儒者が來たことがある。此の人は吾等靑年に種々の怪談を聽かせて後、本座敷の床に香爐を置き、それへ線香を代るゞ立てよと命ぜらるゝので、奥深い座敷を三室も暗中摸索して行くことが怖かつた。それのみならず、此の漢學先生は更に吾等を怖がらせんと、夜具を被つて暗中を怪物のごとく飛び廻るので、これには皆々閉口したが、翌朝になつて座敷を見ると、床近く飾りつけてあつた茶棚がメチヤ〳〵に崩壞してあつたので、叱られ役は吾等でなく、年甲斐もないと老主人から叱られたのが先生であつた。

此の時分寺子屋の村童は毎月二十五日を以て輪番に天神講と云ふを銘々の家でやり、一同が其の家に就いて食事をした。菅公像は自分の家のを持出し、それを必ず掲げて一同拜禮をしたが、貧家では無論座敷などはなく、皆々藁筵の上に坐し、饗應と云うても大きな鍋に筍を煮て鷄卵をあしらつた料理唯一つを、皆々飽食したやうな次第だが、互に親しみ交はるには、此の講はよい慣習であつた。此の講のお蔭で自分は村の大概の家を知つたが、妙な事のあつたのは今より二十四五年も前のことだ、ある貧家に前原一誠の書幅があると云ふ。それにはあなたの姓が書いてあると或るものが知らせたので、或は私の家の舊藏であつたかも知れぬと、借りて見ると果してさうであつて、私の幼名雄之助の爲書で、「忠孝節義」の四字を大書したもので、確に前原が私の家に居た時の書で、卷留めに先考の書もあるので、自分は喜んでこれを讓り受け、今も所藏してゐるが、ゆかりもない家にこれを發見したのは不思議に思ふが、鄕里には私の家の舊藏品が往々散らばつてゐて、それを得ることが歸省毎の一つの樂しみである。

餘談はさて置き、私が漸く十二歲位になつたとき、前に記した肥田野先生の門に入つた。先生の家は私の親戚の家から二里離れた築地と云ふ村に在つた。私は一年ばかり毎日通學したので、其の往復で田舍氣分を滿喫した。官道を行けば二里もあるが、捷路を辿ると餘程近い。それは田圃道を行くのであつた。勿論其の頃は人力車などはなく、必ず徒步で朝出かけて夕景に戻るのが例であつた。田圃

路だから野趣滿々で、所々に農家はあるが、滿目田畑で、目を遮るものとては多少の樹木があつた位で、用水路が縱横で、そこには犬ころ柳が叢生してゐて、發芽の季節にはそれを折つて歸つたこともある。野路に石佛が一體あつた。それをよく目標にして歩いた。秋になると田を刈り上げて、畦畔の所々に藁ニホがあつた。それに身を寄せて憩うたこともあつた。夕景になると家鴨が三々五々ガーガーと聲を發して家に歸るのがおもしろく、農家に就て一匹食用に買つたこともあり、農家の畑の隅に菊花の咲き亂れてゐるのを貰つて歸つたこともある。農夫が用水路に洗つてゐる大根が、白い肌膚をあらはして如何にもうまさうで、家に歸り大根を生で喰つたこともある。往復三里餘の所を、單身獨行だから可なり退屈で、其の頃初めて敎はつた詩作に思を凝らして見ても、一向よい思案が起らず、用水の獨木橋を渡る時、無心でゐたので危なかつたこともある。いつも居村近くなると夕景で晩鐘を遠く聽くことが多かつた。熟知の農夫に出遇つて其の牽いてゐる裸馬に乘つて歸つたこともある。秋の田圃の詠めは今考へて見てもよい氣分で、寂寞蕭條の風氣はいつも神氣を爽かにした。肥田野先生の家には其の頃二人寄宿してゐる人があつた。私よりも年齡も學識も共に先輩であつたが、自分は其の先輩と輪講をやらされたので可なり難儀であつた。先生の父なる人は築村と云ふ儒者であつたが、其の頃は中風で身體の自在を缺き、厠に行く時は自分達の先生が老人を背負つて吾等の講席を横斷して厠に上ぼすのであつたが、或る時老先生背負はれながら大便を漏らしたので吾等も閉口したことが

ある。此の時の同窓の一人長谷川松溪と云ふは新發田の醫師であつたが、その人と巡り遇つたのは二十數年の後で、自分が政治運動をやつてゐた頃、或る暴漢に襲はれたので、新發田警察では醫師を伴うて檢診に來た。其の醫師が卽ち昔の同窓で、別後初めて遇つたのだから双方共懷かしく、警官の前で何事も忘れて昔話をやるので、警官を困らしたこともあつたが、實は檢診を受けるやうな負傷はして居らなかつたのだ。

自分は漸く長じて英學を學ぶやうになつてからも、多少田園生活をやつた。それは岩船郡の關と云ふ村に隣る辰田と云ふ所に養蠶のため蠶室を營み、一時家族はそこに引移つたことがある。自分も、寒暑の休暇には歸省して其の都度田園の人となつた。當時の舊宅を取拂つてから旣に數十年を經るので、其の舊址を見たいと五六年前思ひ立ち親族と共に訪うて見た。此のあたりには一條の官道があつて、路傍に行松があるので、誰に問ふまでもなく、吾家のありし處は知れたが、今は悉く桑田と變じて、一宇の建物も其の跡を留めない。見渡せば馴染の遠い山も熟知の森林も錯綜した堤防も皆そのままであるのに、屋敷は何と云ふ變りやうであらう。眞に低回惆悵去り難い思があつた。此の地は越後の奥地であるが、よくも其の頃奥平謙輔や秋月種樹など云ふ人々がコンナ草深い處へやつて來たものだと、種々當時の感想に耽つたが、此の附近に二三ケ所溫泉のあることを想ひ起し、昔はしば〳〵遊んだ所だが今はどうなつてゐるか、それが見たくなつて、自動車を馳せて一氣に三溫泉を歷訪し、中

に尤も大なる溫泉鷹の巢に暫時憩うて往事を追懷した。鷹の巢は風趣ある地形にあるので、蜀の棧道に似てゐると自分が評したことなどを思ひ出した。今は某鐵道會社で立派に經營してゐるから、萬事萬端舊日の比でなく、如何にも殷賑享樂の地となつてゐた。

水禍の思ひ出

「越山長青水長白、越人長家山水國」の詩は、宋の詩人宰相王荊公の作だが、宛ち私の鄉國越後を詠じたかの如き觀がある。兎角山水美の國土には水禍は有り勝ちである。一朝水魔があばれ出すと、人畜家屋田圃が犧牲になり、其の損害は莫大であるが、これは水神に納める租稅の如きものである。其の年の水害は北陸一圓に及び、吾が鄉國も亦免れ得なかつた。越後には信濃、阿賀、加治等の大川が數多くあつて實は水魔の巢窟である。明治以來治水の績が大いに擧り、水禍は著しく減じたが、なほ夏期大水が到ると、堤防橋梁等の壞裂を免れない。私は鄉國の水害を幾たびも目睹してゐるが、其の慘憺の狀は火災よりも甚だしいものがある。其の害の急速に且つ廣汎に及ぶことゝ、農產を腐爛し土砂で水田を埋沒することに於て。

私の遭遇した大水禍は、戊辰の歲の夏月、信川の暴漫した時にある。自分は其の頃六七歲の小兒で、兵亂を避けて西蒲原郡に於ける所有地の田家に暫くゐたことがある。此の田家は仰ぎ見る程の高い堤防の下に在つたが、その堤防の幅は人力車が二輛優に並んで通過し得る程で堅固に築いたもので

あるが、一朝大水が到ると、氾濫して水は堤防を越え、土が緩む結果遂に壞裂を生ずるのが定例で、其の間數は二十間乃至五十間にも及び堤下は忽ち泥海となる。吾等は卽ち此の災厄に出遇つたのである。斯かる水禍は往々あることだから、避難の用にと平素小舟が家の軒に吊してある。一夜深更水が門まで押寄せて來たので、家僕は大喝一聲、蚊帳を取拂つて吾等を呼び起し、寢卷の儘室內から舟に移され、濁流に投じたが、夜は暗く雨も降りつゝあつたので、子供心には何が何だか一向に分らず、暫く漂泊した後、半ば水に沒した大樹に船が繫がれてゐたのを翌朝に到り初めて知つたが、一夜どうして明かしたか、敢へて畏怖するでもなく、夢中に過した。天明に及び驚いたのは、瀰漫の水が湖海の如く渺茫としてゐて、堤防は早く冠水して見當らず、滿目濁流の滔々たる外、何物も目に入らなかつた。追々上流から、橋梁の斷片や家具などが流れてくる中に、子供心にも驚かれたのは、大きな茅屋が二軒も三軒も押流されて目前を過ぎることであつた。鷄が屋上に立つて悲鳴をあげてゐる光景は吾等をして悽慘の感に堪へざらしめた。殊に船中の一同を厭がらしたのは、艀を繫いだ樹上に五七の蛇が攀ぢ上つてゐて、それが船中に落來る無氣味さは女連を戰慄せしめた。吾等は如何にして安全地帶に達したか、今は記憶に無いが、半日食も取らずに舟中に在つて減水を待つたことゝ思はれる。もと兵亂の慘禍を避けんため此處に移つたのが、案に相違して此の恐るべき水禍を體驗することになつた。當時の童心には、寧ろ陽氣の銃聲を聞く方が興味があつたぐらうなど、後日述懷したやうな始末

で、實に慘憺たる大水害であつた。

鄉國の諸川が戊辰以後も幾回か氾濫し、水禍を繰返したが、自分は東京に住してゐるので、其のすべてを目睹しては居らぬ。たゞ一二を云へば、いつぞや長岡で講演會を開いたをり、信水が氾濫して市中の道路が股に達するまで浸水し、講演の會場に集るものは皆舟に乘つたやうな始末であつた。又ある時の大出水には、自分は偶ゝ衆議院に議席を有してゐたので、職務上新潟附近の罹災區域を船に乘つて視察したことがあつた。此の區域は信濃川に沿うてゐる所で、平素は水の多きに困む水腐地が多く、我田引水のためよりも我田排水で喧嘩の絕え間のない處へ、信水の暴漫は不公平なく田も畑も用水路も皆水底のものとした。吾等は滿目渺茫たる濁流に棹さして半日視察を遂げたが、奈落の底は概ね水田であるから、濁水は肥料と和して惡臭鼻を撲ち、水底には頗る凸凹があつて、用水路の柳などが暗礁となつてゐるので、動もすれば船はそれに觸れて覆らんとしたことが幾回もあつた。いくら熟練の篙師でも田畑に舟を遣ることには經驗がないから、吾等は危險を感じて手に汗を握つた。その際吾等は同船の人に「大海に溺死するなら格別の事、こんな糞水の中に萬一船が覆るやうなことがあつては一生の名折れだ」と言うたが、あの時のやうに不快且つ危險を感じたことは無かつた。

信川の剩水を排出する大河津の分水工事は吾が鄉土に福祉を齎す大事業で、幼時水禍に遭遇した自分としては、此の工事が完成してまだ水を通ずるに至らなかつた時、逸早く縣の技師に伴はれて態ゝ

視察に出かけ、現狀を見て歡喜を禁じ得なかつた。此の分水は長い歷史のある難工事で、地すべりのために幕府時代には終に成功せず、一揆などが起つた難所であつた。加治川の瀨替工事も亦治水事業であるが、これも長い歷史があつて自分の鄕里に關するだけに往年微力を致したことがある。併し此の事業完成の績を見たのは近く六七年前で、今は七里の堤上の櫻樹は他縣に比類のない名勝となつてゐるのに機會がなく訪ふこともなかつたが、始めて其の境を踏査した時は紅雲搖曳の美觀を喜ぶ外に事業上の喜びがあつた。鄕國の水害が昔のごとく甚だしくないのは、此等治水の庇蔭であることは申す迄もない。全體日本の如く雨量の多い國土のハイドロリツクは外國のそれの反譯では役に立たぬ、日本の治水には特有の工夫があらねばならぬと每々思うたことであつた。長い間日本の治水術も幼稚であつた上に、國庫が豐かでなく、全國の各大川が氾濫すると、各川に姑息の復興修理を施して總花的に治水費を振割つた。其の總額は莫大のものであるが、各川に割當てゝ見ると、何れも根本的に永久の治水が策せられず、或る季節に大水が到ると、幾千幾萬圓投じた土功が一掃されて、大損害を幾回か繰返した。吾等は何故總花的に國帑を水に葬るの愚を爲すのだ、何故公債を募つてゞも、根本的の治水を策さないのだと叫んだこともあつたが、今も北陸の水害を聽くにつけなほ此の感無きにあらずである。

幼時見た前原と奥平

過ぐるとし芝の青松寺に萩の亂に斃れた前原一誠、奥平謙輔一派の追悼會が催された。私は此の二豪に緣故があるからその會に臨みたいと思つてゐたが、差支が起つて已むなく缺席した。此の缺席は自分として遺憾とする所であつたので、身代りに奥平の揮毫五幅を、人に託して會場へ持たせてやり展觀に供した。

萩の亂も六十幾年前の昔となり、今日、二豪を知る人は甚だ少からう。私が二豪を見た頃は十歲にも足らぬ幼少の頃であつた。明治八年に東京へ遊學した頃は私が十五六歲の時で、確か其の時前原は萩から出京し、木挽町の或る宿屋に宿泊した。此の宿屋の名は忘れたが、萩の人の話に、それは萩の定宿(ちやうやど)であると聞いた。餘り立派な宿でも無かつた。何でも五七の附添もあつたやうであつたが、前原に面會したのは此の時で、そしてこれが最後であつた。其の後萩の亂が起つた。此の私の訪問は別に意味のあつた譯ではなく、私の親戚熊倉美雅、當時工部省に出仕してゐた人が私を伴うたのであつた。前原は私を見て「大きくなつたナ」と言つたことが頭に殘つてゐる。その後、開成學校で山川健

次郎先生から物理學の教を受けてゐたころ、一日同級生と先生の家を訪うた時、先生は茶の代りに大きな茶碗で冷酒を侑められたが、其の際フト見ると奥平の揮毫の幅が壁間に掲げてあつたので、先生と奥平とが尠からぬ緣故のあることを感じた。此の時は奥平が既に刑死した後であつた。

前原が私の鄕國越後に來たのは明治の初年であつた。私の鄕里水原はもと天領で、今は寂寥たる僻邑であるが、玆に多くの富豪が居つたので、明治の初年には玆を政治の中心とした。即ち越後府を置いたのもこゝであり其の後縣を置いたのも亦こゝであつて、前原は即ち越後府の長官として來たのである。水原には舊陣屋もあつたけれども、宿泊には十分の設備も無かつたので、私の家に宿泊することになつた。邸内には隱宅があつて、それが母屋と離れて可なり廣かつたので、そこを前原を宿す所とした。確か座敷を應接の間に充て、階上が居室で、寢所も爰に設けた。當時府の長官は今の知事などよりはるかに格式が高く、殊に前原は參議格の人であつたから、私の家でも全力を接待に盡し、粗略のないことを期した。當時は政府の顯官を宿すことが、富豪の大切な奉仕であるかに考へられ、これをもつて光榮とした位である。言ふまでもなく宿泊料を取るではなく、費用萬端みな賄つたものである。

私は當時頑是ない小兒であつて、時には前原の居室で遊び戯れ、菓子などを貰つて喜び、毎日遊びに行かねば氣がすまぬやうであつた。前原も可愛がつてくれられたが、家父が氣をかねて、さう矢鱈

に往つては困ると叱られたこともあつた。幼少であつた私がどう前原を見たかといふと、極めて穩かな沈默の人で、どうしても恐しい人とは思はれなかつた。いまになつて考へても、あの人が山縣よりも軍上手の武人であるとは思へない。確か顔面には薄あばたがあり、色白であつた。如何にも物に頓着せず、朝寢坊でそして無性であつた、あの人のエライ處がそこにあつたのだらう。如何にも生眞面目で、怒ることもなく亦笑ふこともなかつた。居室にはいろ〳〵の重要の書類が散亂してゐた。それを奇麗に片付けることは御本人の望でもなかつたらしく、三人の小姓のやうな青年が附いてゐたが、此等も居室の掃除をしなかつた位であるから、私の家人などは勿論遠慮して此の室に立入らなかつた。たゞ折々遊びに往つたものは、私と私より二歳違ひの弟であつた。此の室へ漫りに入ることの出來なかつた理由の一つは、毎月長官が受取つてくる俸給が、奉書紙で包んだまゝ放り出してあることであつた。此の室には床の間がなく、其の代りに薄暗い物置のやうなものがあつた。別に戸も何もなかつたが、重要の物を入れ置くには究竟の處であつたので、官文書でも俸給でもこゝが放り込み場所となつた。こゝは前原のほか、手をつけぬ祕密の所であつた。が、其の主人公が無性であつたから、主人公自身も殆ど手をつけたことがないといふ始末で、毎月の俸給が、封も解かれず、累々として他の文書と雜居してゐた。然るに此の封も切らぬ金がいつしか無くなつてをる譯は、前原をそゝのかして金を貰ひにくる甲乙があつた。かれ等は前原の性格を十分知り拔いてをり、若しも金の入用

あれば私の家が辨ずることをよく承知してゐるので、事を設けて無心をいふと、恬淡な前原は、そこらに包んだ金がある筈、それを持つて往けといふ調子で、みづから手を下さず、無心をいふものに捜させたので、幾包も胡麻化して持去るといふ始末で、俸給は封のまゝ他人の手に移り、前原が歸國する時には旅費すら無かつたので、私の家で辨じた筈である。

前原の無頓着であつたため私の家で困つた事は、各方面から日々寄せ來る贈品の中には少からず魚類もあつたが、その始末に就いて主人は例の無頓着で、小姓輩に何一言云ふでもないから、私の家では勝手に始末が出來ず、みす〳〵腐敗せしめたが、後には前原の性格が分つたので、ドシ〳〵勝手へまはして始末をした。當時前原に使はれてゐた吾が鄕人が、私の記憶では二人あつた。それは伊藤退藏と遠藤七郎だ。此等はみな士族でなく、市井の人であつたが、官仕に足る才幹があつた。時々前原に無心を云つた連中は卽ち此等である。伊藤退藏は水原の蠟燭製造營業であつたが、晩年岩船郡の郡長をつとめた。前原の小姓格で附添うてゐた三人の靑年の一は、此の伊藤退藏の養子で伊藤悌治というた。他の二人の姓名は忘れたが、みな越後人であつたやうに思ふ。伊藤悌治は私より年長であつたが、後に東京英語學校で一緒になつた。晩年大審院の判事として相當の地位を占めた。彼等小姓連も當時髮を切り下げて、紫の紐で結んでゐた。それが當時の流行であつたのだ。彼等の務は、上官の出仕の時御用箱を携へて追隨することゝ日々の訪問客を取次ぐ位なものであつた。遠藤七郎に就いては

多く語るを要せんが、私の家に前原が、歸國後遠藤に寄せた書簡が一通ある。それに依ると前原には一人の妾があつたことがわかる、「あれも氣の毒だ、どうか俺に代つてよく世話をしてくれ」とある。此の妾はどこに置いたものか、水原在任時代妾宅があつたとも聞かない、私の家には無論妾の來たことは無い。しかし妾のあつたことは爭はれない、流石の豪傑も女なしには日が送れなかつたと見える。

前原が私の家に宿した數月間は、警衞のために特に門番を置き、又夜番を置いた。裏門のそとには隍(ほり)があつて橋が架してあつた。こゝは家僕の通用する門で、裏門から滅多に前原に面會を求める客の來たことがないのに、ある日のこと、一癖ある佩刀の一士人が、袴羽織もつけず「前原をるか」とヅカヅカと這入つてきた。これには門番も驚いたが、誰何しても名を云はず、遮らば斬りも捨てん見幕であるから、門番も戰慄して隱宅へ案內すると、これが奥平謙輔であつた。門番が後に語つたのによると、テツキリ刺客であると思つたと云うた。如何にも奥平の相貌は斯く思はせたであらう。彼の顏面は漆のごとく黑く、兩眼は爛々として光つてゐる。衣服は粗野で袴羽織も着けず、白縮緬の兵兒帶を締め、足袋も穿かず古びた下駄を突つかけてゐた。何人が來ても前原に對しては敬語のありたけを用ひるのに、これは呼棄にして、何を問うても一切答へない。門番が刺客と速斷したのも全く無理はなかつた。今考へて見ても、奥平は案內もなく、よくも裏道をたどつてきたと思はれる。案ずるより

も生むが早いといふ如く、門番から此の椿事の報告される前に、奥平は早や前原の居室に通つて一別以來の挨拶が交換され、間もなく破鐘の如き奥平の大聲が階下に聞えた。二豪の此の會見は何年振とかいふのに、兩人顔を合はせて唯だ一語「オー」と云つた計りで、如何にも簡單なるに驚いたとは傍らにゐた小姓の語る所であつた。奥平は此の日より前原と同室の人となつた。奥平は多分佐渡の准判事として赴任前先づ前原を訪ねて來たのであつたらう。私の家は圖らずも爰に萩の二豪を併せ宿す緣故關係を有するに至つた。實は奥平は早く越後に因緣があつた。戊辰の戰爭に越後を平定したのは此の人であつた。彼が新潟の酒樓で紅燈綠酒に親しんだのはツイ一年前の事である。併し吾が鄕里に來たのはこれが初回であつた。

前原と奥平が私の家に同棲したのは幾日位であつたらうか。私の記憶では餘り長くなかつたやうである。兩人の性格が全然異なつてゐるのに、よくも同室に起臥が出來たと私の父はよくいうた。兩人の異なるのは其の風采のみでなかつた。一方は鷹揚で寡言であるのに、一方は性急で多感である。一方は朝寢坊で日の三竿に上るを知らないのに、一方は東方の白む前に早く目を覺まして破鐘の如き聲で詩を吟じ書を讀むを例とした。一方は喜怒哀樂色にあらはれず、端倪の出來ない所があるのに、一方は慷慨激越、兎もすれば劍を按ずると云ふ風であつた。一方は酒を控へ目に飲んで泥醉の境に至らないのに、一方は斗酒を辭せず、醉倒すれば鼾齁雷の如くである。いくら相許す朋友であつても、よ

く起臥を共にし得たものであると怪しまるゝほどに其の性格が異なつてゐた。但だ兩人共に同じき所は頗る生眞面目であつた。前原を以つて玄德に譬へたならば、奥平は張飛であつたらう。奥平はどう見ても武勇の人で、渾身是れ膽、進むを知つて退くを知らぬ人と見えた。機略は恐らく此の人の短所であつたらう。しかし學問は深く、詩書共にあの頃の有志家の群を拔き、文章は曾て草稿を作らず立ちどころに成つた。

奥平が私の家の客となつて、家人は其の面相で恐れたが、吾等小兒は相變らず其の膝下に遊び戯れた。コワイをぢさんも吾等には優しかつた。奥平は佐渡の准判事を勤め、それを辭してから再び私の家を訪ねて來たことがある。その時は既に前原は去り、私の家も水原から他に移つた頃であつた。今想ひ起すが、岩船郡の辰田といふ村に私の所有地があつて、そこに土地の管理人を置く小さな家があつた。奥平はそこに行きたいとあつて、吾等兄弟も伴はれた。こゝは越後の僻土で奥平を待つ設備がなく、酒は四斗樽を運んで其の鯨飲に委したが、下物の調理には困つた。然るに奥平は一向無頓着の人で、肴はあるに任せて別に望がなく、飯を喫する段になると、必ず總べての肴をしりぞけて、梅干だけを副食物とする人であつた。斯かる簡易生活でなければ此の田園には一日も居らるべきでない。案外此の田家が氣に喰つて數日滯在され、毎日吾等を伴うて河原に散策に出かけ、犬などに出會ふと刀を拔いてどこまでも逐ひかけるといふ意氣で、今日なれば不良の二字の免れ難い型であつた。吾等

は此の豪傑には慣れ親しんで、其の醉倒を待ちて其の眞黑の顏に樂書をしたり、玩具を頭髮に結んだりして、サンザン戲れても、眠を裝うてゐるのか一向知らぬ顏で、夢が覺めると面上の樂書などを氣にもかけず、得意の詩を高吟し、興到ると何か書いてやる、墨を磨れと云はれ、吾等は幾度も墨を磨つた。私が今藏してゐる四五の幅は皆奥平が越後在留中の筆ではあるが、十年前東京で手に入れたもので、幼少時代に書いて貰うたものは四散して一枚もない。今想ひ起すが、此の辰田に奥平が醉後揮毫の額が久しく私の鄕里の家に揭げてあつた。それは「敵愾」の二字であつたが、奥平は小兒のためにもこんな激越の字を選ぶ人であつた。前原の書もみな散じて幾んど無い、僅に一幅あるのは「忠孝節義」の四字を縱に大書し、私の幼名雄之助の爲とある。これが不思議にも母方の村落の一農家にあつて往年手に入り、今はそれを記念に藏してゐるが、前原と奥平は一寸語を選ぶにも各〻其の性格をあらはしてゐるやうに思はれて、そこに私は興味を感ずる。

奥平が越後に來たのは此の時が最後で、前原とは後年東京で遇つたが、奥平とはこれが永訣であつた。前原が越後を引拂ふ時、私を長州へ伴ひたいというたと聞いたが、それは戲れであつたかも知れんが、父は勿論諾さなかつた。若し伴はれたならば、或は前原と運命を與にして、靑松寺の五十年記念祭に祀られた組であつたかも知れん。

忘れられた一人物名和緩氏

維新前後國事に鞅掌して功勞あり、不幸にして早く病歿し、今では其の名が埋もれて幾んど知る人もないやうな氣の毒な人は少からずある。私の鄕里越後の水原（すゐばら）といふ所には、最初越後府が置かれ、後には水原縣が置かれた。（新潟縣の置かれたのはその後である）越後府の長官として前原一誠の來た事は前に錄して置いたが、水原縣の長官として名和緩（ゆるむ）といふ人が來た。確か官名は縣參事であつたやうに思ふ。此の人などは、若死をせなんだら無論臺閣に列した人であらうと思ふのに、三十六歲で米國に客死した。此の人は長州の人であるから、長州では知つてゐる人もあらうが、一般からは忘れられてゐる人物である。私は此の人に多少の緣故があるから時々思ひ出すが、其の人の經歷が一向わからず幾十年を經過した。然るに或る人が毛利家に就いて略歷を調べてくれたので始めてその事蹟を知ることが出來、私は骨肉の履歷を知り得たかのやうに喜んだ。實は此の人と私は師弟の關係があるのである。私は當時七八歲の小兒であつたが、名和氏が私の宅へ來られた時に、父から見習ひに私を毎日長官の寓所に通はせたいと依賴があつた爲か、長官から求められたのか、そこらの處はよく分ら

んが兎に角毎日通つたものである。名和氏は舊陣屋に寓して居られ、毎朝縣廳へ出勤され、午後歸らるゝと、私に本を教へられた。其の頃私は「四書」の素讀が濟んで、「五經」に手をかけ、「詩經」の素讀を受けた樣に記憶する。見習ひというても給仕などをするでもなく、唯教はる計りで、菓子などを頂戴して夕刻家に歸るのが常であつた。私の外に誰も本を教はりに來るものも無かつたことを思ふと、全く特別の事であつたと思はれる。名和氏は其の頃二十臺位と見受けたが、三十を聊か越してゐたことが今度分つた。優形(やさがた)の白皙の美男子で、如何にも溫厚に見える人であつた。素讀を受ける時は物やさしく懇切に教へられ、嘗て叱られたことなどは無かつた。小兒が時めく役人に對坐するのだから、いくら無心でも多少畏怖の情があるべきだが、些しもそんな氣が起らず毎日樂しんで出かけた。今考へて見ると、可なり愛されたものと見える。幾十年の間、時に此の人を想ひ起すのも、畢竟其の故であるかとも思ふ。何にしても幼少の時であるから、直覺したことの外は記憶になく、深いことは一切分らないのであるが、氏の居室は十疊ばかりで、それに四疊ばかりの隣室があつた。氏は此の十疊を書齋とも寢室ともされてゐた。床には妙な幅が常に揭げられてゐた。それは多分氏の所藏品で何か意味のあるものであらうと思ふが、繪は甲冑を着けた武將が生首(なまくび)を腰に下げて馬に騎り長鎗を手にしてゐる圖で、生首からは鮮血が滴り如何にも悽慘の氣の漲るものであつた。何故か他の幅とかけかへられたことはなく、いつも素讀を受ける時には此の幅を一瞥したものである。長官の處へは餘り多

くの來客も無かつたので、時々紙を展べて詩などを書かれ、後には蘭竹の畫を學ばれてしきりに描かれた。其の畫の手ほどきをした者は私の家に仕へた高橋耕雲といふ畫家であつた。此の頃越後に來た大官連は多く妾などを蓄へたり娼樓などへ通つたりするのが例であつたのに、此の人にはそんなことは無かつたやうである。併し幼少の自分が斯く見たのは僻目(ひがめ)であつたかも知れんが、自分は此の點において感心な人だと信じてゐる。畢竟酒色を斥けた爲に書畫で無聊を慰したのではあるまいか。非常に簡單な生活で、執事が一人、炊事のため老婆が一人ゐたに過ぎない。執事は二十歳位の藤井といふ人であつた。毎朝縣廳へ出勤さるゝ時には此の執事が桐の用箱を携へてお供をした。辨當持參であつたと思ふがそれも甚だ質素のもので、今時の大官の日常生活とは雲泥の差があつた。縣廳といふのは私の宗家の舊址で、その地形が城地の如く高く築き上げられてあるために戊辰の戰に兵燹に罹つた。亂平いでこゝに越後府の役所が建設されたがそれが即ち後の水原縣廳で、名和氏はこゝへ日勤して政務を見たのである。自分は毎日名和氏の寓所の玄關に屢々跪いて送迎したことを想ひ起す。

今度手に入つた略歷に據ると、氏は毛利家の老臣毛利出雲(いづも)の家來とあつて、毛利家の陪臣である。幼少から聰敏人に過ぎ、篤く道に志して四方に遊び、常に氣節を尙んで國事を慨した。文久二年には屢々京師に上つて主(もつぱ)ら力を王事に盡し、同三年には藩の寃を雪がんと有志の徒を激勵し、大義のため死するは此の時であると意氣大いに振ひ、其の主出雲に請うて一小團を組織し宣德隊と號した。之が

長藩唱義の嚆矢である。又國老と謀つて文武を講習するため尙義場をも設けた。此の頃長藩には正俗二派の議論があつて、俗論派は君側を圍み、その爲す所往々勤王の大義に悖り藩主をして不臣の譏りあらしめたので、元治元年、藩老益田右衞門介等は之を憂ひ、君側を淸めて君寃を雪ぎ、王室に干城たらんことを期し、尙義場、宣德隊の人々を率ゐて京師に入つた。名和氏は言ふまでもなく隊伍を率ゐた一人であつた。然るに反對派の氣焰がなか〳〵熾んで、遂に事が敗れたので、益ゝ俗論黨は勢を得て正義の士を陷れた。名和氏も亦連坐して終身禁錮に處せられたのである。然るに時運到來、慶應元年には正論黨大いに起り、高杉晉作が崛起して遊擊軍を率ゐ吉敷に陣を張つた時に氏の禁錮を解いて軍の參謀たらしめた。名和氏に緩の名のあるのは之を記念する爲であつて、略歷には繩緩と改稱したとある。藩主より若干の俸を賜はつたのも此の年である。翌年幕兵が藩の四境を侵した時も氏は遊擊軍の參謀として小瀨川口に防戰して功があつた。明治の初頭には京師に入つて岩倉公に寓仕し、公を助けて王事に鞅掌し、終に維新政府に出仕することになり、明治二年八月、前原の後を承けて水原縣の參事となつた。略歷には新潟縣參事となつてゐるけれども、新潟縣を置いたのは其の後であつて誤つてゐる。氏は一年職に在つて、辭して四年米國に渡航し、專ら民法の學を修めたが、六年空しく志を齎してボストンで客死した。氏は晩年名を道一と改めた。享年僅に三十六である。

私は以上の略歷に據り氏が長藩正義派の旗頭であることを知り、氏が高杉晉作、岩倉相公の帷幕の

人であつたことを知り、又戎事を以て身を起した人であることをも知つた。併し氏は其の體格相貌から見ても武人ではなく、寧ろ爲政家たるべき人と思はれた。氏が早く渡米して民法の學に志したのも爲政家の素養を積まんとしたのであらう。或る書に米國に於ける我が公使館の書記官として渡米したとあつたが、多分書記官名義での遊學であつたのであらう。氏の地位は內地に於ては旣に書記官以上であつたのだ。縣の參事と云へば今の知事のやうなものであるけれども、其の頃の參事は今の知事などよりも遙に大なる人物であらねばならなかつた。幾んど大臣に次ぐ程のものであつたやうに思ふ。私が大隈侯の薨後其の家に藏する多くの書簡を調べた折に、圖らずも名和氏が侯に寄せた一簡を發見して少からず興味を覺えた。其の手簡は侯の訪問を謝したものであつて、越後へ赴任の期が迫つてゐることを云ひ、又當面の國事に對して多少の意見を陳べてあつた。この遺簡から推測しても參事の人物と地位が重かつたことが窺はるゝ。若し壽を保つたならば、歸朝後必然臺閣に列したであらうに、惜しいことであつた。私が幼少の目で見た氏の體格と相貌は、長壽を保つには餘りにキャシヤであつたやうに思はれた。私は六十年間謎のやうに此の人の經歷を臆測した。それが始めてハツキリ分つて見ると、如何にも立派な經歷であるのに、一層追慕惋惜の情に堪へない。

搖籃時代の議會

帝國議會の生まれたのは明治二十三年である。憂國の士が如何にこれを見ることを待望したか、宛ら春を待ち花の咲くを待ち遠しがつたやうな觀があつた。それも其の筈、立憲政治は振古未曾有の事で、我が國史の上に輝く大事件であつた。當時の政情を案ずるに、官民の抗爭が甚だしく、その安全瓣として議會が必要であり、志士のオアシスとしても之が必要であり、民衆の氣を吐くのにも亦これが必要の處であつた。

議會は豫期の如く開けて、誠に目出度い慶びであつた。併し呱々の產聲を揚げた許りの議會は危ない搖籃の內にあた。議席に列した選良は、勿論議會の操縱に慣れなかつたが、政府者も選良よりも憲政の認識が足らなかつた。これは自分の偏見でなく、今となつては誰も異論の無い公評である。斯樣の譯で、折角議會が開けても圓滑な政治が行はれず、官民の抗爭は益ゝ甚だしく、明治二十七八年日淸の役までの五六年間は、議會は官民抗爭の土俵であつた。

初期の議會に於ける政府の首腦は山縣で、其の次が松方、それから伊藤が出た。初期の議會は幸ひ

に無事に終了し、元勳三條、大久保、木戸の墓に特に勅命で第一議會終了を報告されたが、第二議會には早くも解散を見た。そして總選擧には激烈な選擧干涉が行はれ、高知、佐賀、熊本、石川の諸地には流血の慘劇を演じ、某々の地には軍隊の出動があつた。此の間に保安條例や豫戒令が布かれ、國士も壯士も玉石同架に放逐され、言論の梗塞は此の時より甚だしきは無かつた。

第三期議會は辛うじて無事に畢つたが、第五期議會伊藤首相の時に亦解散の不幸を見た。卽ち議會の初期より五六期に至るまでは騷擾の議會史で、呱々の聲を擧げたばかりの幼稚なる議會は斯かる物騷裡に育つたのである。

飜つて當時の選擧如何と顧みるに、初期から、意外にも肅正の選擧が行はれた。當時は今日と異なつて、普通選擧でなく、選擧人にも被選擧人にも、納稅居住等の資格があつて、選擧人の數も甚だ少く、二十五年の調べに依ると、京橋區の選擧人は僅に二百二十數名に過ぎなかつた。

當時はどこの選擧區でも第一流の人物を擧げんと競ひ、輸入候補が多く、名家は諸方から引張り凧で、二三區から擧げられた人もあつた。適當の人物に被選擧資格がなく、他家の養子となつて資格を作つたものもあつた。大石正巳が尾崎咢堂の媒妁で伊勢古市の油屋の養子となつたなどが其の一例である。候補の選定が人物本位であつたから、後年のやうに金力で候補に立つことが出來なかつた。候補に擁立されゝば選擧費を煩はさないのを條件とし、選擧費は有志者が負擔したものである。其の頃

は投票の賣買が行はれなかつたから、後年の如く巨費を要することもなかつた。隨つて選擧場は清淨であつた。

政黨は既に存在したが、政府黨の銘を打つたものは無かつた。但し中立と云ふ無所屬の内に、暗に政府と氣脈を通ずるものがあつた。併し民間では役人の古手を候補とすることを恥とし、政府筋に秋波を送るものを吏黨と呼んで擯斥した。

以上の如き選擧區の情勢で生まれた議員はどんなものであつたかと云ふと、長く國事に盡くしたものが當然當選した。其の他各地に散在の著名の人が多く擧げられた。政府に脈絡を通ずる者もあつたが、それは私生兒に齊しいもので、滔々たる議員は多く藩閥の非違を憤慨するものであつたから、民黨の氣勢の議會に横溢したのは自然の勢であつた。恐らく四十七年間の議會史に於て、尤も國士型の選良を議會に送つたのは初期であつたらう。

此の際の議員は歳費八百圓などを眼中に置くものは無く、眞面目に且つ嚴正に身を持して、大概は祕書などを置いて議案を調査せしめたり、相當の邸宅を構へて體面を維持したから議員の信用は此の時が尤も社會に厚かつた。議會は搖籃期に在つたとは云へ、選擧場の淸淨と、選良の人を得た點から云ふと、搖籃期が模範期であつたと云ひ得るのである。

國士揃ひの初期議會は壯觀であつたが、政府は到底太刀打が出來ず、衝突の結果解散を二度迄行う

た。初度解散後の總選擧には思ひ切つた干渉を行ひ、保安條例、豫戒令でクーデターらしいことをやつたのみならず、投票間際に自由、改進黨の首領板垣、大隈を始め、兩黨の幹部を裁判所に召喚するごとき妨害までも試み、之がため壯士輩を刺戟して其の跳梁を挑發し、軍隊をもつて鎭撫するごときを不祥事さへ現出し、議會史に汚點を印したものは卽ち藩閥政治家で、神聖の選擧場を汚したものは、決して政黨のみでないことを忘れてはならない。

吾々が遺憾とするのは、初期の議會に折角粒選りの國士が揃つて擧つたのに、此の干渉によつて其の大半を振り落したことで、惜しむべきことであつて、亦國民の長く忘れてはならぬことである。

初期より五六期迄の議會は物騷の事が多かつた。建てた計りの議事堂が燒けて、貴族院が華族會館に、衆議院が元の工學寮で開議し、閉院式が宮中の豐明殿に行はれたごとき變態の事もあつた。

壯士が横暴を極めて議員が其の襲擊を受けた例も二三に止まらなかつた。第四議會の時の首相伊藤が不慮の事で、議院の大切の場合に負傷し、臨時に首相を置いたこともあつたが、こゝに漏らしてならないことは、第五議會の時の衆議院議長星亨が、院議で懲罰を受け、遂に議院から放逐されたことで、其の原因は星の收賄事件で、議會は假藉なく之を罰したのを見ると、其の頃の議會が如何に嚴正であつたかゞ知れる。

自分などは今になつて思ふのに、議會は搖籃期に於て相當の選良を得、議會並に選擧區の風氣も淸

潔であつたのに、政府には選良に對する雅量が無かつたことを遺憾とする。若し政府に相當雅量があつたら、あれほど頻々たる衝突も無かつたであらうにと思はざるを得ない。

山縣、松方など云ふ人々に、立憲的理解があらうとは思はれない。唯だ伊藤こそ憲法の立案者で、斯人こそ理解もあつたであらうに、何故か最も大切な初期、二期に隱れてゐて、やつと四期に現れたのは甚だ遺憾であつた。伊藤が折角現れても解散を餘儀なくされたのは、松方の選擧干渉が祟つてゐて、議員の氣勢を如何ともすることが出來なかつたのであらう。

伊藤内閣の時豫算の衝突に、政府は妥協に意なく、宛ら緣日商人の如く、一錢一厘もまからぬと喧嘩腰の態度は、偶ゝ時の政府者が立憲的素養の無かつたことを自白したもので、吾等は當時を追想すると洵に感慨に堪へないものがある。

選擧の回顧

自分は今帝國議會創始の頃の選擧を回顧して見ようと思ふが、それに先だち何が選擧を腐敗せしめたかを一瞥するに、此の弊害は一概に政黨の責任にのみ歸するのは公平でない。既往に於て政府も度度選擧干渉を露骨にやつた。政府は自己に不利な候補を叩き落すに地方官を使嗾した。總選擧のある毎に政府に都合のよい結果を擧げしむるため例として地方官の交迭を行うた事は著明な事實である。乃ち選擧の神聖を害したもの〻中に政府のあつたことを忘れてはならぬ。亦選擧の都度政黨は何時も陰に巨額の運動費を資本家から徵した。資本家は或る政黨を援助すると他日報酬があると云ふ打算から、巨額の出資を辭さなかつた。此の金が則ち投票を買ふの資金であるから、資本家も亦選擧腐敗に責任がないとは言はれない。選擧勝敗の決は、金をバラ蒔く多寡にあるのだから、選擧戰は金を蒔く競爭である。逐鹿場が年を逐うて益ゝ腐敗するのは無理はない。地方官が或る政黨に荷擔して聲援するのも、其の心理は資本家と同樣で、他日の報復を期待するに外ならない。一概に國民が幼稚で選擧權の重要性を知らないなど言ふけれども、指導者の地位にあるものが、腐敗して居ることを思ふと、

選擧民の無智を云々するは抑〻末である。

明治二十二年に憲法が發布されて選擧法が公布され、初期議會の總選擧は其の翌年であつた。但し府縣會議員の選擧は前から行はれてゐた。帝國議會の選擧を回顧する前に、先づ府縣會議員選擧の狀況を一瞥することが必要である。自分も帝國議會の開ける三年ばかり前に、新潟新聞の記者であつた際、或る人の勸めで縣會の選擧を爭うた經驗がある、選擧は新潟であつた。此の頃は縣會議員になりたがる人も極めて少く、選擧にも冷淡であつた。選擧規則もまだ甚だ備らないもので、町の年番が投票を集めて歩くやうな始末で、其の年番に一杯飲ませれば、投票の變改などはどうでも出來たものである。自分は或る有力者に任しきりで、何等の運動もしなかつた。戸別訪問などは其の頃まだ行はれず、選擧人を饗應するやうなことも無かつたので、費用の負擔も無かつた。さて愈〻開票となつた結果、私が一票負けとなつた。然るに投票を改めて見ると私の門下生格の或る富豪の投票は自記調印までしてあるのにそれが失せて居ることが發見され、爰に爭議が生じ選擧やり直しとなつた。實は從前投票を改めることもなく、曾て爭議も起らず、選擧やり直しなどは無論無かつたのだが、此の選擧の候補者は一方は新聞記者でそれに對抗するものが辯護士であつただけに、既往の如くどうでもよいでは濟まず、双方極力爭つて全投票を無效とするまでに至つたから、從來冷淡なりし選擧人も、爭鬪の猛烈なるに驚いた位である。新潟は勿論、吾が縣で選擧の活機を示したのはこれが始めで、漸く選擧

に注意を拂ふことになつた。乃ち此の選擧は吾が縣では劃期的のものであつた。

扨て明治二十三年議會開設當時の選擧はどんなものであつたかを回顧すると、此の頃は被選擧人選擧人にも若干の納税や幾年かの居住資格を要した。隨つて選擧人は今に較べれば甚だ少かつた。運動の取締もまだ寛大で、戸別訪問も勝手であり、選擧人を饗應するなども大目に見られてゐた。そして警察も不公平な干渉などをしなかつた。何にしても初期の選擧に當選することが名譽と考へられたから一般に緊張した。併しどんな人を選良として送るべきかに惑うた。既に黨派で候補を立てることにはなつてゐたが、第一流の人が地方に由つてあつたり無かつたりして、しきりに候補の輸入が行はれた。事實人物本位であつたが、長ちく國事に奔走したものが名聲が高かつたので、それ等が自然候補に立てられた。野心家が功名心の爲に候補に立たんとしても多くは顧みられなかつた。まだ金力で投票を買ふことが行はれず、候補に立つたものは概ね有志者に擁立された關係上、選擧費は有志者が分擔した。黨の本部から所屬候補に選擧費を與へるやうなことは後のことで、初期には黨の本部は應援に演說者を派遣するくらゐのことで、金錢の應援などは全然無かつた。勿論選擧費も競爭激甚地は別として大たい多くかゝらなかつた。三千圓乃至五千圓位であつたらう、一萬圓かゝつたと云ふと驚くほどであつた。候補者には金を出させないのが寧ろ原則であつたが、事實は候補者も出したに相違ないが、自家の費用を辨ずるのが主であつた。偖て當選した選良は流石に立派なもので、國士型の人が

多かつた。當時の歳費は八百圓であつたが、それ式のものを眼中に置くものは少く、議員は自家の體面を重んじ、祕書の一人位は手元に置き、家も相當の構へをして抱へ車もあつたやうな始末で、概して品位は高く、社會よりも尊敬を受けた。

當初の選擧法には選擧人たるものは直接國稅を納める條件があり、又其の他に若干年居住の條件もあつた。そこで其の資格を作る爲に人から土地を借りた候補者が到る處にあつた。輸入候補の中には住居資格を缺く爲に他家へ養子となるものもあつた。明治二十五年の新聞を見るに、大石正巳が尾崎咢堂の媒妁で伊勢の油屋の養子になつたことが見えてゐるが、こんなのは勿論資格を作るためであつた。選擧費用は地方の狀況で區々ではあつたが、概して後年の如く多額の金を要しなかつた。僅に端書代や事務費位で濟んだのは横濱市で、こゝは島田三郎氏が生涯選擧區とした所で、選擧費用の少い點では模範的であつた。

戸別訪問は早くから都會地に行はれた。これは選擧界の陋習で、候補者が自ら選擧人に就いて叩頭投票を賴むなどは不見識此の上もない。傲岸なる候補者はこれを厭うたが、それをせねば勝てぬと云ふから己を屈して叩頭するに至つた。自分などは都會で選擧を爭つたことがないから此の醜態を免れたが、曾て友人の選擧を後援して五七の有志者と市内を回つたことがあつた、或は酒屋の店頭、或は薪炭商の家に就いて何某に投票を賴むと丁寧に申入れると、主人は冷然たる態度で諾とも否とも云は

ず、宛ら乞食や物貰ひに對するが如きものであつたので、自分はつく〴〵愛想をつかした。

地方の選擧も處に由つては戸別訪問もあつたが、自分の選擧區などでは此の事が無く、寧ろ候補者の斯くすることは其の人の威嚴を害ふものとして、高閣に据ゑられたから此の點は樂であつた。勿論演說會には毎日幾度も出かけ、夜分も頻りに臨んで舌を爛らしたものだつた。總じて選擧の勝敗は參謀の如何に由るので、參謀其の人を得ざれば費用が嵩むのみで成績が擧らない。自分などは最初參謀に一任して日々其の情報を聞き結果を卜したものだが、參謀が不慣のため各地の報告に誤られ、開票の結果が大いに齟齬するので漫りに人に依賴するの非を覺り、後には自分自身諸方の情報を査察し、それに由つて表を作つてから、漸く得票の豫算と實數に大なる齟齬を見ないやうになつた。

當時政黨の分野は民政黨の前身改進黨と政友會の前身自由黨とで、自由黨は改進黨の先輩であるが其の行徑は矯激であつたため政治思想の幼稚な時代には穩健なる人に忌まれた、殊に資產家に恐れられた。そこで穩健の資產家は多く改進黨に與した。併し自由黨は政治運動に多少の經驗があり、殊に壯年客氣の者に喜ばれたので選擧運動にも强味があつた。彼等の運動は敏活輕快で足を勞することを意としないのに反して、穩健派側は運動には無經驗で且つ鈍重であつた。今の言葉で云ふと穩健派はブルジョアで矯激派はプロレタリアに比すべきものであつた。私の選擧區には殊に大地主が多く、それが一村若しくは數村の素封家と仰がれ、封建制は廢されても小大名は存してゐる如き觀があり、此

の大地主は其の居村の牛耳を取つてゐたから、其の向背は一村の向背であつた。一村の包擁する幾十百の選擧人が、若し牛耳を取つてゐる人と共に動けば實に一勢力であるが、所謂長袖能く舞はずで、何事も萬事執事や番頭まかせで、唯〻徒に自分の村は大丈夫だと思ひ込んでゐても運動がそれに副はないから、イザとなると多數の選擧人を擁しながら棄權者が多く、大地主も決して頼みにならなかつた。いくら多くの財産を有し、いくら多額の税を拂つてゐる素封家でも、其の有する投票は一票に過ぎない。貧乏人からでも多くの投票を得れば勝利はそれに歸するのだから、自由黨の味方は質に於ては劣つたとは云へ量に於ては敢へて劣つては居らず、且つ輕快の運動で手が屆いたから、勝はおのづから彼等に歸する道理で、自分なども此の點では苦い經驗を嘗めた。

當初山村僻驛には投票場の設けがなく、二三里も往復して投票せねばならなかつた。英國でも、曾ては選擧御免の請願をしたことが議會史に書かれてゐるが、如何さま一日のヒマを潰すことは選擧人に迷惑のことゝ感じた、斯樣な譯だから此等の選擧人に日當を與へることも當然起る筈で、こんなことが投票賣買の俑を作り、投票を大切と敎へれば敎へるほど、投票を高く賣る習慣を養ひ、遂に拔き難い弊を生じたのである。

選擧人に酒食を饗することは初めから禁ぜられてゐたが、銘々會費を出して懇親會を開くことは敢へて差支へなかつた。そこで懇親會に名を藉り選擧人を手なづける苦肉の策も自然に行はれた。自分

の縣の或る地方では一策を案じ出した、それは犯則ともならず結果は有效であつた。どんな方法かと云ふと、演說會を開くと五六百の聽衆が集る。勿論郡部である。演說會が終るとこれより引續き懇親會を開くから、可成皆々其の席に止まつて參列されたい、會費は金五錢と云ふから、大抵の人は其の席に止まる、五錢の會費で酒の飲める筈はないが、酒は有志が寄附するから宴會が出來る譯だ。肴と云へば澤庵や鹽鮭スルメと云ふやうなもので、竹の皮を小さく切つて小皿に代へ、それに肴を盛つて出すから咄嗟に辨ずる。酒は飲みはうだいで有志者が酌をして回る、其の有志者は多くは地主で、會衆は小作人等である。平生地主の前に頭も擡げ得ない連中が、けふは地主から慇懃に酌をして貰ふのだから、彼等の好感を博するのは當然で、斯樣なことを選擧人收攬の策としたこともある。但しこれは選擧事前の準備行動であつたが、此の懇親會に列したものは大概味方となつた。嚴肅に云へば、酒の寄附と云ふに犯則が潜んでゐるのだが、當時は見遁された。

自分は今幾回か選擧を爭うた既往四十年前のことを考へると茫々夢の如くであるが、實は選擧に經驗が無ければ、呼吸の知れないものである。自分が全然政治と無關係の身となつてから、大隈內閣が總選擧を行うた時、自分は强ひて推されて大隈侯後援會の會長となり、選擧長として逐鹿戰に臨んだ時、侯の聲望と侯の努力とが大勝を博したに相違ないが、自分も昔取つた杵柄で、格別の困難を感ぜず任務を果すことを得た。（此の一篇、前篇と多少重複する所もあるが、其の點は讀者の諒恕を請ふ。）

記念すべき逐鹿戰

昨今は寄るとさはると選擧談で持ち切つてゐるが、それに興味のない自分は五月蠅いので相手にならん、併し選擧に就いては思出がないでもない。自分の體驗した最も大規模の選擧は、前年大隈侯が首相で議會を解散したその擧句の總選擧、ことに石川縣の金澤市に於ける選擧は永く選擧史に記錄さるべき價値のあるものであつた。自分はその節大隈侯後援會の會長で、別働隊の選擧長であつた關係から、金澤市の選擧には出張までして特に干與せざるを得なかつた。

この選擧は民政側横山章氏、政友側中橋德五郎氏が候補者で猛烈に競爭をした。當時の横山氏は盛んに資力のあつた頃で、多くの會社に關係があり、常に市に住してゐただけに大なる聲望があつた。中橋氏も金澤出身であるけれども、平素土地に居ない爲に金力があつても横山氏ほどの聲望はなかつた。そこで中橋側では頻りに人物論を宣傳に擔ぎ出し、横山氏と比較をやつて勝を制せんとした。それを打破る爲に自分と若槻禮次郎氏が演壇に立ち、若槻氏は財政演說をやり、自分は「大隈か原か」といふ題を掲げ、候補者の人物論は抑〻末で、大隈侯の政策と原氏の政策如何で勝敗を決するのであ

るといふて、本流に棹さしてその比較をやつて散々に政友會を攻擊した。この演說は確に反響があつたので、中橋側は急に三宅雪嶺氏を東京から迎へて自分の演說を反駁せしめた。その演說筆記は機關新聞三頁に渉つて四號活字に組んであつたが、それを讀んで見ると辯駁が餘程苦しく、市島君は加賀の如き大藩に生まれないから人物のことなど分らないと言うてゐたが、本流に就いての辯駁は頗る貧弱であつた。新聞も演說も互に精根の續く限りをやつた。自分は五六日間足を留めて總參謀をやり、頻りに新聞を指導した。むかし猛烈を以て聞えた盈進社は横山側であるのだから、働き手は充分にある。横山氏を推薦する實業團體は三十もあるやうな譯で、夫が新聞に列署してゐる。中橋氏はそれに對抗する爲に各地にある石川縣人何百名を搔き集めて推薦者と爲す如き窮策に出た。中橋氏が市中の商人それ〴〵に關係を結ぶ方便として、要もないものを盛んに買集めて急に顧客となつた。其の物を收めておく爲に土藏を借りねばならぬことにもなつた。手當り次第いろ〳〵の物を買つたから相當金もかゝつたであらう。コンナ鹽梅に双方の對抗運動はすべて大袈裟であつた。一時双方の勢は幾んど伯仲の間に在つたので、自分も内々終局を氣遣ひ、參謀會議の際に萬一の場合に處する苦肉策を立てた位であつた。自分が誤つて名參謀の名を博し、後に永井柳太郎氏が候補に立つた時加賀の有志者が大隈侯に市島を參謀にと望んだのも此の故であつた、併し自分は應じなかつた。この選擧の際に大隈首相は應援のため關西へ出張され、到る處車中よりプラットホームに群がる選擧人に演說された。二

分でも相應に何か呼びかけられた。其の際自分も會長として同行したが、何故か激戰地である加賀へ侯は行く事を欲せられなかつた。然るに大阪に著すると、加賀から委員が出て是非に侯の出張を望むと申して來た。巡回の日時が既に定まつてゐたのだが、侯は自分に時間割の都合がつくかと問はれたのを機會に、自分も委員に加勢をして曲りなりに日程を作つて急に加賀に回らるゝことになつた。

これが勝敗を決するに此の上ない力となつた。金澤の同志は老侯を車に乘せて全市を引回した。丁度雪が降つてゐて、侯は堵列の市民に挨拶のため脱帽してゐられたが、禿頭に雪がチラ〳〵かゝつてそれが爲に風邪に罹られたけれども、この引回しが演說よりも功を奏して大勢を決したことが數日後に分つた。侯の金澤入りは眞に大なる應援であつた。自分は侯に隨つて金澤を去つてその後の形勢如何と聞くと、確に横山側に勝算があることが知れた。唯警戒が最も必要となつて、開票間近には不寢番のもの二百人に懷中電燈を持たせて辻々に立たせることもやつた。開票の前夜中橋側が各戸に撒いた名刺などは翌朝までに悉く取去られて、扨て當日の朝になると小學校の兒童でもうば車に乘つてゐる赤ん坊でも横山氏の名刺を身につけぬものはないといふ有樣で、全市横山氏の名刺が溢るゝまでに手配が屆いたなどは實に驚くべきことで、開票の結果は千票も横山氏の勝つたのは、大隈侯の金澤入りが如何に有力であつたかを物語るものである。選擧に可なり經驗のある自分にもこれ程痛快味を感ぜしめたものはない。（昭和五年二月）

條約改正の斷末

今でも思ひ出すと殘念で耐らないのは、大隈侯の條約改正の悲愴の斷末である。私はその頃、鄕里新潟の新聞に筆を執り、大隈侯を仰ぐ政黨を率ゐてゐた。これよりさき井上侯の條約改正の時も、私は鄕里にゐたが、あの改正案はすこぶる缺點が多かつたので、反對黨である自由黨と連衡して、私が反對の建議を書いた。其時は自由黨の根據地に陣を張り、自由黨の面々は私の身邊を擁護してくれて萬端樂であつた。實は如何なる場合でも反對は容易で辯護は難儀である。井上案は破竹の勢で敗れたが、さて此の難事業を繼承して大隈侯が衝に當らるゝと、形勢は一變して自由改進の連衡は破れ、自由黨は攻擊の位置に立ち、吾等は辯護支持の衝に當る立場となり、前の共同者は忽ち吾等の敵となつた。乃ち前に私を警護した面々は今度は矛を逆まにして、ある時は僞書を作つて私を某所におびき出し、暗中に私を襲うて、乘車もろ共濠の中へ投げこむといふ暴を爲すに至り、實に物騷を極めた。島田三郎君が應援のため越後へ來られた時などは、私の遭難地で演說會をひらく日、自分も臨んだが、前に自分を襲うた暴漢は此の土地に名のある劍客で、それが罪に問はれたので、乾兒共は私に復讐す

るといふ意氣込み頗る不穩であつた所から、警察でも非常に警戒し、多數の警官に包圍されて演說會場に入つた樣な始末であつた。そんな殺氣の滿ちてゐる所に、冷靜に條約案を細說せねばならなかつたから、苦心は一通りで無かつた。

大隈侯の案は井上案に較べると餘程進んだものであつて、先づ當時の日本の文化程度から見て、縱令幾分不滿足の所があつても忍ばねばならぬと識者が認めたのだが、何というても當時の國民はまだ幼稚で外國を畏怖することが甚だしく、第一內地雜居をいやがり、外人に土地を購ふことを許せば、日本の全土は直に外人の占有に歸しはせぬかと漫りに心配するやうな始末で、それを然らずと會得させるだけでも容易の業では無かつた。殊に國民の畏怖に乘じて疎枝大葉の反對論で保守氣分を煽る氛氣裡に立ち、條約案の細目を說明することは頗る難事であつた。當時吾々が如何に平易に內地雜居の恐るゝに足らぬことを說明するに苦心したかの一例として、演說の一節を記憶から呼起して、爰に笑資に供するが、それは左の如きものであつた。

內地雜居を畏るゝは謂はれない事だ。試みに婦人の頭髮を見よ、髮を飾る珊瑚樹は地中海の產であり、櫛に作られてゐる玳瑁は南洋の產であり、指頭に燦たるダイヤモンドは亞弗利加トランスヴアールの產であり、細腰に纏ふ帶は支那產の繻子であり、肌に着ける唐縮緬も亦外國製で、それが女の股の間にまで喰ひ込んで、外國品は旣に最もか弱い女の體に雜居し、女子に寧ろそれを喜ばれてゐるではないか。外人に雜居を許すことがなんで恐しいのだ。

といふごとき、今考へれば吾ながら稚氣……を愧づるやうな事をひねり出さなければ、聽衆の會得を博し得ないほどに一般が幼稚であつたのである。

知識階級でも其の頃は保守氣分が頗る盛んで、條約遂行にはこれが暗礁で結局それで破れたのであるが、外人を延き來たつて日本の法廷に立たせるでなければ外國人は安心しないので、已むなく外人を日本に歸化させてそれを法廷に立たしむるといふが大隈侯の案であつた。これは窮策には相違ないが、憲法違反を避け、外人の滿足を博するには、當時已むを得ない機宜の案であつた。然るに保守派の政治家達は理不盡に憲法違反を高調して侶衆を煽起し、終に內閣中にも離反者を生じて大事去るに至つたのである。

私は當時を追懷して忘れ難い事の一は、矢野文雄君が大隈外相の背後に在つて極力との事業を翼賛された事である。條約案の成行に就いては君自ら筆を把つて每日郵書を寄せられた。私が地方にゐながらも時々刻々の推移を知ることが出來たのは矢野君のお蔭である。危急の場合に臨んでは、日に二三回も君の手書に接した。よくも筆まめに報道せられたものと、當時感激して、その手簡は危機一髮錄と名づけて今も保存してある。その書狀に據ると、實は敵は外にあるのではなく、寧ろ閣中にあつた事も分つた。後に大隈侯の八十五年史を編するに當り、大隈家の文書を調べると、當時閣中の人で

あつた榎本武揚氏が侯に寄せた書簡が出た。それによると、國家の重事を藩閥の私心より破るとは何事ぞと憤慨してゐる。それが宛ら當時の事情を語るものであつて、矢野君の內報を裏書してゐるのである。

私は鄉里で矢野君から櫛の齒を引くごとく相踵いで來る刻々の推移の報道を見、どれほど焦慮したか知れなかつたが、大勢如何ともする能はず、遂に斷末が來た。それは頗る劇的シーンで、私と私の同志の最も大切な慶事をメチヤ〳〵に蹂躙し、私をして無念の涙を滂沱たらしめた。その仔細は外でもない、私等同志の會館の建築の工を竣つて開館式を行うた日が、恰も大隈外務大臣遭難の日で、式の半ばにその悲報が達したので、吾々は爲に色を失つた。幾十日間ほとんど晝夜を分たず慘憺たる苦心をした自分に取つては、實に終生經驗のない打擊であつた。私は席に溢るゝ會衆にこの悲報を傳へた時は、幾んど歔欷聲を發し得なかつた。然るに、爰に私の悲憤を更に刺戟したものがある。反對黨から使者が會館に來て、私に面會を求めるから、何氣なしに出て接すると、貴黨の會館の落成を祝するため疎末ながらこの品を獻ずるというて、三寶に堆く水引かけて積み重ねたものを出した。卽座にそれを改めて見ると、それは彼等の機關紙が發行した、侯遭難、條約改正頓挫の電報を印刷した號外であつた。私は憤然としてそれを突き戻したが、彼等もあらかじめそれを期したもの〻如くで、三寶を引取つて戻つたが、門外には示威運動のため大衆が集つてゐて、使者が門外に出るのを合圖に、萬

歲を喧しく唱へて號外を撒き散らしながら市中を橫行したことが私を極度に刺戟して、無念骨髓に徹せしめた。

獄窓舊夢談

忽ち識を爲す

私が一ツ橋の大學にゐた頃、多くの友人もあつたが、石渡敏一氏とは特に懇意で日夕往來した。氏は純粹の江戸兒で、氏の知人に傳馬町の牢屋の事を精しく知つてゐる人があつた。氏は其の人から聞いた話を私に委しく語つたので、私も頗る耳を傾け、おのづから監獄に就いて興味を感じ、共に研究するの端緒が開かれた。全體法律では罪囚の刑期が滿つれば之を釋放することになつてゐるが、刑餘の人を社會に放つことは甚だ危險である。監獄は罪人を罰すると共に其の改悛を促すを目的としてはゐるが、事實懲罰の目的は達しても精神的の感化改悛を爲す迄には行屆いてゐぬ。由來人の不善を爲すは其の原因さま〴〵であるが、生活難も其の原因の一つである。殊に刑餘の人は社會の信を得難いから職業を求めても有りつけず、已むなく罪を犯すものもある。放縱性を爲す彼等が、饑渴に迫つては勢ひ罪を犯すより外は無い。されば刑餘のもの〻二犯三犯を防ぐに何より大切なものは、彼等を保

護して相當の職業に就かしめ、それに由つて改悛に導くことであらねばならぬ。斯かる方法なくして彼等を良民と伍を爲さしむるは、所謂虎を野に放つと一般で危險も甚だしい。全體監獄なるものは、一方から見れば惡事の練習所であつて、これに入ることが度重なれば重なるほど、惡事の手段は巧妙になつてくる譯であるから、成るべく獄外で改悛を促す手段を講じ、犯罪を再四することを防止せねばならぬ。それに就いては何等かの救濟の方法が必要であると、兩人は種々考案を凝らした。結局這般の事は、人心の上に大なる感化力を有し、物質的にも力ある本願寺の如きものが救濟の計畫をすれば有效であらうといふ結論に達した。當時吾々兩人も年少氣鋭で、考へたことは直ちに實行されるとと〻思ひ、刑餘の人に職業を授ける案を書いて得意であつたと云へば恥かしい譯だが、實は當時監獄學など修めてゐる人は法律學者の内にも幾んどなく、僅に時の帝國大學教授穗積陳重氏が、監獄の原理を科外講義で吾等に聽かされた位に過ぎなかつたので、吾等は臆面もなく穗積教授を訪問して、したり顏に案の梗概を陳述した。教授は吾等に向かつて、兩君はよい所に氣がついた、まことに結構な案だ、併し、これ等の事は既に西洋に工夫されてチヤンと組織があるというて一二の實例を示されたので、内心大いに悄げた。が其の後も細目に渉り實行方法を案じ續け、しば〻筆も把つて見たが、追々考へれば考へるほど面倒を感じて來た。實は兩人とも監獄に少しも經驗がある譯でなく、所謂座上の兵法であるから行きづまるも無理は無かつた。終には兩人筆を投じ、お互の内一人監獄に繫がる

る身となり、實地を踏まなければ獄内の事情も分らず、囚人に對する同情も起らぬと、此の研究に段落を告げたが、何ぞ圖らん、其の後二年も經つか經たぬに、私が不幸にも實地を踏むの貧乏鬮を引當てた。全體を云へば、石渡氏は法律の人で私は文科のものだから、鬮は先方へ當るべきであるのに、妙な番狂はせである。由來惡語識を爲すことが多い、さりとてはまた奇しき緣因である。

新聞界第一の犧牲

私が越後の高田に赴いて、今の「高田新聞」を創刊した時は、恰も彼の高田事件の勃發した際で、「高田新聞」は幾んど同時に呱々の聲を上げた、卽ち今を距る四十五年の既往に屬する。當時民論が沸騰し、官民の軋轢は極點に達した。政府は民論の壓迫に餘力を剩さず、新聞條例には曾てない峻刻の改正を施したのである。云ふ迄もなく此の條例は明治初年から度々改正され、改正毎に嚴密が加はつて來たのであるが、まだ幾何か寛なる所があつた。それをば明治十六年に至り、水も漏らさぬ嚴密な改正を加へた。從前は紙上の責任はひとり編輯長にあつて、罪は編輯長が引受けたものである。隨つてどこの新聞社でも、入獄擔任のものを編輯長としたものであるが、此の改正では、苟くも紙面に名を署するものは、社長でも主幹でも印刷長でも、苟くも情を知るものは編輯長と共犯を以て論ぜらるゝことになつた。これが新聞界に大恐慌を惹き起して、東京の諸新聞紙に、それまでは社中の第一

流の人が署名してゐたのだが、此の條例發布と共に一齊に署名を撤して警戒する所があつた。事實此の頃の社長は皆主筆であつたから、此の改正の條例は事實の筆者を罰するに在つた。尙此の條例の政正と共に法の執行が頗る嚴となり、從前不問に付した事まで容赦しないことになつたから危險は非常であつた。私も此の危險に心附かなかつたでもないが、新聞が生まれたばかりで、私が社長として署名しておく事が新聞の信用上多少の必要もあつたので、都下の新聞に倣ふことなく名を撤去しなかつた爲に禍は頻々として起つて來た。全體高田事件は福嶋事件と同じく自由黨に纏綿した事件で、當時改進黨であつた私竝に私の新聞とは沒交渉の事であつたけれども、藩閥政府の專恣を憤る點に於ては自由黨と同樣であつたので、此の事件に對しては吾等は寧ろ同情を寄せたのである。そこで當局の吾等を見ることは高田事件の被告人と毫も異なる所なく、些細の事でも苟くも政府の不利と見るとビシビシ告發し、吾が社の被告事件は僅々二三ケ月の間に五六件も續發するに至つた。其の罪の目安は何かといふと、誹毀罪もあり、官吏侮辱もあり、豫審下調に關しての條例違反もあつた。斯く並べ立てると、國事犯を飽くまで庇護でもしたかに見えるであらうが、決してそんな事ではなく、今から見ると實に兒戲に齊しいやうな事が罪となつたので、今日の新聞記者から見ると幾んど理解もつかぬほどのことが官吏侮辱となつたり、條例の違犯となつたのである。豫審の下調に屬する事の如き、豫審の妨害をなす程度に書けばよくないことは言ふまでもないが、僅に筆が豫審の事に及んだと云うて法に

問はるゝとあつては、今日の新聞は毎日法に問はれねばならぬ。官吏の失錯を冷笑したくらゐで、それが侮辱とならば、今日の新聞紙は毎日侮辱罪を以て問はれねばならぬ。實は、當時官尊民卑の風なほ盛んで、警部巡査を冷笑したくらゐのことが皆罪となつたのである。たとへば、高田の警察署長赤木某が高田事件の被告人を取調べるにあたり、「汝等は干戈を弄する」と云うた。然るに、干戈の戈の字が才の字に似てゐる所から、干戈と云ふべきを干才と云つたのがをかしいと書いたばかりで、それが官吏侮辱となつたなどが一例である。他の幾多の被告事件も大體こんな類で、此等の事から、私が社長として共犯を以て論ぜられたことを告白するのは自ら恥ぢる程であるが、時の判事でも、今頃考へたら、吾等と同じ樣に其の苛察に恥ぢるであらうと思ふ。しかし當時の裁判所は如何にも神經質で、馬鹿に高田事件を重く見たから、其の餘沫がひどく新聞社にも及んだのである。當時の檢事が如何に陰險であつたかの一例を擧げれば、檢事は宛ら探偵の如く、見え隱れに私などの身邊に附き纏つたり、夜中戸外に佇んで私等の動靜を窺つたり、吾等の宴會席の隣室に潛んで偵察をしたりしたことは隱れもない事實で、高田事件の被告人に對してならば兎もあれ、新聞記者に對しては、如何にも念入りに過ぎた擧動と云はざるを得ぬ。

當時私は二十四歲であつた。如何に年少氣鋭の時であつたとは云へ、自重を闕いて數多の筆禍を得たのは面目ない次第であるが、政府者の遣り口も亦大人氣のないものであつた。私は斯くして新聞歷

史の上に於て既往に類例のない峻嚴な改正條例の犧牲となつた。編輯長としてゞはなく、社長として共犯を以て論ぜられたものは私が始めてゞある。久しく帝國通信社の社長であつた竹村良貞氏は印刷長であつたが、これも私と同じく共犯を以て同罪となつた。これも此の法律の第一の犧牲である。斯かる事は固より自慢にもならぬ事だが、談話の順序として之を省くことが出來ず、當時の狀態を知るにも之を語るの必要があるのである。

入獄

明治十七年六月二十一日、私は此の日を以て高田の分監に收容されたのである。此の日は朝來潦雨盆を覆すが如くで、殊に日曜であつたから、新聞社も寂寥であつた。豫て覺悟をしてゐたのではあるが、警吏に引立てられ、社を立出る時は言ふ可からざる感慨に打たれた。高田の分監は上職人町に在つて、同じ町に居ながら曾て見たことも無かつたが、高く黑い板塀が嚴めしく立て廻され、一隅の潛りの戸には重量ある分銅が鐵の鎖に吊され、開閉の時にいやな鈍重な音響を發した。此の戸が娑婆と地獄の境界であるだけに、一種言ふ可からざる凄味を覺えしめた。全體小兒等が戯れに地上に線を引き、こゝは獄屋だというてさへ、誰もそこへ立入ることを好まぬのが人情である。私共は破廉恥罪を犯したのではない、精神上別に疚しい所がないから、內心氣樂ではあつたが、よく考へると獄舍は全

くの別天地で、實は劍呑な所である。こゝにあるものはみな疵者で、よからぬ徒である。それに臨むの獄吏も亦それ相應のものである。こゝは祕密の場所であるから、祕密が往々祕密のまゝに葬らるゝこともある。此の中で暗殺されたとしても、實は遣られ損であることなど思ひ合はせると、私は始めて悚然として自重自愛の念を起さゞるを得なかつた。私は竹村氏と共にやがて一房に收容された。そこには他囚は一人も無かつた。相當に廣い監房で板敷に筵が布いてあつた。房内の模樣は、同じ經驗のある人は誰も知つてゐるから略するが、入獄當時の感想に就いては聊か言ふべきことがある。誰しも斯樣な境に臨んだ初一日二日は、最も神經興奮して無限の感慨に打たるゝものである。吾等は當時政府に不平があつた、それが兒戯に齊しいことで囹圄に繫がるゝことゝなつては、一層政府に對する不平が增長して來た。吾々はつくゞ〳〵思うた、過激でないものを驅つて過激の徒たらしむるものは、其の過激を最も恐るゝ政府であると感じたのが抑〻第一感であつた。私共の最初の刑は輕禁錮二ヶ月で、他の被告事件はまだ上告中で決しなかつた。輕禁錮は勞役に服することなく、監房に閉鎖されてゐる譯だから、讀書でもやつてゐれば幾分不平も慰め得らるゝのであるけれども、入獄匆々書物の差入も出來ず、已むなく沈默して居れば精神は益〻興奮して來るので、幾んど一日を送るのが非常の苦痛であつた。とんな事で何うして前途幾月の刑期を過すことが出來ようぞと、初めの二三日をひどく長く感じた。併し在獄八ケ月間のことを後から考へて見ると、初めには似ず、中頃は夢の如くに過

ぎ、いざ滿期と云ふ二三日に迫ると、又候最初の如く非常に待遠に覺えるものである。入獄早々の一兩日は多く沈默をつゞけていろ〳〵の事を案じた中に、同じ境遇に立つた先輩の述懷などを、記憶から呼起して味はつても見た。佐久間象山の獄中の語に「吾れ此境を履まざれば此省覺なし、一跌を經て一知を生ず」と云うたのを味はうては、如何にも此の境遇に立つ以上吾等も亦省覺する所が無ければならぬと發奮の念を生じた。又同じ象山が「振拔特立は可なり、激昂忿戾は不可なり」というたのを味はうては、自重自愛身を傷うてはならぬと、自ら警めるやうになつた。終には「儻し閑居すとも眞に日月を空過せざれば、我を錮するものは我を成す也」といふ句を誦して、獄中に於ては是非此の心掛が無ければならぬと悟つた。私が新聞記者の身として何よりもつらく思つたのは、數月間世の中と隔絕して世事に疎となることであつた。それを償ふには是非這中に一省覺をひらき、日月を空過せず、他人の企及し得ざる獄中の修養を積まねばならぬと考へた。かう考へると神氣が初めて安靜に復したが、しかし此の安靜は忽ちにして破れた。我々は、三日目の朝、突然新潟の本監へ移さるゝ事となつた。吉か凶か、又復不安の夢を辿る境地に陷つた。

新潟へ護送

二十三日早朝、新潟本監へ護送さるべく出發する事となつた。現今では交通機關が備つて居るから

別段不便もないが、當時の傳遞護送は、全く宿送りと云ふもので、其の上犯人は病氣にあらざる以上腕車などには乘せない。殊に私等の護送の任に當つた看守は兼ねて聞く意地惡だと云ふから甚だ面白くなかつた。併し斯く言ふ自分等も中々我儘者だから病氣を言立てゝ、自分等と外一人の常事犯と三人で腕車に乘る事が出來た。當日自分等の護送は既に知られてゐたと見え、高田の北端陀羅尼町あたりへ近づくと、新聞社の同人及び友人知己數十名は附近の茶屋へ出張つて見送つてくれた。此の見送りの一人が私の車を遮り通ると見る間に、一封の何物かを車中へ投込んだので、行く〳〵之を開いて見ると、中に金が三十圓在つた。自分は金であることを知つたものゝ、さて其を何うする事も出來ない、併し道中で自己の費用を以て辨ずべき場合が無いにも限らぬし、又時には通常の旅館に泊ることもあるかも知れない、さすれば其の時の役に立つと思うて、內心厚く好意を謝して、携帶した洋本の表紙の背の處へ祕めた。それにつけても氣づかはれたのは、意地惡な看守が附添うてゐることで、果して此の金を遣ひ得るか何うかであつた。間もなく直江津に着いた。茲に滑稽であつたのは、自分が警察署の控所へ這入るとそこに四五人の藝妓がゐた。是等は皆兼ねて知つて居るもので、自分を見て大いに驚き、何うしてあなたは繩附などになられたと問ふ。自分は透かさず、貴樣達はまたナゼ警察などへ來てゐる、と云ふ樣な問答で、果は大笑ひとなつた。此處でも不相變病氣を申立て、懇意な醫者に見せて都合のよい病人になり、腕車に乘り傳遞されて二三泊した。扨て案ずるより生むは易く、

護送の看守も、高田の友人間で前以て何か作略がしてあつたと見え、途中中々親切に取扱つて呉れるので、聊か安心した。これと同時にそろ〳〵謀叛氣が起つて來て、例の金を何處かで遣ふ方法を講ずべく、是非途中一泊だけ旅館へ泊めて呉れと賴んだが、中々好機會がなかつた。斯くて愈ゝ長岡へ着く事となつた。そこで自分は看守に訴へるには、明日は既に新潟である。今夜賴みを聞いて呉れねば到底絕望だと云つた處が、彼も大いに同情したが、併し平生あなた方の泊る樣な旅館では目立つていかんと云ふので、何でも裏通りの餘り振はぬ旅館へ宿つた。すると看守がまた言ふには、あなた方は何も心配はいらぬが、連の男は常事犯であるから逃亡せぬとも限らぬ、さすれば自分の落度になるから、今夜は寧ろあなた方に任せるから責任を取つてくれと云ふので、自分等も宜しいと引受けた。何分三十圓の金を此の振はぬ旅館で消費しようと云ふのだから、凄じい勢で、無論第一等の座敷を占領して、極度の贅澤を言つて一夜の豪興を縱にした。殊に可笑しいのは、任せられた常事犯の奴を一つ改悛せしめて遣りたいと云ふ樣な抱負で、酒食を勸めながら其の改心を說くと云ふ樣な事で、是を看ともなし、殆ど通宵飲みあかし、翌日は愈ゝ新潟へ行つた。處が此の時の金は何うしても遣ひ切れず、仕方がないので、後長野監獄へ移さるゝ迄祕めて置いたが、之を或る囚人に與へたため面倒な事が起つた一條の話もあるが、それは後に話ることにする。

險〻於〻山

私共は愈〻新潟に着して、直ちに本監へ收容された。此の本監こそ、私等に長く忘れ難い不快を感ぜしめたものである。古の詩人が、人の心は山よりも水よりも危險であるというたが、實にその通りであると感じたのは此の監に於てゞある。此の獄の首腦は誰あらう、吾等を告發した高田の警察署長、卽ち干サイの名を博したものが、いつしか轉職して、こゝの副典獄となつてゐた。當時は大抵の監獄に典獄を置かず、副典獄だけで間に合はせてゐたやうであつた。いくら告發者が監獄の首腦であつても、それが相手に對して復讐的の待遇をなすことはあるまいとは今の人の推測であるが、當時はそんな譯では無かつた。內閣大臣ですら隨分陰險な手段を以て敵手に對した時であるから、屬僚は推して知るべしである。私等は運惡くも、高田分監に收容された時は輕禁錮の刑が執行さるゝ譯であつたのに、他の被告事件が新潟へ移るまでの間に決した、そしてそれは重禁錮の刑に處せられたので、制規に據り輕禁錮の刑の執行を後にし、先づ重禁錮の刑の執行を受けることになつた。云ふまでもなく重禁錮の刑は服役を課せらるゝものである。副典獄は此の刑の轉換を利用して私等の力に堪へざる勞役を選び、特に看守長に命じて翌日よりこれを課したからたまらない。吾々は屈强な人夫と一般、大なる材木や土石の如き重量あるものを運搬させられたのである。如何に意氣山を拔くものと雖も、

體質に適しないことに堪へ得べきでない。吾等は半日ばかりで兩肩は全く爛れて、名狀す可からざる痛苦を感じた。囚徒を率ゐる親方株（誘工者といふ）は流石に吾等を見兼ねて、看守に、こんな力仕事の出來ないものに、斯かることをさせるとは何事であると詰ると、看守は聲を低うして、何故か知らんが、看守長から特別の命令があつたといふのを、私等は傍に聞いて、其の故意に出たものであることに氣がついた。實は新潟の本監には、吾が社の社員が三人ばかり前に入監してゐた。高田事件に關係ある、八木原繁社といふ人も這入つてゐた。その連中が吾等に耳語して云ふには、あなた方は當分御難儀であらう、此の副典獄は陰險な男で、看守を使嗾して初めは飽くまで苛酷の取扱をなし、後に自ら現れて之を救ふと云ふ狂言を演じ、恩を賣るものである。吾々も其の手に掛つて幾んど殺されんとした。あなた方も亦同樣であらうというたが、果して其の通りであつた。全體監獄は懲罰を加へる所ではあるが、其の人の體質力量に問うて勞役を選ぶのが通則となつてゐる。獄內には藥工もあり、木工、紙工、種々輕い仕事のあるのに、特に外役を課して、屈强の勞働者でなければ出來難いことをなさしむるといふは無法も甚だしいのであるが、意地わるく復讐をしようといふのであるから全くお話にならない。吾等は三日間いろ〳〵のことをやらされたが、みな力に堪へないことばかりであつた。中にも尤もつらく感じたのは、新潟の白山浦の砂山（すなやま）から或る地點まで砂を運ぶことであつた。これは數町に涉る距離もあるから、數間を一丁場（ひとちやうば）として幾丁場も設け、一丁場より次の丁場まで、前

より來るものを肩に受け、次の丁場に到つて他の肩に移し、これを繰返すのであるが、體力のない吾等は麻誤つくために、傳遞の步調を亂すことになるので、看守は容赦なく吾等を打ち、他の囚徒も吾等を叱咤するといふ騷ぎで、眞に堪へ難い苛責であつたが、吾等は三日間兎も角もあらゆる痛楚を堪へ忍んだ。

四日目は日曜の休日で、監獄では例として全囚を廣い工場に收容し、こゝに教誨師が說教ジミた事をやり、或は倫理道德の講演をやるのである。私も多囚の間に交つてゐると、教誨に先立ち、副典獄が場に現れ、威猛高に私の名を呼ぶから、私が起立すると、「其許元(そこもと)には今後教誨を託すから、次の日曜から全囚のために講演をされたい」と宣告があつたので、私はこれが兼ねて聞く狡獪手段であると窃かに失笑した。副典獄は三日間吾等を極度に苦しめた擧句、こゝに恩を施さんとしたのであるけれども、私は其の恩に與るもので無かつた。私と竹村は、其の翌日卒然長野縣へ旅立つことになつたのである。それは私等が控訴中の被告事件が、審理の末原裁判を破毀して長野裁判所へ移すの判決が下つたからである。僅々十日ばかりの間に、走馬燈のごとく頻々獄が變つて、少しも落ちつくことが出來ず、其のかはる毎に不安を新にした。

地獄と極樂

長野の獄に移るに先立ち聊か新潟監獄に就いて語るべきことがある。云ふまでもなく監獄は專ら地方稅に由つて建てられてゐるので、各縣其の構造が異なつてゐる。縣に依つては整頓してゐる所もあるが、又然らざる所もある。新潟の監獄は今はどうか知らんが、其の頃は甚だ不整頓であつた。監房はすべて松の生木(なまき)で造られて、それがまだ新しかつたので、板の間などは濕氣でジブ〳〵してゐた。それに臺も置かず、寢具を置き、夜間は其の板の上に布團を敷くのであるから堪らない。疥癬に罹らないものは幾んど無いといふあり樣で、衞生には全く無頓着であつた。私等は幸ひに長くこゝに居らずに濟んだから、此の病を免れたが、若しこゝに長く居つたら、半病人となつたに相違ないと思ふ。なほ監房の構造其の他に就いて云ふべきこともあるがそれは省略するとして、玆に一言を要するのは監獄の位置である。其の位置は今も同樣に市街の一端で、新潟で有名な料理屋行形亭(ゆきかた)と墻一重の隣り合はせであるから、極樂と地獄が境を接してゐる。一方は享樂の處で、歌舞管絃がさんざめき、一方は鐵窓呻吟の苦界である。斯く云ふ私も、此の極樂に出入したこともあるが、今は其の隣家の人となつてゐるので、深夜夢さめては無量の感に堪へなかつた。殊につらかつたのは、外役の場合には必ず此の酒樓の門前を通過せざるを得なかつたことだ。或る時は石を擔つて此の門前を通過したこともあつた。新潟市中には知る家が少くないので、赭衣を纏うてゐるから、人は氣が付かないけれども、吾自らは知る人の家前を過ぎては、坐ろにフランクリンが微時一片の麵包を民家に乞ひ、後日偶然婦を

迎へて見ると、それが卽ち麵包を與へた婦人であつたことなどを思ひ浮かべざるを得なかつた。外役中の瑣事を擧げればいろ〳〵あるが、爰に談柄となる一事がある。ことは後日に屬するが、端は私の外役に發してゐる。私が外役中土砂を運んだことは前に錄したが、數年の後私が「新潟新聞」の主筆となつて新潟に在住した際に、後に女子大學を經營した成瀨仁藏氏が新潟にゐて、學校を建てたいと云ふので私等も贊助して、北越學館を設けることになつた。さて其の敷地として選んだ所が卽ち私共が熱汗をしぼつて土砂を積んだ所のそれであつた。そこで校舍が出來た時、發起人會の席で、私の言ふには、私は微力ながら此の校舍の基礎を作つたものである。斯く云へば不遜の言を吐くやうであるが、實は此の敷地の土砂は自分が運んだのだというて、入獄當時の機微を漏らすと、發起人一同も初めて事の次第を知つて驚くもあり、又感謝するもあつたことを今想ひ起す。

留置所の一夜

前述の如く私等は長野監獄へ護送さるゝ事となり、七月七日を以て新潟警察署へ引渡された。處が其の時刻が最早暮れ方であつたため、一夜警察の留置所に泊められる事となつた。留置所は一時犯罪人を留める所であるから、規模の小さなものであるが、併し新潟は五港の一でもあるから可なりのものと思うたが、實際は意外のものであつた。僅か二疊と三疊の二室があるばかりで、それが板を以て

仕切られてゐた。自分は廣い室に入れられ、相手は狹い隣に這入つたが、自分の三疊には六人入れられてあつたから、炎暑の折柄、室內の蒸暑い事は勿論、一種の惡臭鼻を衝いて來たり、殆ど堪へ得られなかつた。軈て喫飯の時となり、それを了ると、自分は連日の疲勞一時に發して忽ち睡魔の襲ふ所となつた。

破獄未遂を見る

茲に一珍事が起つた。夢中一種の物音に驚いて目を覺まして見ると、旣に暮れて居るのにまだ燈光が點かない。隨つて同室の者の顏の見分けもつかなかつたが、よく視ると或る一人が切りに騷いで居る。此奴何をすると思つて居ると　彼は猿の如くチョロ〳〵と監柱を攀ぢ、外廓にある高い小窓を外して緣を破壞し、其の一片を携へて降りて來た。今度は己が帶を手早く解き、監柱三本に、眞中を押へとして左右へ引掛け、其の眞中の結び目には前の高窓の緣を通し、之を挺に捩つてゐる。警察署の留置所は所謂一夜泊りの假監であるから構造は必ずしも嚴重ではないが、併し五寸角位の柱を廻らしてゐるから、容易に破獄は出來ないと思つてゐると、挺に力を籠めて帶を捩る每にギシン〳〵と凄じい音響を發して、其の都度左右の柱が次第に中央に撓み寄つて、柱と柱の間に多少の間隙を生じてくるので私も驚いた。こやつを脫せしめては一同は其の累を免れぬ。別して自分に對し監獄の首腦は意

地がわるいから、どんな言ひがけをするやも知れないと、蹶然起きて嚴然たる語氣を以て、「何をする」と制した。すると此奴は「お互の事だ、大目に見て呉れ」と云うた。自分は更に「貴樣には都合がよからうが、あとで同房の者が迷惑をする。知らねば知らぬで濟みもしようが、目前に見る上は默しては居れぬ。併し强ち止め立てはせぬ。自分は明朝護送されるのだから、遣りたければ其の後に勝手に遣れ」と諭した處、彼の云ふには、「俺が此處で脫監を企てゝ既に四日にもなるが、果し得ず今日に迫んだ。明日は必定本監に移さるゝであらうから、今日遂げねば到底出られない。どうか拜むから見逃して呉れ」と哀訴しながらも、彼は挺の手を休めず捩つてゐたが、挺の力は强勢のもので、優に身體を脫し得る間隙を二柱の間に生じた。しかしその間隙より身を通ずるには、他人に挺を支へて貰はねば、一擧ヨリが戻るので、彼は、誰か此の挺を握つて呉れよと賴んだ。房中には惡黨もゐたに相違なからうが、流石に後累を恐れて、諾するものが無かつたので、曲者も大いに窮した。此の時幸ひ戸外に人聲がして、警察の使丁が燈火を携へて來た。曲者も其の物音に驚いて倉皇挺を放つた。それからは追々見巡りの警官も出入し、彼も目的を達し得なかつたので、私も漸く累を免れたが、此の椿事のため通宵睡眠を得ず、短夜の明ゆやすく、東天いつしか白みたる間もなく、吾々は出發することになつた。後日聞けば、此の曲者は有名な掏賊で、脫監には頗る巧者で、吾等が發してから終に脫監の目的を達したとか。

護送の奇緣

翌朝巡査が附添うて吾等兩人は留置所を發した。其の頃は無論汽車はなく、長岡までは安進丸(あんじんまる)といふ汽船で信濃川を溯るのであつた。全體護送の場合には戒具を用ひる事が多いのであるが、護送巡査の裁量でそれを用ひないのみならず、衣服も刑服を脫して通常服に着替へることを許されたから同船のものは吾等の境遇に氣がつかず、船中には始めて種々の新聞紙を讀むことを得たので、其の喜びは大したものであつた。此の待遇は全く同情ある巡査の取計らひに出たのであるが、私はそれを幾んど忘れてゐた。後に私が「新潟新聞」を主宰した時一人の探訪者を入れたことがある。それは警察に勤めたものだとは聞いたが、委しく其の素姓を聞く事もなく打過ぎた。然るに後藤伯が大同團結で新潟へ來た時に、私は死活の間に抗爭したので、危險は頗る身邊に迫つた。此の時である、兼ねて入れた探訪者が私に私語していふには、今夜は貴下に危害を加へんとする計畫があるから、社より御歸宅の途上御用心なされねばならぬ。私が御案內をするといふに任せて、常に往來する通路を避け、嘗て通つたこともない小路をいろ〳〵迂回するので、私はフトある割烹店に此の人を伴うて、對酌しながら種々の談に入ると、先年長岡まで護送した巡査が卽ち此の人の前身であることが知れて私は愕然とした。私は前後此の人の助けを得た奇緣に興を覺え、危難を忘れて對酌を續け、深更無事に歸宅したと

とを今想ひ起すのである。此の探訪者は後に新聞社の會計主任となつた人で、名を林鑄吉といふた。

高田を通過

斯くて長岡より長野までは三四日を費したが、途次高田を過ぎた時は、既に知れてゐたと見えて、多くの知人に迎へられた。此の日高田警察署に休憩中、友人より最近の新聞紙を與へられて、此の上ない喜びを以て讀み、入獄以來の政界の形勢を略ゝ知ることが出來た。公侯伯子男の爵位が定まり、華族の外、國家に勳功あるものに授爵の御沙汰があるといふ記事を見たのは此の時であつて、議會開設の曉には兩院制を採る準備として、先づ爵を定めたものであると推察し、憲法の制定も遠くはあるまいと想像を馳せて愉快に感じた。それから佐渡の有田眞平が新潟の某新聞に寄せた論說中、今日ならば不問に付さるべき事が皇室の不敬罪として告發された事は自分の入獄前で、兼ねて氣の毒に思うてゐたが、其の上告が棄却されたとの記事を見て、同舟遭難の歎を發せざるを得なかつた。斯くて長野警察署へ着したのは七月十三日で、翌日は日曜である故を以て二日間同所に留置され、十五日本監に移された。

長野監獄

私が長野監獄に移されたのは私に取つては非常の幸であつた。別して刑期の全部を此の監獄で送ることを得たのは私の仕合せであつた。當時の長野縣の縣令は私の鄕里の先輩で、其の人は累世儒者の家に生まれた大野誠といふ人であつた。縣令が越後出身である所から、屬僚の重なる人も多くは同じ出身で、私の親戚も縣廳で樞要の位置にゐた。縣廳の此の組織が間接に私を幸ひしたに相違ない。よし然らずとするも、犯罪地は種々の利害關係から往々公平を缺くことがある。現に新潟監獄が其の適例である。長野は隣縣であるけれども、私の事件には何等の關係もないから、監獄の取扱が公平であるだけでも仕合せと云はざるを得ぬ。況んや私の仕合せは實に想像以上であつた。それは追々後段に陳べるが、差當り喜ばしかつたのは、監獄の設備がよく屆いてゐて、衞生上の注意が申し分無かつたことである。こゝの監獄の大要を言ふと、其の構造は羽翼制を取つて、監視には最も便利であり、監房の用材が皆乾燥してゐるので、忌まはしい濕氣は毫もなく、飲食物其の他の供給も新潟よりもよく、看守、押丁なども純良であるかに見えた。即ち吾が鄕里の監獄に較べると雲泥の差があるので、私は窃かに罪囚は犯罪地の如何によつて幸不幸のあることを感じ、如是く不同であることが刑に不公平を及ぼし、よくないことゝ思うた。

それは兎も角も、私共は收監の翌日式のごとく長野裁判所へ召喚されたが、一旦取調べられた切りで十數日何等の取調を受けなかつた。その後判決があつたけれども、前判決と大差がなかつた。此の

判決などに就いては云ふべきこともあるが委に略する。扨て判決があつたから既決囚の取扱を受けねばならぬ筈であるのに、其の事もなく三ケ月以上も未決のまゝに置かれたのは氣樂ではあつたが、何故であらうかと、窃かに不審を抱いた。後で考へると、これも暗に私を厚遇したことであると理解した。此の未決の監房に居る間は、各所からの差入物などは破格に許されて、些しも不自由を感じなかつた。

獄中に書を講ず

三ケ月間未決の間を如何に經過したかといふに、隨分記すべき事もあるが、それは追つて項を分つて陳べることゝして、監房は羽翼制の大建築の内にあつて、一房十囚を收容するの廣さである。昔の牢屋の遺習は些しも今は存せず、相當の素養あるものは房長に推さるゝ譯で、自分も此の監房に入ると、直ちにそれに推された。同房には種々の未決囚がゐたが、かれ等は私を頭領と推さゞるを得なかつた他の事情もあつた。仔細は、かれ等は日々無聊に困んでゐるが、さて讀み物として差入を許されてゐるのは、刑法、治罪法と、自己の事件に關係ある一件書類の外には何もない。然るに彼等の多くは刑法、治罪法を解するの能力がない。さりとて己が事件のためには曲りなりにも研究を要するが、其の相手になつて説明したり解説したりしてくれるものが無かつたのに、今度は其の先生が這入つて

來たのであるから、彼等は競うて私に法の説明や解釋を問ふことになり、彼等は意外の便利を得たので、私は監獄から命じられないでも勢ひ房長たらざるを得なかつたのである。實は私とても法律には門外漢であるから、自ら此の機會に多少の研究をしようといふ氣になり、始めて刑法、治罪法を總則から終りまで一二度通讀し、こゝに同囚の法律顧問と成り濟ましたのは滑稽であつた。私は此の點で同房の尊敬を受けたが、なほ各所から差入るゝ食物などを必ず皆々に分配してやるので、此の點に於ても私を尊敬せねばならなかつた。彼等は私に對して臣僕畜ならざる態度を以て忠實に仕へた。

毎日々々刑法、治罪法のみの講釋で日を暮す譯にも行かず、追々に興味ある雜談をやつて彼等を喜ばせるとともにわれ自らも悶をやつたが、長い間の事だから、其の内種切れとなり、果は矢野龍溪翁の「經國美談」を、二三夜つゞけて、講談師口調で語つたこともあつた。此の未決監房に私が常に座右に置いたのは、ヒスクの「コスミック・ヒロソヒー」二冊で、毎日幾頁かを默讀することが私の日課であつた。

獄中の著述

或る日の事、副典獄から特に召喚されて監房から出て、導かるゝまゝに副典獄の室へ入つた。此の時初めて副典獄を見たのであるが、四十格好の武人肌の頗る快活の人であつた。此の人は三浦親肅と

云うたやうに記憶するが、此の獄も副典獄が新潟同樣首腦であつた。さて私が其の室へ入ると、副典獄は看守を退け、私に對等の座を與へて、先づ私の境遇を慰藉して云ふには、「貴君の事件はいくつもあるやうだから、結局どうなるか分らんが、それがどうなつても、結局刑期のあらん限りは當監で服役さるゝことにならう。それに就いて御相談がある。貴君が「高田新聞」に曾て連載された監獄意見を拜見してをる。如何にも現行獄制の缺點をよく看破されてゐるのに敬服した。實は我々は一年に一回乃至二回中央に開かるゝ典獄會議に臨んで討論するけれども、いつも好案がないので困つてゐる。貴君の現在の境遇は貴君の爲には不幸であるが、監獄の爲には幸とも云ふべきだ。どうか在監中に監獄意見を書いて貰ひたい。貴君は最早獄内の實際にも通じて居らるゝから、必ず相當の意見があらるゝであらう。どうか司獄官のため遠慮のない意見を陳べて戴きたい。それが成されゝばひとり本監の仕合せのみでない」と云ふのが私に對する要求であつた。

私は此の意外な要求に驚きもしたが、實は内心喜んだ。此の篇の首頭に陳べたごとく、私は嘗て學友と監獄問題に觸れたこともあつて、結局實地の研究を必要とした。然るに圖らずも私が其の境地に臨むことゝなつては、眞實研究の意もあつたのであるが、未決の監房に居るだけでは實情も分り兼ねてゐた。處が又圖らずも公然副典獄の依頼とあるからには、これから便利もおのづから開ける譯と、私は喜んでその依頼に應じ、自分は法科を修めたものでもなく、監獄に就いても決して多く研究して

をらぬ。併し云々の事があつて研究の志はあるから、出獄までには何か書いて記念のため獻ずることにしよう。それに就いては監獄に關する材料を示されたいと求めた。副典獄はそれを諾したが、之から後は私に對する待遇が全く一變して一層寛大となり、直ぐに他囚を交へない一房に移された。其の房は頗る清潔であつた。且つ私一人では寂寥を感ずるであらうとの同情から、竹村をも同じ房に移して、互に無遠慮に談笑し得るやうになつた。差入なども、これから一層寛大となつて、菓子を箱入のまゝに入れたこともあつた。時には副典獄が見舞ひにも來た。私の需めた參考書は、兩三日後に監獄から差入れた。それは一二に過ぎなかつたが、其の中に「萬國囚獄會議錄」といふ、厚い印刷した二冊本があつた。これには各國の監獄制度の改良に關する意見書も載つてゐて、私の研究には可なり役立つた。全體監獄に關する原書は其の頃日本に餘り來てをらなかつたので、此の會議錄も私が始めて寓目したものである。

私は副典獄から一種の著述を頼まれたけれども、十分研究した上でなければ筆を取る可からずとなし、筆硯を房内に差入れを請ふ事を差控へた。斯くの如きは獄則の禁ずる所である。私が筆を把り始めたのは、重禁錮執行のため工場へ出るやうになつてからで、私の爲に特に湯呑所を居處と定められた、其の時からである。それは後に更に語るとするが、在監中、監獄論十篇を著し、それを脫稿したのを竹村が淨寫してくれた。出獄の時監獄に殘したのはこれであるが、これは監獄に關する私の理想

を陳べたので實際の事には觸れなかつた。實際の事に就いては、私が獄中に感じた事を、出獄してから副典獄に口頭で語つて其の參考に資した。獄内には獄司の氣のつかない事がいろ〳〵ある。蟻蛭の穴が大堤を崩壞する基となるやうなもので、獄中に行はるゝ惡弊は、瑣事と云うても兎もすると不容易の事を惹き起すから、決して輕々に付すべきでない。以下少しくそれ等に就いて語る事にしよう。

獄中の電信

交通遮斷が獄中の原則である事は言ふ迄もなく、未決囚には最も此の原則を勵行するのが大切で、監房の構造も、隨つて遮斷的に出來て居り、隣室と互に話などすることは萬出來ない筈であるが、人間の智惠はなか〳〵エライもので、窮すれば通ずるの諺の如く、いろ〳〵の交通法を案出するから妙だ。獄中の隱語で「電信」と云ふがある。之は隣室と聲語を交へる法であるが、看守押丁が始終目や耳や鼻を以て意地惡く偵察する傍ら、各室互に聲語を通じ得るは妙と言はざるを得ない。之を說明するには監房の構造を一通り言はねばならんが、當時長野の監房は前にも云うたやうに羽翼制であつて、中央に六角の看守室を置き、それを中心に左右羽翼を廣げた樣に監房が總二階で二行に並んで居る。一房は凡そ十疊敷位で、兩室の境は松板の二寸許りのもので隔てゝあり、苟且にも節孔や割れ目やアキなどはない樣に注意してある。尤も死刑に處せらるべき程の重罪犯を容るゝ處は三疊敷位で、

障壁も頗る堅固で、兩室より板と板とを以て隔てた其の中に土砂が入れてある。何と云うても二寸許りの板を以て隔てた處であるから、兩室の間に聲語の交通は出來ぬ樣に素人の思ふは勿論、看守押丁も大丈夫に思うて居る樣子であるが決してさうでない。自分が未決囚との雜居時代に親しく見た所に依れば、例として朝七時頃には用の有無に拘らず此の電信と云ふものが行はれて居る。先づ看守の戸外に居らざるを見濟まし、拳で靜かにコツ〳〵と板壁を打叩く。元來此の電信は囚徒間に行はるゝ常習であると見えて、隣室の者も時刻になれば注意して耳を欹てゝ居る。そこで合圖を聞けば聲のするあたりに耳を付け挨拶をする。或は互に晴雨の挨拶から、用あれば簡單に之を語り合ふのであるが、此の話が看守に聞えぬと云ふのは、長野監獄の監房の構造が四圍栗板を以て封鎖され、唯一隅に縱五尺橫三尺許りの扉が設けてある計りなので、低聲の言語は室外には漏れぬからである。毎朝時間を約しての應酬位は退屈まぎれの戲であるが、こゝに恐るべき惡事が此の手段に依つて行はるゝ事が往々ある。それは別房に在る共犯人若しくは關係者と情思を通ずる事で、例へば數人の共犯者があれば、其の一人が金錢の報酬を得て自己のみ罪を負擔する約束をなし、若しくは法廷に出た際言葉の不揃ならぬ樣罪證湮滅の手段を講ずるが如き、皆此の手段に依つて行はるゝのである。卽ち一房より隣房に對し先づ甲なるものありやと問ひ、若しありと答へれば直ちに板越しに其の言を傳へるは勿論、隣室に其の者なくば更に隣室に託して其の隣室より更に其の次に傳聲し、如是くすること各室に及び、其

の返答も同様の手段によつて傳へられ、遂には全く罪證を湮滅し若しくは共犯者を救濟し、意外の變化を法廷に見る事がある。而して最も驚くべきは廊下を隔てゝ前面の監房にも情思を通ずる事で、之は容易に出來ぬ事であるけれども、囚人の目と云ふものは口よりもよく働くものであるから敢へて怪しむに足らない。啻に目の働きのみならず、看守室より最も隔りたる一隅の相對する監房に於ては、看守の目を忍んで長い間に切れ〴〵に簡單の聲語を傳へる事も敢へて出來得ぬものでないから、一度前面の或る一室に意思が通ずれば直ちに其の列にある各室に傳へ得るのである。そこで各室ともに此の電信の取次をつとめ、決して疎略にせぬのは銘々同様の事を依頼する必要があるからである。

外界との交通

監房内の交通を遮斷すると同じ様に外界との交通を遮斷するの必要がある。否外界との交通は最も嚴密に遮斷せなければ、治罪の上に大妨害を來たすは言ふ迄もない。さて外界より書狀なんどの紛れ入るのは專ら衣類差入のときにあるから、差入物の檢査はなか〳〵嚴密のもので、或は衣類の内部に縫ひ込んでありはせぬかと思ふときには、解きほどいてまで檢査する位である。又房中に禁制品を置かぬかと、それを檢査する爲に、毎日一回一房毎に全囚を看守室へ連れ出し、數人の看守押丁が其の房に入りて疊を上げ、夜具類を改め、板のふし迄ほじりて周到の檢査をなすのである。斯かる嚴密の

檢査の下に、手紙を認むる筆墨なんどのあるべき筈なく、又元より一本の手紙も外界へ出し樣のないものであるのに、立派に筆墨に託した手紙が係官の手を經ず外界へ達すると云ふは獄中の祕密で、身を囚人の位置に置いたものでなければ、到底此の祕密を知ることは出來ない。凡そ二犯以上の罪囚は一種斯道の專門家とも云ふべきもので、未決監に入るに先立ち、あらかじめ家人や知人と申合はせをして、衣類の差入をなす場合、若しくは不用の衣類を下げる場合には必ず音信が衣類の或る部分に隱されてゐて、それを注意して搜すことになつてゐる。而して差入の時に如何にして手紙を縫ひ込むかといふに、多くは薄い紙に細字で認め、紙捻にひねつて、襟のあたりの端物の重なつてゐるやうな處に縫ひ込むのであるから、係官が如何に檢査に拔け目がなくとも、眞逆に衣類全部を解きほぐすでもなく、疑はしい箇處を撫でさすつて改むるに過ぎないから、細い紙捻位な物は衣類の上より幾ら探ればとて手に觸れるべきものでなく、終に目を脫がれて房中に這入る事になる。啻に手紙計りでなく手拭、懷鼻褌の類も衣類と共に這入つて來るのが普通である。自分はこれを目擊し、其の工夫の巧妙なるに驚いた。それはどうするかと云ふと、手拭は肩繼ぎとして張り付け、越中褌は尻繼ぎとして縫ひ付けてあるから、これを解けば直ぐに用をなすのである。此等は格別害にもならないから、係官も餘りやかましく云はぬやうだ。且つ未決監には手拭や褌の類は既決の如く一定のものがある譯でないから、氣が付かぬと見える。扨て又外界より信書其の他の紛れ入る次第は前陳の如くであるが、出すと

きはどうする。即ち返事を遣る時には如何にするかと云ふと、矢張り同一の手段で衣類の中へさし込んで親族に御下願をするのだが、下げる時は入れるときより無造作で、看守も檢査などを嚴重にせぬ。ナゼと云ふに、毎日々々監房を改めて決して手紙を認むるなどの器具はないと思うて居るから、それは難なく關門を通り過ぎるのであるが、扨て其の家族は專門家の家族だけあつて、早速解きほどいて周密に搜索するから、どこへ縫ひ込んで置いても終にはわかるのである。次に何を以て手紙を認むるかと云ふに、いろいろの方法もあらうが、自分の房中に實見したのは極めて巧みな遣り方であつた。墨も筆も、手紙差入と同じ方法で衣類と共に這入つて來るのである。墨、筆と云へば大袈裟であるが、實は墨の粉末と筆の毛が衣類の縫目に這入つて來るのである。墨粉も毛もバラにして、壘の下の塵埃に混ぜて置くから、如何に嚴重に檢査しても氣の付くことでない。斯くて手紙を認むる場合には、先づ毛をあちらこちらより四五本拾ひ集めて箸の頭に結び付け、墨粉も塵埃中より拾ひ集めてこれを枕の上などで唾液で溶解し、虱大の細字に勝手の事を認め、前陳の如き手段で衣類を宿元へ下げるのである。自分は其の工夫の巧みなるに驚き、成る程これなれば看守の氣が付かないのも無理はないと思うた。

寫眞屋となる

三ケ月許りも未決監に這入つて居つたが、冬近く肌寒き頃、既決囚として勞役に服することになつた。扨て愈々既決となつたら筆硯を請求して監獄論の執筆に取掛らうと待構へてゐたが、監獄意見を書くことが、如何に典獄から內命を受けて居るとは云へ、斯樣のことを看守や看守長に唐突に言うてよいか惡いか、先づ以て考へ煩うたが、工場へ伴はるゝや、間もなく年若い人品のあしからざる、肥太つた一人の囚人が自分の前に來て言ふには、私は聊か寫眞術を心得て居るので、自身の器械を取寄せ、此の工場外に別に一室を構へて寫眞を撮るのを日々の仕事とし、極めて暢氣にやつて居る。そこで先生から少しく洋書の素讀を受けたいと思ふが、是非寫眞場へ來て戴きたいと云ふ。自分は突然の事に驚き、そんなことが出來るのかと問うたら、彼は、それには私から、先生は東京で寫眞術を極めた妙手であるから、自分は是から其の教授を受けたいと申し立て、寫眞工場へ編入されたいと願ひ出るから、萬一看守から問はれたら寫眞に長じて居ると答へて下さいと云ふので、薄氣味が惡いけれども其の言に任せて置いた處が、典獄より兼ねて特待の命が下つて居た爲か、一應の質問もなく直ちに此の男の請求通り許され、喧囂なる疊糸などを製する工場を去つて寫眞の方へ行つた。此の若い男は大江某と云うて、小諸のある豪家の次男である。出京中道樂に寫眞などを習ひ、終に誤つて詐欺の刑に觸れ獄中の人となつたのだ。又寫眞場とて特に設けたのではなく、大江が偶々寫眞術を心得て居る所から、典獄の道樂で、病監の不用となつた所を暫くそれに充て、これに暗室をしつらへて寫眞場と

したのである。當時信州の如き邊鄙の所では、監獄若しくは縣廳の小役人等が寫眞を撮るなどは贅澤となつて居たので、それを安價に撮れるやうに大江に此の勞役を授けたものと見える。扨て自分は大江の云ふに任せ寫眞の先生氣取で居つたが、一日に客が一人か二人あるかなしであるから退屈で困るので、例の監獄論執筆の事を願ひ出でた處が早速に許され、之よりは筆も硯も机も供され、寫眞の傍ら專ら執筆に從事し、大江は東京遊學中聊か西洋の文字を習つてゐたのでひまには讀本(リーダー)などを素讀して遣つた。如此くして二ケ月許りをとゝで暮したが、此の間にをかしい事がある。あるとき縣官が四五人監獄に遣つて來た。三浦副典獄は先に立つて寫眞場へ來たり、之が市嶋君でありますと丁寧に紹介し縣官も一々姓名を名乘つて挨拶をした。此の時自分は柿色の獄衣を着けて居たが、名乘るを聞けば多くは新潟縣の人々で、斯かる場合に紹介を受けたのは誠に難有迷惑に思つたが、之も三浦の好意より出たに違ひない。又或る時一人の押丁が遣つて來て、「寫眞を寫して呉れよ、大江は拙手(へた)だから是非先生に」と云ふので先生も已むなく大江諸共暗室に這入つた。其の實はたゞ大江の爲すを傍觀するのみで、暗室を出ていざ寫すと云ふ場合に、度が高いとか低いとか大江を叱り飛ばして漸く一場のお茶を濁した事もある。斯樣の次第で時々暗室に這入つたが、寫眞用に備へてあるアルコールのある に心付き、水に和して一二回飲んで見ると、好酒家なる自分の事だからなか〳〵旨い。遂には毎日飲む事となり、自分の相手の男も眞似を始めたが、この人は顏に紅を呈するので困つた。或る時見張を

する看守が此の事を看破し、二人暗室に這入つて居ると、外から突然戸を明けんとするのに驚いた。其の時自分は高く聲をあげ、「素人が暗室を明けると藥品が全部用立たぬ樣になる」と、叱る如く制した處が、看守も已むを得ず控へた事がある。今から思へば洵に抱腹絕倒である。自分も大江の爲すを見て、二三度は自ら試みもし、序に少しく敎はつて他日の隱藝にせばやと思うた事もあつたが、餘り熟達せぬ內に寫眞勞役を廢する事になつたのは遺憾である。曾て戯れに獄衣を着けた自分を大江に寫させた事がある。燒付けて之を見て、思はず吹出した。人間は衣類で半ば氣品を作るとは眞實である。筒袖、股引、襟に番號を付けた扮裝では、我ながら一文半錢の値もなかつた。此の寫眞は記念のため出獄の折携帶したいと思つたが、獄法許さぬとあつて、他人に與へて仕舞つた。

書家となる

大江も滿期が近づき、寒氣も迫つて來た爲か、寫眞場は撤せられ、自分と相手の兩人は工作役場に附屬する湯呑所に移された。こゝは六疊敷許りの板敷で、大爐を構へ、湯と火とは贅澤な程豐富である。此の度は大江と別れ、相手と差向ひに机を構へ、他囚を交へないから獄中と思はれぬ心持がした。これも典獄の特命に出でた事と思へば感謝の外はなかつた。こゝに移つてからは、靜閑に乘じて著述を專らとしたが、傍ら相手の請ふがまゝ毎朝英書を敎へた。何というても長い間であるから、ノ

ベツに著述計りもして居られず、追々獄中に知る囚人も出來て、手本など五六度書いてやつたが、段段其の眞似をするものが出來て來た。これは多く長期囚である。さうすると獄内に評判が立つて、看守押丁などで書を需めに來るものが毎日五人や七人ある樣になつた。退屈に任せていろ〳〵のものを書いて遣つたが、中には楷書で一枚の白紙に「千字文」を書けなど云ふ注文が出て、これには閉口した。が無聊で堪らないから此の難題も斷らず、幾度か遣つてのけた。遂には少し書法を習つて見たいと云ふ考が起つた。然るに手本などは無論ない。囚徒中に誰か所持して居るものはないかと穿鑿して見ると、僅に佐瀨得所の書いた摺本の千字文を所持して居るものがあつた。草書を學ぶにはこれもよしと借受けて、毎日無聊の折に之を習ひ、人の書を需むるものあれば、手習半分に此の手本中の語を得所流に書いて遣つたが、目を經るに隨つて兎に角手本を離れて草體を一通り書くことが出來る樣になつた。今日自分が書は拙ながら、餘り法に背かぬ崩し樣の出來るのは全く得所のお陰である。後年新潟で得所の子息佐瀨精一氏と日夕交遊の折、此の事を語り出でゝ一笑した事もあつた。そは兎も角、追々自分の人と爲りが獄中の上下に知れ渡るといたく尊敬を受け、看守なんどは爭うて書を需めに來た。監獄でも屏風や襖などを製して、ヤス表具して賣出した事もあるが、皆自分に書かせた。此の時分になると一廉の書家氣取で、ドウも毛氈がなくては書きにくいと言出した處が、看守は、毛氈はないがとれではドウだと出したのを見ると、屑布團に綠色のケツトを張つたもので、當直の役人が

板の間に敷いて疊と寢具とを兼帶するものであつた。これ究竟と、居室に推し廣げて、書くものがあつても無くても常にこれに坐して傲然構へた樣子は、我ながら書家らしく思つた事もある。扨て毎日毎日屏風の一雙位は筆に任せてなぐつたが、斯うなると印章もなくてはならぬ事になる。或る日役人が典獄の言付けであるからというて、印章御所持なれば御宅より御取寄せ願ひたいと言うて來た。恥さらもに印章など押すは不本意と斷つたが、再三の請求辭しがたく取寄せた。如此くして出獄まで毎日毎日書いたが、出獄近くなると、幾んど書き切れぬくらゐ依頼が來た。そこでをかしいのは、獄則で百日以上の在監人には工錢を與へる事になつて居るが、書家先生たる自分の工錢は十二錢五厘であつた。十二錢五厘と云へば情ない薄給であるが、これが監中第一の高い工錢で、終日炎天に曝されて力役する囚人、例へば瓦職の如きは隨分骨の折れる勞役であるが、僅に五錢さへ取ることが出來ぬ。それで或る日彼等は自分の工錢の額を耳にし、休憩時間に自分の室に來て云ふには、あなたは誠に仕合はせ者だ。終日蒲團の上に坐つてゐて、勝手な樂書をしてゐて、一日の工錢は我々に比すれば二日分よりも多いと羨んだ事がある。滿期出獄の當日は午前十時迄に獄門を出すが法であるが、滿期前三日より遽かに書きものが多くなつて、いくら走り書をしてもなか〳〵書き切れないので、出獄當日も、折角獄官の依頼だから時間がないと云うて斷るも氣の毒に思ひ、一時間許り出獄時間を延ばして漸くの事に書き終つた。多分信州地方には自分が獄中に書いた拙書が幾らも殘つて居るだらう、誠に

よい手習をした。

門下生に博徒の親分

上田の早川富五郎と云へば信州切つての博徒の親分で、その乾兒(こぶん)は到る處に散在し、なか〳〵強勢のものであつた。自分の入獄の節此の男も入監してゐたが、あるとき自分に手本を請うたから、直ぐに書いて遣つた。此の男は右眼の下に紫斑があつて、如何にも一癖ある者と見受けた。手本を與へたのが緣となつて、書物も請ふがまゝ敎へて遣つた。此の男一通り讀めた。自分の敎へたのは「古文眞寶後集」であつたが、大概は自ら讀んだ。扨て此の男は信州に有名な博徒であるから、獄内にも乾兒の五十人や七十人位は確にゐた樣である。自分は既に親分の先生であるから、乾兒共も勢ひ自分を尊敬せざるを得ない。毎朝工作場の井戸側に私が顏を洗ひに出ると、富五郎の言付けで、盥を持つて來るもあれば水を汲んで呉れるものもある、時には汚れた衣類を洗濯して呉れるものもあつて、これには大層便宜を得た。

送別會

獄中に送別會があると云ふと人は怪しむであらうが決して怪しむべきでない。自分の出獄間近に富

五郎は乾兒十三四名を率ゐて送別會を開いて呉れた。實は送別會と云ふと大袈裟であるが、矢張り送別會に違ひない。それはドウするかと云ふと、百日以上在監の囚人は一日若干の工錢が取れる、さうして日々三錢だけの食物を買ふことが出來る規程になつて居る。そこで何れも申し合はせて買物の餘り重複せぬ樣、或る者は菓子を買へば或る者は茶を買ふと云ふ樣な鹽梅で、酒や煙草こそ禁じてあれ、其の他は大概買ふことが出來るのであるから、いろ〳〵のものを持寄つて、食後の休憩時間に團欒して食ひ且つ談じ、送別の意が寓されたことがある。

大隈邸の邂逅

富五郎に別れてから十數年、或る歲議會終了の後、進步黨議員一同、大隈侯邸に招かれた際、日頃見知らぬ男が兩三人入り交つてあるを不審に思つたものゝ、深く意にも留めなかつた。處が會食後、居合はせた竹村氏が自分の處へ來て言ふには、貴君に珍しい男を紹介しようと云ふから、後へ付いて行くと、先に不審に思つた男の處へ連れて行つた。自分は誰だか分らなかつたが、よく〳〵顏を見ると、眼下の紫斑に見覺えがあるので、妙な處に邂逅するものであると大いに驚いた。後に聞けば、富五郎は最初は自由黨側の壯士を操縱し、毎回の選擧に進步黨を苦しめたが、其の後深く感ずる所あつて、飜然態度を一變し、進步黨に左袒する事となつたので、降旗元太郎氏が伴うて來たと知れた。

相撲興行

獄中に相撲興行ありと聞かば何人も意外に思はんが、長野監獄内に自分が兩度まで目擊した事である。當時の獄則として祭日には囚徒の驅役を免ずることになつてゐたが、囚徒は此の日だけは氣樂な日だが、さりとて勝手に飲食の出來るにもあらず、思ひ〳〵に打集ひて日頃の苦しみを喞つか、さなくば無駄話に打興じて徒然を慰むるがせめて其の日の心遣りである。但し大方は退屈と無聊の中に欠伸だら〳〵日を送ることが多いので、斯くては折角の休暇も面白からず、何ぞ氣晴しに鬱を散ずる趣向もがなと、ある時いろ〳〵思案の末、相撲こそ養生にもなり、別に弊害もないから宜しからうと、試みに看守に願ひ出た處が、副典獄は武人氣質で、自身も相撲を好む所から、幾んど公然之を許可したのが始りで、祭日は相撲興行を以て殆ど二兩年來の慣習とするやうになつてゐた。全體斯かる遊戯を許すのは疑問であるが、實は多少の弊があつても之を許さねばならぬ必要もある。仔細は、祭日の事であるから出來得べくんば看守押丁にも休暇を與へたきは典獄の情である。然るに千餘の囚人を勞役も課せず監内にゴロ〳〵遊ばせて置いては、如何なる惡事を企むかも知れず、平日に比すれば取締上一層の困難を感ずるので、斯かる場合に相撲の如き遊戯を許し、これに全監内多衆の視目を集中するに於ては、爲に看守押丁の數も省き得るのみならず、監視も亦容易であるから、其の方便としても

許したものと思はれる。殆ど公然に近い典獄の許可であるから、相撲の心得ある壯丁は遠慮會釋なく騷ぎ立ち、獄舍の傍に廣い空地のあるのを究竟の場所と喜び、一同此處へ繰出して、明き俵に土を盛るもの、土砂を運んで土俵を築くもの、材木を持來つて四本柱を建てるもの、八方に手をわけて掛れば餓鬼も人數とやらで、法に叶うた見事な相撲場が咄嗟の間に出來上つた。偖て四本柱は建てたが幕がなくてはと云ふ處から、裁縫の心得あるもの三四人一團となつて、頻りに縫ひ針をして、これも時の間に出來た。一體獄中には一定の規律があつて、衣類は勿論、手拭、三尺に至るまでたゞ一本に限りて渡しあるもので、一片の布きれと雖も餘分のものゝあるべき筈がない。然るに柿色の幕ながら幅三尺長さ三丈もあらうと思はるゝものが出來ると云ふは、重罪の囚徒で長の年月を送るものが、平日の衣服の外に着古しの短衣、役に立たぬ三尺帶、垢だらけの犢鼻褌など、各〻幾許の貯へなきにあらねば、これを取集めて、はぎ合はせたものである。扨て愈〻場所が出來て、東西の力士場に登るに際し、驚いたのは行司が柿色の裃を着け、なか〳〵精巧の細工をした軍配を持つて居る事で、これは大工や仕立屋や其の道の職人が幾らも監内に居るからなので、斯かる器具は常に心がけて看守の目を盜み拵へて何れへか隱してあつたのだらう、到底咄嗟の間に出來得べきものでない。さて力士も柿色の犢鼻褌を式の如く締め、紙捻で作つた化粧廻しを着けたのも面白く、軈て東西の關取は代る〴〵場に上つたが、中には骨格逞しく角術も妙を得て居るものもあつて意外に感じたが、よく〳〵聞けば、

田舍相撲ながら四邊の評判を取つた專門家も五六交つて居り、行司も專門家であると聞いて、成る程千餘の囚人中にはいろ〳〵の者が交つて居ると感じた。そこで千人に餘る囚人は何れも土俵際に座を占め、赭衣着用の看客は雲霞の如しとも譬ふべき有樣で、勝負毎に我が贔屓の方に拍手喝采する聲は天地も崩るゝ許りである。こゝに頗る面白いのは、看客から纏頭を與へる事で、誰殿より金三百圓、誰殿より金何千圓下さるなど、聲高らかに披露するのは囘向院あたりと同じであるが、これは戯れに空の披露をする譯ではなく、金額こそ百がけも千がけもしてあれ、纏頭を與へる事は實際である。仔細は、己が工錢を以て買ひ得る其の日〳〵の食物などを、或は一人或は數人共同して與へるのである。これよりなほ可笑しいのは、中入毎に「菓子はいかゞ」と群衆を推し分けて物を賣りあるくものあることで、これは何ぞと見れば、米麥四分六の辨當の殘りをかき集めて小さな握り飯を作り、黄粉に砂糖を交ぜたるをつけたものである。但しこれを賣り歩くのはたゞ場面を本場の相撲に擬せんとの醉狂ものゝ所爲で、賣る譯ではなく、望むものあれば隨意に取らすのである。

演劇

獄中に相撲興行あるさへ人は意外に思はんが、なほそれより更に意外なのは演劇の催しある事である。これは無論獄中に許すべからざる事であるが、併しこれを默視すると云ふのも矢張り多衆を一處

に集め置き、視聽を一處に集中し、監視に便する方便から來たに相違ない。即ち多衆を一處に集め置けば、少數の看守押丁で監視の出來る便利もあるからである。併しこれは斷じて許すべからざる遊戯であるから、典獄もこれだけは容易に默許しない。たゞ歳首三日に許した例があるとか云ふ事で、自分の入獄中も恰も歳端に際したので、遂に默認した。扨て監獄で默認するからには、舞臺に充つる場所も貸さねばならず、道具類も貸し與へなければならぬ事になる。否看守や押丁も演劇興行に多少の盡力をしなければならぬことになるは自然の行掛りで、をかしなものであるが、已むを得ない。獄中には俳優も居る、振付も居る、義太夫を語るものも三味線をひくものも皆備つて居る。長期の囚人などは別に自ら慰める事がないから、俳優や振付に就いて、毎晩監房に這入つてから看守の目を偷んで稽古をする。勿論其の道のものと偶〻同監したものが稽古するのだ。稽古をすると云うても、勿論幾何も出來るものではないが、半年も一年も少しづゝ遣つて居る内には聊か身體に心得が出來て來る。そこでこれ等の連中の熱心なる希望は、先例を楯に取り、新年三日の休日に之を試むべく默許を得たい計りで、許すか許さぬかは未知數であるが一意專心これを樂しみとして居る。啻に藝の稽古許りではない、苦役のひま〳〵には、係官の目を偷んで種々なる器具を製造して蓄へて置く。相撲の如く、柿色のキレを以て女の服も出來ないから、打掛や鎧や兜や素袍やの演劇用服裝の一切はみな紙で作るより外に途がない。紙細工ではあるが何れも其の道の心得ある者が作るのであるから、中々巧みに出

來て居る。模樣はいろ〳〵の繪の具で描いてあるから隨分滑稽だが、これも繪師がゐて書くから兎に角金襴や緞子の樣に見える。尙是等の衣裝類はなか〳〵數多いことであるが、これ程のものをよくも斯う看守等の目を偷んで作つたものだ。作るのも容易でないが、これを隱し置くは實に不思議と云ふの外はない。監房は出入ともに衣類檢査をするから禁制品は一つでも隱して置くことが出來ない。ドウしても是等の品物は工作場へ隱して置くより外仕方がないが、此の工作場も每日日暮、囚人が監房に入つた後、隅から隅まで十數の看守押丁が檢査をするのであるから隱し置かるべきではない。で正月となつて演劇を默許することになれば、其の結果として、斯かる器具裝束の類も默許することになるが、平日こんなものが顯はれたら、何れも嚴罰を受けるのである。扨て一月元日より三ケ日演劇を默許さるゝ事となると、先づしつらはねばならぬのは觀覽席であるが、是は監獄の方から監督上の便宜を計つて敎誨堂を貸し與へた。是は在監人千名以上を集めて敎誨する處であるから劇場に充つるには究竟の場所である。劇道の心得あるものが此の廣い堂の一隅に、土砂など運ぶ爲に車上に裝置する大きな箱を幾つとなく積み累ね、(信州には荷車と云ふもの何れも車上に大なる箱を載せ、それに竹木土石等を入れて運搬する)舞臺の三方は葦簾をはりつめ、大きな梯子を一方に渡し、板を敷いて花道にあて、その背後に樂屋を作る、滑稽ながら宛ら舞臺に見ゆるもをかし。そこで引幕もいくつか紙で作つたのがある、紙捻に環が出來てゐて、自在に卷舒の出來る樣になつて居る。囃子方も專門家が

居るが、たゞ缺けてゐるのは、三味線、太鼓、鐘の如き樂器は一切作ることが出來ないので、三味線は口三味線である、太鼓の代りに桶の底を叩くと云ふ次第である。けれども兎も角も多少其の道に心得のあるものがやるだけに、滑稽ながらなか〳〵聞くに足るものがあつた。

登場の役者の顏には或は隈取があり、日にやけた眞黑な顏に白粉代りに胡粉を塗りつけたりして、馬鹿に白いところがあるかと思ふと赤黑い肌が露骨に見えたりするのだから、お姫樣などは殊の外滑稽であつた。それから外題は雜多で、今寺小屋をやつてゐたかと思ふと忽ちにして太十(太閤記十段目)、忽ちにして琴責め、忽ちにして熊谷陣屋、忽ちにして毛谷村といふ工合に、もの〻十分もやつたかと思ふと、すぐ次の劇に移るので、まるで走馬燈を見てゐるやうであつた。

かうして一日に十番から十四五番づゝの外題を演ずることが三日間つゞいた。無論練習がつゞかないから、一つのものを纏めてやらうとしてもそれは出來ない。しかし、やる部分だけは藝も相當に練習を積んでゐて、今少し練習をすれば、マア田舍芝居の役者程度にはなれると思はれた。團十郎や菊五郎や左團次などの假聲などを巧みに使ふものもあつた。觀覽席では、時に成田屋、音羽屋など〻囃し立てたが、此の日は大抵の事は默許されて、監督の看守等も極めて鷹揚であつた。

獄中の賭博

獄中にある囚人一千餘名、罪種はさま〴〵であるが、多數であるのは賭博犯であつた。恐らく全國の監獄中斯く賭博犯囚の多い所は他に無からう。長野縣に賭博が如何に盛んであるかの一端が窺はれる。此の賭博犯は概ね現行犯であるが、中には博徒が態〻小事犯を構へて入監するものもある。勿論斯樣なものは專門の博徒である。つまり獄中で一仕事をやらうといふ料簡から這入つてくるのだ。元來一年の季節から云ふと、農繁の時が、賭博の相手の尤も少い時で、彼等の不景氣の時は此の季節である。恁(か)う云ふ時節には、娑婆にあるよりは監獄の方が却つて商賣が出來ると云ふ、意外な事で這入つて來るのである。彼等は入監すると、概ね未決監內で同房の者を相手にして奇偶(ちやうぐう)を遣る。相手になることを拒むと、出獄後復讐をすると威嚇するから、大抵は相手になるが、其の相手の多くは初心であるから無論負ける。すると差入れてある塵紙に味噌汁や醬油などの有合ふもので借用證書を書かせる。いやだと云へばまた脅迫するので、已むなく書く。さうすると、前に陳べた方法で衣類の內へ隱して宿元へ下げると云ふ譯で、此の證書が後日祟りを爲すのである。なほ又監中で威嚇手段で乾兒を作る事も少からずある。在監人中には、今乾兒になつた方が却つて將來の便利だなど〻間違つた考から進んでなる奴もあるが、多くは威嚇されるので仕方なく水杯をして師弟の禮を取る。愈〻此奴出獄の曉には、證文を以て相手の處へ怒鳴り込み、或は水杯をした廉で强請(ねだ)り込み、結局幾らかの金錢をせしめる事となるので、扨てこそ自ら好んで小事犯を構へてまでも入監するのである。兎に角賭博の

目的でわざと入監するは案外の事と云ふべきだ。

死刑

死刑に處せらるべき囚人を容るゝ監房は三疊敷位なもので、隣房との間には、双方より二三寸の松板を以て障壁を作り、松板の間に土砂が入れてある事は前に陳べた通りである。又此の監房は或は二人位入れてあるのもあるが、大抵は獨囚である。死刑の宣告を受けたものは非常に煩悶するのと、一つは旣に極刑に處せらるゝので其の上罪の加はるべきものがないと云ふ處から、二人容れて置くと、或は他の一人をしめ殺すと云ふ樣な兇暴を働く虞がある。看守等も、食物を差入れるか或は何かの用で行く時は大いに警戒する。或る時一看守が監房の戸口で囚人と語りつゝあつたが、矢庭に中より手を差延べてサアベルの柄を取り、正に引拔かんとしたことがある。勿論之を以て看守を刺すか、乃至自殺するかの出來心に相違なく、危險至極の事である。故に死刑囚の監房に接近する看守は非常に遠ざかつてサアベルの柄を押へて注意する。また普通囚は日常看守室へ出して衣體檢査を行ふのが例であるが、死刑囚だけは出さぬ。しかし長く監房に居ると、髭を剃つてやる場合もある。普通囚には剃刀を用ひるが例であるが、死刑囚には鋏を用ゐる。是も剃刀を奪はれまい用心からだ。扨て又死刑の執行がある當日は誰云ふとなく其の事が知れ渡る。これほど囚人に激切の感情を與へるものはないと

見えて、平時に於ては、夜中入房の後は看守が如何に矢釜しく云うても、私語騒然として到底制し切れるものでないが、死刑の執行ありと云ふ前夜は、殆ど互に申し合はせた樣に全監水を打つたる如くヒツソリとなると云ふも、一種の感に打たるゝ自然の現象であらう。今頃はそんな事もあるまいが、當時は死刑執行の當日には特に頭を刎ねた魚類を全囚に喰はせた。これは無論此の機會を利用して一般罪囚に警告し感化を促すの方便に供し、且つ之を以て彼等を制御するの助けにしたものであらう。

烟草の密入

酒と烟草は云ふまでもなく獄屋の禁物で、酒は絶對に密入が出來ぬが、烟草は何うかすると這入つてくる。元來烟草に對する人間の嗜慾は非常のもので、此の嗜慾を充たす爲には危險を辭せないものが澤山にをる。神妙にさへやつて居れば間もなく出獄の出來る囚人が、此の嗜慾の爲に滿期間際に犯則して、マゴツキを生ずるものが往々あるのは愚の至りであるが、それほど烟草の誘惑は甚だしいものである。獄中では禁制品にはおのづから隱語もあるが、烟草を「クサ」と呼び、烟管を「ラツパ」と云うてゐる。烟管と云うても金屬製のものでなく、西洋の「シガレツト・ホルダー」のやうに、木や竹で小さく自製した粗末のものである。看守の目を遁るゝために、通例「クサ」と「ラツパ」を油紙に包んで土中に埋めておき、時に出して喫するのであるが、妙なことには、全然烟草の禁ぜられて

ゐる所だから、どこかに一吹やるものがあると、その香氣が方々に傳はつて、誰がやつたとの評判が立つ位である。且つ平素用ひないものが一服喫すると、其の人に隱し難い香氣があるので、それが爲に看守に看破さるゝこともある。それ故に必ず一喫の後は口を洗うて其の香氣を去るを例としてゐる。自分は當時非常に烟草を嗜んだが、危險を冒し犯則までして喫するは愚の至りと思うて、度々喫烟を勸められても一回も口にしなかつた。獄則では此の犯則者に減食の罰を行ふのである。情狀の輕いものには一飯の三分の一を減ずることになつてゐるが、重いものは暗室に入れて數日間の減食を行ふ。此の刑は囚人の最も苦痛とする所である。

一椿事起る

茲に一椿事が起つた。自分が高田を去る時或る人が車中に若干の金を投じたことは前に記したが、其の金が護送の旅中につかひ切れず、幾許か殘つてゐるのを、洋籍の内へ隱して長野の獄へ這入つたのであるが、此の金は私には全く不要のものであつた。或る囚人が滿期になつて出獄匆々糊口に困るといふを聞き、氣の毒の情が起つて、此の金を與へた。すると此の金が糊口の爲に計り使用されず、其の囚人が出獄すると、其の金の幾許かゞ烟草となつて獄中へ這入つて來て、それが長期囚の手に入つた。無論出獄者と此の長期囚の間に約束があつて差入れさせたのに相違ないが、どうして此の禁制

品が這入つて來るかといふと、監獄の高屏から工場附近の或る地點に投げ込むのである。豫め時間と場所が申し合はされ、投げ入るゝものが獄内の地形を知り事情に通じてゐるのであるから、看守の目を偷むことが出來るのである。扨て烟草が一袋這入つて來ると、一種の商賣が内々行はれて、密輸者は成金となると云ふ譯は、一袋の烟草は一圓位のものに過ぎないが、監内喫烟嗜好者は一服十錢と云はれても其の價を拂ふことを辭せぬ。それだから一圓の烟草を所持するものは、十倍二十倍の所得となるのである。勿論監内では金錢で買ふ譯には行かないが、金錢に代るものがある。即ち前にも述べたが、百日以上の在監囚は工錢の内から毎日三錢だけのものを買ひ得るのであるから、それを以て烟草と交換するのである。斯樣な譯で、烟草の密入を受けたものは、單に喫烟の嗜慾を充たし得るのみでなく、交換で他の供給もあることになるから、彼等が危險を冒して斯かる犯則をなすのも理りありとも云ひ得よう。扨て此の密入が遂に看守の知る所となつて、犯者は終に暗室に投ぜられた。此の事は自分の與り知らぬ事とは言ひながら、源に溯れば自分が惻隱の情が動いて金を惠んだのに胚胎してゐるので、自分は監内で慈悲心を起すなどは無用の事だと感じた。看守は犯者に金の出處を嚴しく糺したと聞いたが、どう云ひ紛らかしたか、終に累は私に及ばなかつた。

暗室

前に暗室の事を云うたから筆の序に大略を錄するが、暗室は僅に一人を容るゝだけのもので、云はば玩具の土藏のやうなものである。そしてそれが四隣に人語の全く無い所を特に選んで設けられてゐる。寂寞を感ぜしむるのも苦痛を與へる一方便であるからである。自分は監獄研究の資料として、この中に幽閉されたものゝ感想を聞きたいと思うて、三日間此の刑を受けた者に就いていろ〳〵と質問をした。その話に據ると、内部は一點の光線も通ぜず、絶對暗黑である。人語は一切聞くことが出來ず、狹いために正坐の外はなく、眠るにしても正坐のまゝでなければならず、空氣を通ずる所はあるが、寒中などは冷たい恐しい風が肌を衝いて堪らないほどつらいと云うた。食物の差入口があつて三食を差入るゝから、それで初めて晝夜を判するのであるが、特に粗食を量を減じて與へるのだから其の苦痛も甚だしいが、尤も困るのは空氣拔の穴から推し入る冷たい空氣であるといふ。此の囚人は三日間の幽閉で、ひどく衰弱し、且つ足部に浮腫（むくみ）を生じて、大關（おほぜき）の足のごとく膨脹してゐたには一驚を喫した。

獄内の事を書けばまだ色々あるが、年を經て忘れたことも少くない。

大隈侯追隨記

所謂侯の大名旅行

大隈老侯の旅行は大名行列と呼ばれて有名であつた、併し其の眞相は知れて居らぬ。唯侯が旅行の度ごとに、多數の隨伴者があつて如何にも賑かである外形を見て、大名行列と云つたに過ぎない。實は侯の旅行の內容はなか〳〵複雜で、到る處侯が豪奢を極めたのが大名行列の內容であるかの如く思ふのは眞相を知らない皮相の觀察で、そんな成金的な俗的なものではなかつたが、これまで侯の旅行の內容を如實に書いたものがない。畢竟侯に隨伴して侯の動靜を仔細に知る者でなければ書けないからで、斷片的には多少の記がないでもないが、較ゝ纏つたものは無い。

自分は大隈家の家職でないが、いつも侯の旅行には家職同樣に必ず隨伴した。其の譯は侯の晩年は早稻田大學の總長で、大概の旅行は早大の總長としての旅行であつたから、早大から理事若しくは幹事が隨伴せざるを得なかつた。但し侯の旅行が政治的であつた時も、總長の肩書を帶びて居られた關

係上、早大から誰ぞ隨行する必要があつた。侯が首相として議會を解散し、總選擧のため旅行された時も、自分は恰も侯の後援會の會長であつたので、職責上矢張り隨伴の必要があつた。斯樣な譯で、自分は侯の動く時は必ず追隨したので、おのづから三太夫頭の觀をなし、出先の公的交渉はすべて自分が擔任し、旅行の先々侯を招待することが頻繁にあつたが、自分の關門を通らねば、侯は諾否を云はれなかつた。行違を豫防するには事實斯くせねばならなかつた。自分はこれが爲に多忙を極めた。長途の汽車などで、侯の話相手も自分であり、旅館に於ても侯が寢に就かるゝまではお伽役は自分であつた。去れば侯の旅行の巨細を知るものと云はゞ、不束ながら自分であると云はねばならぬ。

侯の旅行の規模

侯の旅行の場合、汽車の二三室を買切ることが幾んど例であつた。侯は身體が不自由であるので、醫師や看護婦が必ず隨伴する。晩年は侯の衞生を氣遣はれて夫人が大概隨伴されたから、夫人に屬する女中も二三人加はつた。侯は動もすると知人を勸めて一行に加へられたこともある。足利へ赴かれた時などは、支那が足利の織物の得意先であると云ふので、支那公使丼に公使館員を伴はれたこともある。各地に講演するために二三早稻田の教授が大抵一行に加はり、侯を送迎するものゝ內、代表者らしいものが三四人必ず一行に加はる。各地の校友の幾許か加はるのは言ふまでもない。なほ大都會

に近づくと、必ず新聞記者が各社から入り來り、侯を取卷いて其の談論を聽くが例で、それやこれやで一行は十五人位であつても、臨時の來客がどし〳〵やつてくるので、車内に餘程の餘地がなければならぬ。侯の荷物も、あの不自由の身體に應ずる大なる便器や寢具まで携帶さるゝから、夫人のを併せて、如何にも大量のものであつた。汽車の沿道で侯の旅情を慰めんと種々のものを持込むものが多く、或る時は大なる盆栽を持込んで侯の座前に据ゑたことがある。また薩摩琵琶を彈ずる婦人を車中に伴ひ來り、侯の面前に彈奏せしめつゝ、數驛を通過したこともある。私としても汽車中琵琶の彈奏を聽いたのはこれが初めで、驛頭に堵をなす歡迎者を驚かしたに相違ないが、大名行列など云ふに至つたのも此等の故でもあらうが、侯は敢へて豪奢を喜ばるゝでもないが、種々の必要から斯く旅行が規模大きくなるのも止むを得ないのである。

旅行に先だつ準備行動

侯の旅行に先だちいつも準備行動に骨が折れた。關西方面は旅館其の他の設備が調うてゐるから、餘り面倒もなかつたが、北陸地方の僻地になると、宿泊所に適當の處を得ないことがあり、已むなく地方の富豪の家を宿所としたり、新潟ですら當時適當の大旅館がなく料理屋を宿所に充てたことがある。私の鄉里に行かれた時には親族の家に宿られたが、主人は準備の爲約一週間晝夜努力して萬遺憾

なきやう沒頭した。侯は足が不自由であるために浴槽を改造する必要があつた。また、汚損の疊は新しいものに替へ、寢具まで新調する宿屋もあつた。越後の長岡の旅舍では、家は新築だが庭がまだ出來て居らなかつたので、急に作庭をやると云ふのであつたが、自分はそれを制し、丁度夏季三伏の候であつたから、越後名物の雪をもつて山を築くべしと指圖をしたことがある。實は雪は澤山に包藏されてあるので、十圓も拂へば山が築けるから、經濟的に此の案を立てたのだ。侯は二階の上り下りが難澁であるから、下座敷を必ず選ぶ必要があつたが、二階に相當の座敷がありながら、下座敷が相當でなかつたりして困つたこともあつた。すべて這般の準備も、其の地元の有志者が東京に打合はせに來てやることであるが、自分の鄉國へ侯夫婦が行かれた時は、それに先だち自分が萬端の事を自らやつた。幾回の旅行に、自分が些しも與らず、萬端行屆いてゐて、申分なかつたのは讃岐の高松のみであつた。

侯の茶代

老侯がどこの宿に泊つても二百圓、三百圓の茶代を投ぜらるゝのが例だ。これを以て大名行列とするものがあるけれども、老侯を待つには前述の如く相當の設備も要るので、多くの茶代を投ぜられても實は不思議はないのである。維新の元勳達の内では、儉約家もあつて、俺が泊つてやるのは宿屋の

光榮だと云はん許りの自尊の人もあるが、侯は全く其の選を異にして思ひ遣りが深かつた。そして夫人が同伴であるために決してその邊にぬけ目が無く、どこに行つても大もてであつた。侯は人に招かれた席に藝者などが來ると、それにも纒頭を與へる人であつた。金澤に行つて一泊された時、侯は自分に云はるゝのに、先頃井上が來て一週間もこゝに泊つた筈だが、茶代をいくら置いたか調べてくれとあつたので調べた所、井上侯は百五十圓置かれたのを隨伴の早川千吉郎氏が内々それを二倍にして置いたことを知り、其の事を侯に告げると、侯は笑つて、俺は一泊だから三百圓でよからうと云はれた。侯はぬけ目のない人だが、夫人は常に氣にされて、夫人同伴でない時は、東京へ私が歸ると、大隈は一人で出ると兎角ケチで困りますと云はれたことがある。如何さま侯は各地の寺宮に參拜されると廿五圓納められたが、夫人同伴なら其の二倍であつたと思はれる。

大阪の宿屋の勘定

大隈侯はあの通り陽氣な人で、おまけに規模が大きく、宿屋の勘定などは寧ろ嵩むのを喜ばれたかに思はれる。大阪でいつも泊らるゝ宿は、この頃廢業した花屋であつて、五六日も滯在さるゝと拂が數千圓に上り、自分は出納には全然關係のない身分だが、侯が滯阪となると、毎日どうでもよい訪問客が朝から宿屋に來てブラ〳〵してゐる、それに對して無差別に酒飯を饗するは、莫迦々々しいやう

に感じ、宿屋に申し付けて多少の斟酌をした結果、その勘定はいつもの半分にも達しなかつたので、侯は家職に就いて何故勘定が少いと問はれた。聊か來客の接待に斟酌を加へた結果だと云ふと、侯け喜ばるゝどころか寧ろ不滿であつたと聞いたが、侯は景氣のよいことが大好きで、旅中の費用は決して惜しまれなかつた。所謂大名行列も内々侯は得意であつたらしく、ある會場で藤田平太郎男に遇はれたとき、俺は貧乏でも苟くも足を擧げると衆と共に樂しむのが愉快で、自然散財をするが、君などは金持の癖に四疊半で内々金を散じて衆と樂しまない、チト僕に見習ひ給へと戯れ半分に揶揄されたことがあるが、侯の大名旅行は成金的でなく、衆と共に樂しむことにあるのは此の小話で知ることが出來る。

日程の齟齬

侯の旅立に先だち細心の注意を要するは日程を定むることであるが、殊に氣を配らねばならぬことは汽車の連絡であつて、いつも汽車通が調査の衝に當るのであるが、二三度失敗したことがある。越後路から越中に入る時などは汽車の連絡を誤つたので大混雜を生じた。斯樣な間違から行先の日程が全部狂ふのであるから實に大變である。越後の柏崎で豫定連絡が出來ないと知つた時には、夜半まで越中と數十回の電信の往復をした位であつた。さて翌日富山縣の入口なる泊町に入つて下車すると、

富山の有志者十數名の包圍をうけて、時間の喰違をどうすると難詰された時は自分も實に困つた。終には大隈侯も其の混雜の處へ出て來られて、時間の都合で朝餐前若しくは深夜であつても俺の都合に構はんから、急速に日程を作り換へて豫約してある方面に失望させぬやうにと云はるゝので、無理の時間に侯を煩はした事もあつた。なほ東海道線の或る處で乘り後れた時などは、鐵道の好意で特に速力を早めて失つた時間を取返してくれたこともあつたが、こんな無理な臨機の措置は大隈侯に對してこそ出來るので普通行はるべきでない。侯が高野山に登られて、下山して和歌山市に臨まるゝ時も、電信文の時間の誤が混雜を惹き起し、夜半まで和歌山へ數次大阪から人を派したこともあつて、此の時もひどく困つた。侯の旅行には例として各驛に挨拶のため多衆が群集するので、時間が狂ふとそれ等に立往生をさせることにもなるので、旅程と日程とは尤も精確であらねばならないのである。

大都會に於ける侯の繁劇

侯の旅行には大阪の如き大市には三日位滯在さるゝが例であつて、其の滯在中の日程は出發前凡そ定まるのだが、臨時侯を招待せんとするもの、侯に演說を請はんとするものなどがいろ〳〵あつて、侯が旅舍に到着さるゝと、待構へてゐる幾多の面々は、私を先づ玄關に包圍して口々に種々の要求をすることが例であつた。侯は時間の許す限り、どんな所にも行かるゝ流儀であつたから、結局多數の

冀望を容れ、會社でも工場でも學校でも私人の宅でも、極めて短時間臨まるゝことを諾して日程に編入すると、朝から晩までぶつ通し巡回さるゝことになるが、侯は寧ろそれを本懷とされ、時間にアキが生じてボンヤリ次の時間を待つことを嫌はれた。私はそのため招待する當事者にあらかじめ注意して虛禮のために時間を潰さぬ樣にと茶菓の饗應までも斷つた。侯は朝旅舍を出らるゝと、其の日の日程に隨つて順次に回つて長短さま〴〵の演說や講演をさるゝのが常であつたが、大抵夕刻迄に六七回の講演をされた。侯の會場に着さるゝと行きなり演壇に臨まるゝのが常で、私はいつも時計を手にして侯の傍に侍立し、時間になると侯に注意し、それで演說が終ると、休憩室にも入らず直ちに辭して馬車に乘らるゝ。車上に侯の喫煙中私から次に臨まるゝ學校なり會社なりに就いて大要を言ふと、侯の頭腦には卽時に演說の趣向が定まり、始めて臨まるゝ所でも極めて劃切の演說をさるゝのには自分も恐れ入つた。尙侯に敬服することは、どこに行つても演說の趣向が異なつて、決して同じことを繰返されたことが無かつた。侯自身も內々之を得意として居られたやうであつた。

侯の經濟演說と軍隊に訓示演說

侯の大阪滯在中實業家に招待を受け、そこに經濟上の大演說をされた。經濟は侯の最も長ずる所であるから、其の演說は最も出色のもので、極めて近い貿易其の他の統計が、精確に巧妙に繰出さるゝ

のには實業家は皆感じ入つた。北濱銀行に取引所の仲買人を集めて、仲買人の責務は銀行家のそれにも倍するものだと仲買人の人格修養を鼓舞せられた演說は、侯ならではと思はるゝ名演說であつた。侯は僧に對しては法を說き、醫に對しては刀圭を論じて往く所として可ならざるなき該博な能力を示されたが、自分が扈從中に敬服したのは、大阪の造幣局に「ミント」の沿革を仔細に說かれたのは、如何に造幣當初の事に與られた經歷があらるゝとは云へ、餘りの記憶の好さに驚嘆した。尙又侯が大阪師團に於て將校に對して一場の演說をされたのは、侯の演說としては一風變つたものであつたが、僅に五分間の簡潔の演說で、威容堂々三軍を叱咤するの概があつた。人は侯の廣長舌を稱するが、簡勁にして寸鐵人を刺すの演說も亦天下の逸品であることを知らねばならぬ。

侯の愛嬌

侯は大阪で二三の小學校にも簡單な演說をされたが、學童は送迎のため門內兩側に堵列してゐた。侯は例の不自由の足を引きずり、愛嬌を振りまきながら、兒童の頭を撫でつゝ演壇に進まるゝのが常で、兒童は侯の愛嬌に魅されて忽ち親しみを生じ、馬車で市中を通過さるゝ時には、路頭の兒童はみな脫帽して侯に禮をした。これは小學校に臨まれた反響で他所に見難い光景であつた。大阪を根據として高野山に登られた時山上に五六十人の團體が足を駐めて整列して侯を迎へた。侯は步して居られ

たので、團長らしい者と握手されたが、其の男は感激して懷中より忙がはしく手拭を取出して握手を受けた手を包んだ。何故かと問うて見ると、これは居村に歸り、村人に大隈さまの握手を移してやりたいので、大切にせねばならんと云うたので、如何さまと思うたこともあつた。高野山に於ける侯に就いて別に言ふこともあるが、これだけは爰に記して置く。

旅舍に於ける侯

旅舍に於ける侯は朝の六時に起床せられて、運動されるやうな場所もないから、一行のもの〻寢て居る部屋を廻つて、まだ寢て居るかなど云はる〻ので、皆々刎起きるやうな始末であつた。夜は十時頃まで寢に就かれないので、話相手に侍坐したこともあつたが、侯から種々の話が湧き、他日のため書取つて置きたいこともあつたが、侯に隨伴の時は甚だしく多忙で、そんなことをする暇がなく、今になつて惜しいことをしたと思うてゐる。侯の談話に受け答することは、不肖なる自分には可なり難儀を感じ、後になつてから、あんな侯の閑散の時にあの事を問うて見ればよかつた、この事も聞けばよかつたと感じたこともあるが、あとの祭で殘念に思ふが、それにしても自ら待設けない種々の談論を聽いて興を感じ、益を得たことが少くない。侯の旅中は、汽車中でも旅舍でも應接に忙殺されるので、夜中旅宿で話のお相手になるやうなことは極めて稀であつた。大概夜分は招待があつてそこに行

かるゝ。それに就いて思ひ出すのは、或る時藪田と云ふ、其の頃株式界に雄視した人が自宅に侯を招待した。其の時澁澤子爵も來阪中で共に行かれた。此の招待につき如何に侯を饗應すべきやと自分は相談を受けた。先方の言ふには、大阪の名物と云へば淨瑠璃の外にないから、越路太夫を招いて語らせてはと云ふ、自分はそれがよからうと云うて越路は二段語つた。實は侯に淨瑠璃を聽く趣味の無いことは自分は百も承知であるが、前に云うたごとく、侯は終日各所に講演をやられて少しの休憩もない、侯に沈默を餘儀なくするには淨瑠璃を聽かせるのも一案と考へたからであつた。越路は入念に二段まで語つたから、侯は可なり退屈さうに見えたが併し口舌はこれに依つて休憩を得た。事果てゝ馬車に乘り旅舍へ歸る途中、自分を顧みて散々苦情を鳴らされ、越路のあの不自然の態度、あの苦しさうな聲、どこに妙があるのだと云はれたが、自分も說明も出來兼ねて一笑した。侯は淨瑠璃嫌ひであらるゝのに、大阪には實業界の巨頭に土居通夫と云ふ人が居り、此の人も昔大隈家に寄宿した緣故があるので、侯の大阪滯在中度々見えたが、此の人の得意は淨瑠璃を語ることであつて、侯に一段聞かせたいとあつて、著名な三味線引を伴うて旅舍へやつて來た。侯の執事はいつもの通り侯夫婦の室に案內せんとすると、土居氏の言ふには、今日は太夫格で參上したから別室に控へると云ふ餘所行の挨拶であるのに侯も笑はれたが、漸く侯夫婦の前に語り出す段となると、避けてゐた私なども聽聞を命ぜられたが、土居氏は得意の一段をやつてのけたが自負ほどでもなかつた。大隈侯は苦り切つて居ら

れたが、夫人は流石に愛嬌ある讃辭を寄せて土居氏を喜ばせた。同じやうなことで侯を困めたことが今一回あつた。それは大阪でなく靜岡の旅舍であつた。侯の一行中に高田博士もゐたが、博士は深更一人の校友を伴ひ來り、共に謠曲をやり出した。自分は隣室に寢ながら聽いてゐたが、侯は吾等の室の二階に寢て居られた。翌朝侯に面すると、侯は、昨夜は謠曲に當てられたと云はれ、二人の內下手なのは市島君だらうと云はるゝので、自分は謠曲をうなるやうな邪道に入ることを幸ひに免れてをります、高田君の相手は某校友でありますと告げて一笑したこともあるが、侯はすべて音曲に趣味が無かつた。

京都と金澤に於ける侯

侯は京都に行かるゝ毎に片山春子の舞踊をしば〳〵見られた。これにも侯は趣味をもつて居られないのだが、夫人が喜ばれるので侯も辛抱されたらしかつた。風の變つた踊の饗應に出たのは、大丸下村の小松谷の別莊に招かれた時、庭園の野趣に調和さすべく八瀨小原の農婦を招いて其の鄕土固有の踊をやらせたことがあり、嵐山の對嵐房に招かれた時、空也踊を農夫連がやつたが、これはなか〳〵複雜な踊で、其の野趣のある所を侯は却つて喜ばれた。侯は常に自ら云はるゝのに、俺は野武士で都びた事はわからないと。曾て加賀金澤の兼六公園內にある前田家の別莊に招かれた時、侯は私を茶室

に伴はれ、云はるゝのに、こゝだよ昔俺が失敗した所はと懷舊談があつた。維新の當初こゝに前田侯から招かれ、當時の顯官四五が會した折、庭前に潺湲聲を發して流れてゐる水を見て、侯は庭に降り立ちて水を手で掬して口を嗽がれた。それを見てゐた岩倉公は、「どうも野武士の行儀のわるいのに困る」と評したのを、侯は忘れず當時を思ひ出して一笑されたことであつた。

下村大丸に招かれた時の侯

話は又京都へ戻る。下村大丸が侯を本邸に招待した時、設備に就いて自分は豫め相談を受けた。私の言ふには、侯は書畫などを見て喜ぶ人でないから、そんな事に意を用ひるは無駄だ。侯はすべて雄大なことを喜ばれるが、何か侯を驚かす樣なものはないかと相談すると、下村には、綠靑で松を畫した金屏風が百雙あると云ふから、それこそ究竟のものだ、よろしくそれを立て囘すべしと。先づ入口の長い路地の兩側に立て、玄關に入つて五六の室を通過して本座敷に入るまで同じ屏風を左右に立て、どこまでも金屏風の垣根を通過せしむべしと一決したが、當日若し降雨があるかも知れぬから、路地にはテントを張るべしと注意したが、下村では濡れても構はぬと云ふので其の意に任した處、丁度侯夫婦が路地に入らるゝ時に小雨があつた。雨中に金屏風が立つて居るので侯の注意を惹いたが、それが、奥深い座敷まで際限なく墻壁の如く通路を飾つてゐるので流石の侯も驚かれた。實は各室の

アラ隱しであつたが確に成功であつた。此の時も餘興に片山春子の舞踊があつたが、酒次侯の口から興味ある談話が出た。侯の曰く、自分の京都の旅舍は祇園の中村樓であるが、或る時矢野文雄が大嘉をしきりに褒め、是非一泊を試みよと云ふので、其の言ふに任せて一泊して翌朝早く二階の洗面所で楊枝を使つてゐると、前樓に蚊帳が吊つてあつて間もなくなまめかしい若い女が出て來た。誰があとから出てくるかと思うてゐると、案外にもそれは矢野であつたと云うて笑はれた。傍の夫人はその話を承けて、矢野さんは白ばくれて大嘉の娘を褒められたが、實はおのろけであることを萬々承知であると云うて笑はれた。侯は料理の二の膳に大きな鯛のあるを瞥見して云はれた。これは目鯛と云うて饗應に出て見るばかりで、箸をつけずに持歸るものとなつてゐる。いつであつたか、東本願寺の枳殼亭へ招かれた時、矢野も同席であつたが、此の目鯛が出ると箸を着け出したのがをかしかつたなど云うて笑はれた。侯は此の處案外野武士でなく、寧ろ龍溪居士はあの態度不似合の野武士であつたと一笑を發した。

村井の長樂館に於ける侯

序になほ京都に於ける侯を語るが、侯は曾て村井煙草王の請に應じ其の洋館別莊長樂館に寓されたことがある。村井は善美を盡くした馳走をしたが、それが却つて野武士的の侯には氣に喰はなかつ

た。浴場其の他に苦情もあつたが、尤も飲食が氣に入らなかつたのだ。侯は田舍風の鹽辛好きであるのに、村井は京都第一の料理を吟味したから、淡泊に過ぎて、侯の口に適しなかつた。マサカ人の厚意を彼是と云へないから辛抱されたが、東京へ戻られてから、其の際同伴の夫人の云はるゝのに、村井さんの別莊では實に困りました。食物が大隈の口に適はないので、大隈はコンナ時に鰹節と大根おろしがあればよいがと度々申しましたが、二三日あすこにゐたため少し痩せましたと云はれたことがある。事實は侯は上品の料理など好まない人であつた。さうかと思ふと番茶が嫌ひで、私が同癖であることを知る侯は、いつも番茶が出てくると、茶碗を指して自分を顧みらるゝが例で、煎茶を供したが、それを滿喫さるゝのが侯の流儀であつた。祇園の中村樓が長い間侯の旅舍でありながら、侯の食味を心得ないので、往々苦情が起るので、中村樓から指導を請はれて、出かけたことがあつたが、校友の谷村一太郎氏も同伴で、藝者まで揚げて散財したことがあつた。あの樓は元來旅館でないから、客の扱ひに慣れず、大隈侯が宿泊されると、ある限りの女中は侯の身邊に集中して別室にある自分等を全く閑却するので、いつぞや嚴格に、吾等は大隈家の令扶でない、外に宿を持つて居るから粗略にすれば泊らないとねぢこんで、臨時に吾々附の女中を特に傭はせたこともあつた。

侯の乘用の馬車

侯が入洛さるゝ毎に東本願寺が馬車を提供することが例となつてゐた。縣廳の馬車の方が新式であつたけれども、本願寺の厚意を無にする譯にゆかないので縣廳の方は辭して滯洛中本願寺の馬車を用ひられた。ある時此の馬車で侯が西本願寺を訪はれた時、恰も遠忌に際し多數の人衆が門内に蝟集してゐた。侯の馬車が門に近づくと、人衆は侯を見んと吾勝ちに門外に出て雜沓を極め、馬は駭いて門にも入らず、門外の空濠に沿うて駈け出したのでアハヤ濠に落込まんとしたが、幸ひに人力車が路頭にあつて車夫は其の車で前を遮り辛うじて馬車を駐めたので難を免れたが、人力車はメチヤ〳〵に破壞した。さて人力車の賠償問題が即時起つて、西本願寺では自分の寺前の出來事だから當然自分方で始末すると云ふ、東本願寺では自分の馬車が事を起したのだから自分方で處理すると言出す。侯は又兩寺共御心配に及ばぬ、自分がどうでもすると云はれるので事が決しない。それこれで雜沓中に時間を潰すのは馬鹿らしいので、馬車に同乘してゐた自分は、侯の主張を止め、兩寺の爲すに委して寺に入つた。寺では光瑞師始め赤松連城等の耆宿が侯を書院に迎へた。侯は長幹なる光瑞師と並び立つて挨拶を交はされたが、身長は光瑞師の方が幾らか高かつた。光瑞師は侯に向かつて、閣下は百二十五歳の壽を期して居らるゝやうに承るが、私は聊か御遠慮して百二十歳の壽を期して居りますと云はれた。侯と師はしきりに盆栽談を交換されたが、自分は其の頃寺に齎されて一見を得た敦煌の發掘物に就いて云々し、師は時機が後れたのと資力が乏しいため充分發掘が出來なかつたと謙遜の挨拶があつ

た。やがて能の催されてゐる席へ導かれ拜觀後に饗應を受けて辭去すると、前刻の出來事が新聞の號外に出たり、各地へ電報が飛んだりして旅舍へ見舞に來る人が相踵ぎ意外の混雜を生じたが、夜に入ると各地から繼るが如く見舞の電報が來て、家職連は夜を徹して事務を執り頗る多忙を極めた。

比叡山に於ける侯

侯の滯洛中叡山の延曆寺管長が訪うて來て是非登山をと請求したので、侯は登山さるゝことゝなつた。此の日京都の有力者校友などの隨伴者數十人皆徒歩で從つた。此の頃は勿論今のやうなエレヴエートルの設備がないので登山は可なり難儀であつた。自分などはヘコタレて籃輿で登つた。延曆寺では禮を厚うして大綠門を作り盛んに歡迎の意を表した。山上の根本中堂は國史に輝く名蹟で、天子の行幸でも無ければ開かない所だが、此の日は特に侯夫婦の爲に開門して佛に直面する座に侯夫婦を坐せしめ、吾等四五の隨員も其の背後に坐した。侯の母堂は曾て自製の耦糸曼陀羅を納められたが、此の日は特にそれが侯の座邊に置かれてあつた。此の席は僅に四五人を容るゝ位の狹い所だが、これは通常人の入り得ない所である。如何さま管長始め一山の僧徒は座の下に坐するので、間もなく梵鐘が鳴り、讀經の聲は吾等の脚下に起つた。吾等は坐ろに此の席の尊さを感ぜざるを得なかつた。讀經終つて休憩所へ案内されたが、侯の休憩所の床に掲げてある幅に私の目が留つた。其の繪は杉聽雨翁の

筆で、登山者が嶮路を攀ぢる所を畫し、諦視すれば登山者の臀部を丁狀の棒を以て押す合力が居るので、ハテ此の人は誰かと案じつゝあると、侯は、其の男は誰か分るか、前年登山した時杉も同行したので戯れに俺を圖したのだと云はれて、侯の健脚の昔を偲んで感慨に堪へなかつた。饗應を受けた後、山上を散策して眼下の琵琶の湖景を弄し、今の寺の荒廢を見て昔時の隆盛時を追懷し、遂に日枝神社を拜した。偶〻小雨があつたが、宮中の禮儀に通じて居らるゝ侯夫人は下駄を脱ぎ棄てゝ足袋跣で雨に濡れて石道を歩し、一拜の後背退された。吾等は其の物慣れた儀禮に敬服した。侯は此の境内に笻を曳きながら、延曆寺并に此の神社に就いての史談をいろ〳〵説かれた。侯は一場の演説をなすべき腹案もあつたのに、管長が遠慮して請はなかつたのは甚だ遺憾であつた。侯は腹案の大略を語られたが、惜しいかな筆錄し置く暇がなかつたので今は殆ど忘却した。維新匆々高野、比叡等の寺々の廢寺とならんとしたのを助けたのは侯で、此の日の歡迎は謝恩の爲であつた。

賀茂の葵祭見物の侯並に妙心寺と侯

侯の滯洛中賀茂に葵祭があつたので侯は見物された。繪卷を展開した如き古式の行列に吾等も興を感じたが、侯は行列中の服裝其の他に破損のあるを認められ、此の祭典は朝廷の盛儀であるのに破損を修理しないなどは以ての外だと憤慨され、歸京の後宮内省に注意を促さねばならぬと云はれた。又

妙心寺を訪はれた時境内を散策されたが、傍に歩しつゝある私を顧み、此の寺は思ひ出の多い所だ。幕末に捕吏に附き纏はれ逃げるに處なく、旦らく身を潜めたのは此の寺であつたと云はれたことも忘れ難い侯の逸事である。侯は又京都の實業家中井三郎兵衞氏の請に應じ東山に行かれたことがある。中井氏は東山を京都の公園にしたいと計畫した際であつて、東山の地形を侯に見て貰ひたいと云ふ懇望であつた。此の時も京都の有力者は菊池帝大總長を始め、幾十の人々が隨伴して賑かであつたが、其の際侯が記念のため手栽された樹木は今は大きくなつて、數年前京都の校友會は記念碑を建て、且つ記念樹の保護を計畫したが、此の記念樹は今は東山の一名物となつた。

神戸に於ける侯

京阪の記事が案外長くなつたが神戸に就いても多少云はねばならぬ事がある。いつであつたか侯の馬車に同乘して神戸を周覽した際、侯は維新前の事を回顧して、今は立派な開港場となつてゐるが、維新の前はまばらに家があつた田舍で、土地の價も二束三文で、買占めることも容易であつた。他日の繁榮は期して待たるゝあの頃に神戸の地を買占めたら間もなく暴富をなすは知れ切つたことであるから、自分は鍋島家のために土地の買收を策したことがある。藩の俗論はこれを納れなかつたが、今目前の繁榮を見て自說の行はれなかつたことを殘念に思ふと語られた。侯夫婦が川崎造船所主川崎正

藏氏に招かれ、其の饗應を受けられた時は、自分も席に陪したが、自分の青年時代校長であつた服部一三氏が兵庫縣知事であつたので、陪賓として席に臨まれ、造船所の社長格であつた松方幸次郎氏も亦席にあつた。主客の間に懷舊談が交換されたが、侯夫人は松方氏を顧みて、宛も少年に對する如く、あなたも大きくお成りだと云はれたのには、松方氏も苦笑し、自分も一笑を禁じ得なかつた。十歲位の少年時代夫人が見られた幸次郎氏は、今は二十數貫の肥大の人であるから、夫人の驚かれたのも道理であつた。神戸で盛んな侯の歡迎會のあつた時、服部知事は總代として歡迎辭を陳べられたが、知事は青年時代佐賀の大隈侯經營の學校に學んだ侯の門下生だと言はれ、侯が早稻田大學を起した功を稱へたのはよかつたが、侯が到る處に雄辯を揮はるゝが、侯の門前にどんな材料でも直ちに供給する多くの學者のあるのは羨ましいと云はれたのは、自分から抗議したかつた。成るほど早大には幾多の學者はあるが、侯は唯の一遍でも學校に賴んで、統計やら材料などを得られたことは無いので、この事實を知つたら服部氏も驚歎したであらう。侯は幾回も神戸に演說されたが、或る時外交演說のあつた時、其の誤譯が電報で外國へ傳はり、意外のセンセーションを起し、正誤電報を發するやうなこともあつた。

中國筋に於ける侯

中國筋では岡山市を始め倉敷、津山、吉備津などに數ケ所講演された。岡山では後樂園の内曾て明治大帝行幸の際、行在所に充てた座敷に侯は立つて庭の風景を詠められ、明治大帝もいたく此の庭がお氣に召し、御賞讃があつたと語られた。此の庭の特色は天守閣が庭の一方に雄姿を現してゐることと、樹木や丘陵の視界を遮るものがなく明かるい庭であることゝ、附近の山が京洛の東山の如く溫藉でそれが宛ら庭中のものとなつてゐることなどが特色で、山を庭中のものとする爲に平庭にしたものであらう。寺もない眼前の山に五重の塔の立つてゐるのも庭に風致を添へんがためであらう。併し何物か缺けてゐるかに思はれ、侯がしきりに賞せられても實は自分はそれほどよいとも思はなかつた。夜に入り同行三四の友人と水邊の一亭に小宴を催した時、清い一帶の河流に柴舟の通過するのを見、沙磧に白布の曝してあるのを見、又中島と云ふ遊廓が橋を隔てゝ燈火を漏らしてゐる景を見ると宛ら鴨河そつくりで、水の多いだけが鴨川に優つてゐるので、自分は激賞して後樂園よりも此の景が優ると云ふと、一友人は笑つて、此の流れは園に附帶の一景で、此の河が園を抱へて居るのだと語つたので、自分も始めて覺り、この河流が園の附屬なれば園に對して遺憾はないと、翌朝侯に此の事を語つた所侯もうなづき、後樂園は全く京洛の景に擬らひ、山も河も京都に形どつたものだと語られた。

早大の出身者であり岡山縣下の有力者である大原孫三郎氏に招かれ、侯は倉敷へ赴かれた。大テントを張つての講演であり、大原家の饗應も善美を盡くした。津山では舊城趾内で侯の歡迎會が催さ

れ、侯は舊藩主松平確堂と閣僚として交りがあつたので追懷の談があり、津山はスウエツルランドと地形が似て居ると云はれ、工業國たるべしと鼓舞された。吉備津神社の參拜の折の演說には犬養木堂に言及され、あの人の祖先は此の神樣の犬の番人だと語り、此の神社の名物釜鳴りに就いても侯一流の興味ある說を立てられたが、すべて省略して四國に渡り、高松の松平賴壽伯の客となられたことに筆を移さう。

四國に於ける侯

侯は船中珍しく休養の時間を得られたので、私などを相手にいろ〳〵のことを語られた。それに據ると、曾て夫人同伴の旅に讃岐へも立寄られたことがある。それは燈臺建設の官用を帶び、外國の技師を伴うての視察旅行であつた。其の頃征韓論で内閣は大紛議を生じ、閣僚は大隈を呼び戻せと騷いだが、今のやうに電信が自在でなく、一度電信に接しても侯は平氣で戻らず旅行をつゞけたと云はる。實は内閣の紛爭はおよそ知られてゐたが、極度まで爭はねば治らないからと思つて、態と急いで歸ることをしなかつた。然るに大阪に着した時には東京から迎へが來てゐたと言はれた。此の燈臺視察に侯は伊勢に立寄り、外人が大廟を拜したいと云ふのでそれを初めて許したが、一條件を附した。それは跪いて拜せねばならぬと云ふことであつた。外人はその如くにしたが、慣れないために後ろに

ヒツクリ返つたものもあつたと語られた。倘古市の踊が見たいと外人が望むので、縣知事に交渉すると、あの踊は今禁じてあるが臨時にやらせようと云ふので、備前屋であつたか油屋であつたか忘れたが、臨時に命じてやらせると、知事は其の娼樓からひどくやられた。人の營業を勝手に禁じて置きながら、必要であるからと云つて突然やれと命ぜらるゝは餘り蟲がよすぎると散々苦情を鳴らされ、知事も閉口したなどの笑話も出た。

さて船は高松に着し、侯夫婦は數日滯留され、屋島の勝地を始め鹽田地其の他數ケ所に講演されたが、屋島の懷舊演說などは頗る揮つた名演說であつた。自分が何よりも嬉しかつたのは、讃地では世話役が物慣れた人で、何から何まで申分なく行屆いてゐて、自分が容喙せねばならぬことは一つも無かつたことである。自分は山水明媚の此の地を最も好むもので、滯在中は全く觀光の客となつて愉快を感じた。松平家の客となつてゐる間に、一夜松平伯夫婦より正式の饗應があつて私も其の席に侍した。席には侯夫婦と伯夫婦の外、私があつたのみだが、宴酣にして中野（武營）をお相伴に呼べと命ぜられ、私の席の次に客の膳よりも小なる膳が持運ばれ、そこに中野氏が入り來たり丁寧に禮をして座に着いた。中野氏は其の頃東京實業界に雄視してゐる巨頭であるのに、こゝでは君臣の關係が嚴重で、踰ゆ可からざる畛域があるのを見て、ひどく感激した。

馬關に於ける侯

夜中の汽船で高松を發し、深夜の岡山に上陸馬關に着いたのは朝であつた。侯は前夜不眠のため顏色は不愉快げに見えたが、自分の鄕里の商業學校の教頭であつた齋藤軍八郎氏が此の地の商業學校校長となつてゐて、自分を訪ねて來て、突然だが是非侯に講演を請ひたいと云ふ。豫定しないことでもあり、殊に不眠のため氣色わるげに見える侯に請求して承諾さるゝかどうか私には難色があり、海峽を渡るにまだどれほどの時間があると聞けば、一時間半位はあり、會場には人が集つてゐるかと問へば、早朝から立錐の地のない程詰めかけて居ると云ふから斷り兼ねて侯に云ふと、案外早速に承諾盥嗽が濟むと朝餐も取らず直ちに會場に赴かれた。自分も例の如く隨從し、コンナ場合の演說は果して氣乘があるかと暗に氣遣つて侯の演說を傍聽すると、如何にも堂々たるもので、あらかじめ工夫でもされたかの如く行屆いたものであつた。實は此の地は侯の一演說無かる可からざる地である。侯は長州の先輩が維新の大業に與つた功績を列擧され、盛んに氣焰を吐かれた。ホテルに歸る途中、自分が傍聽した感じを陳べると、侯は莞爾として、朝餐前の演說は餘りやらんが、腹がへつてよい氣持だ、時間があればまだ言ふべきことがあつたにと語られた。

九州に於ける侯

愈〻九州に入り博多に於ける醫科大學に於てなされた講演は一時間餘に渉つたが、醫學の大家が席の前面にぞろり列してゐるのを見て、侯は徹頭徹尾、醫學範圍の談論をされ、それがなか〳〵興味があるので、壇に侍立して聽聞してゐた自分も侯の多能であるのに驚いた。侯は長崎に於ける蘭學の沿革やら、政治家中にも醫者が幾人かあると云うて寺島外務卿などを引合に出し、醫學や醫術に關する興味ある經歷が沸くが如く陳べられて、遂に百二十五歳說に移り、養生の要を說かれたが、目前の大家先生を宛ら書生を扱ふごとく、諸君はまだ若いから深いことを云うても分らんなど〻、横柄ながら愛嬌ある辯を弄して全衆を烟に捲かれた。

侯は不思議な强健の記性の持主で、腹笥に滿々たる種々の事實が必要に應じて續々迸り出で、それが如何にも多方面である。どこの講演でも多くの場合、其の土地に就いて若しくは其の地の故人に就いての懷舊談が出るが、侯の演說に光彩を添へる要素は確に之である。侯は何れの地でも跋渉を經ない所はなく知名の士で知らないものとては無い。侯の記憶に存する程の事は史的興味のある事で、それが場所に應じて續出するのだから聽者の興味をそゝるのも無理はない。侯は醫者に對すると醫を說くと同じ樣に僧に對しては法を說き、神主に對しては神を說き、皆侯獨得の見解があつて、强ち故事

附でない。吉備津では古事記が引合に出で、高野山では空海の稀有の大天才であることを稱し、經文を侯一流の解釋で說くと云ふ工合で、土木でも工業でも商業などに就いても大なる經驗を有せらるゝからそれ等は云ふまでもないが、侯は又外交の辭令に通じ、人をそらさぬ妙があつて、人の感情を害するやうなことは決して口外されぬ。加賀の金澤に行かれた時、加賀藩は收斂を以て名高かつたと喝破されたから、場所柄妙なことを云はるゝと思つてゐると、直ぐに政治家は手腕が無ければ收斂は出來ないものだと云はれ、縱横の辯に驚かされたことがある。醫科大學に於ける講話の如き多能の侯の演說の一標本とするに足ると思ふ。

佐賀に於ける侯

九州でも各所に講演され、錄すべきことが少くないが、割愛して佐賀に於ける侯を少しく觀察しよう。侯の汽車が佐賀に着すると官民多數の人が驛頭に迎へた。小學兒童も澤山に堵列してゐたが、それが皆跣足であるのに吾等は驚いた。侯はまだあれを止めないで困るとつぶやかれた。侯の佐賀入は大人氣であつた。丁度閑叟公の銅像除幕の式があるので、侯夫婦もそれに臨むため歸省されたのであるが、鍋島直大侯一家も前日既に到着されてゐて、佐賀は歡喜で滿ちてゐた。全市お祭騷ぎで、フリューとか云ふ獅子舞は各町村のを併せると三十團もあるとか云うたが、それが一々侯の旅宿の前で舞

ひ踊る。一は歡迎の意を表する譯でもあるので、大隈家では各〻相當の酒肴料を出さるゝので、これだけでもなか〳〵混雜であつた。侯の久方振りの歸省と云ふので、侯の舊知は頻りに訪ねて來た。大隈家では四斗樽の鏡を拔いて之を待つ樣な騷ぎで、到頭侯の外出の留守に來島恒喜の弟が夫人に面會を需めて叩頭謝罪をする樣なこともあつた。閑叟公銅像除幕の日、生憎雨が降つたが、侯は雨中に立つて公の偉蹟を陳べられた。私は長幹の公の像を拜し、又式場にあつた武富時敏氏に公の達辯なりしことや、人を待つに傲ちず如才のなかつたことなどを聞き、大隈侯に似寄つた人だと思うた。侯は又因緣の深い寺院を會場にして鄕黨に演說をされた時は、鄕國に對する種々の感慨を陳べ、且つ苦言を吐いて警醒されたが、侯は前年來た時よりも烟突が減つたと云うて工業の不振を喝破され、佐賀人は兎角議論好きであるが、無用の言を繰返す癖がある。此の繁劇の世の中にはそれを改める必要があると云うて、ロヂツクを習へなど云はれ、兒童の跣足の陋習などを說かれた。

侯の政治的旅行

以上は侯の非政治的旅行の大略であるが、侯の政治的旅行は侯の首相として議會を解散し信任を國民に問ふ時に在つた。侯は上野の精養軒に閣僚と共に都下の有識者を會して解散の理由を陳べられたのが皮切りで、候補のため都下各選擧區に演說をされた。首相が足を擧げて自ら逐鹿場に立つことは

日本に於て前例の無いことである。侯は都下のみの運動を以て足れりとせず、遂に地方遊說を試みらるゝに至つたが、此の遊說は侯として前例のない多忙を極めた。侯は東海道筋の都會地には大概演說されたが、汽車中でも各驛に選擧人が群集して居るのに對し窓外に顏を出して一二分の停車時間を簡單ながら群衆に呼びかけられた。此の簡單な演說には侯は旣に經驗があるのであつた。私の鄕國越後に北越鐵道が出來た時、侯は此の汽車で全線を視察されたが、片言一語でも侯の說を聽かんとするもの〻各驛に群をなしてゐたので、侯は驛毎に起つて呼びかけられた。越後地方は侯が御巡幸に扈從されて熟知の地であるので、簡單ながら土地に適切の事を說かれ、多衆の滿足を博されたこともあつたので、東海道でも此の經驗を繰返されたに過ぎなかつたが、侯の當意卽妙の演說は、千鈞の力があつて、沿道の選擧民は靡然として侯に左袒し、侯の經過地の候補者に落選したものは殆どなく、時間の都合で侯の經過されない地方では氣の毒にも落選者が若干あつた。三四日に亙る侯の不眠不憩の運動は、侯の咽喉に祟つて聲が全く潰れ、低調で物を言はるゝと聽き取れないほどであつたが、侯を煩はす難場が一つ殘つた。それは小山松壽氏のため名古屋に演說さるゝことであつた。名古屋の通過はいつも夜半近くで、自分は內心コンナ夜更に聽衆があるであらうかと思ふと同時に、侯の發聲を氣遣つたが、事實は私を裏切つた。名古屋に下車すると群衆は會場に到るまで數町の沿道に堵を築いてゐたが、會場は數時間前旣に滿員となつて、沿道の人衆は皆場に入り難いものであると聞いて、其の意外

なるに驚いた。侯は會場國技館に導かれ、直ちに演壇に立たれたが、侯の音聲は自分の氣遣つた程でなく、低聲に語らるゝ時こそ不鮮明であつたが、大聲ではよく徹し、一時間に渉る大演說も無難に濟み、大感動を與へたのは實に意外であつた。

富山に於ける侯

名古屋に於ける侯の大人氣に就いて想ひ起す一事は、侯が富山に赴かれた時である。此の地は旅順の戰鬪に出征した兵の出身地で、此の役に戰歿した將卒は無慮三千を數へた。侯の來遊を機とし戰歿者の追悼會が催された譯は、侯が軍人後援會の會長であられた爲であつた。會場は西本願寺の別院で貳千人の遺族は朝來詰めかけてゐた。勿論將校も澤山に座にあつた。侯は演壇に立つ前に、鎖してあつた佛殿の扉を開かせて聽衆の目前に香を焚き、合掌された後、徐に演壇に進まれ、愈ゝ演說となると言々語々戰歿者の遺族に同情を寄せられ、白骨の文などを引用されての熱誠溢るゝ演說には聽衆も感に打たれた。場內獻秡の聲に滿ち、將校も首を垂れ泣く人も少くなかつた。侯は終に報國の大義に論及して降壇されたが實に大說教であつた。

富山は東西兩本願寺が對立して各ゝ別院がある、均勢上西の別院に軍人の追悼會があつたから東の別院にも侯に講演を請ひたいと切なる要求が出て、侯は諾された。講演は午後三時に始るのに、朝か

ら近在のものが詰めかけて、午前中既に滿員となり、入場の出來ないものが貳千人寺の境內寺の門前に溢れてゐるので、侯が臨まるゝ時、通路が雜沓を極め、警官が如何に制しても通行が出來ないので困つた。自分は車を下りて侯に近寄り、此等の群衆は場に入ることが出來ないので失望して居る、願はくは車上で二三分群衆に呼びかけて戴きたいと需めた。侯はよろしいと例の當意卽妙の演說をさると、群衆は歡呼して漸く道をひらき、追々歸路に就いたので寺に入ることが出來た。人力車上の侯の演說はこれが始めであり、また絕後でもある。こゝに一瑣事を附記するが、富山では侯夫婦の人力車を紅紫の花で飾つて、車夫にも特別の服を着せたが、田舍じみた工夫ではあるが、一行三十人も車を列ねて練り步く時、侯夫婦を容易に認識せしむるにはよい工夫であつたので、自分は鄕里に於て此の故智に倣つた。

新潟に於ける侯

侯はどこに行かれても、舊藩のある所では必ず藩祖の廟を拜せられ、或は地方の崇敬してゐる神社佛閣を必ず參拜された。此の參拜で思ひ出すのは新潟で法音寺を訪はれた事である。此の寺は前年火災に罹り本堂も其の頃は假設であつた。そこへ侯夫婦が訪れて懇なる讀經を賴まれたのには人々は奇異の思をなしたが、侯夫婦には深い因緣がありながら、始めて參詣されたのであつた。安政頃に新潟

で名奉行の稱があつた小栗又一忠高と云ふ人が幕末の俊傑小栗上野介の父で、大隈侯の夫人には肉親の關係があるのだ。奉行の墓も此の寺内に在つて立派に存してゐるが、侯夫婦は展墓して香花を捧げられた。此の奉行在世中、新潟の藤井忠太郎の家と特別懇意の關係があつたので、小栗上州が其の領地高崎で官軍のため横死すると、遺族は遁竄して此の藤井の家に潜伏するに至つた。藤井は自分（市嶋）の妻の親戚であるので侯夫婦に紹介し、家に傳はる小栗上州の遺族に就いて語つたのに據ると、三人の婦人は從僕が一人附き添うて藤井に投じた。其の婦人の内、老體は新潟奉行たりし人の未亡人で、姙娠中の婦人が小栗上州の室で、十七歳許りの一女子は、藤井家では大隈侯他日の夫人であらうなど丶云うてゐたがさうではなく、小栗家の親族であることが侯夫人の談で分明した。藤井家では油斷なく大切に隱匿したが段々危險が迫るので、深夜會津へ落した後は杳然消息を絶つた。併し其の後多少の消息が知れ、上州の未亡人は分娩後死し、産れた一女は三井の三野村氏が引取つて育て、七八歳の頃始めて侯夫人に引合はされたとは夫人の談だが、此の女子こそ矢野文雄氏の弟貞雄氏の配偶となり、貞雄氏は小栗の姓を冒すこと丶なつたのである。此の因緣話は旅中尤も興味を感じ、脚本にでもしたいと思うた事實である。

侯は越後校友の熱誠なる冀望により前後二回來られた。其の間の事に就てはいろ〳〵記すべきこともあるが、綺羅の巷新潟に於て侯が寛いで喜ばれた一事を語らう。初度新潟に來られた時校友會の宴

席も侯の宿泊も割烹店行形（ゆきなり）であつたが、校友は侯の旅情を慰めんと款待至らざる所なく、宴席には特に新潟の佳麗三千の粹を拔き、妙齡の藝妓をけふを晴れと粉粧を凝らさせ、侯の座を圍繞せしめた。陽氣の侯は御機嫌殊に麗しく、新潟美人は日本第一とまで賞讃され、興の盡きない内追々夜が更けるので、自分は侯の健康を氣遣ひ退席を請うたが、侯は餘程遺憾とされたらしく、歸京して後も、しばしば私に、君等は俺を邪魔がつて早く寢せたなど云はれたので、十年後再び新潟へ來られた時は夫人も同伴であつたが、今度こそは引取ると云はれても應ずまいと校友連とも謀し合はして、前回よりも一層派手に百餘の佳麗に座敷の兩側の緣に盆踊をさせた。侯は自ら野武士を以て任ぜらるゝだけ、此の種の陽氣な舞踊が大いに悅に入つて、深更まで退席されなかつた。自分は前回の侯の不平を十年目に償つた心持で頗る愉快を覺えた。

侯の旅行の到る處何人にも先んじて斡旋款待をつとめるのは校友で、宛ら慈父母に對するごとく熱誠を籠めた。以上新潟の事も其の一例だが、侯夫人は衷心悅ばれて、往々涙ながらに謝されたこともあつた。侯はいつぞや松方侯に澤山子孫のあることを言はれ、俺は隨分負嫌ひだが、兒孫を多く有つてゐる點では松方に勝てぬ。併し俺の兒孫は早稻田大學に始終一萬有餘居り、全國に散在してゐるものは幾萬とある。俺も强ち子供が無いとは云へないと云はれたが、實に其の通りである。

結語

侯の所謂大名旅行と云ふものゝ内容は凡そ以上の如くで、賑かな旅行であるには相違ないが、決して成金的に豪奢を極めた旅行でない。侯に舊交のあるもの、早大に生まれた校友は天下に充ちてゐるから、其の關係で侯の旅行は勢ひ大規模となるのである。大名の旅行は云ふまでもなく、大名はロボットと一般であるが、侯の旅行は侯一人のみ間斷なく根氣限り活動さるゝので、人はこれを見て侯の文化運動と評するが、侯の志もこれにあるのである。侯は少からざる自費を散じ、勞を厭はず活動されたのである。侯の旅行は決して觀光のためでない。地方人の案内するに任せ、風景地を訪はれたこともあるが、それは侯の趣旨ではなかつた。侯の趣味は風景にあらずして、多數の人衆に會し自家の主張を傳へんとするのである。されば侯の行かるゝ先々、各地の新聞記者は侯の車中でも旅館でも遠慮會釋なく訪ね來るが、侯はこれに接することを寧ろ興味として喜んで應接せらるゝことが常であつた。侯の精力は絶倫とは云へ既に古稀を超えての老齢で、よく身體が堪へたものと敬服の外は無かつた。自分などは侯の長途の旅に隨伴して格別自ら勞することもないのに、歸京すると多少の疲れを覺えて一日位客を謝して休養したいと思ふほどであるのに、侯に於ては歸宅の翌朝訪問して見ると、常の如く早朝客に接して居られて些の疲勞の態を見なかつたことを思ふと、體力に於ても吾等は太刀打

が出來ないことを感ずる。自分は東京に在つても幾んど毎日侯の邸に伺候して、其の談論を聽き、これが爲に啓發したことは少くないが、侯の旅行には幾んどいつも追隨したので、他人よりも侯の薫陶を受ける機會が多かつたことを思ふと、私は衷心侯に感謝を捧げなければならないのである

大隈侯の國民葬

此の回顧錄に漏らしがたいのは、大隈侯の薨去と其の葬儀である。侯は八十五歳を一期として不歸の人となられた。これは早稻田大學の痛恨事であるのみならず、眞に國家の大不幸であつた。吾等は大學の同人と共に十數日間侯の邸に詰め切つて、御容態を打護り切に恢復を祈つたが、實に最後まで不治の症であることを知り得なかつた。十二月十八日と云ふ日に、私を病床に呼ばれたから、直ちに參ると、侯は危篤の病人にも似ず、例の快濶の調子で、其の頃の不祥事であつた安田善次郎翁と原敬首相の横死を氣の毒であると同情を表され、俺も長く病褥に在るので君等に厄介をかけてゐるなど語られ、病前からしきりに編纂に努力された「東西文明の調和」を是非出版してくれと囑され、文明協會に就ても是非守立てゝ、存續するやうにと語られた。私は此等のことを承つて非常に感激したが、これが實に侯の遺言であつた。

侯の母堂が逝去されたのは十二月三十一日であつたから、侯の病勢が次第に重りゆくのを見て或は母堂と同じ日に薨去されはしまいかと思つた位だ。それ故に其の日が來ると、私は心配で心臟が烈し

く鼓動する樣な氣がした。然るに幸ひに侯は三十一日を無事に過し、大正十一年の新正を迎へられ、そしてなほ十日の壽命を保たれた。愈〻臨終の時、私共極く少數のものが侯の枕頭に集つた。もう二三時間で絶命の場合であつた侯のお顏を拜すると、極めて安らかに何の苦惱も無い樣子であつた。私は靜かに水を筆につけて侯の唇頭に點じた。此の時ほど私が沈痛の感慨に打たれたことはなかつた。四十餘年間侯に追隨して侯の赴かるゝ所へは影の身に副ふが如く陪侍し、侯の薰陶に浴したことが無量であるのに、今お別れと思ふと、熱涙が止めどもなく出て、吾を忘れて慟哭した。私が生涯忘れられない深い悲しみを感じたのは此の時であつた。

私が一生の光榮としたのは侯の御葬儀の衝に自ら當つたことである。葬儀委員長としては時の宮相波多野敬直子を推したが、委員長は萬端私に任され、侯の令嗣もまた私に委かされた。實は高田博士が此の衝に當るべきであつたのに、不幸病んで居られたので、私が此の光榮を擔つた。勿論早稻田大學の理事諸君は皆私を扶けて非常に努力された。吾等は大學の同僚と共に侯が不起と定まつた時から、祕かに如何にして侯の終りを飾るべきやを寄り〳〵相談した。侯の死は國葬に値するものであるけれども、國葬は現役の人でなければ行はない規定と聞いて、何かそれに齊しい葬儀はあるまいかと案じた結果が國民葬となつた。私は此の案を決する前に加藤高明伯にグラツドストンの葬儀の模樣を聞いて見た。グラツドストンの靈柩はウエストミンスターアベーに安置されて、大衆の參拜を許した

と聞き、其の例に倣はんとしたのが、國民葬を行ふ動機となつたのである。實に侯に最もふさはしい葬儀は、或る階級に限つて參列せしむる國葬でなく、あらゆる階級、熊も八も包含する大衆が、隨意に參拜し得る告別式であらねばならぬ。それは日比谷公園に行ふべきであると私かに案を立てたものの、未亡人の一諾を得るにあらざれば、勝手にやることは無論出來ないので、內々其の準備を進めながら、どうすれば未亡人の同意を得ることが出來ようと、之が自分等の大いに頭を惱ました問題であつた。侯の絕命の其の夜は、吾等は悲しみの間に夜を徹して內議を凝らした。其の席には加藤高明伯は不在であつたが、町田忠治君などはゐた。種々協議の末、侯の未亡人は病氣であらるゝから、どうあつても告別式は本邸に於てせねばなるまい。それが終つて後ならば、日比谷に大衆の告別式を行ふことには未亡人も多分不同意はあるまい。併し一日二度の告別式を行うて埋葬まで濟ますことは、なかなか容易でない。本邸の告別式は門から行ふにしても勅使や皇族も見える譯だから、餘り早く初めることも出來まい。日比谷の告別式も大衆の參拜に遺憾なきを期するには、三時間位の時間が必要であるが、終つて護國寺の墓地に埋葬するにも餘り深更になつては困る等々で時間の組合はせを案ずる苦心も一通りでなかつた。

吾等は所謂國民葬を行ふに、それに要する費用まで內々工夫をした。と云ふのは、二重の告別式を行ふに、大隈家を煩はすべきでないと考へたからだ。が、其の費用に充つべき資金は案外容易に出來

た。併し未亡人の同意が得らるゝかどうかゞ一種の謎であつた。悲しみの間に居らるゝ未亡人に、薨去の翌日直ちに御相談するのは餘り無遠慮と、多少躊躇する所があつたが、大體の案が決しねば準備に手を下す譯にも行かないので、自分の氣を採んだことは一通りでなかつた。幸ひに薨去の翌日加藤伯も武富時敏氏も早朝から來邸されたので、兩氏を先頭に立て自分も後に隨つて未亡人に相談に及ぶと、萬事を任すとの挨拶があつたので、吾等も初めて安心した。書院に居並ぶ多くの同人も、暗に心配して其の結果を知らんと待構へてゐたが、皆結果を聞いて安心して歡聲を發するものすらあつた。

愈〻正式に準備に取りかゝつたが、告別式當日まで十日間を費さねばならぬほど大規模の葬儀であつた。侯の靈柩は三百六十貫と云ふ重量のあるもので、それを日比谷に運ぶには自動車に依るの外はなかつたが、校葬の心持で居る早稻田の學徒は、日比谷まで舁ぎたいと云ひ出したのは其の麗しい赤誠から出たものではあるが、一分の時間も誤つてならぬ葬送に萬一の事があつてはならぬと氣遣つた自分は、學徒の折角の望を拒むことが已むを得なかつた。靈柩を載せる自動車を新たに製造したり、日比谷に式場を作つたり、途中の道普請をしたり、種々の土木を營むにもいろ〳〵面倒もあつたが、此の葬儀の委員たらんことを冀望するものが澤山あるので、折角の念願を無にする譯にゆかず、追々委員が增加して遂に八百人と云ふ多衆になつた。それがため度々委員名簿を印刷し、何か通知を發するにしても八百枚の葉書を出さねばならない始末で、此の事務のみでも容易なことでなかつた。

偖て愈〻當日が來た。本邸の告別式は豫定通り滯りなく行はれ、侯の靈柩は混成旅團の儀仗兵に護られ、肅々と本邸を發し、親近者を載せた幾十の自動車は靈柩に尾し、二萬に餘る早稻田の教職員學徒は、沿道の兩側に堵を築き、それが九段の坂上に達し、靈柩が九段下を過ぎると、それに尾して早足で早稻田關係者は日比谷公園まで隨つた。公園は前日降雪があつたので、折角石炭ガラで泥濘を整理したのが降雪のためぬかるやうになつたのを、急に一萬枚の蓆を敷くと云ふ騷ぎで、靈柩は一刻も違はず、假りにしつらひたる式場に安置され、定刻左右二個所の門を開くと、弔客は潮の如く入り來たり、忽ち幾萬の人を以てさしもに廣い場が滿ちた。豫て混雜を恐れて、御大葬の式場に倣ひ、靈柩前に左右に吐ける道を作つたので、拜を了ると直ちに自然足が移り、斯くして幾十萬の人衆は間斷なく去來したが、何れも敬虔の念を以て禮拜し、毫も混雜なく、又非禮のものも無かつた。此の日は一月中の寒天であつたから、脫帽を强ひず、外套を脫するに及ばぬと揭示をしたが、其の揭示は全く無駄で、手を引かれて入り來たつた小兒すらみな脫帽して一人の彌次馬らしいものがなかつた。殊に群衆中には侯を神の如く尊敬し、雨の如く賽錢を投じ、靈柩の前に賽錢の堆をなした。此の日朝野知名の士は皆委員となつて參拜者の通路に立つて一々丁寧な挨拶をなしたので、場を一層嚴肅にした。私は大衆の去來に萬一何事か起つてはと時間中心配で溜らなかつたが、それは全く無益の心配であつた。此の日大衆の取締は警察を煩はさず、學生が熱心に其の衝に當り、慇懃に來會者に對したので、

心あるものは校風の美なるを思うて感激した。

靈柩を護國寺の大隈家の墓域に移して全く埋葬を畢つたのは夜の九時であつて、朝の告別式より終局まで一絲亂れずプログラム通り一刻の違算も無かつた。埋葬を畢るまで幄舍內に多數の侯の昵近者がゐたが、當日儀仗兵を指揮された堀內將軍は私に握手を求めて無事結了の喜を陳べられ、且つ云はるゝに、此の葬儀に就いて君の伎倆に敬服した。實に葬儀の準備中每日大隈邸に集つた面々の內に論客が多く、葬儀に就て囂々の論があり、多分總務に任ずる君も方針を變ずるならんと豫期した。軍隊などでも傍議に左右せられて方略を變ずる事は珍しく無いが、君は紛々たる群議に頓着なく初めに立てた方針を幾日經つても毫も變ずること無かつたのは恐れ入つた。君は三軍を率ゐるの能があると、溢美の褒辭があり、なほ二萬の學徒が九段より日比谷まで自動車に尾して駈足で歩き續けた、如斯きは軍隊に於ては不可能の事に屬し、誠に異數の事だと云はれた。自分は自ら揣らず、此の大任を故障なく果し得たのは、侯の令嗣が自分に萬事を委せられ、傍議を一切取上げられざりしことゝ、早稻田大學の同僚が極力自分を輔けたことに依るので、決して自分の手柄などゝ思つてゐぬ。

此の葬儀は誰云ふとなく國民葬と名づけられたが、葬史に前例のない盛儀で、あらゆる階級の人が式場に臨み、其の數三十萬と註せられ、日比谷附近の電車は一時停車を餘儀なくさるゝ雜沓であつた。常に國民を友とせられた侯の葬儀としてはふさはしいと一般の公評であつた。これを二ケ月後の

山縣元帥の國葬に比すると、繁閑同日の論でない。國葬は餘りに階級本位で、服裝などがやかましく、會葬を望むものもおのづから制限せられて、如何にも淋しかつた。これは強ち山縣元帥の德が大隈侯に讓るにあらず、國葬の儀式が時代後れをしたのに據るもので、或る人は、國葬は閥葬だと云うたが、吾等は國葬儀の今後改善されんことを望まざるを得ぬ。所謂國民葬こそ國葬の實質を具するもので、國葬の式を改善するとなれば、國民葬に學ぶべきものがあらうと思ふ。

私は儀全く果てゝ坪內逍遙翁と自動車に同乘して歸途に就いたが、車中戯れに翁に問うた、君は劇通だが、今日の日比谷劇を見て君はどう感じたかと。翁の答は如何にも大規模であるのに恐れ入つたと云はれた。翁は又あれだけの大芝居を打つにどれほどの費用を要したかと問はれたから、未だ精算してゐないが、多分十萬圓を下るまいと答へた。

大隈侯國民敬慕會

大隈侯薨去後十年にして侯を追悼する會が催された。此の發起の中堅となつたものは隈門會であつた。此の會は侯の薨後、侯を偲ぶ爲、常に侯の邸に出入したものが組織したもので、今も繼續して時時大隈會館に催されるが、侯の薨後九年目に此の會に動議が起り、來年は侯薨去の十年目に當るから侯を追悼する會を開きたい。侯の國民葬は日比谷に行はれたから宜しく日比谷の公會堂に開會して、會名を國民敬慕會としたいと、衆議これに決して、準備委員を擧げ、自分は又委員長に推された。

此の會の準備行爲として、式日に頒布すべき侯の偉蹟錄を編纂することが尤も急務とされた。幸ひに渡邊幾次郎氏が明治以後の文獻に依り、侯の偉蹟を考證しつゝあつたから氏に囑してこれを完成せんことを需め、半年許りで脫稿したのを「文書より觀たる大隈重信侯」と題署し、これを印刷に附した。侯の傳記八十五年史三册は旣に刊行されてあるが、渡邊氏の編纂に係る著は種々の文獻と侯の事蹟を考證したもので、八十五年史と全く趣を異にするものである。乃ち侯の事蹟の明瞭を缺くもの、侯が謂はれない非難を受け、久しく謎となつてゐる事蹟などを文書に就いて寃を雪ぎ暗きを明かるく

したのがこの一書である。

準備行爲として骨を折つた他の一事は、一千人の發起者を募ることであつた。これも案外容易に出來て、一千人が醵出した會費は一萬圓に上つた。これは侯の往年の葬費の十分の一に過ぎないが、これを以てすべての經費を支拂ひ得る豫算で、編纂物の費用は勿論、侯の墓域に國民敬慕碑を建てる費用も皆包含されてゐるのだ。

準備は悉く調ひ翌年豫期の如く、式を日比谷の公會堂に行うた。當日場を飾つたものは三十數團體よりの獻花で、それが侯の影像の左右の壇に置かれた。司會者として山本達雄男を推し先づ會を代表して追悼文を朗讀し、踵いで犬養首相の追悼の詞があり、德富蘇峰氏等の追悼文朗讀等があつたが、國民葬の時と同樣、何人も皆場に入り得たので、忽ち會衆は堂に溢れた。發起人のみで千餘人もあるのだから、實に盛況であつた。此の夕べ兒童に對し、自分は侯に就いて放送をした。自分は此の會に於て感慨に堪へなかつた。實は十年前の國民葬で侯に對し最後の御奉公が終つたと思つてゐたのに、十年後に此の敬慕會の衝に當らんとは、思ひもよらなかつた。幸ひにして盛況裡に終り、國民敬慕の碑も此の式後侯の墓域に建設することを得た。

震災當時の思ひ出

大震災の際の思ひ出が一つ浮かんだ。あの際には私の宅は火災を免れたが、玄關と、それに沿ふ處が傾いた。私は其の頃毎日圖書漁りをしてゐた頃で、書庫を有たない私は、玄關に隣る室に多くの圖書を置いてゐた。さてそこが傾いて取崩しを要することゝなつて困つたのは、書物の置場の無い事であつた。一時大隈會館に預ける外方法が無いので、そこへ自動貨車で移した書物箱は二百程もあつた。會館も災後取亂してゐたので、置場の工夫がつかず、假りに置かれた所が老侯の書齋であつた。私は始め其の置場を知らなかつたが、數日を經て會館を訪うて、どこに置いてあると係員に尋ねると、案内した所が侯の書齋であつて、ドアを押して入ると、箱が一杯に積み累つてゐて、それが爲に室内が闇くなつてゐた。私は其の時、置所もあらうに、假りとは云へ妙な處へ入れたものだと思ひながら、一種の快感を覺えた。こゝは老侯が終日客を延いて談論された、尤も記念すべき室である。自分も幾十百回此の室で老侯の謦欬に接した。併し夢にも自分の寄せ集めた書物が此の書齋に宿借りすることがあらうとは思はなかつた。全く不思議な因緣である。私の多くの圖書の中には老侯の趣味に

適ふものもあつたが、一册〻雖も老侯に示す機會が無かつた。それがゆくりなく全部老侯の椅子の側面に堆く積まれた。老侯の英靈、若し此の室に在すとすれば、一擧、萬餘の藏書を老侯の覽に供したやうな氣もする。コンなことは全く偶然で、企ても出來ないことである。假令數日間でも、一たび老侯の書齋のものとなつたことを思ふと、何となく喜ばしく、且つ感激に堪へなかつた。地震と大隈會館と私は不思議な緣因があつて、大震災の刹那は書院にゐた。そして書物は書齋に宿り、後數年を經て、全部の書物を賣却に附した入札場も亦會館であつた。

足利町の追懷

足利町の有志者に招かれ大隈侯が同地へ行かれた時、私も隨行した。其の際は支那公使も一行の內にあつた。足利は支那と織物の貿易關係があるから、侯は特に公使に同行を勸められた譯であつた。

足利では侯一行を待つに盛んな設備をやり、公園內に幔幕を張つて、そこに多衆を會し、侯と支那公使の演說があつた。その際休憩所に充てられた處は、公園內の白石山房で、これは此の地に名高い畫家田崎草雲の舊居である。私は初めて草雲の遺像を拜し、且つ草雲の閱歷や逸事を聽き、おもしろく感じた。其の逸話の內に、草雲がまだ名を成さない伏櫪時代に、御殿奉公をした或る婦人を納れて妻としたが、此の婦人が貞淑でよく良人に仕へ、嘗て草雲が盛茂曄の山水をほしがり、之を購はんとして資を得なかつた時に、婦人は髮飾や衣類までも賣つて其の資に充てたといふ美談もあつた。此の來歷のある盛茂曄の幅は、今足利町の豪家の手に歸してゐるので、此の日の宴會席に充てられた銀行の樓上に特に揭げてゐるのを一覽し、益〻興をそゝつた。

足利には、貴重の古書を藏してゐる有名な「足利學校」があるので、私は一二度特に此の地に游ん

で、古書籍の取調をしたこともあり、その校内に行はれた釋典を見たこともある。又鑁阿寺を訪うて其の什物を見たこともあり、此の地に興味をもつてゐるものであるが、田崎草雲の遺址を見て又一つの趣味を加へたのである。

此の日私の宿つた家は大きな料理屋であつた。夜に入り寢に就かんとする時、土地の有志が私の室に來たり、階下に小宴を催してゐるから其の席に一寸來いと請はれた。私は一應辭したが、是非にと需められ、衣服など着換へるに及ばないからと云はるゝので、寢卷のまゝ其の席へ出て見ると、三十人許りの町の有志が居並んでゐた。私は今更寢卷の儘で出たことを悔いたが、退いて取繕ふことも出來ず、導かるゝまゝに上席に着いた。隣席には笹川臨風君がゐて、何か足利に就て所感を陳べよと云はるゝので、これも辭しかねて、出鱈目を云うた。その出鱈目の席上演說が、やがて足利町の町會の議に附され、私の說が實行さるゝに至つたのは實に意外であつた。

私の說といふは、足利には有名な足利學校の遺蹟があつて、古くから釋典が行はれてゐる。これは孔子を祀る支那の祭典であるけれども、古式を亂さず久しく嚴肅に行はれてゐることは足利の誇の一つに數へてもよろしい。お祭は云ふまでもなく土俗風習で、來歷の古いほどそこに趣味がある。釋典は近年お茶の水の聖堂に復興され、年々行つてゐるけれども、此の足利のよりも整備してゐない。久しい間古式を崩さず續けてゐるのは足利學校の遺址が存してゐるからでもあるが、祭典中珍とすべき

ものである。足利には外にお祭もあるであらうが、全國に知られてゐるのは此の釋典である。然るに此の釋典は學校の奥まりたる狹い處に行はれ、それに參加する人も極めて少數であるために、足利の人達は見たくも見ることが出來ぬといふ始末であるのは遺憾と云はざるを得ぬ。これ程名高く且つ趣味の深いお祭を、何故少數者の爲すに任して、町民は視ず聽かずで濟ましてゐるのであらうか。私は足利町のために圖るに、此の古風な趣味ある祭を足利學校の祭典とせず、これを全町の町祭とし、其の執行さるゝ十二月二十五日には全町皆業を休んで、一日を娛樂に費したらどうかと思ふ。それをするには、丁度此の度大隈侯や支那の大賓を迎へるため野外に歡迎場を設けたやうに、釋典の式を衆庶に見せるやうにして貰ひたい。大きな鍋で牛肉を煮て、之を大牢に擬し、式に參列するものに酒を飲ませるなども一つの趣向であらう。なほ當日講演會をひらき、一般に名家の講演を聞かせるなどもよからう。斯くの如きは此の町の繁榮を圖る一策であると思ふ、と。

私のいうたことは凡そそんな事であつて、咄嗟の思ひつきで責塞ぎに云うたことであつた。勿論それが實行されようとは夢にも期さなかつたのだが、其の年の十二月の二十二日頃であつたか、足利町から特使が來て云ふには、先般貴君の仰せられた通り、町會で釋典を町祭とすることに決したから、お說に從ひ當日講演會を開くにつき、是非おいでを願ひたいとあつたので、私は事の意外なるに驚いたが、自說の行はれたのだから愉快を感じて、歲晚匆忙の折柄ではあつたけれども吉田東伍博士を伴

うて臨席することを約した。さて當日出かけて見ると、町はづれの民家に國旗が樹つてゐるのが先づ目につき、追々町に入ると連簷皆國旗を揭げてゐるのを見ては、痛快の感に打たれた。依つて坐ろに大隈侯に隨伴當時のことを追憶し、侯の演說はあれほど雄大であつたが、其の雄大の爲に實行が出來ず、自分の寢卷演說が却つて實行されたといふも妙だと、眞に感慨無量であつた。

當日の講演會は滿場立錐の地なきほどの大入りであつた。其の際に於ける私の講說は足利町の繁榮を圖る二三の私案を述べたので、其の要旨は次の如くであつた。

(一)幸ひに鄙說が採用され、釋典が町祭となつたのを滿足に思ふが、節季師走に近い十二月二十五日にお祭騷ぎをすることは、或は時期を得ないと思ふ人もあるかも知れぬ。此の町には春季に織姫のお祭があると聞くが、釋典をばそれと同時に行ふもよからう。釋典は必ずしも十二月二十五日に行はねばならぬと、支那の舊規にある譯でもない。

(二)足利學校は儼然遺址を存し、建築物も殘つて居り、上杉家傳來の貴重書も保存されてゐるが、實を云へば骨董同樣に取扱はれてゐるのである。此の學校を永久に保存するの道は骨董としてゞなく、活かして働かせて、是非町民の爲に無くてはならぬものにしなければ、百世の保存は覺束ない。之を活かすの法は、中學校程度の學校を興し、舊造營物をこれと併せて足利學校と稱し、子弟を敎育するの處としたい。これが永久に保存する法である。

(三)今一つの冀望は、足利町の知識開發のため適當の圖書館を設けたいといふ事である。足利學校に藏してある圖書は概ね國寶に値する貴重のものに相違ないけれども、實は之も骨董に齊しいもので、働きをなすものではない。民智の開發を圖るには、時代に應ずる圖書が必要である。殊に足利町は染織を以て名產とする所であるから、それ等の營業者の爲に何よりも大切なものは、染織に關する參考書であることは申すまでもない。若し十分の働きある圖書館を作るとならば、當業者の必要とする多くの圖書を備へて、其の便利を圖ることが肝要である。此の地の染織家は今の處皆銘々必要の標本などを備へてゐるが、若し圖書館にそれ等のものまで備ることゝなれば、銘々が高い價を拂つて備へるに及ばないことになるのである。此の町の如き特殊の產物のある所には右の如き特殊の圖書館が必要である。當業者に關く可からざるものとなれば、圖書館は永久に存續するに相違ない。併し以上の如き冀望は將來のことに屬するかも知れぬ、差當つては普通の圖書館でも結構である。足利學校の貴重圖書も、町衆に重寶がらるゝ必要の圖書と共に保存さるゝでなければ、永遠に保存されようとは思はれぬ。私が圖書館の設置を望む所以である。

釋典を町祭としたキツカケに斯樣な冀望を陳べた。そして足利町の如き力ある土地に斯樣な冀望を有つたのは決して出來ない相談とは思はなかつたが、其の後は打絕えて足利町に赴かないから、一向樣子が知れない。釋典が引きつゞき町祭となつてゐるかどうか、それすら消息を知らぬ。

酒豪二人の追憶

中國筋で著名の素封家は野崎武吉郎氏である。初期の議會に多額納稅議員に擧げられたのは此の人で、私の同姓も越後から同じ多額議員に擧げられ、同僚である關係から特に別懇であつた。同姓からしば〳〵野崎氏の事を聞いてゐたが、面會する機會が無く、幾年か經過した。或る年吾が大學の用を帶び備中に旅した時、田邊碧堂氏の紹介で初めて此の人に會した。

氏の家は岡山縣の倉敷を距る三里許りの海濱で、味野といふ所である。訪ねて見ると、如何さま堂堂たる家構で、主人の在否を糺すと別莊の方に居ると云ふことで、留守であつたけれども、兎に角通れとあるから客間へ通ると、家人の挨拶振りや接待振りが極めて物馴れて懇切であるので、先づ以て主人の風格が推量された。

しばらくすると別莊から電話がかゝつて來て彼方へ來いとあるので、別莊へ出かけた。此の別莊は同じ市中に在つて、本宅より僅か三四町しか隔つてゐぬ。玆に初めて主人と會見を遂げたが、主人は其の頃六十からみの年配で、體格のよい風采の溫雅な人であつた。此の人の客を遇することが懇切で

禮儀正しく、私が別莊に着した時は、時間を見計らつて、門前に佇立して恭しく迎へられた。

主人は切りに一泊を勸めらるゝので、其の親切にほだされ、まだ日も高く且つ旅宿も遠くないのに、其の勸めに應ずることになつた。此の別莊は近年の經營に係るものらしく、極めて新しく見受けた。庭は海濱に相應する結構で、翠松白沙の間に程よく巖石を點綴し、五六の白鶴が游んでゐた。やがて晩餐の時刻となり主人に案内されたのは百疊敷の大廣間で、床には森寬齋の海上の鶴の大幅が掲げられ、私が其の正面に据ゑられ、主人外一家眷族の五六は横手に陪席した。何分にも廣い室での饗應、私は俄に大名にでもなつたやうな心地がした。

俄大名の氣分はわるく無かつたが、玆に當惑の事が起つた。元來此の家の主人は非常の酒客で、眷族も皆豪酒であると兼ねて聞いてゐた。然るに私自身は隨分酒量があつたのだが、病の爲に酒と絶緣して十年にも及んでゐる。今豪酒家の客となり、宛ら大賓を待つかの如き饗應を受けながら、果して酒を辭し得べきや否やと苦悶した。曾て私自身にも折角人を招いて其の客が酒を飲まぬと云ふ場合には不快のものであつた。今其の情を推して考へると、私が酒を辭したら主人は恐らく不興であらう。されば一旦十年折角守つた禁を破るのは余に取つては重大事である。漫りに主人の意を迎合して譯もなく杯を擧ぐべきでない。宜しく心事を明白に告白して而る後應ずべきであると、意を決して主人に實を告げ、折角の御款待なるが故に十年の禁酒を解くといつた時、主人は感激して慇懃に禮を云

はれた。斯くして私は十年目にもとの酒客に復したのである。此の夜此の別莊に宿し翌朝辭し去るに臨み、私が齎した用件は忽ちに辨じた。酒客の同感が俗事に及んだのであらう。當夜主人歡喜の狀が今なほ髣髴目前にあるが、此の人は既に鬼籍に入つてゐる。

こゝに亦酒客に就いての追憶が他に一件ある。岩崎氏の三菱時代に東京支店長を勤め、後吉佐移民會社社長として知られた吉川泰次郎氏は土佐出身で、豪放磊落の人であつた。私は曾て本野盛亨翁の紹介で此の人を訪ねたことがある。其の頃は吉川氏の全盛時代であつた。

氏の宅は向島にあつた。なか〳〵數寄を極めた壯麗のもので、庭は千坪もあらんと思はるゝ廣さで、見渡す限り平坦の芝生で、目を遮るものは牆塀を隱す若干の樹木のみで、一風變つた趣向の庭であつた。こゝを訪うた時は秋の初め頃で、まだ暑い時であつたから、肥滿した主人は殘暑に堪へざるものゝ如く、膚も露はに頗る寛濶の態度であつたが、例の土佐辯を操縱して如何にも客を外らさぬ處があつた。要談が濟み辭し去ちんとすると、主人は押止め、折角來られたのだから、緩々話してお出でなさいと云はるゝので、私も辭し兼ねて其の氣になると、主人は此處は暑いから、庭に出ようと云はれ、急に執事に命じて涼牀をいくつか庭に運ばせ、それを組合はせて毛氈を敷き、私をそこへ導かれた。涼牀の上には緞子の座蒲團があり、臺の四方には十ばかりの陶榻が排列されてあつた。間もなく杯盤が運ばれ、食膳酒器さま〴〵のものが列ねられたが、皆燦爛たる蒔繪づくめであつた。着かざ

つた侍女は周圍の榻に踞して、酒を注ぐもあれば、團扇もてあふぐもあり、物の持運びを擔任するもあつて、約十人許りがゾロリ取卷いたところは如何にも堂々たるもので、其の大名的態度は慥に此の主人が仕へた岩崎氏の盛時を偲ばしむるものがあつた。

主人はなか〳〵の豪酒で且つ飲み且つ談じた。兎角土佐の土音が勝つてゐて話を往々解し兼ねたが、すべて話が大きい處に興を惹いた。主人は人に酒を勸めるにも亦巧みで、平生其の薫陶を受けてゐる侍女等は勉强して酒を注ぐので、私も漸く醉境に入つた。午後の四時頃でもあつたか、一天俄に搔き曇り、ボツ〳〵雨が落ちて來たが、主人は一向頓着なく平氣で飲み且つ談じてゐた。雨は用捨なく勢を增し、其の點滴が膳部の中を浸すので、主人は初めて氣が付いたかの如く、急に雨傘を持來たらせ、侍女をして主客の背後からさしかざゝしめ、主人は尙自若として飲み且つ談じてゐるので、私もそれに倣つて平然たらざるを得なかつたが、考へて見ると、傘を翳して雨中人と對酌することは臍の緒切つて初めての事で、一種の興味を感じた。

主人は空を仰いで、此の雨は直ぐ晴れゝうと太平樂をいうてゐたが、その期待は裏切られて、終に覆盆の豪雨が襲ひ來たつた。流石の主人もこれには閉口し、私を促して座敷へと馳せ上つた。私はこれを機會に辭し去ちんとしたが、主人は容易に許さず、更に飲直さうとあつて、杯膳を座敷に移し、更に飲み更に談ずること前の如くで、いつ果つべくもないから、私は屢〻辭しかゝつたが、其の都度

引きとめられて既に夜に入つた。酒家の常として醉が回ると種々の下物が欲しくなる。主人は頻りに呼鈴を鳴らしてそれこれと取寄せる。曰く鹽辛、曰く唐墨（からすみ）、曰く甲地の産物、曰く乙縣の何と、持來たるもの十種に垂んとし、主人は益ゝ興に入つて辭し去るを許さないので自分もホト〳〵閉口し、漸く隙を窺つて逃歸つた事がある。自分は多くの酒豪を知つてゐるが、其の中最も雄なるものとしては此の人を推さゞるを得ない。氏は如何にも愉快な酒豪であつた。

意匠を凝らした天神講

下谷廣小路に「かなめ家」といふ小さな店がある。主人は栗原金三というて、深川のさる材木屋の息子であるが、病身である處から、家を弟に讓り、自分は廣小路にさゝやかな店を出して、凝つた細工物を並べて居る。此の主人、風の變つた人で、故尾崎紅葉や我輩などを顧問として、色々と凝つた趣向を盡くすのを、何よりの樂しみにして居たが、その内にこんな珍趣向を凝らしたことがあつた。

明治三十五年、菅公の千年といふにちなんで、此のかなめ家の主人、前人のおもひ及ばなかつた意匠を凝らし、奇拔な天神講を催した。其の趣向のあらましを言ふと、お客としてはいろは四十八字と一二の數字の頭字を有する懇意の顧客を講中に見立て、淨瑠璃の手習鑑の趣向を取つて、講中を寺入りの寺子に擬し、四十八字並びに一から億までの數字の机と硯箱とを、昔時寺子屋に用ひた形になぞらへて作り、これを來客の膳ともなし、果は景物ともして贈らうと言ふのだ。斯ういふ趣向で、九月二十六日が舊曆の二十五日に相當するとて、神田明神境内の開花樓に於て催された。

自分も此の招待を受けて、三時頃に出掛けて見ると、かなめ家主人を初め清水晴風などゝいふ、か

なめ家に深交のある連中は入口に机を構へて、來客に挨拶をして居たが、何れもお粗末な單衣に紺の盲縞の前垂を掛けて居た。よく〳〵見ると、何れも單衣に肩揚がしてあるのは、前垂と共に寺子に擬へた一趣向と見受けられた。殊に晴風のやうな肥えた男が、短い單衣に肩揚のついてあつた滑稽千萬な樣子には、噴飯を禁じ得なかつた。來客は七八十人で、尾崎紅葉、角田竹冷、竹内久一、武内桂舟などの知人も見え、大槻如電翁を初め、某々の好事家も見えてゐた。

客溜りの大廣間の一隅には、壇を築いて古器數十點を陳列してあつたが、何れもかなめ家好みの器物で、價は二束三文でも、どこやらにをかしみのある品ばかりであつた。それは都府樓の瓦片、豐公の瓢簞、咸陽宮の瓦なんど〵いふ類で、何れも出鱈目の品名を附して、由ありげに陳列されてあつたが、これは福引に取らする景品と知れた。

先づ餘興として、某々の落語家、手品師などが滑稽の技を演じた。それが終つて一方の襖を開くと、こゝには竹内久一が曩に菅公千年の記念にとて、千體の菅像を彫刻した其の一を、白木の厨子に納め、壇を築いて其の上に飾りつけ、前刻落語を語り、手品を演じた藝人どもは、何れも神主の扮裝で、笙篳篥を吹きならし、幣をさゝげ、端然として坐して居る。其の樣子の可笑しさには、一同どつと笑つた。玆で皆々神前に進んで御酒を戴くと、梅鉢の紋を畫いた陶杯一個づゝを頒ち、なほ松竹梅に因んだ菓子をも分つた。參拜が終ると、更に餘興の續きとして、寺子屋の段松王首實檢の茶番を演

ずる。講武所の雛妓數名に、めくら縞の單衣を着せ、寺子に擬したのを出して、一番の舞踏をやらせたのは一趣向であつたが、其の服裝が寺子に見えず、紡績工女と見えたのも却つて興を添へた。愈〻設けの宴席に這入つて見ると、驚いた。こゝは七八十枚の疊を敷いた大座敷で、床には素岳が石摺樣に擬して、かなめ家主人に贈つた空海のいろは歌の大幅をかゝげてあつた。正面に置かれた桐製の机が寺子屋先生の席で、左右二列に寺子屋的の揃ひの机を三個づゝ並べ、さしもに廣い座敷も、中央の一條の通路を存する外、机をもつて充たされて居る樣子は、いかにも寺子屋の光景をよくも現出したものと、一同アツと感歎した。やがて長老の故を以て今日の先生に推された大槻如電居士は、正面に据ゑられた桐机に凭り、我々寺子一同は、各〻の机と定まつた所へ着席した。七八十人のお客がズラリと並んだ處は、なか〳〵の見ものであつた。扨て机の結構をよく見ると、もとより粗製であるが、寸尺など實用に叶ふやうよく工夫され、殊に抽斗の中まで丁寧に漆を塗り、硯箱の内方などは、艶消漆塗にした處など、かなめ家の用意のほど、感服の外なかつた。机の上には、硯箱の外に手習草紙と書いた半紙の張られた折箱、並びに手本樣のものが載つて居た。試みに硯箱の蓋を開いて見て、更に主人の用意に驚かされた。即ち硯箱の中には、硯がある。水滴がある。墨がある。筆がある。何れも席上酒肴に充つ可き食物を以て作られてあつて、硯は燒豆腐、墨は昆布、水滴は蒲鉾、筆は生姜で、それ〴〵其の形に擬してゐるので中々に凝がある。手習草紙といふ折詰も同じく食物で、輪形の型に

飯を押したのを、梅鉢の形に排列してあるのは、菅公の紋に擬したものである。其の他飯の菜に、海老や金柑や昆布や柚子や章魚なんどの入れてあるのも、ウツカリして居れば無意味のやうであるが、實は矢張り寺子屋の戲曲の文言から意を取り來たつたものと思はれた。例へば金柑は金冠、海老は梅王の顏のクマ、昆布の靑く細く切つたのは松王の松になぞらへ、柚子の輪切の中のスの明いたのは御所車の洒落ではないかなどゝ、考へれば考へるほど興味が湧く。又手本の如きものは紙製の柱懸を二つ折にしたもので、中に短册一枚と手巾一枚とが挿まれてあつた。

こんなことで、來會者一同が主人の趣向ぶりに感歎の詞止めもあへぬ中に、けふの寺子屋先生たる大槻如電入道は起立して一場の挨拶をなし、今日は讀書を廢して直ちに淸書に取りかゝらる可し、先づ十分に墨を磨られたし、誰かある、硯水を持てと叫ぶや、芝居がかりでハイハイと、先に寺子に扮した雛妓と、素人風に扮した大妓は、各〻酒瓶を携へて次の間より出で來り、いざ硯水を差上げんと、銘々に酌をする。其の間には、吸物や取肴などを配るものもある。この吸物も肴も、何れも趣向を含蓄して居るやうに見受けたが、今は既に忘れてしまつた。斯くて酒酣にして、銘々得意の隱し藝が湧くがごとくに起り、時ならぬ春げしきを演じたが、私は早く辭して歸つた。明治の世に元祿の昔を偲ばする珍趣向、馬鹿げて居ると言はゞ言へ、這間の趣味は、功利にのみ齷齪たるものゝ遂に解する能はざる所であらう。

日本女子大學の開校

成瀨君が世を去られてから既に二十年餘を經てをる。君と相識る事になつたのは自分が鄕里にゐた頃で、君も新潟に居られて自然交はることになり、吾等有志は君を校長として英學教育の學校を經營したことがある。其の學校は北越學館といふた。此の頃に就いても多少の思ひ出があるが、どうしても忘れ難いのは寧ろ其の後共に東京に出て、君が女子大學の經營に苦心された時にある。當時自分は神田の神保町に居を構へてゐたが、君は毎日自轉車を驅り必ず訪ねて來らるゝが例であつて、晴雨に拘らず二三ヶ月に亘つて訪問を續けられたので、其の氣根の强さに敬服したが、其の來襲の餘りに頻繁であるのに恐縮もした。

君は幾度か女子教育の必要を說かれ、特に女子の高等教育を說かれ、又女子にも大學が無くてはならぬと主張されて、我輩に賛同を求めた。扨て其の建設の手段方法論に移つては、如何にして其の資金を得べきやが君の最も頭を惱ました問題で、いつもの協議といふは資金募集の實行方法であつた。君は熱誠の人であつたが、實務に長ずる人ではなかつたので、虛心に默々として人の說を聽かるゝの

が常で、自分のみならず四五後援者を次々に同じ態度で熱心に訪問された。當時自分は早稻田大學の經營の衝に當り、資金募集が何よりも自分の大切の任務であつたから、募集方法の相談に出會つては實はツラかつた。何もかも胸中をさらけ出しては、早大の繩張を讓るやうな事にもなるので、此の問題に就いては極めて大マカな應答に止めたのだが、結局君は各方面の助言に聽き極めて利巧の方法を採られた。卽ち早大は廣く天下の大衆を相手にして資金募集の法を採つたのに反し、君は少數の有力者から資金を得るの方法を採ることにされた。之は今考へて見ても確に智惠のあるやり方であつた。當時はまだ女子に大學教育は尙早だと言ふ論が多く、天下に唱道して大衆より資金を募るが如きは最も困難で、若し此の方法に由つたならば、君の計畫は恐らく失敗に終つたであらう。但し天下何人も許す有力者をパトロンとし得たのは、君の比類なき熱情と努力に據つたもので、聲望家には大隈、西園寺、澁澤の三氏、富豪には森村、三井、加島等の諸氏を發起者として又維持者として得たのは君の努力の如何に大なりしかを反面に語るもので、何人も君の熱誠に敬意を拂はざるを得ないのである。

吾等緣の下の力持が早稻田から遠からざる高地に巍然たる女子大學の講堂を驚異の目を以て見たは、成瀨君と漸く疎遠となつた三年位の後であつた。成瀨君は宿志を達して女子大學教育を開始したのである。卽ち女子の學校は明治以來早く開けたけれども、女子の大學は開闢以來これを創始とするのである。私などはいろ〳〵の機會に招待を受けた。卒業式にも其の都度招かれたが、曾て一たびも

招きに應じたことはなかつた。斯くして十年ばかりを經過して、女子大學の諸設備の全く成つた頃、成瀨校長は我々を歷訪して言はるゝのに、學校もお陰で漸く整うたが、あなた方は何故か幾回御案內しても、一回も來觀を賜はつたことが無い、某日特に御招待を申すから是非駕を枉げられたいと。如何にも丁寧な招待であるので、初めて行つて見る氣になり、其の日出かけて見ると、十人ばかり招かれた人々が一堂に集つた。その人々は一々記憶もしないが、三好退藏氏、島田三郎氏、其の外成瀨君別懇の同志社出身の學者達も四五加はつてゐたが、皆當時著名の人々であつた。一同打揃うて成瀨校長の先導に尾し、大小の講堂を始め校長室、事務室等を一覽し、幾字かの舍寮を巡視し、割烹練習室其の他を隈なく縱覽したが、此の間約二時間を費したのは、觀る物がそれほど多かつた爲である。凡そ學校の景物は多くは乾燥無味のもので、美術工藝などの專門の學校にこそ見るべきものも多いが、普通の學校に於て一覽二時間も要するのは寧ろ異數とすべきで、吾等は經營の多岐に亘つて注意を拂ふべきもの〻多きに一驚を喫した。

大小の講堂は敢へて豪華の裝飾などあるでもないが、何れも煉瓦建造で質素の間に堅牢を旨とし、建築後多くの年を經ないから何れも淸潔であり、寮舍は瀟洒の日本建築で、特に寄附者の名が寮名となつてゐるのも二三あつたが、大槪一室二人を置く位に劃せられ、寢臺も備つてゐたが、舍監の注意が行屆いて、どの室に入つても帶紐一點取散らしてある所がなく、整然としてゐたのは、特に吾等の

注意を引いた。言ふまでもなく各寮には舍監室があり、食堂も附屬してゐたが、孰れも整頓してゐた。なほ家政科のために設けられた割烹室につりあふやう調理の器具が備り、牛乳をしぼるために牛舍迄が具はり、園藝研究のためにはいくつかの畑があつて、百花の咲き亂れて舍寮の庭に美觀を添へるなど、通例男子の學校に見難い優美の設備がいろ〳〵あるのに、吾等をして最も經營の妙を感ぜしめた。

吾等は一巡諸設備を見て一息つき、心窃かに感歎を禁じ得なかつた。吾等は此の學校分娩以前に產婆の末班に列し、成瀨君の協議に少からず無駄口を吐いたが、其の出產の胎兒が斯くまで立派に生育したことを思ふと、何となく涙ぐましく感無量であつた。それも實は當然で、發育の行程を折々部分的に幾度も見たのではなく、一擧發達の全部を見たのだから、其の筈でもあつたのである。

此の夕べ鄭重の饗應を受けた。洋食は學生達が手づから作られたもので、宴席の斡旋も一切十數の學生達が奉仕されたので、殊に愉快を感じた。宴會席上成瀨君は起つて吾等に對する歡迎の挨拶があつた後、徐に開校までの苦心經營の閲歷を陳べられた。此の苦心談は三十分計りの簡單のことではあつたが、全く血涙の歷史で、吾等は聽きながら屢〻襟を正さゞるを得なかつた。此の苦心談内に今なほ忘れ難いのは左の一節である。

毎日奔走中の或る日、後援者たる某有力者が馬車を驅つて訪ねて來られた時に自分（成瀨君）

は生憎下宿に居た。ナゼ生憎と云ふかと不審に思はるゝであらうが、自分は窮乏の極普通の下宿屋に居ることも出來ず、或るみすぼらしい煙草屋の二階を借りてゐた。其の梯子は半ば朽ちてグラグラして危險を感ずるやうな粗末のもので、かりそめにも富豪の踏むべきものでないのに、訪問者は卒然それを踏んで二階に登つて來られたのには、自分は恐縮もし、赤面もした。

と云はれた。

右は成瀨君が窮苦の間に奮鬪された一端で、決して潤澤の運動費などあつてあれだけの大事業を經營されたのではなく、偶〻自ら愧づるほどの居住を有力者に見せたのが君の赤誠を認められた所以でもあつたであらう、と吾等はしみ〴〵君の勞苦の大なることに感じた。

扨て成瀨君の演說が終つて、誰か答辭を陳べるべく起立すべきであるのに、互に顏を見合はせて、「あの頃は困つたな」と異口同音に云うて已んだが、此の述懷は、當時毎日君の訪問に煩はされたことを洩らしたもので、各人の僞らざる至情だから、形式的の答辭を述べるよりも時に取つての好答辭であつたかも知れない。此の會は吾等に長く記憶さるべきものであつた。

女子大學の創立に對して吾等は聊か緣の下の力持をやつたとは言へ、それは言ふに足らないが、同じ緣の下の力持でも、やゝ自負のあるのは、此の話の冒頭に言うた北越學館の經營に關してゞある。學館の建設された敷地はもと低地であつたのを砂を運んで盛り上げたのは學館建築の數年前で、新潟

監獄の囚人等の勞役になつたのだが、當時自分は新聞記者として筆禍のために入獄し、偶然典獄が吾等のために侮辱を受けた腹癒せに、吾等を力不相應の外役に驅使し、土砂を運ばせて土盛りをさせた其の所こそ北越學館が設けられた所である。開校の時自分が成瀨君に戲れて語つて言うた。此の學館に自分がどんな功績あるかを恐らく君も知るまいが、此の基礎工事の一端は、自分が汗と涙を流して築いたのである、と前條の經歷を語つて成瀨君を驚かしたことを想ひ出す。

侯爵朴泳孝と觀梅

朴泳孝氏が金玉均等と共に亡命して日本へ來て三四年程後の事であつたが、偶然朴氏と相識る機會が起つた。二三月頃の寒い時節、私は或る友人と携へて觀梅のため近郊へ出かけた。先づ新橋で汽車に乘ると、同じ車中に朴氏が二三の書生を隨へて乘つてゐるのを認めた。朴氏は當時春秋なほ若く、色白の優形で、秀麗の風貌に品位が備り、一見名門の貴人であることが頷かれた。主從共に洋服の扮裝で、從者は大瓢を携へてゐた。

車中には互に語を交へる機會を得なかつたが、大森で下車し、其の附近の梅林を徒步で訪ね回ると、到る處に大瓢をぶらさげてゐる朴氏一行に出遇つた。此の一行も探梅のため同じ徑路を辿つてゐるのだから、相前後して同じ處に相會する筈である。斯樣な譯からいつしか語を交へることになり、互に名刺の交換をやり、大瓢の冷酒を頒ち與へられなどして、爰に初めて朴氏と識つた。四五の梅林を歷訪した最後に手を分ち、歸途には再會を期せず、吾等は氣儘に行動して時を移し、漸く大森の停車場まで來ると、そこにまた朴氏一行が先着してゐるのに出會つた。朴氏は到る處大瓢を傾けたと見

えて、醉態淋漓の大元氣で、待合室のテーブルの上に横臥してゐる有樣は、亡命の事など全く忘れてをるらしく思はれた。日本に身を置くは如何に安全とは云へ、刺客に襲はるゝ危險の無いでもないのに、さても大膽の事よと、吾等は密かに危んだ。

終に相携へて同じ汽車に乘込んだが、朴氏は吾等に向かつて今日の奇緣を喜び、新橋に着かば日も暮れんが、余等と與に晩餐を共にせずやと云はれた。私共も何れかに一酌をと考へてゐた折柄、一議に及ばずそれに同意して、間もなく新橋に着すると、朴氏等が先に立ち吾等を或る洋食店へと導いた。こゝは朴氏の常に來る家と見えたが、朴氏は到頭主人となつて、吾等に盛んな饗應をされた。其の際は主客共に既に酣醉の境に入つてゐたので、互に遠慮會釋なく談論し、果は政治の論にも亙り、朝鮮政治の將來に就いても論議したが、此の時はまだ日韓合邦を夢にも想はなかつた時だが、雙方の議論は暗にこれを豫言するもの丶如くであつた。朴氏は當時まだ日本語の操縱が出來なかつたので、すべて韓語で應酬されたが、從者は皆日本語に熟達してゐて、彼我の談論は遺憾なく通譯され、談論に時の移るを知らず、夜深うして袂を分つた。私が朴氏と會したのはこれが初めである。其の後は遂に會する機を得ない内に物故されたが、曾て探梅當時の事を偲んで寄せられた詩がある、今ロ繪として載せてあるのがそれである。因みに云ふ、氏は判書領議政元陽公の子、哲宗十二年水原に生まる。長じて哲宗の一女を娶り、錦陵尉の榮爵を受く。明治庚戌、日韓併合の後、侯爵を授けらる。

得月樓の追憶

十二三年程前關西に旅行をした折、久方ぶりに名古屋に立寄つた。その目的は坪内逍遙氏の記念事業として演劇博物館の資金を募らんがためであつた。名古屋は坪内氏の故郷であることはいふまでもない。この行、俗務忙々、風流の遊びを企つる餘地はなかつたのであるが、偶然半日の閑を得て、犬山の勝を尋ねた。其の事は「山水游記」の内に收める筈だが、丁度その夕べ、同人と共に名古屋の割烹老舗得月樓に一醉することが出來たのは、私としては仕合はせであつた。

此の得月樓は私と坪内逍遙氏には舊緣のあるところだ。今度私が東京を發する前たま〳〵名古屋の友人に會し、この樓の事を思ひ起し、今なほありやと尋ねたら、立派に存在して市内屈指の酒樓であり、家も昔のまゝだと聞いた。そこで機會もあらば訪うて見たいと期したが、何分事務を帶びての忙しい旅だから、果して機會があるか否かを氣づかつたが、幸ひにその機會を得たのみならず、はからずも坪内氏に緣故の深い太田の庄まで望むことの出來たのは奇緣といふべきである。太田の庄のことはこれも「山水游記」に記すはずだから再叙しない。私が氏と共に帝大在學時代、ある年の暑中休暇

を、亡くなつた同窓岡山兼吉氏と四十日餘りの旅行をした折、名古屋を過ぎたのを機會に歸省中の氏の家を訪うた。その頃氏の家は町を離れた郊外にあつた。今のステーションのある笹島が卽ち氏の家のあつたあたりである。氏は私共の訪問を喜んで、連立つて案内された酒樓が卽ち得月樓で、こゝにうなぎの蒲燒を下物に、杯を擧げて款晤したのが、吾等の旅行中最も愉快に感じたことであつたが、指を屈すれば旣に五十餘年の舊に屬してゐる。それを思ふと、吾人もまた老いたりと嘆ぜざるを得ない。

犬山の東道は小山松壽氏であつたが、得月樓への案内者もまた同じ人であつた。犬山に赴いた一行十數名は、淸游の後白帝城下の彩雲閣に一泊する都合であつたから、私は小山氏と共に別れて薄暮名古屋に歸り、電車の起點である柳橋から一町足らずのところを歩して得月樓を訪うた。あらかじめ電話を通じて置いたので、吾等のために席が設けてあつたが、其の座敷は近年築いた新しいもので、私が昔來た家とは違つてゐた。これが此の家の別館であつて、路を隔てゝ母屋がある。その母屋こそ、昔われ等三友の會したところである。生憎母屋はどの室もふさがつてゐたので、二時間ばかり別館に居らねばならなかつた。私は先づ同宿の長谷川天溪、河竹繁俊、片山木瓜の三人をこゝへ招いた。長谷川氏は京都へ出張して來たり會することが出來なかつたが、他は直ぐに見えた。こゝに杯盤が陳ねられ、二三の老妓が來て席を周旋した。酒三行の後、主婦が母屋に案内するに任せて出かけると、成

るほど古色蒼然たる家であるが、何となく懷しみを感じた。先づ一浴を試みんと浴場にはいつて見ると、地下室にでも入る如く、段階を下つて低いところに浴室がある。それがそつくり昔のまゝで、風呂桶の外には新しいものはなく、さながら片田舍の農家の浴室でゝもあるかの如く、何から何まで古風であるのに驚きもしたが、飽くまで頑固一點張りで改造をしないところに却つて興味を感じた。浴後主婦は吾等を二階に導いた。こゝは五十疊も敷く廣い席で、忘れもしない賴山陽の筆に成る得月樓の額が揭げてあつた。私はその額面を諦視する前に、フト樓名について一疑を發した。こんな繁華な市街の眞中に得月樓の名のあるは何故であらうか。私はこの疑を抱きながら主婦に、この家の傍に堀があつたはずだが今もあるかと聞いたら、主婦は一方の障子を押して御覽なさいといふから、下を瞰ると眼下に流があつて、多くの船舶が簇集してゐた。自分の記憶に存する堀よりも遙に大きいものであつた。この夕べは恰も月夜で、月の光は水に映じてキラ〳〵してえもいはれぬ風趣があるので、私は覺えず手を拍つて得月の二字虛しからず、と始めて樓名の疑を解いた。よつて靜かに山陽揮毫の扁額の下に立つて識語を讀んで見ると、

辛卯仲秋。書ニ水西莊ニ爲ニ樓主人ニ。林谷囑也。　子成

とある。

往年は腕白の靑書生で、この識語を全く閑却したが、今讀んで始めて此の扁額の由來をほゞ知る事

を得た。ある人の話に、山陽は此の樓の得意とする野菜の漬物を賞味する爲こゝに遊んで、その際に書いたのだと聞き、さうかと思つてゐたが、この識語を讀んで見ると、その說は全く間違つてゐた。

先づ辛卯の干支は天保二年で、山陽は五十二歲の時である。水西莊に書すとあれば、京都の三本木の自宅で書いたので、この家で揮毫したものではない。なほ林谷の囑とあれば、樓主人から直接依賴したのではなく、山陽と親善であつた讃州出身の有名な篆刻家細川林谷の依賴で書したことも明らかである。たゞ得月の二字はこの樓の舊名であるか、將た山陽が撰んだのであるかはにはかに判じ兼ねたが、識語の內に仲秋とあるを以て察するに、林谷が季節柄自然河水に月の映ずる樓の地形などを語り出したのに思ひつき、得月の二字を撰んだのではあるまいか。こんな風に例の山陽研究癖が起つてしばらく扁額の下に沈思したが、實はこの廣い座敷は昔坐した所ではなかつた。さて樓を下つて二室のつらなるところに案內された時に、ムラ〳〵と舊時の記憶が浮かんで來て「コヽダ〳〵」と連呼したのに一同はふき出して笑つたが、私は熱心に天井を見、柱楹を見、掛物を見、襖を見て當時を追懷し、逍遙氏の若かりし頃を憶ふと共に亡友岡山氏のことなど追懷して、人知れず無限の感に打たれた。室は當時そのまゝで、天井は意外に低く、柱などは黑光りに光つてゐて、全くの骨董である。感興に滿ちた私は別館の席に復して、更に飲みつゞけ、醉酣にして座中の人々に私は左のごとく告げた。

けふは坪內氏に緣因淺からざる日である。前刻は圖らず氏の舊里太田の庄を望み、今は氏に曾て案內された家にゐる。ましてこの行、氏の記念事業のため氏の故鄕に來たのであるが、諸君の連日の努力は謝するに餘りがある。私は氏になり代つた心持で、聊か諸君の勞をねぎらはんとするのだ。

と挨拶をして益〻興が湧き、逍遙氏に就ていろ〳〵の事を思ひ起した中に、去る明治四十五年六月、文藝協會の一座が「故鄕」と題する脚本を演ずるため、逍遙氏と共に名古屋に來たことを想ひ出して、それが端なく酒席の談柄となつた。あの時は逍遙氏が藝術家として始めて鄕里に歸り、父老に見えるといふ大切な場合であつた。阪本彭之助氏が市長の時であつたが、盛んな宴會が開かれた。席上に逍遙氏は謝辭を陳べられたが、謙遜なる氏は自家の經歷は失敗亦失敗だなど〻云はれたので、私は誤解があつてはならぬ、と起ち上つて、君の藝術上の價値や早稻田大學に偉勳のあることなどを陳べたことを想ひ出すが、實はあの時私は心窃かに妙な事を感じた、といふのは、逍遙氏が三十年振りに鄕里に歸つて、鄕黨に見せる演劇が偶然「故鄕」といふ脚本であるのも一奇である。その「故鄕」の主人公マグダは、性に於てこそ男女の別があれ、久しく鄕里を離れて藝術家となつた事蹟が似てゐる。逍遙氏の性格もどことなくマグダに似た處もある。少くとも藝術家氣質に於て。そして此の劇が幸ひに名古屋の人氣に投ずれば仕合はせであるが、萬一名古屋の風尙がなほ舊劇を喜び、此の故鄕劇

が失敗にでも終るやうの事があつたら、それこそ逍遙氏はマグダと同じく故郷に歸省したのを後悔するかも知れぬ。此の點だけはマグダの場合と反對であれかし、と氣を揉んだ。然るに幸ひに好評であつたのは何よりであつたなどゝ話して何れも悅に入り、席上けふ半日のことを敍して遙に東京に在る逍遙氏に寄せた。

横濱に於ける同窓會

青年時代の追懷ほど感興のあるものは無い。別して窓を同じうして學んだものが、年を經て舊雨を語るほどおもしろいことは無い。吾等一ツ橋の帝大に學んだものは、時をり牛肉會を開いてゐるが、いつも書生時代の舊態丸出しで、互に貴樣呼ばゝりをやり、傍人をして驚かしめることもあるが、實はそのうぶな處に興味があるのだ。近年同窓が追々歿して賑かな會合もないが、明治三十一年頃に横濱に開いたのと、尋いで東京に開いたのは可なり趣向もあつて面白かつた。幸ひに其の際の記事が存してゐるから爰に其の一端を語らう。露骨に何もかもさらけ出せば一層興味もあるのだが、矢鱈に天機を漏らすと迷惑する人もあるから、多少の取捨は已むを得ない。

横濱に催された同窓會は千歳樓を會場として、横濱在住の友人が萬般の斡旋をした。其の時の案内狀は左の如きものであつた。

（前略）生等諸兄と袂を帝都に分ちてより各自其の業務に從ひ、萍痕絮跡、暫らく合うて久しく離る。歳月人を待たず、皆驅つて初老の列に入る。曾て兄等と共に一橋黌にあるや、意氣軒昂、絹

布白足袋を賤しみ敝袴紺足袋を貴び、入りては食堂の戸を破つて賄方を叱咤し、出でゝは高屐砂塵を蹴つて大道を濶歩し、燒芋を啖ひ煎豆を嚙り、尙ほ且つ飽かず、子路も途を讓り顏淵も面を反す。而も囊中得意の秋には、天麩羅屋に大氣焰を吐き地久庵に大政を議す。醉來眼中英雄なし。壯跡今に至つて二十餘年。頭を回らせば半ば縹渺の間に落つ。然れども春花秋月、追ひて梁山泊の當時を思へば豪傑豈に萬斛の感なしとせんや。生等曩きに同窓に檄して會合を促すも遂に行はれず、日來情念轉た切也。願はくは來る二月四日午後四時、横濱市住吉町千歳樓に會し、綠酒紅燈の舊雨を話し、傍ら當港の近況を視、以て條約の實施明日に來るも、まごつかざるの論資に供するあらば幸甚。御返事待ちますよ。

此の檄文は在學時代のことをよくあらはしてゐるので評判がよかつた。さて案内を發した面々は左の四十一人であつたが、差支が多くて僅かに○を附した十四人が集つた。尤も神奈川縣の井上書記官と松山參事官の二氏は、同時代ではないが開會地に居る故を以て來會した。

○高田早苗　井原師義　○市島謙吉
大屋權平　土方寧　田中館愛橘
○藤澤利喜太郎　○山田喜之助
三崎龜之助　三宅雄二郎　天野爲之

○坪内雄藏　○石渡敏一　秋山源藏
石川千代松　江木衷　山口俊太郎
○藤田四郎　都筑馨六　堀達
菅谷正樹　伊藤悌治　小林堅好
日下部辨次郎　植村俊平　朝倉外茂鐵
樋山資之　梅若誠太郎　○香坂駒太郎
馬場愿次　○田原榮　有賀長文
○赤井雄　○鈴木充美　○三浦力太郎
奥田義人　○山縣量次　○高橋捨六
原田嘉道　吉岡哲太郎

來會者のうちで、最も人目を惹いたのは鈴木充美氏であつた。此の人は辯護士で、同窓時代には禿充と綽名された。氏は在學時代の服裝そのまゝといふ扮裝で、木綿の黑紋つきに同じ羽織を着し、白縞小倉の袴を着け、大きなステツキを横たへてやつて來た。誰が見ても、當世の所謂壯士、豫戒令を食ひさうな容子であつた。氏の語るを聞けば、此の會に來る前に一外國人に用があつて訪問した。其の時服裝に氣がついたけれども如何ともしがたく、名刺を出して通されはしたが、外人はヒドク驚い

て、私に不審を抱いたので、それを言ひ解く爲に手間が取れたと一笑した。

席の定まる前に、思ひ〳〵に碁を圍むやら既往を語るやらで、なか〳〵賑はつたが、幹事の趣向として、茶菓子には饅と煎豆や豌豆などを大鉢に盛つて座中に置き、鈴木氏の寄附だとあつて、燒芋を大皿に堆く盛つたのが、座の中央に置かれたのも愛嬌であつた。

時刻は進んで早や夜に入つた。甲乙の大食家の催促あるに任せ、クジ引を以て座席が定まると、三浦力太郎氏がやをら立上つて開會の挨拶をした。此の人は今は故人となつたが、新潟學校時代から私の同窓で、大學を出てから、米國領事館に入り十數年を勤續し、缺く可からざる人となり、髭も外國人らしく生え茂り、言語さへ外國人の日本語らしく聞えるのは、平生外人に親炙してゐるからであらう。彼は滑稽の口調を以て、開會の辭は舊大學濱尾總長の假聲を以てせんと、當時我々の仲間の笑柄となつてゐた濱尾翁の言葉其の儘、ハア Please eat in this room; there is nothing.（どうぞ召しあがれ、何もありません）とやつてのけたので、一座絶倒した。

開會の勞頭、誰やらが銘々順番に當時の失錯談を陳ぶべしとあつて、赤井、石渡、鈴木、香坂などの面々はそれに應じて交ゝ談じた中に、赤井氏は、坪内氏と余と三人が、上野邊に飲んで、深更宿する處がなく、徹夜銀座街頭を散歩したことを語つた。私も其の關係者として赤井氏を補足し、銀座のハテ迄往復しても夜が明けないので終に九段に上り、例の夜燈のある芝生に憩ふと其の儘眠に落ち、

翌朝通行人の足音に目を覺して驚き起上つた時は、既に日がカンカンとさしてゐて多くの人が通行してゐたのには面目無かつたと說き、鈴木氏は大森から東京へ歸る時、汽車の切符を買はんとするに、一厘の不足を告げたのに窮し、何とかして鐵道の役人を胡魔化さうとして胡魔化す能はず、終に一喝せられたことを語り、香坂氏は高田氏と共に王子の扇屋に飲んで、勘定の場合に十錢の不足を生じ、ジヤン拳で樓主に言譯をいふ役目を定めた處、高田氏が其の選に當り、手を震はしながら言譯をした光景を說き、歸途二人乘の車に乘り、東京の某處に至り車代を借りる底意で、揚々として歸る途中、運惡く車の輪が外れて、途中より代金を拂はざるを得ざる絶體絶命の場合に迫り、已むなく兩人力を合はせ繩などを拾ひ來たり、一時の繕をして、無理々々東京まで車を引かせた失錯談をなし、何れも大いに興に入つた。

時に樓婢が一通の電報を持つて來たので、差出人を見ると、廣島秦巖方地久庵おるい、松月梅、高田小すみとある。地久庵は書生時代によく行つたそば屋の名、松月は天ぷら屋の名、おるい、お梅は何れも其處の下女だ。小すみは書生仲間の評判となつてゐた下谷の妓である。こんないたづらを書いて來た電報の主は、まがふ可くもあらぬ山田一郎氏であらうと判ぜられ、披いて見れば、

ハタトセノユメアラタナリケサノユキヘン

とある。これに返事をやることゝなつて、山田田奠南氏、田原柳城氏などいふ連中が、いろ〳〵工夫を

凝らしてゐたが、如何に返事を出したか私は與らなかつた。それから寫眞師が來て當日の光景を撮影し、それが終つて、銘々隱し藝を出す可しと幹事から宣告があつた。

先づこれに應じて、座の中央にあらはれたのは赤井氏である。彼は學窓時代に落語家の眞似上手を以て持て囃されたものだ。私も英語學校にゐたころ、彼が寢臺を高座として語るのを二三度聞いたことがある。久しく消息を絶つてゐたから當夜の來會者中では最も珍しい人であつた。彼は洋服の上に羽織を着し、近年はいたく落語の伎倆が退歩したと斷つて說き出す口吻、懷中から手拭を取出す調子、靜かに湯呑を持上げる態度、たしかに前座位は語られる伎倆があると見受けられた。彼は當夕の會を種として、可笑しき落し話をして滿場の笑を博した。次に原銀行の支配人であつた山縣氏が、肥大矮小の身を以てシヤチホコ立をなし、高橋捨六氏はトンボ返りをなし、又箸の上に盃を載せて輪廻しをなし、鈴木氏は手拭を頭に載せて閻魔大王に擬し、續いて仁王の面貌に擬したが、閻魔大王は最も妙だと喝采を博した。次いで山縣氏は、柄にもない二上りを巧みに歌ひ、山田氏は怪しい義太夫二三句を語り出したので、それが大阪の代表かとまぜ返された。

坪内氏は衆に强ひられてテヅマの沿革を說き、余に新發明のテヅマありと云うて、帽子三つを机上に並べ、皿にありし生薑を衆の目前に嚙み盡くし、唯今食ひ盡くした此の生薑を諸君の指圖に任せ、何れの帽子の下にても置く可しとて、帽子を指定せしめ、急に其の帽子を戴いて、御覽なさい、此の

帽子の下に在りますと立上つて、指にて腹の邊をさして一笑を博し、赤井氏も負けじとて、机上に盃洗二つを並べ、一つの盃洗の水を他にうつし、ハンケチを以て双方を覆ひ、只今一方に移した水を更に他へ移して御覽に入れますと、扇を以て煽りまはり、さて最早や一方に移つてしまひましたれど、これだけでは興味薄し、も一つおまけに更に元へ戻しますと再び煽り立て、又もや大喝采。斯くのごとくにして、此の會は閉ぢられた。

東京に於ける同窓會

明治三十二年四月、自分が幹事となつて、一橋時代の帝大の同窓會を催したことがあつた。何しろ其の昔同じ鍋に飯を食つた連中が集るといふのであるから、平凡な、眞面目な遣り方では面白くない。何か大いに風の變つた趣向を考へたいといふので、坪内逍遙氏や尾崎紅葉氏などを參謀として色色の工夫を凝らし、つとめて滑稽な會合を催すことにした。そこで先づ大體の趣向をいふと、會員への案内狀は狂詩を以てすること、會場を東臺梅川樓とすること、洋行者の送別、新博士の祝賀を兼ねること、餘興としては伊井蓉峰をして書生氣質（坪内逍遙作）を演ぜしめること、それから來賓を呼ぶこと等であつた。その來賓といふのも、もとより四角張つた高位高官の人では面白くない。一同の書生時代に、質屋の役目をつとめて呉れた人、世話になつた唐物屋などを當日の賓客とすることに定めた。

いよ〳〵大體のことが決定して、四月三日の神武天皇祭當日、會員一同に對して、同窓會開會の檄を發した。それは左の狂詩である。

一橋同窓會第二會檄

鼻壓二天狗一氣呑レ牛。天下才俊推二吾儔一。名轟一橋同窓會。罵二飛俗物一取二手球一。第一會開二横濱表一。千歳樓上醉且謳。書生氣質昔物語。今爲二歴々第一流一。評レ花品レ月癇癪藥。談レ舊語レ新爲レ忘レ憂。第二會催於レ此起。大聚二同志一大欲レ遊。遊處何好花上野。諸君御存梅川樓。來八日午後三時。會費三圓帳場投。恰是春風好時節。花笑鳥歌忍之丘。憶昔伊達高足駄。微醉吟レ詩花下浮。又憶墨田月夜櫻。花吹レ雪處泛二小舟一。振二返往時一渾如レ夢。一別十年空指僂。知是諸君定同感。當日是非御出頭。尚又同窓關係人。甲乙丙丁誘引求。情切心逸如二矢竹一。時日切迫難二踟躕一。何卒來會有無丈。屹度即刻請二返郵一。

此の檄に對しいろ〳〵返事が來たが、其の中殊に振つたものが數通ある。先づ日下部氏（辨次郎）の次韻の詩は左の如くである。

次韻

遠州樓上曾喰レ牛。思出當年一鍋儔。寄宿舍中嚙二燒芋一。體操場裡弄二野球一。或驕二大福一圍レ爐笑。又倒二老蘭一拍レ手謳。擧動稍雖レ似二粗暴一。我黨昔日書生流。蓬々散髮毫無レ厭。寥々懷中亦不レ憂。聞說先日横濱表。久々同窓愉快遊。今度又催第二會。會場上野梅川樓。案内通知凝二趣向一。狂詩活版郵函投。幹事署レ名何者抑。藤澤利喜覺三丘。正是櫻花好時節。猫兒杓子大被レ浮。年年此頃於二墨上一。競漕最盛各科舟。是等小生無二頓着一。只待二會日一頻指僂。同感諸員定不レ少。確信大勢御出頭。寄レ語當同幹事殿。

澤山馳走致二請求一。萬一會費告二不足一。君方自腹勿二躊躇一。酬餘漫記二出鰐目一。從レ命卽刻爲二返郵一。

註。遠州樓神田橋外牛店。老蘭酒名。

日下部氏は理學博士で、巖谷小波氏の兄である。其の文才はほとんど天稟に屬するというてもよい。此の詩はよく我々の書生時代の情景を描寫して原作よりもうまいが、これが推敲の上の作でなくて、咄嗟の間に成つたといふに至つて、特に其の才氣に敬服するのである。山田奠南氏（喜之助）の返事は、

妙詞拜讀一何粹。召集檄文感服至。余輩只今雖二病中一。勉鞭二尻馬一出頭致。

土子笑面氏（金四郎）の返事は、

八日には生憎ようが御座候
殘念ながらさんじ申さず

開會の八日と時刻の三時とを利かせたものである。亘智部忠承氏（理學博士）の返事は、

一橋同窓會。最是結構催。此會員鼻隆。參圓卑レ於レ埃。雖レ欲レ致二相陪一。生憎別會開。役人之悲矣。不レ往惡鹽梅。乍二殘念至極一。缺二席于今回一。決非レ唱二大根一。文圭安在哉。

大根とは書生時代に假病のことを言つたものである。當時大學に秀島文圭といふ醫者がゐて、假病をつかつたものをよく看破したのであつた。森鷗外氏からは左の如き詰責狀が來た。「灌頂樓主人」

とは鷗外氏の變號である。

讀レ檄寄二一橋同窓會幹事一次レ韵

蕎麥汁粉乃至牛。健啖會詩無二匹儔一。又將二杯酒一澆二何物一。磊塊一名肝積球。由來兩刀稱レ難レ使。吾獨併得附二鼻謳一。平生唯厭嗟來食。況敢二膝行一拜二於流一。心事如レ件與レ誰語。世無二友達一最堪レ憂。聞說一橋同窓會。可レ謂近頃無類遊。當時創立第一會。大開橫濱千歲樓。風評入レ耳浦山敷。久欲二以投二名狀一。忽見幹事懇飛レ檄。第二會開二忍之丘一。千載一時此之謂。吾雖二不精一豈不レ浮。好機會兮不レ可レ失。食則食レ牛呑呑レ舟。不レ知當日果何日。仔細讀來指空僂。檄是三日之所レ作。云來八日可二出頭一。既曰二八日一卽明日。吾有二先約一。叵レ應レ求。消印認得七日發。底事這般爲二躊躇一。擬レ責二幹事不都合一。直揮二禿筆一。艸二返郵一。

四月七日夕　灌頂樓主人　介

之は鷗外氏の處へ、おくれて手紙を出したので、幹事の不都合を責め來たつたものである。無論咄嗟の間の作であるが達者なものである。

愈々開會の當日となつたが、出席者の顏觸れは、

日下部辨次郎　山田喜之助　市嶋謙吉
天野爲之　高田早苗　坪內雄藏

尾崎德太郎　岡倉覺三　木場貞長
高橋捨六　田原榮　山縣量次
原嘉道　樋山資之　石渡敬一
香坂駒太郎　近藤仙太郎　秋山源藏
中嶋謙造　田中館愛橘　斯波淳六郎
三宅雄二郎　岡崎正也　李家隆介
杉山四五郎　堀田連太郎　舟越勇夫
井原師義　朝倉外茂鐵　三浦力太郎
有賀長文　今井鐵太郎　佐々木忠次郎
中原貞三郎　藤澤利喜太郎　高橋一知
和田垣謙三

などの面々で、外に來賓として、江草斧太郎、塚谷喜平、桑端九兵衞の三人を招いた。この江草斧太郎は今は故人となつたが、書肆として名のある有斐閣主人で、昔は微々たるものであつたが、義氣に富んだ人で、大學生に氣受がよかつた。いつも金に困ると一册二册の洋本を持つて行き、五十錢、一圓の金を借りたものだ。大學生のため大切な金融機關をつとめたのは此の人であつた。それから塚

谷、桑端は、兩人とも西洋小間物商で、主として大學生の用を辨じたものだが、怪しからん陰陽の綽名で呼んだ爲に、其の姓などは今記憶してゐるものは少い。併し當時は日々物を此の二店に購うた。そして掛で買うたから終には二十圓三十圓の借を生じて、それを返さぬものもあつた。兎に角一同にはお馴染の商人である。尙此の外地久庵といふ蕎麥屋も、學生の兵站部をつとめてくれた關係上、これも招かうとしたが、代がかはつてゐるので見合はせた。

扨て幹事の挨拶に會が開かれて、先づ餘興として伊井蓉峰の壯士芝居が始つた。戯題は坪內逍遙氏の當世書生氣質下宿屋の段であつた。此の小說は人も知る如く、我々同窓を中に取入れたもので、坪內氏の處女作である。それを蓉峰が、紅葉と親密の關係のある處から、一つ演つて見ようとの好意に出でたものであつたのだ。其の場割と登場役者とは左の如くで、こゝに蓉峰から紅葉に送つた書面をかゝげる。

場割（大道具は至極簡にいたし幕の明間も長くは無之候）

第一　下宿部屋

これは塾部屋ともつかず寄宿舍ともつかず、只何となく集りし體。

登場

任那（本多小市郎）（性格は異なり候へども守山も加味す）

繼原（福島　清）（倉瀬桐山などを代表す）
須川（伊井　蓉峰）小町田（三浦滿壽次郎）
桐山（藤澤淺次郎）宮賀弟（若月新樹）
下宿屋矢場女仕出し（大勢）
おとよ（鶴岡福之助）
第二　淡路町矢場
第三　寄宿舍門外
第四　門外（是は桐山に須川打たれる處）
第五　門内
第六　草津溫泉座敷
第七　風呂場前
第八　元の座敷

と箇樣にいたし申候、原作破壞の大罪を犯し申候、可成丈は性格及び原書のせりふより申候へ共筋は前後いたし候、御ゆるし下され度候、實にむづかしきものに候。

人員は

俳優（伊井、藤澤、福嶋、木多、三浦、福岡、藤井、藤塚、吉澤、若月、山崎、村井）

扨て斯ういふ場割、役割で、いよ〳〵書生氣質の芝居が始つたが、出席者の中には、此の劇中の人物に當るものが少からずある。今は天機暫く洩らさずとして置かうが、こんな緣故のある芝居のことだから、開演と共に、皆が舞臺に向かつて、固唾を呑んで眺めて居る。就中劇中の一人物たる三宅雪嶺氏などは、偶然か、あらぬか、最も舞臺近く寄つて熱心に見て居た。

併し蓉峰一座の書生氣質は、大體に於て失敗たるを免れなかつた。元來蓉峰などは、昔の大學生といふものを知らずに、今日の下落した書生の狀態をのみ見てゐるのと、蓉峰自身は獨逸仕込の書生で、英語教育を受けたことなく、從つて一寸喋舌る西洋語も矢張り獨逸語であるので、甚だウツリがわるい。それに俳優に大學生といふ品位がない。それでゐて、今日の帝大生に比し四段も五段も氣品の高い昔の大學生を寫さうとするのだから、凡ての遣りぶりが妙を得ず、且つ大體に於て下劣を免れなかつたのは甚だ遺憾であつたけれども、又無理のない點もあるのである。で、觀客は何れも半ばにして倦厭を來たし、「よい加減にしてよして呉れ」とか、「お互が舞臺に上つた方が却つて成功する」とかいふ聲が、其處此處に聞えた。

兎に角とんなわけで、折角蓉峰の義氣に出でた寄附演劇も失敗に終り、いよ〳〵開會といふ事になつて、先づ座の整理を行ひ、來賓を適當の處に据ゑる。來賓は前に言うた三人で、何れも羽織袴の扮

裝で喜んで遣つて來たが、當日の光景を見ては、何れも無量の感に堪へなかつたらしい。それも其の筈で、昔ボロ着物を着て、五十錢、一圓の融通を乞うたものが、今日では博士とか、局長とか、或は大臣次官とかになつて、皆社會に時めいてゐる。此方側でも昔を考へると珍しくもあり、なつかしくもある。で、お客を捉へて、「君の處には昔大變厄介になつたが、まだ勘定がいくらか殘つてゐる筈だ」とか、「僕も今ではそれ位の借金を拂つてもよい」とか言ふものがあつて、互々の懷舊談に、笑聲先づ堂に滿ちた。

かくて一同席定まつて、幹事が重ねて開會の挨拶をすると、もうあとは思ひ〳〵に、昔の態度に立返つて、懷舊談やら何やらに花を咲かせ、一人として沈默を守つてをるものはなく、忽ちにして場内蜂の巣を壞したやうな熱騷を現じて來たのを、幹事は之を制止して、折角の芝居が失敗に終つたのは遺憾であつたが、幹事が今一つ餘興をやると言つたので、何事が始るかと一同鳴りを靜めて待つた。

そこで幹事は、「これから諸君の若い頃の假聲を使つてお聞きに達する」との前置で、二三の書物を持出し、これは數學に於て日本の泰斗と稱せらるゝ藤澤利喜太郎君の假聲だとか、これは物理學に於て世界のオーソリチイである田中館愛橘君の假聲だとか、之は現政府にときめける藤田四郎君の假聲だとか、凡そ七八人の若い頃の聲を眞似て、大喝采を博した。

幹事が何うしてこんな眞似をしたかといふに、それには仔細がある。昔大學生時代に、みなのもの

が、演說や文章などが未熟だから、之を稽古するために毎月數回、人を定めて代るゞ〳〵演說をやつたものであるが、其の演說の草稿は幹事の手許にまとめて保存して置くことゝした。其の最終の幹事が私であつたので、草稿は今なほ三四十篇ぐらゐ私の手に保存されて居る。當日讀み上げた假聲は、即ち此の草稿に依つたものである。當時吾々の文章と云つたら頗る幼稚のもので、その草稿は坪内氏の所謂舊惡全書である。そのまづいヤツを、一人について五六行づゝ讀み上げたのであるから、槍玉に上げられた當人は何れも赤面し、會衆は皮肉の喝采を浴びせたが、此の喝采者も、お次の番には又赤面せねばならぬ運命に逢ふなど、なか〳〵に面白かつた。が、この假聲使ひもおしまひには、遂に笑はるゝ一人となつたのは是非もないことである。

幹事が此の餘興を濟まして壇を下りる隙を見計らつて、ある同窓が件の書類を奪ひ取り、今度は幹事の假聲を使つてお聞きに達しますと、私の拙な文章を二三通讀み上げたので、一同は更に喝采したが、自業自得とは此のことを言ふのであらう。兎に角こんなことで、一夕の歡を盡くしたのは愉快であつた。

貢進生時代の大學

同窓の舊を語つた序に、吾等の先輩貢進生のことを聊か附け加へよう。往年（明治三十一年）杉浦天台道士（重剛）と或る會で落合つた時、氏は貢進生に就いて種々語られた。杉浦氏は江州膳所の貢進生で、先づ幼少の頃のことから談が始つた。氏は四歳の時、賴三樹三郎が網乘物で檻送されるのを母に抱かれながら見たと語るを冒頭として、貢進生に就ては、大藩三名、中藩二名、小藩一名で、各藩は俊秀を拔いて南校へ入學せしめた。其の總數、四百名に及んだ。

當時の學生たる貢進生は大小を脇挾んでゐたもので、「某藩貢進生」と烙印をした札を脇差の束にぶらさげ、弊藩に於きましてはなど〻角張つて互に挨拶した樣を、今から思ふと隔世の感がある。此の頃は教場へ出るにも脇差をさしてゐた。勿論各藩の俊才を擧げたことであるから孰れも漢文位は縱横に書ける連中であつた。然るに教場に入つて學ぶ所は何ぞといふと、ピイ、エ、パなど〻子供くさい限りで、中には不平を洩らす者も少くなかつた。當時はなか〳〵殺伐の世の中で、學生も帶刀してゐたことゝて、教師に無禮の動作でもあると、教場で脇差を拔き「斬つてしまふ」など〻騷ぎ立てる

ものもあつた。

貢進生は何れも士族出身であるために、各自その專門を選ぶに色々の好き嫌ひがあり、法律は、代言のやうな賤しい業だから好ましくないとあつて多くはこれを嫌つた。さりとてエンジニアリングは大工の業だとあつて、これも好ます。專門學科の種類の未だ多からぬ當時、それこれと好き嫌ひを言ひ立てゝゐては學ぶ可き學科もなかつたので、分別もなく舍密科（化學）を修めたものが少くなかつた。當時の理學專攻家にして、文學に長じた者の一二を擧げると、久原躬弦の如きは某々軍談と題する小說を書き、其の挿畫も自らうまく書いた。小藤文次郎は歌人で、歌をよく詠んだ。渡邊渡も文章家であつた。此の他當時文學をよくするもの頗る多く、福富孝季の如き、柄にもなくやさしい歌をよみ、河上謹一は詩を能くし、宮崎道三郎も同じく詩を能くした。西德次郎が滑稽にして狂歌をよくし、磯野德三郎は小說に通じたなど、一々枚擧に遑ない位であつた。自分の浮行中、詩歌の唱酬頻繁で、なか〳〵風流のことであつた。

當時芝居好きの三幅對と云はれたのは西松次郎、福富孝季、磯野德三郎の三人で、就中西は最も巧者で、自身の觀た芝居の數は百四十にも及び、常にどの芝居でも旨く評し得られないものはないと言つて居た。これには他の二人も三舍を避けた。西は天稟の滑稽家で、或る時水に落ちて學校へ歸つて來た。其の時に仲間の學生がやかましく囃し立てると、西すかさず「西水に落つる也」と言つた。西

水は「洒」で、「洒落」のことを云つたのである。森文部大臣の刺殺された時、彼は、「廢刀者出双庖丁を横にさし」と詠じた。彼は又地質學上の難題を巧みに歌に詠じて人を感動せしめたことがあつた。又放屁を以て有名であつたので、みづから「芳菲山人」と號した。彼は一夜に放屁百首を詠じて、同窓を驚かしたこともあつた。磊落に世を渡つて、名利の伺たるを知らない風があつた。

當時最も亂暴家として聞えたのは、野村珍吉、城多虎雄など〳〵いふ連中で、隨分思ひ切つた事をした。大學では此の時分吝嗇と詔諛とが最も嫌はれ、これを「リンゴン」と言つてゐた。「リンゴン」は吝嗇の「リン」と、詔の言扁を合はせたものである。そして苟くも「リンゴン」をなすものと認定を受けたが最後、運動場に引出されて必ず鐵拳の三つや四つを喰はされたものであつた。同窓間の制裁は此の通り嚴で、舍長などを煩はすまでもなかつたのである。

此の時分面白かつたことで記憶に殘つてゐるのを二三語ると、仙石貢は浴衣の儘で卒業證書を受取つたと云ふので、大いに非難を受けた。併し彼は實は是より外に何等の衣服をも持たなかつたのである。某は教場に於て、教師に「スタンド・アプ」(お起ちなさい)と言はれながら應じなかつたとて詰責された。然るに此の人は至つて矮小の男で、ベンチに腰をかけて居る方が起立するよりも却つて身長高く見えるので、言譯は立つた。某は絹袴を穿いたとて、同窓がこれを校長に告發した。然るに仔細にこれを檢すれば、無慮二十五箇所穴のある袴であつた。又ニコライの教堂が駿河臺に建てられ

た時、當時の大學生等は氣に食はぬことに思つて、他日必ず砲擊するの必要が起るだらうと云うて、大學の機械でこれを測量したことがある。其の時機械のスパイダル・ラインを切り破つて大いに叱られた。

以上は杉浦氏の談であるが、今日から之を見ると、なか〳〵興味がある。

神田の文化町

東京に於ける、吾等が古い馴染の地はどこかと云ふと、早稲田は吾等に最も關係の古い處で、その關係は半世紀以上も繼續してゐるが、それよりも更に古い馴染は、神田の或る一區である。吾等に精神的の食糧を始めて供給してくれた忘れ難い地區は神田である。委しく云へば、一ツ橋から神保町、今川小路に及ぶ左まで廣くない地區である。吾等が、郷里で英學を學び、明治八年に始めて上京して英語を習つた處は英語學校で、それは一ツ橋通りの高田舊藩主榊原侯の舊邸を、昔のまゝ學校に充て、門も昔のまゝ、教室も元の諸室に多少の手入れをして、疊を上げた位に止り、假校舍と見るべきものであつた。大道を隔てゝ大學があつた。これは今學士會館のあるあたり一圓の地で、南校より系統を引き、吾等の出京した頃は開成學校と云うたが、其の後東京大學と改稱し、法理文の三科が置かれたので、東京大學三學部と云うた。醫科だけは本郷の今の大學の處に別になつてゐた。此の頃まだ高等學校はなく、高等學校に相當する豫備門を經なければならなかつた、それは大學内にあつた。此の大學は木造洋館で寄宿舍もあり、外國教師のため教師館もあり、大講堂などもあつた。吾等が入つ

て政經文を學んだのは、此の科の置かれて二年目であつた。大學の門前、今の商科大學のある邊りに、外國語學校があつた。こゝは專ら諸外國語を教へる所で、支那語、露西亞語、西班牙語まで教へた。漢文も此の學校で教へたので、吾等は此の學校にも通うた。今は商科大學と外國語學校が存するのみで、大學は本郷に移り、英語學校も其の跡を留めない。吾等の學んだ學校の所在地の全然趣が變つて、昔を尋ねる由もないやうになつたが、竹橋外に文教の府、文部省が大震災前まであつたことを漏らしてはならぬ。

單に以上擧げたのみでも、神田の一區は文化に大關係のあることは絮説を待たない。尚お茶の水を隔てゝ向かふは本郷區となつてゐるが、神田と最も近い處に聖堂があり、昔の學府であつた昌平學校の址があり、そこには曾て圖書館が設けられ、又教育博物館が設けられたこともあり、大震災には燒けたが今は復興された。尚、隣地に高等師範學校があり、此等を合すれば一ツ橋からお茶の水向かふの一區は、學校の淵叢とも云へるので、日本の文化史に大切な部分を占める。尚比較的近年の設置に係るものを云へば、九段下には大橋圖書館があり、その近くには、中央大學や日本大學もある。餘り廣からざる地區に、學校が斯く多く、文化的經歷に富む町は、東京廣しと雖も、これに匹敵し得る所は他に無い。

學校は本郷の帝國大學、早稲田、三田の大學等があちこちに散在してゐるけれども、勿論他にもあ

る。が神田の學區には他にない一特徴がある。それは何かと云ふと、書物の集散地がこゝであつて、文化の裨補に大なる貢獻をしてゐる事だ。神保町表裏一帶の地は、連簷櫛比、書物屋で、新舊各種の書物が供給され、教科書、字書、各種專門の圖書が間斷なく出版され、又雜誌の大販賣店もあつて、その店の規模の大なる點に於て將た其の店舗の數の多き點に於て都下に雄視してゐる。畢竟此の區が文化的歴史を有つて居るから斯かる機關が自然こゝに集つたものであらうが、學校には興廢があるけれども有益の圖書の出版、古書籍の供給が年を逐うて益ゝ盛況を呈するのは吾が文化史上偉績として傳ふべきで、神田の誇と云へば、何を差措いても、精神的糧食の供給にありと云はねばなるまい。

一ツ橋の大學の在りし頃の神保町邊を回顧すると、隨分雜然たるものであつたが、學生に供給するものの營業が殆ど家並で、唐物屋があり、牛肉屋があり、蕎麥屋があり、小料理店があり、天ぷら屋があり、汁粉屋がある。菓子屋があり、パンヤがあると云ふ鹽梅に、飲食店で滿ちてゐた。學生相當に上等のものなどは一切なく、西洋料理と云へば美土代町の三河屋あたりのみであつて、集會でもする時は、玉川堂（今あるのは移轉して小さくなつた）に會したが、これが唯一の貸席で、飲食は辨當で濟ましたやうな質素さであつた。今のやうな喫茶店は無論無かつたが、パン屋に椅子を設けて學生を待ち、菓子パンと日本茶を饗した。最も繁昌したのは天麩羅屋などであつた。すべて此等口腹の爲にする營業は大學が本郷へ移轉すると、皆無くなつたが、精神の糧を供給する本屋だけは殘つたのみ

ならず、追々に發展した。

當時の書物屋の狀況を回顧すると、隨分貧弱の店が多かつた。大體書物屋は裏町にあつたのが、市區改正でそれが表町となり、裏町には少數ながら有力の大店のみ、堂々と構へるやうになつた。卽ち富山房や三省堂や、東京堂などがそれであるが、しかしそれは皆近年大をなしたのであつて、大學のありし時代には、これほどの大店は一つもなかつた。當時洋書を賣る家と云へば、有斐閣のみであつたが、九尺二間の小さな店で、和本一册も交へない洋籍の古本屋で、これが學生連の金融機關で、その書物を買ふことは稀で、洋籍を典して少し計りの金を借りるのが重で、此の家の主人江草斧太郎と云ふ人は相當義氣があつたので、學生に喜ばれた。それから可なり後に、洋本の專賣店が神保町に生まれた。それは富山房の前身である東洋館書店で、小野梓氏の經營に係り、あの頃では目ぼしい店であつた。これは古本屋ではなく、態と西洋から輸入した立派な學術書店であつたが、學者肌の小野氏が自己の好む所に偏して取寄せたため商賣がうまく行かず、遂に閉店するの止むなきに至つたが、小野氏が書店を開くに此の地を選び、自分の住宅も其の附近に移したのは、此の地が書物に如何に緣因があつて、書物營業に絶好の地であるかが知れるのである。

書物屋が追々繁昌した沿革は自分は委しく調べて見ないが、或る書店が大をなした動機が二つあるかに思はれる。それは一つは法典の編纂が成つたことゝ、他の二は教科書の編纂である。此の二つの

ことは普遍的に全國に及ぶもので、共に非常に大きな仕事で、これに成功すれば巨利を博し得る所から、書店は一時これに熱中した歴史がある。前に記した有斐閣などは洋本屋をやめて、一意法律書を發行して、後には立派な書肆になり、東洋館書店を繼承した富山房も半世紀の功を積み、堂々たるものとなつたが、これも一時教科書に全力を傾けたのが其の成功の元であつたやうに思はれる。今日力ある書店の經歴を尋ねると、此の三大事業の孰れかに力を籠めて成功したものでないものは無い。自分は餘り多くの書物屋を知つてゐないが一二を擧げると、法律書を專らにした明法堂と云ふのがあつた。中學程度の教科書を專らとした敬業堂と云ふがあつた。又數學書を主とした開進堂と云ふがあつた。又法令を專らとした八屋新助の店もあつた。此等は一時成功したが、有斐閣の外はみな前後して亡びた。中西屋と云ふ洋本店は、一時丸善と拮抗したが、今は丸善に併合されて其の支店となつてゐる。九段下には、堅木屋と云ふ古洋本屋が、今もやつてゐる。

法令や教科書で一時成功した本屋も永く續かず多くは仆れたが、其の間に立つて成功を積んだものが富山房と三省堂などで、彼等の力の加はるに隨つて、出版界の難事業である尨大の種々の辭典を編纂出版してそれが成功してゐる。斯かる事業は實力が富まねば出來ないことで、一書を企てゝ成功を見るまでには十年若しくは二十年も費さねばならぬものがある。其の店に充分の信用が無ければ出來ない業で、辭書を專門とするやうな書店の出來たのは、實に書店の一大進歩と謂はざるを得ない。

世間では書物屋を評して水商賣だと云うてゐる。此の評は書物屋商賣の危險を云うたので、一概に流行を追うて見込出版などをするものは、中ることもあれば外れることもあり、外るれば、幾萬の書物を切棄てねばならんから、危險の伴ふ商賣であることは事實であるが、併しおのづから除外例もある。即ち辭書出版を專一とするものなどは之に庶幾い。其の譯は、辭書の編纂ほど骨の折れるものはなく、一人の力で之をなせば一生を費すものもあり、衆多の力を併して作るもの、例へば百科辭典のやうなものも、其の册數の多いだけに、それだけ十數年を經ざれば成功に至らない。これは流行など云ふ潮流を超越し、容易に競爭者の起らないもので、堅實に丹精にやり遂げれば、それが廣く長く行はれるから、時に改訂增編を加へれば永久性を有つので、これは水商賣とおのづから選を異にする。斯かる成功の本は、目前の利を爭はず堅實の歩みを以て最良の圖書を作れば、書物商賣も確實であるが、これが爲に時間と金力を要するから、結局資本主義の勝利に歸する。

如上の成功者は一二に止まらないが、富山房書店を例に取つて、其の成功の偶然ならざることを云へば、この書店は小野梓氏の開いた東洋館書店の後身である。東洋館は成功しなかつたが、その主義主張は立派なものであつた。その信條に曰く「利他則ち自利」と。自ら利せんとするには、先づ他を利さねばならぬ。其の作る書物は假令多くの年月を費しても、最上のもので無ければならぬ。不朽を期するもので無ければならぬ。そして廣く賣ちねばならぬ。廣く及ぼすには價を安くせねばならぬ。

斯くすることが他を利するの法で、其の實自ら利するの法であると。東洋館は此の主義を以て好書の出版もしたが、時利あらず終に閉店するの已むなきに至つたが、後繼の富山房主は小野氏の門生で、小野氏の遺訓を終始守つて、氏の理想を着々實現した。其の堅實の歩武も、其の不屈の耐忍も、良書を作る熱誠も、廣く賣る努力も、皆氏の遺訓の現れで、富山房主は小野氏の爲さんとする處を氏の理想通りに行つたのである。其の世に出した多くの出版物、殊に大部の辭典類はこゝに列擧するまでもなく、餘りに有名であるが、自分の與つたことの一二を擧げて見ると、吉田東伍博士が一介の書生として私の書生部屋で著した『日韓古史斷』は、史界を畏服した名著であるが、決して大衆向のものでなく、識者のみに讀まるゝもので、云はゞ賣行の廣いものでないのを、富山房で出版を敢へてしたのはそれを名著と知つたからで、決して利の爲ではなかつたが、この出版は富山房の識見の現れと見ることが出來る。又『大日本地名辭典』は日淸戰役後吉田博士が微力なる私に賴つて編纂に着手したものであるが、自分の力では到底遣り切れず、富山房に移して編纂を繼續して、完成まで十有三年を費した。これは多分富山房で辭書を出版した始めと思ふが、其の頃の富山房は決して今日の如く隆盛のものでなかつたのによくも此の編纂を持續したと、今更ながら感ずるが、これも畢竟一種の着眼で、成功を他日に期する根强き經營が、早く此の頃から現れたとせねばなるまい。完成の後、果して此の書は不朽の名辭典と賞讃され、吉田氏もこれにより博士の學位を得た。富山房が其の後追々多くの辭

書を編纂したのも、この經驗が土臺をなしてゐるであらう。富山房は此の地名辭典を作り出すと共に一人の文學博士を產出したとも云へるのである。

三省堂が厖大の百科辭典を出版するに當り、自分も聊か其の經營に與つたため、其の苦心の程をよく理解してゐる。その完成の時には、自分は會長大隈侯の名を以て其の苦心の經緯を錄し、それを印刷して關係の人に廣く配布したこともある。それは今爰に引かないが、百科の辭典は、幾百の學者を勞して集大成するものだから、編纂の面倒なることは、實に涙ぐましいものである。併し辭典の出版ほど大功德を社會に與へるものはないから、神保町は斯かる生產地として、文化のため光輝あり名譽ある地と云ふを憚らぬ。

神保町に最も多いのは古本の店である。全然古本に限る店と新刊とを取交ぜた店もあるが、便宜上古本屋として觀察するに、これも文化の爲には大切な務をなすもので、斯かる機關がなければ、古書籍の供給は何に求むべき歟。すべて物貨には問屋があり、問屋に就けば何でも得らるゝものであるが、古本と云ふものには問屋が無い。古本屋が隨時種々の手段をもつて買集める勞は、決して輕微とは云へない。そして此の營業はあまり利得の多いものでなく、たゞ上品の商賣であるだけに、喜んで其の業を營むものもあるが、其の營業は世相の變に依つて屢々困難を感ずる傾向が見えて、店賣だけではなか〳〵おツつかず、書林が聯合して、デパートなどに持出して客を待たねばならないことにな

つて居る。一方古書を漁る一種の趣味家も追々減じてくるし、埋沒の古書を居ながら買集める事も大震災以來著しく困難になつてきたが、よくも其の業務を持續してゐるものだ。實際神保町の如く連簷櫛比の書物町があるのは客の爲には便利なことで、書物を尋ねるに一店に無ければ隣店で得らるゝ便利がある。書物屋同士も亦一ケ所に集つて居れば、互に有無を通ずる便利もあるのであるから、店の盛衰は頻々とあつても、此の書物屋町は其の特色を保ち、今から三四十年の既往に較べると可なり立派な店も出來て來た。東京の名所とも云ふべきは此所で、苟くも古書を漁らんとするものは、都人士でも地方人でも足を運ばねばならん。こゝは古文豪の位牌や墓の遺蹟の存する所とも云ふべく、訪書家の中には故人の墓參りの氣持で、各店を訪ふものもあらう。圖書館は多くの圖書を藏すれども、購うで己の有とすることが出來ないが、こゝは獲得の出來る便利がある。或は此の區を精神上の食物の供給所と見れば、學者や研究家や學生などの流連の處であつて、こゝに流連するものは酒食の害を受けず、相當の知識を獲得することが出來る。此の地に據つて研究家が如何に多くの資料を得たか、好事家が如何に多く珍書を得たか、大藏書家の書架を充たした本地はこゝに在ることを思ふと、文化に貢獻した其の功は、決して小なりと云ふを得ぬ。

（註　この項は、商大及び女高師の移轉前に書かれたものゆゑ、その點、現在と若干相違する所あるは諒せられたし）

英學を學びたる最初の新潟學校

はしがき

明治五六年頃同じく新潟の學校に机を共にして初めて西洋の學問をした頃の同窓は今極めて少い。兎もするとその同窓が會して語り合つて見るといろ〳〵面白いこともあつて、今から考へれば殆ど隔世の感がある。自分は其の頃十三四歳の少年であり、且つ在學の間が僅に二、三年ぐらゐの短期に過ぎなかつた爲に、覺えてゐることも甚だ少く、且つ少年の觀察であるから、その觀察も誠に覺束ない。幸ひにして當時同學の先輩が二、三人在京であつた頃いろ〳〵と前後の事を聞糺したりなどしてみると、いろ〳〵の事が分つて來て、一通り其の當時の事が話せるやうに思ふ。併しながら越後の最近の文明といふものは、此の幼稚な學校が紀元をなしてゐるのである。其の點より考ふれば、越後の文明史を他日編まんとするには、どうしても其の時代の教育の有樣を缺いてはならぬ。然るに此の時代のことは、多く忘れられて今は語る人なく、若し二三十年を經過したならば、遂に其の時代の事實

は全く湮滅に歸して、此の文明紀元の材料が越後の歴史なり若しくは教育の歴史なりに全く缺ける虞があるであらうと思ふので、自分は不束ながら取調べただけの事を書著して教育史などを書く人の他日の參考に供したいと思ふ。返すゞ〳〵も思ひ出づる儘を粗略に語るに過ぎないのだから、當時同學の人、若しくはその頃學校に關係した人の眼に此の記事が觸れたなら、自分と志を同じうする人は、願はくは材料を供給して、自分の足らざる處、誤れる處を補正して貰ひたい。

新潟に於ける英學の端緒

新潟が幕府の末路に開港場となつて、五港の一に數へられた結果、早くも維新以前新潟には、特に外國人に接する係員が置かれた。それには農學界の先輩として知られた津田仙氏の如き、その頃は外國係として、新潟に來てゐたこともある。新潟は五港の一に數へられたが、實はあまり開港場たる用を爲さなかつた。併し五港の一たる格として、外國人に對する設備を要したのである。此の津田氏が新潟在住の頃、早く英學の端緒を開いて、津田氏を師として、五、六の人々は英學の研究を始めた。

斯樣な譯だから大政維新となつては、無論英學の機運は、此處に發せざるを得なかつた。自分の知つてゐる處に依れば、平松時厚といふ人が知事に任ぜられたのは明治三年六月十九日であると思ふが、此の頃よりして、英學が先づ知事の考を以て計畫せられた樣に思ふ。

知事の事をいふに就いて序ながら府縣の沿革を言はんに、今の新潟縣には、自分の鄕里北蒲原郡の水原に明治元年六月越後府が置かれ、同年九月新潟府となり、更に二年二月に再び越後府が置かれ、更に同年二月二十二日に新潟縣が置かれ、更に同年七月二十七日に水原縣が置かれたといふ樣にいろいろ沿革もあるが、明治三年六月十九日に今の新潟縣が置かれて、その時の知事に任ぜられた人が平松時厚氏で、氏は元宮內省の權大丞であつた。

平松氏の考を以て初めてブラウンといふ人を新潟へ聘した。是が新潟に英學の起る紀元とも謂ふべきものであらう。此のブラウンは其の時分流布した英文典の著者で、所謂ブラウンの文典といふものは、その當時盛んに用ひられ、その爲にブラウンといふ名を人が知つてゐる樣なものであつた。斯の人は一人の娘を伴ひ來つて、その娘もいくらか英語教授の手傳をした。

楠本縣令の激勵

此の時分の學校の組織は如何なるものであつたか詳しく分らんが、何にしてもその時分の學校といふものは都にこそ相當のものがあつたが、地方にはたゞ各所に家塾がいくつかあつた位なことで、所謂寺子屋跋扈の時代であつたから、此の新たに起つた學校といふものも、先づ家塾の少しく纒つた位のものと觀て可からう。無論何々學校といふ樣な立派な名稱もなかつた。何處で英學を教へたか、そ

の場所も自分は知らない位である。無論維新の當時に於ては英學を主にした譯でもなく、之に伴うて漢學並に皇學などの學科も並立せられた譯である。是等は皆場所を異にして、殆ど同時に三學校が開かれたといふ有樣である。

漢學の方には何んな人が教師であつたか分らぬが、皇學の方は慥か加茂の小池内廣がその教頭らしい位置にゐた樣である。英學の方ではブラウンの外に、當時新潟縣の一等譯官で、中村得高といふ人が助教授といふ樣な格で、譯讀などは此の人が受持つた樣に聞いてゐる。

その時分學生の數はどの位あつたか、之も詳しくは分らんが、何にしても兵亂の擧句で人心も定まらぬ時代であるから、學校が開けたというても誰も來たり學ぶ者はない。殊に新潟は商人の多い所であるので、學問などに志す者は少く、土地の者で入學したものは幾何もなかつた。そこで知事は據ろなく縣廳の役人の子弟などを勸誘し、是等の學科を修めしめた。だから、その數は二、三十人位に過ぎなかつた。此のブラウンの新潟にゐた間は二、三年位でもあつたらうか。實は折角外國人まで聘しながら、たゞ僅に英學の萠芽を發したといふ位の事で、此の人は去つてしまつた。が併し新潟の英學は、此の時より始つたというてよろしい。

平松に代つて縣令となつた楠本正隆は誰も知つてゐる他日の衆議院議長で、大村藩士である。楠本は外務大丞より轉じて明治五年に新潟へ縣令となつて來たので、新潟縣の改革は全く斯の人の赴任後

であるというてよろしい。楠本は晩年は頗る不得要領の人と評せられたが、此の時分は年も若く、中元氣壯んな時代で、赴任匆々あらゆる方面に大革新を試みた。例へば、斷髮令は出ても誰も結髮であつたのを髮を切らせると共に、不馴な帽子を戴かせるといふ樣な勢で、僅の間に社會の各方面に激烈な變化を與へた。勿論英學の如きは此の人に依りて、非常な革新が圖られた。

是までは學校の組織も碌に纒つてゐなかつたものを、楠本に至りて大いに規模を擴張して、初めて學校らしいものとなつた。その頃の學校の組織は主として慶應義塾に則つたと思はるゝ。校名は英學校と呼び、學長には二橋元長を擧げ、外人にはキングを聘し、教頭とも言ふべき位置には、縣廳の一等書記官であつた土取忠良といふ人を用ひた。序にいふが、その時分には新潟の如き開港場には、外國人と交渉がある所から、官制に於て譯官といふものを置いた。それが一等より數等あつて、無論英學に通じた相當の人が來た譯である。斯樣な人は置かれたが縣廳には格別仕事がないので、いつもこれを學校の教授に充てた。乃で前述の如く平松時代には、學校はあつても僅に二、三十名の生徒であつたのに顧みて、楠本は猛然起つて管内の巡回を試み、盛んに就學の奬勵をした。管内至る所大地主を集め、時勢を論じて新學を學ぶの必要を說いた。楠本縣令は大地主に向かつて、「お前等は子供を生んでも、之を教育することを知らん、そんな事では禽獸と選ぶ所がない。」といふ樣な激語を發して盛んに勸誘した。

その當時は未だ官尊民卑の習風の殘つてゐた頃であるから、縣令樣御自身の御巡回御勸誘といふので、富豪の輩は恐縮して子弟を出すことを諾した。斯くいふ自分もその時の勸誘で、新潟へ出ることになつたのである。又その時の勸誘に依つて斷髮せしめられた。自分は斷髮の勵行だけは喜んで受けた。此の頃油をつけてすき櫛にすかれて結髮することは日々の一大苦惱であつた。それを免るゝ譯であるから喜んで應じたけれども、英學を學ぶため新潟へ赴くことは躊躇した。と云ふのは、その頃自分は漢學塾にあつて聊か漢學の趣味を感じた頃であつた。今日と違ひその時分の少年は、十二、三歲位でも無點の漢文を讀み、或は詩を作り、漢文を作るといふ位な程度であつたから、今日より見れば非常に進んだものである。自分は漸くにして漢學趣味を感じ、これから相當の力の付くことが、眼に見えてゐる時であるのに、時勢の必要とは言へ、茲で廢めてしまふことは生涯の損と考へて、餘り氣も進まなかつたが、何にしても縣令は目星を打つて出せといふし、親も强ひて勸めるので、實は不本意ながら新潟へ赴いた樣な譯である。

楠本縣令の雄斷と學校の隆盛

以上は當時の自分一個の所懷であるが、却說縣令は新潟一縣の極端たる岩船の村上まで赴いて、その時に一、二の人を村上に得た。それは今故人となつた、工學博士近藤虎五郎氏の父近藤金彌といふ

人並びに竹內政武の兩人である。此の二人は共に村上藩の士族であつたが、縣令は此の二人を選拔して學校の事務掛にと新潟へ伴ひ來たつた。慥か近藤氏が前で、續いて竹內氏が來た樣である。

此の二人の役目は、何というたか忘れたが、今いふ幹事といふ樣な役目で、之が久しく學校の事務に從事した。斯樣な事で、一巡知事は勸誘を試みて、幾何か學生も來たが、併し未だ數が少かつた。乃で知事は斯んな事では充分な教育は出來兼ねると更に一大雄斷を試みた。それは私費で學生をとるといふ事では、たゞ富豪の子弟の來たり學ぶ外、殆ど學生を得ることは出來ないから、學資なくして篤學のものを得るには、別な方法に據らねばならぬといふことよりして、その當時新潟縣の行政區劃が二十數大區に分れてゐたが、各區に命令を傳へて、必ず區費を以て、若干の學生を是非新潟へ出せといふ訓令を出した。是に於て各區とも若干の學生を選拔して、新潟へ送ることゝなり、此の强制手段で、初めて相當の學生數を得ることゝなつた。嘗て早稻田中學の教頭をした今井鐵太郎氏の如きは其の一人である。斯樣なことで結局隆盛の時代には、學生の數は四、五百人位に達した。

是より先ブラウン已に去り、更に教師を得る必要が起つたので、その時に聘せられた人は首藤隆三氏である。氏は早稻田大隈邸に早く英學を開講した尺振八（せきしんぱち）門下の人で、國民黨代議士として、長く仙臺より擧げられた人である。その首藤氏は當時は中々立派な好男子で、能く黃八丈の羽織を着て學校へ出席するのを、吾々は子供心に記憶してゐる。此の人に就いての奇談は、初め新潟へ着すると秋田

屋といふ旅館へ泊つた。乃で縣廳から召狀の來たのを見ると、何日何時袴で出頭せよといふ事であつた。勿論英學者の事であるから袴の備などない。乃で據ろなく宿屋の主人に計ると、幸ひに義太夫語が來てゐるから取敢へず其の袴を借りて上げようといふと、先生無造作に、それで可いといふので、出頭の時刻は迫るし、之を着けることになつた。是は天鵞絨で造つて、金絲で大きな紋の附いてゐる、所謂藝人の袴である。それを無造作に着けて出頭したので一笑を博した滑稽もある。も一つ記憶されてゐる話は、先生の學校に臨んだ時、第一の講義は、その時分頗る新しい普佛戰爭の事を萬國史から拔いて講じた。然るに先生は仙臺辯であるので、ナマリが餘り甚だしく、流石に熱心な講義も誰一人分らなかつたさうである。

扨て又新たに開かれた學校の位置は、最初は奉行所の官舍で、現在警察署のある邊りかと思ふが、之が南二番といふ官舍であつた。それが間もなく狹隘を告げて、南八番といふ官舍へ移轉した。それは今の農工銀行の建つてゐる邊りである。此の南八番も追々狹くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所のあたりである。何にしても學校の爲に特に設けた場所でないから、間取などもをかしなものであつた。勿論疊を敷いた上に、テーブルや腰かけを置くといふ譯であつた。又そこに集つた學生も、初めの頃は佩刀をして來るものもあるといふやうな譯で、年配なども極めて不同で、老いたるあり、子供もあるといふ樣な不揃のものであつた。遠方から來てゐる學生も少からずあ

つたから、寄宿舍の設備もあつた。それ等の事は後に詳しく言ふ折もあるが、兎に角普通の日本座敷に、室の大小に從つて、五人、十人雜居した。

變則よりも正則

首藤時代の教育方針は謂はゞ變則流であつて、譯讀が主であつた。たゞ書物さへ理解すればよいといふ風で、正則に音を正すといふことは二の次であつた。勿論首藤は教頭の地位であるから、多數の學生を此の人が教へた譯でなく、多數の學生を教へる教師を寧ろ教へたのである。その一般學生を教へる教師は、學生の優等生から擧げて句讀師といふものを作つた。

句讀師といふものは、漢學塾の流れを汲んだ名前であるので、今日の人は一寸妙に思ふ名前であるが、一時斯樣な名前が付いてゐたものが十人位あつたと思ふ。此の句讀師が、首藤先生の教を受けて、一般の學生には句讀師が教へるといふ譯である。而して句讀師は何を教はつたかといふに、當時は極めて程度の低いものであつて、グードリッチ氏の英國史などが最も六ケ敷いものゝうちであつた。無論此の上級の學生といふものは、新潟の學校で育つたといふよりも、寧ろ外で相當の程度まで學んで、然る後新潟學校へ來た連中である。首藤が新潟學校へ留つたのは二年許りであつたらうか、確か其の後外國教師を聘した樣に思ふ。而してそれは英國人のキングといふ人であつた。

此の人の素姓は能く分らぬが、如何にも人格の低い人で、又教へ方も餘り上手でなく、隨つて怒りつぽくて學生を叱りつけたりなどした所から甚だ生徒の人望なく、久しく留る事が出來なかつた。此の人に就いて語るべき一珍事がある。或る夜刺客がキングの家を襲うたといふので、大騒ぎになつた事がある。だん〳〵調べて見ると、拔刀でキングの寢室へ行つて、布團の上から切りつけたといふキング自身の話で、成る程着てゐる布團には刀で切りつけた跡が存してゐる。乃で大騒ぎとなつて、縣廳でも外人を刺殺するなど〻いふ事は、大變の事で、それが爲に、兎もすると巨大な償金をとらる〻事もあつた譯であるから、一時犯人を大いに搜索した。誠に今から考へて見ると馬鹿々々しいと思ふのは、犯人搜索のため新潟全市の市民に二、三日間禁足を命じたことである。此の調べのつかぬ間は一歩も外へ足を踏出すことが出來ぬといふ事には、今は一笑を催す樣のことであるが、之がため市民は迷惑を感じた。併し犯人は出ぬ、何でもその時の評判では、キングが償金を貪るため、自分で芝居をしたらうといふので、遂には償金を出さず、有耶無耶の間に濟み、間もなくキングを解傭して、事は落着した。

キングに次いで聘せられた外人は、米人のエドワード・ゼームス・モスといふ人であつた。之が長く新潟に居り、此の人の來た時代には、學校は最も繁榮を極めた。此のモスといふ人は、横濱の新聞記者をした人で、學力は格別なかつたかも知れんが、教へ方は上手な人であつた。此のモスが學校に

聘せられて以來、學校も初めて正則の面目を保つて來た。

モスの新潟へ聘せられた時分、新潟縣廳へ一等書記官として來たのは、梅浦精一といふ人で、學校へ教鞭を執ることになつたが、無論教頭とも言ふべき位置で、最高級の學生は皆此の人に教はつたのである。その後に又同じく縣廳の六等譯官を勤めた高野爲隆といふ人も來て、教授を助けた。併し之は餘程後の事である。

モスの新潟へ來たのは、慥か明治六年の頃であつたと思ふ。その譯は、此の頃丁度金星が太陽を横斷して日蝕を生じた時であることを記憶するが、モスが初めて日蝕を見るにはガラスに鍋墨を塗つて見ればあり〳〵と見えるといふことを教へて、皆々競うて日蝕を見た事がある。今日では誰でもその位の事は知つてゐるが、當時は甚だ珍しく感じたのである。丁度此の時分學校に充てられた町會所が市中の火事の類燒に罹つたため、假りに何れかへ移轉することになつて、暫時廣小路上の勝樂寺へ移つた。此の移つてゐた間が半年位のものであつたらうか。もう學校も大分大きくなつて來た譯で、茲に初めて學校新築の議が起つて、白山浦に元米廩の多く列んでゐる處を選び、その米廩を潰して茲に初めて新築をやつた。その落成までは此の勝樂寺にゐたのである。

本校の建築と分校の設置其の他

今その勝樂寺時代の事を一つ二つ話して見ると、先づ本堂が寄宿生の讀書室でもあり寢室でもあると云ふ鹽梅で、薄暗い廣い處に、四、五十の學生が机を列ねてゐたものである。乃で夜具の置場は、本堂の一段高い所、即ち佛壇の下に、日中は累々として積まれてゐるといふ有樣で、その本堂と背中合はせに屏風を立て廻して、そこに幹事室や事務室が置かれて、他の各室が講堂に充てられ、庫裡が食堂に充てられ、賄所は本堂の昇口の片側に假りにバラック樣のものを作つて、其處で炊事をやつた。宛で戰にでも行つたやうな鹽梅で、頗る雜沓を極めた。併し斯樣な雜沓の間にも、教授は常の如く進行してゐた。斯樣にしてゐるうちに、白山浦の新築も出來上つたので、玆へ移つたが、此の學校が出來てから初めて新潟學校といふ名稱を付けたのである。

今までは町會所や或は奉行の官舍などを學校に應用した譯であるのに、此の度は特に手廣の建築をした譯であるから、玆に初めて堂々たる學校の面目を現して、前に比ぶれば實に月鼈の差を生じた。此の時分に學校の徽章も定まり、旗にも學生の帽子にも鷲ペンを交叉したものが付いた。その時分の知事は楠本正隆で、學長は二橋元長、その下に校監といふものが置かれ、それが橋口正弘といふ人で、此の人は楠本と同藩で矢張り大村藩の人であつた。幹事としては前にいうた近藤、竹内などが事務を執つたのである。そこで教頭には梅浦精一といふ人があり、他の教師としては、此の時分縣官の出身地の關係より、大村藩から數多來てゐた。又松平正直といふ人が、福井の人で、縣廳の樞要の地

位にゐた關係から、福井の人が澤山教員に來てゐた。其の他會津の人で來てゐた教員もあるが、それ等の名は後でいふ折もあるであらうが、兎に角學校は、その時分無比の繁榮を來たし、學生の數が四、五百にも達した。

是に於て新潟縣の二、三個所に分校を起すの議があつて、場所は新發田、長岡、柏崎に定められ、新潟に來たり學ぶ能はざるものは、皆此の分校に學ぶことゝなつた。

分校の事に就いては詳しく知らぬが、併し幾何かの事は後にいふ事にして、新潟學校（本校）のその頃の教へ方などに就いて少しくお話しするが、いふまでもなく、此の時分の教育の組織といふものは、丁度中學程度といふ形のものであつて、無論專門の學科を主とするものでなかつた。中學程度といふのであるから、專ら英語を主として傍ら洋算に力をこめたものである。

その組織は今日の我が邦の中學校とは違つて、何れかと言へば、西洋の中學校をその儘日本へ持つて來たといふ風であつた。モスの時代となつては、盛んに正則の奬勵をしたので、斯の人の教へ方は、極めて實際的であつて、日用の事柄を主に立て、書物を讀むに音を正すといふ事は勿論、綴字などには非常に重きを置いて、書取の時間が多くあつた。又地理などを教へるのにも、餘程實際的で、書物に就いて學ばせる外に、講堂の壁に懸けてある世界地圖に就いて、學生をそのまはりに集めて、一週何時間といふもの、必ず學生に地名を呼んでこれを指させる樣に努めた。

モスといふ人は、書が中々巧みであつて、筆跡が極めて見事であつた。隨つて習字にも重きを置いた。習字に附帶して、或る上級には必ず手紙を練習させた。手紙は主に商用の手紙であつて、その奬勵の結果としては、中々今日の中學よりも遙によく歐文の手紙を書くことになつた。此の人の教へぶりをいふと、書取などの外は、總べて自分のまはりに學生を立たせて置いて、綴字なり或は地圖の地名などを指點せしむるものであつた。その方法は立たせて、名を呼んで順番に問ふのであるが、先づ第一番にをるものより始めて、それが答へないと順番に次々と及び、答へたものが直ぐに go up（上へ上れ）といふて、答へることの出來なかつたものゝ上へ進むのである。斯樣の方法で問はれるのであるから、學生は皆勵んだ。而して一時間の終にその日の席順が定まる譯で、教師はそれを出席簿に控へ、それが學期終の點數になるのである。

教師に關するいろ〳〵

以上は主に正則の方面の事であるが、前述の教頭の位置にある梅浦といふ人は、專ら上級の學生並びに教頭以下の教師を二、三の組に分つて、譯讀を授けた。それは輪講の方法で教へたのである。その時分どんなものを輪講の書物としたかといふと、今では廢つたが、ウエランドの倫理書、經濟書などが、その時分流行で、是等が最高級の本であつた。尙その外にギゾーの文明史、ミルの經濟書、ク

ワツケンポスの究理書などもあつた。梅浦教頭は輪講の外に、自ら文章を書いて（時文）それを英文に譯させる事などもやり、或は又外國の新聞の或る部分を分割して、之を各々に飜譯させるといふ事を努めた。而してその各々から出した飜譯を纏めて、書直す人がその級にあつた。それは後に實業界に入つた萩原源太郎氏が書を能く書き、又達者に書くといふ處から、此の人が淸書を擔當した。

生徒の譯文に梅浦教頭が筆を入れた。扨て又それが纏つて何うなるかといふと、當時の新聞は小型の未だ幼稚の域にあつたが、之に寄稿することが例であつた。それがために、自分などの譯したものが、月に二度や三度新聞に現るゝといふ譯で、ひどく奬勵になつたやうに思ふ。今日に於ては、新聞に文章を載せるといふ事は、誰でもやる事で、餘り名譽とも思はない事であるが、その時分は自分の筆になつたものが、新聞に載るといふことは、學生として大いに面目に思つたものである。隨つてそれに載せるといふ事が奬勵にもなり、又新聞社のためにもなつたものである。又梅浦教頭の書いた文章を英文に飜譯するのは、餘程上級者中の少數者のやつた事である。今でも覺えてゐるが、或る時の文章は「民選議院設置の議」といふ長文が、課題に出た事を記憶してゐる。

で、その時分の月謝、寄宿舍費は、幾何であつたかといふに、是も多少の變遷はあつたかも知れぬが、今記憶してゐるのは、何でも南八番時代の月謝が金一朱即ち十二錢五厘であつて、寄宿舍費は二圓五十錢であつたやうに思ふ。十二錢五厘など〻言へば大層安いやうだが、實は今日（大正初年頃のこ

と、以下これに準ず）の五倍と見れば矢張り相當のものであつたに違ひない。乃で町會所、南八番時代には前述の句讀師といふものが置かれて、幾何かの俸給を受けたものである。例へば十圓位の俸給を受くべきものが、自分が教はるといふ方から三圓許りを引いて七圓位の俸給を受けてゐるといふ樣なものであつた。何でも新潟學校となる以前の教頭以下の句讀師などは、俸給の最も高いもので十圓位のものに過ぎなかつた樣である。新潟學校と改るに及んでは、句讀師の名も廢せられて、何といふ名が付いてゐたか忘れたが、謂はゞ今日の教員といふ樣な名義で、諸方から多くの人達が聘せられて、十數人の教員が備つた。是等は矢張り二、三の取除けの外は、皆教頭に就いて一面には教を受けた。その取除けといふのは、例へば數學の教師の如きは、唯自分は教師を務めるといふだけで、教を受けなかつたのである。

教師には何んな人が來たかといふに、前にも言つた通り、知事が大村藩であるといふ關係から、大村から士屋廣次といふ人が來てゐた。それからその時分の縣の知事の次の人で、福井の松平正直といふ人が來てゐた關係から、松平正秀、松平誠、津田東、松原某、武藤鳳六などいふ人も福井から來てゐた。それに、之も確か福井の人であつたと思ふが、數學の教師が高橋貫一、それから會津の人で、萩一雄、また長岡からは佐野洪藏などいふ人が來てゐた。遡つて新潟學校となる以前の所謂句讀師といふものは、何んな人であつたかといふに、中川忠太郎、石澤兵吾、長谷川寛治等の人々であつて、

是等の中には、新潟學校となつてもなほ繼續して所謂助教授といふ樣な格で教務に與つた人もある。

久保氏の談話

それから分校では新發田に久保扶桑氏、長岡柏崎に小島銑三郎、藤井三郎、此の人々が教頭になつて來たのであるが、此の二人の中孰れが柏崎であり、孰れが長岡であるといふ事は、一寸自分には覺えがない。兎に角是等の人々が聘せられて來たのである。

乃で長岡から出た上級生として知られてゐるのは、故人となつた波多野傳三郎氏、盲唖學校長であつた小西信八氏などである。

久保氏が新發田へ來て教頭になつた頃の事に就いて、いつぞや久保氏に面會した折に直接聞いて見ると、久保氏は次の如き興味ある話をした。「自分は實は東京にゐて、北海道へ出懸けて何か一つ事業をやりたいと云ふ考で、自分の後の事はみな岡山兼吉氏に託して、僅ばかりの旅費を以て北海道を志して東京を發した。その時分北海道へ行くには、越後を經て行く方が近道であつたので、先づ越後を志して東京を發すると、前橋に着き圖らず病氣に罹つて、多くもない旅費が殆ど盡くるに垂んとして、病氣が癒つて、やつとのことに新潟へ着した時は、嚢中僅に金一朱を餘すのみであつた。その時分新潟の師範學校に平井と云ふ友人があつて、それを便つて相談をしようと訪ねて見ると、生憎その

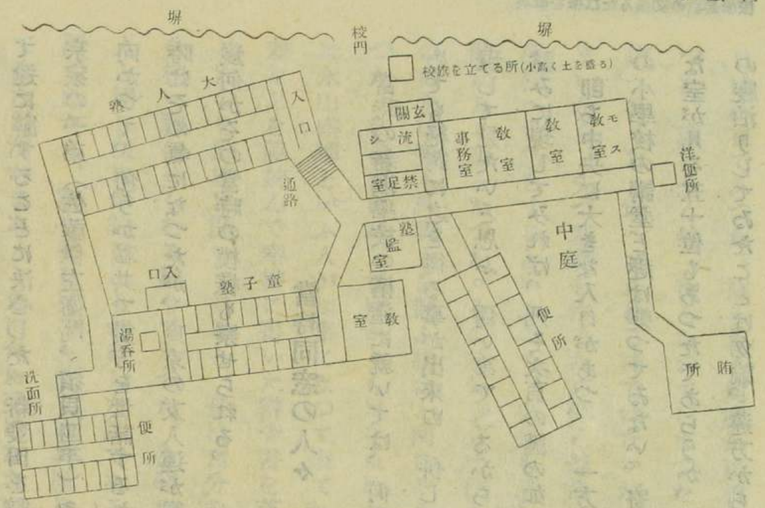
日は不在であつた。據ろなく何處かに旅宿を求めて、懷にある全部の金を茶代として拋り出してしまつた。處で全く無一物となつてしまつたが、幸ひに翌日平井に會つて見ると、平井の云ふには、北海道へ行くなら敢へて止める譯ではないが、兎も角出懸けるに就いては少しは金を持つて行かねばなるまいから、先づ基礎を作るため暫く越後に足を止めては何うかといふ。そして、その積りなら、新潟學校へ世話をするといふので、自分も已むを得ずその氣になつて、梅浦の世話で、新發田の分校の教頭になる事となつた。その時分自分は役人といふ資格でなく、所謂御用掛といふ役で、縣廳との條約の如きは恰も外國人を傭ふ場合と同じやうな約束のとりかはしをして、そこで新發田分校の教務に與つた。新發田には二年ばかりも足を止めたであらうと思ふ。さうすると楠本が東京へ去つて、その後に永山盛輝といふ人が知事になつて來てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭して見ると、永山は脇差などを脇挾んで奉書に書いた辭令書を芝居などにある樣に、雙手に高く捧げて、恭々しく自分に渡したのを即座に開いて見ると、是は自分を役人扱にする事に改めて、イクラか俸給を增して、柏崎の分校へ轉任せしむる辭令であつた。全體自分は役人になるつもりではないので、初めもそれがため外人と同じ樣な條約をとりかはした譯であるのに、豫め相談もなく、突然役人扱にする事に對して癪に障つたから、辭令書を見ると直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言出したら、わきに坐してゐた田沼がまあ〳〵兎に角お受けなさいと言つて、頻りに宥めた。併し自分はその時から厭になつ

て遂に辭することに決心した。新發田を辭するに當つて、その時分自分が世話した學生の中に自分の宗家の子弟（佐藤伊左衞門、須貝四平）や白勢家の子弟（白勢和一郎）もあつて、此の兩富豪が私に向かつて、何うか私共で貴方を世話するから長く越後に留つて貰ひたいといふ勸告もあり、自分も一時はその氣になつたが、東京の友人連が歸京を勸めるので、遂に引上げる事になつた。」斯樣な話で、幾何かその當時の模樣も察せられる。

當時同窓の人々

當時の新潟學校の構造に就いては、何れ新潟縣廳にその圖は殘つてゐようが、今は他にその圖を求めても絕對に之を得る事が出來ぬ。併し話の序に、大體何んな風なものであつたかを粗雜ながら玆に現して見たいと思ふ。舊い事であるから、とても正確に現す事などは思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ次頁の圖の如きものであつた。

即ち中央に大きな入口があつて、一方は講堂、一方は寄宿舍といふ大體の構造で、講堂の有樣は今の小學校の講堂と趣は變つてゐない。寄宿舍は廊下を中央にとつて、兩側に三人乃至五人を容るゝ位な室が凡そ五十位もあつたであらうか、丁度今の病院の病室のごとき趣があつた。此の寄宿舍に學生の寢泊りしてゐたことは勿論、遠方から來てゐる教員もまた寄宿舍にゐたものであつて、その人達は



房長といふやうな有樣で、他の寄宿生を監督してゐた。自分兄弟は未だ南八番頃には、新潟の醫界に名聲ある長谷川寛二氏の室にをり、それから會津の人の萩一雄氏の室にも居り、新潟學校時代には曾て刈羽の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室にゐた事もあるが、是等の人々は年配も學問も先輩であり、單に房長として監督したといふのみでなく、頗る親切に學問其の他の事に就いて指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

新潟學校時代に如何なる人が就學せるかを考へるも、今に於て興味ある事であるが、唯遺憾な事には、その時分の名簿が殆どなくなつてゐる爲に、記憶してゐる人々の名が甚だ少い。たゞ思ひ出づる儘に、人々の名を擧げて見ると、理學博士藤澤利喜太郎氏なども學校の創始時代にゐたのであるが、是はずつと舊いので自分はその頃の事は知らない。自分の競爭者として、今猶記憶してゐ

るのは、宮内省の侍醫たりし桂秀馬、それから横場の筆工の子である古田鎭三、此の兩人は極めて秀才であつて常に自分と首席を爭うた人々である。それから大竹貫一氏、高橋邦三氏、小林善四郎氏、内藤久寛氏、廣瀨吉彌氏、是等の人々も矢張りその時代にゐた。新潟市の實業家中には鍵富德次郎、栗林貞吉、荒川才二、小山長作、是等の人々も矢張り同時にゐたのであるが、勿論級は皆それ〴〵異なつてゐた。未だ幾人か記憶してゐるが、どうも今となつては、姓を覺えてゐても名を忘れたり、名を覺えてゐても姓を忘れたりして、玆に申し述べることは甚だ困難である。曾て東京にその時分の同窓會を催したことがあつた。それは已に十數年前の既往になつたが、偶〻今の内務省技師の近藤虎五郎君の嚴父、金彌老人（當時の幹事）の出京せられたのを機として、今の楠本男爵、梅浦精一氏などを招いて、二十人許りの人々が會合したことがあつた。何にしても三十年振りで、殆ど始めて出逢ふ樣な譯であるから、昔は互に知り合つてゐる面々も、互に出逢つてみると、殆ど互に相知らぬといふ有樣であつて、自分は比較的此等の人々と度々會つてゐる樣な事から、紹介者となつて、是は誰、これは誰といつて紹介して見ても、その引合はせられた人々は、殆ど茫然として暫く顏を諦視して、漸くにして理解がつき、成る程それに違ひないといふ有樣で、甚だ奇觀を呈した。何うも此の時分の人達が多く集合するといふことは、今日に於ては甚だ困難である。その集會の席にいろ〳〵な懷舊談が出て、甚だ興味を感じたが、考へてみると、隨分舊いことであつて、近藤博士などは、吾々よりも遙

に年配若く、その時分は未だ毎晩寄宿舍に嚴父の近藤老人に抱かれて寢てゐた小兒であつたなど云ふ舊夢談も起つて、皆一度は近藤老人に叱られた面々であるから、それらの失敗談を口々に語り出で、打興じた事がある。

その後の新潟學校

明治八年に至つて楠本縣令は東京府知事に轉じ、梅浦教頭は內務省の勸業寮に轉じた。たゞ外國人モスは九年頃まで止つてゐた樣である。梅浦の去つた後は、會津人で阪井正義といふ人が來たが、此の人は學殖足らざるため、間もなく排斥せられて去り、それに代り縣廳に一等譯官となつて來て、學校の教頭を兼ねた人は工藤助作といふ人で、之は確か弘前の人であつた。無論永山知事の時代である。之より先、確か明治六年と思ふが、全國に文部省が英語學校を起すといふ事になつて、全國を六大學區に分ち、六ケ所に英語學校を置かれたが、新潟にも亦置かれた。是に於て二つの學校が竝立する事となつて、新潟學校からも幾何かの學生が英語學校の方へ轉じた。併し新潟學校は依然として成立してゐたのである。たゞ新潟學校が追々年を經るに從つて、多少の變化を生じた譯は、當時遊學してゐた連中の中に、子供計りでなく大分年配の進んでゐた人々も多かつたので、學問の方針に關して一時議論が沸騰した。その要領は如何といふに、たゞ西洋の語學ばかり研究してゐるのでは、身を立

てるの方法としては不完全である。何等か職業を得る學問をするに非ざれば、將來活路を得るに困難であるから、宜しく學校に一、二の專門の學科を置くべしと、斯樣な議論が一方に起り、之に對して、專門の學科は、各〻志す處に依つて東京に至りて學ぶべし、此の學校は專門の學科を修むる階梯にして置けば可なりといふ二種の議論があつて互に鬪つた結果、學校でも考へ、結局兩方の議論を折衷して、玆に二つの學科を分けて置く事になつた。それは在來の專ら語學を教へるの學科を講習科と名づけ、專門の學科の方面は、百工化學といふものを起した。これが學校の一大變革であつて、此の百工化學を起す爲、經營上人を聘したが、其の人は美濃の出身で村橋次郎といふ人であつた。此の人は經營が一通り終ると東京に去り、後中川謙次郎氏が來て、その教頭といふ位置にゐた樣である。講習科の方面には、最初大石某といふ人が來たやうである。それと殆ど同時に、故文學博士三宅米吉氏も講習科の教員に來てゐた事がある。斯樣な學科を改めて以來の事は、自分は殆ど知らぬ。自分は明治八年に新潟學校を辭して上京したわけであるから、その後の事は一切知らんが、何でも一年位後に學校は、遂に英語學校と合併せられたかと思ふ。

新潟學校の前後に關する自分の知る處は、此の如きに過ぎない。勿論幼少時代の記憶でもあり、又在京者で此の時分の事を知つてゐる人も甚だ少い譯であるから、實は甚だ覺束ない記事であるが、前述の通り何うか自分の足らざる處や、或は誤れる所は充分補つて貰ひたいものである。

明治初頭文壇の回顧

一

私の東京に出たのは明治八年であるが、それまでは小説に觸れたことが無かつた。其の頃東京の書生社會では馬琴の小説――「八犬傳」や「弓張月」や「美少年錄」などを讀む事が流行で、まだ其の頃は貸本屋が江戸時代の型で方々にあつた。自分は番町の親戚の家に寄食してゐたが、親戚の子弟が毎日麴町の貸本屋から「八犬傳」を三册五册と借りて讀んでゐるので、自分も始めて馬琴の作に親しみ初めて、「八犬傳」を全部讀通し、追々其の他の大部の小説にも及んだ。七五調の文章が其の頃大變に面白く思はれたもので、「八犬傳」中のサワリ文句は多く書生間に諳記され、信乃濱路別れの一節などを諳誦が出來ないと、友人間に何となく肩身が狹く感ぜられた。西洋の語學を習つてゐる一方舊派の小説に耽つたなどは妙なことだが、此の頃は新體の小説はまだあまり無かつた樣である。

それから明治九年に開成學校の豫備門に入り、寄宿舍で坪内雄藏君と交つた。君は當時大の馬琴通

で、馬琴のあらゆるものを讀過してゐたのみでなく、馬琴脈の文章を縱横に書いた。何といふ標題であつたか忘れたが、馬琴の顰に倣つて吉野朝系統の材料で一册の小説を書いて示されたのを見ると馬琴ソツクリで、例の七五調で、面白いかけ言葉もあり、サワリもあり、殺し文句もあるので、自分などはエライものだと驚いた。坪内君は馬琴ばかりでなく、三馬でも春水でも一九でもあらゆる作家に通じて、誹諧の文はなか〳〵得意であつた。それはズツト後に書いた「馬骨人言」などで何人も會得したであらうが、大學時代に書いた誹諧文字で自分の記憶にあるのは、五六人の同窓が連れ立つて、鴻臺(こうのだい)へ徒歩で往返した、其の紀行を膝栗毛風に書いたものであつた。ある時坪内君が示された小説目錄、それは讀み本、洒落本、人情本、草双紙の類まで千種以上も收めたものであつたが、何の目錄かと聞いたら、鄕里にある時名古屋の大物（貸本屋）から借覽した書名の大略を書き記したのであると聞き、その渉獵の廣いのに一驚を喫した。坪内君は其の頃既に一廉の小説家であつたのだ。

自分は大學の文科に入つたが、志す所は政治にあつたので、文學とは沒交渉であつた。隨つて文學に就いて何も云ふ資格が無い。たゞ親しい友に坪内君のごとき人があつて、學窓時代からその歿するまで、長い間交情が連續してゐたので、此の友人から文學上の薰陶を受けたことが少くない。時折往來して話題となるのは文學談で、自分からワカラヌことを問うたこともあつたが、坪内君はいつも親切に、一時間も二時間もその蘊蓄を傾けて諄々として說き聞かされたので、興味を感じて時の移るを

忘るゝのが常であつた。コンナ偶然の往復で、自分の受けた文學上の薫陶も少くないが、まして毎年例として熱海に坪内君と落合つては、一週間位毎日五六時間にわたり、坪内君の文學論を聞くのが定例で、新しい各國の文學思潮なども、例の巧みな說き方で親切に話してくれられた。殊に劇に關しては古今東西に通じて該博な講說があつた。考へてみると坪内君には多くの門人があるが、自分は恐らくは尤も親切に且つ多量に教育を受けた門人であらう。自分は文學趣味が缺けてゐるものか、生來の魯鈍は、薫陶を受けた割合に一向開發する所がない。しかし、多少にても文學に就いて理解のあるのは、坪内君のお蔭である。坪内君は内々自分を劇趣味の歸依者にしたい下心もあつたらしく、特に熱心に劇に關して講說されたが、どう云ふものか自分には劇の趣味が起つて來ないので、坪内君もいつそや、君は何でも趣味に通ずる人だが、劇だけは取除けかネ、と云はれたこともある。又、君に劇の趣味があると俺も助かるが、など云はれた事もあつた。如何にも坪内君の期待に背かないで劇趣味があつたら、折角參加した文藝協會にももう少し手腕が揮へたのだつたらう。併し、坪内君は自分に對しては特別の同情がある。いつぞや大隈老侯が雜誌を起さるゝに付き自分に擔任せよとあつた時などは、坪内君は「早稻田文學」を人に委して以來連續的に雜誌に執筆することを思ひ止まつてゐられたのだが、此の事あるを聞き、君がやるなら、俺も努力して助筆すると云はれた。此の雜誌は遂に自分が擔當せずに了つたが、坪内君の同情は眞に感謝に堪へない。

私は坪内君と右いふ樣な間柄であるから、坪内君の作などを是非する能力も資格も有つてゐない。唯大學同窓時代のことを追憶して見るのに、自分の觀察が誤つてゐるかも知れないが、多少の說がある。それは何かといふと、前にも云うた通り坪内君は學窓時代に旣に立派な舊派の小說家であつた。少くとも非常の素養があつた。其の素養が結局坪内君を大家となしたのであるけれども、西洋風の小說に推し移るには或は却つて累をなしたかのやうにも考へらるゝ。どうも一つの形式に熟してゐる人は、それに捕へられて他に轉ずる場合には困難を感ずるものである。坪内君に若し舊派の小說の筆が無かつたとして、西洋小說に早くから沒頭したら、初めからモツト新しい小說が書けたであらうと思はれる。坪内君の「書生氣質」は有名なものであるけれども、舊派の筆致や趣向が隨處に散見するのも其の素養の然らしめたものではあるまいか。半峯高田君があの小說に對しての批評は、今想ひ出すが、半分書きかけて、何年であつたか、正月の二日か三日に共に靜岡へ旅行した事がある。高田君は批評の後半を靜岡の酒樓で書き畢つたことを思ひ起すが、昨今讀んで見ると、高田君の批評は坪内君の病根によく言及してゐて、高田君の小說眼が一段高い樣に思はれる。全體高田君は坪内君と同窓であるが、西洋小說の繙讀は高田君の方が少しく早かつたし、又相當に見解もあつた樣に思ふ。此の頃の早大出の若い文學者達は、當時の高田君の批評を讀んで意外の感に打たれ、高田さんもなか〳〵エラカツタのですナと云うた者もあるが、高田君も文學者たらん事を志したのであつたならば、恐らく

は人後に落ちなかつたであらう。但し、創作家となるよりも批評家の方であつたゞらう。今日の高田君は教育家經營家であるけれども、學窓時代は文學の天分をあらはしてゐたものである。高田君は坪内君の如き小説の筆を動かす能力は無かつたが、英文を縱横に書き、相當文學的に書き得た人であつた。多分日本風の文章に素養が少かつた爲に、英文には却つて達したものであらう。三宅雪嶺君が其の個人雜誌「我觀」に吾等同窓のことを書いてをる内に、高田君のことに迨んで、其の本領は文學であるか政治であるか、疑はしいと云うてゐるが全く同感である。兎に角同窓時代を振返つて思ふと、高田君は西洋小説に於て坪内君よりも一日の長があつたやうに思ふ。勿論其の事に專らであると否とで追々懸隔を生ずるのは當然のことで、坪内君は間もなく高田君を駕するに至つたが、高田君の文學的才能は十分認めざるを得ないのである。

明治の九年十年の頃に帝大でボツ〳〵西洋小説を讀み耽ることが行はれ始めたが、しかし、この趣味家は甚だ少かつた。先輩には金子堅太郎君が此の方面の隱れもない人であつた。洋行中小説ばかり讀んでゐたと云ふ事が同君に對する非難であつたなど、西洋文學はまださう理解されてゐなかつた。大學の豫備門に入つて本科まで進まず退學した丹乙馬といふ人などは大の小説愛讀家で、英文も達者にかき、時々日本人を驚かす樣な新思想を吐いたが、それを奇怪に感じた位我々は幼稚であつた。此の頃讀まれた西洋小説はスコツトが大流行で、リツトンやサカレーなども愛讀された樣に思ふ。吾々

の先輩で芳非山人と號した、西松次郎といふ理學畑の人も此の趣味家で、卒業後新聞紙上に得意の筆を揮つたことは隱れもない事であるが、しかし、大學から專門の作家を出したのは坪内逍遙君だけであらう。

今から考へると一笑を催すほどであるが、當時は文學に理解がなく、帝大を卒業した文學士坪内雄藏が春廼屋朧の名を以て小説界に現れ出たのを驚異の目を以て見、「時事新報」のごとき、比較的新思想に理解のあつたものですら、苟くも文學士たるものが野卑な小説家となるなどは以ての外の事だと攻擊を加へたことがある。此の時分は假名垣魯文が戯作の文權を握つてゐて、小説家たらんものは其の門に趨り、束脩を納めて門下生となり、魯か文かの一字を頂戴しなければ世に立てなかつた位であるから、「時事新報」が小説家を輕蔑したのも無理はなかつた。坪内君はコンナ情實に捕はれずに、巍然獨立獨歩でやつてのけたのは流石に一見識であつた。

漢文でなければ文學でない樣に思はれた時代には、戯作者は一併に擯斥を受けた。當時は西洋の所謂文學なるものゝ一端も世に理解されてゐなかつた。それを闡明して世の妄を啓いたものは坪内君の「小説神髓」であつた。今ではこの著にあるほどのことは誰も知つてゐるけれども、當時においては尤も時宜を得た著述で、小説が重んぜらるゝに至つた動機は、此の著の出版から發したと云ふも誣言であるまい。坪内君當時の傑作は「書生氣質」にあらず、寧ろ「小説神髓」にありと私は思ふ。坪内

君は作家としてもエライに相違ないが、それよりも君は文壇の教育家として尤もエライと平素自分は思つてゐる。君は文學の各方面に先鞭を着け、それを開拓し、且つ其の將來に起るべきものを指摘もし教へもしてゐる。乃ち歌曲に就いても、劇に就いても、ペーゼントなどに就いても、皆君が唱首で、君が開拓したものであるが、文壇教育の第一歩は卽ち「小說神髓」である。此の著述の稿も早く大學にある頃ノートに書きつけたものを書直したものであつたやうに覺える。まだ外に學窓時代に書いたもので、自己の名を署するを忌み、服部誠一の名で出したもの、友人橘顯三の名で出したものなどもあつた。此等の書名は自分はしかと記憶がない。春廼屋作とないために、多くは閑却されてゐるかも知れない。

坪內君とは長い交りであるから、龍岡町の僑居時代、又そこから大久保余丁町に移つて以來の事をよく知つてゐるが、文學上に關係あることは多く憶ひ出し得ない。「內地雜居未來の夢」を書かれた時などは、自分から麁末な材料を提供したことなどを思ひ出す。其の標題を私に書けとあつたがそれを斷つたことをも思ひ出す。龍岡町時代は君も何となく戲作者風であつたやうに思はるゝ。君は「朧ろ月夜にしく物ぞなき」といふ古歌から春廼屋朧と名を命じたので、その家に訪ねて見ると、掛物でも額でもこの和歌に因んだものが揭げてあり、日用の箸函にも月下に櫻が散つてゐる圖が蒔繪で出來てゐて、如何にも氣取つたものであつた。併し、君は昔の戲作者とは大いに其の品を異にした、と云

ふのは、學殖も非常の相違があるからであつたが、君は名家の子弟を家に預つて、その監督やら教育やらを擔任してゐた。且つ早稻田大學の前身東京專門學校に追々日勤することになり、歷史や文學の教授をやる身でもあつたので、嚴正身を持さねばならず、事實君の半面は堅苦しい先生であつた。

早稻田中學の起つた頃は君の大久保余丁町住居時代だが、君は其の教頭にならざるを得なかつた。君が後年私に語る所に據ると、實に心にも無いことであつたが、高田君や君（市嶋）が早稻田大學の經營に盡力してゐるのに、自分のみ何もしないとあつては氣が咎めるので、せめてはと教頭となつたが、教頭の受持で倫理の一科を十年も講じたことは、自分に取つて此の上ないつらい事であつたと聞いて同情に堪へなかつた。あれだけの文學者を其の作に專らならしめず、アタラ大切な時間を中等教育の爲に割かしたのは如何にも勿體ないと感じた。勿論倫理の研究が君の修養や人格に益する所があつたかも知れない。その得た所と失つた所とを較べて差引損得どんなものであつたか、ソンナことは今爰には問題外であるが、何れにしても坪內君の經歷中の大事件であつたに相違ない。此の事を閑却して君の文藝を論じ、又君の人格を評するものがあらば、それは甚だ不備の評たるを免れない。

以上を書き畢つてから、或る日多くの雜筆を出して檢すると、大正五年十二月中の雜筆に坪內君の九箇條の信條が書きつけてあるのを見出した。これは私が熱海で每日坪內君と往來してゐた頃、聞いたことなどを多く錄したものゝ內にあるのだが、倉卒のノートではあるが爰に收めてお

く。坪内君が座右の銘としてゐると云はれた九箇條は左の如くである。

一　行ふ前に先づ論じて立場を定む。

二　作すれば必ず他の未だ爲さざることをなす。

三　他を崇拜せず。（内外人何れでも、沙翁とても）

四　流行の公平なる傍觀者たり批判者たるを任とし、追隨者たらず。

五　少くとも一事に七年を傾く。

六　他の美所を看取して他山の石となす。

七　古人よりも今人、今の先輩よりも今の後輩を規とす。

八　他人を自己の便宜の爲に使はず、他の功を奪はず。

この八箇條は君が平生の箴となすだけに、君の文學上の經歷はよくこれに嵌つてゐる。君の告白は決して自らを欺いてゐないと思ふ。（一）先づ行ふに先だちては理論を著してゐる。小說を書く前には「小說神髓」を著し、脚本を書く前には「夢幻劇論」を書き、歌劇を作る前には「新樂劇論」を書いてゐるなど、必ず行ふ前に論がある。（二）君は文學上他人の未だ手を觸れざるところを開拓し、何につけても先驅をなしてゐる。劇の改善に就いても、樂劇に就いても、ペーゼントに就いても、兒童劇に就いても、皆君は先驅である。（三）君は「沙翁全集」を譯し、半生これ

に沒頭してゐるのを見て、少くとも君は沙翁の崇拜者であると誤認する者もあらうが、君は沙翁のアドマイラーに相違ない、併しウオルシツプしないパーではない。君自身は何人もウオルシツプしないと云ふを以て信條として居る。（四）君自らの告白に、自分は流行を注意する點に於て人後に落ちずと信じてゐる。併し、斷然其の流行のフオロワーたるを欲しないと常に云はるゝ。（五）一事を企てゝそれに七年を傾けるとあるも事實である。君が小說を書いた間も、舞踊に沒頭した間も、中學で倫理研究に從事した間も、雜誌「早稻田文學」に從事した間も、皆七年若しくはそれ以上を費してゐて決して朝三暮四でない。（六）他人の長所善點を看取するに熱心なるは、君が時代に後れず、年齒の進むと共に藝術の進む所以であらう。君は自ら赤倮々に告白された、自分は全體弱味のある男である、他人の美所を看てはみづから倨傲を以て居ることが出來ないと。君が精神的に老いざる所以であらう。（七）後進の作を閑却せずに、孫弟子のやうな若輩の作までも見逃さず、必ず一通り目を通さるゝが常である。これなどは私の最も敬服するところで、繁劇なる大家の出來難いことである。（八）君は寧ろ潔癖に過ぎる人で、常に人の善を爲すに汲々とし、往々人のために自らの名を蔽うて事を行ふことが珍しくない。他人の功を奪ふごときは君の最も忌む所である。

私が君から以上八箇條を聽いた其の翌日君を訪うた時に、昨日は一箇條を脱したと云うて追補

された。即ち第九に曰く、自分は鬱憤を蓄積する主義で、これを發散しない流儀であると。種々例を擧げて說明されたが、成る程、これは出來難いことである。多くの文學者は鬱憤を直ちに何等かの形にあらはし、或は辯疏し或は報復するが常で、それを忍耐するのは容易の業でない。君の云はるゝに、自分は批評家に對しても已むを得ない場合でなければ答へない。實は、鬱憤を漏らすは一時の快を得るに庶幾いけれども、藝術の蓄積を併せて散じ失ふの損もある、と云はれたが如何にも名言である。

二

次に紅葉山人に就いての追憶に移るが、此の思出もなか〳〵簡單でない。山人とは隨分長い間の交りであつた。私が最初山人の「色懺悔」を讀んだのは、鄕里で「新潟新聞」を主宰してゐた頃であつたかと思ふ。此の小說を讀んで山人の垢ぬけした筆致に少からず感興を覺えた。こゝにチョット餘談に移るが、此の「色懺悔」の版元は吉岡哲太郎といふ人で、此の人は嘗て同窓であつた。氣の利いた才子肌であつたが山氣があつたと見えて、小說出版を企てたと聞くと間もなく此の手から「色懺悔」が出版されたので面白く感じた。露伴君の「風流佛」も矢張り此の人に依つて出版された事を考へると、中々着眼がよかつたのである。けれども餘り長續きはしなかつたかと思ふ。それは兎も角、話は

戻つて山人と懇意となつたのは、私が高田君に代つて「讀賣新聞」の主筆となつてからであるやうに記憶する。此の頃山人は讀賣紙上に其の艶麗の小說を連載してゐた。社へ日々來るでもなかつたが、時には原稿を自ら社へ持つて來た事もあつた。社で書く樣なことは滅多に無かつた。實はそんなに無造作に出來る文章でなく、坪內君が一瀉千里と筆を走らすのとは違つて、山人は一語々々嚙んで出すやうな苦吟の餘に出來るものであつた。山人の風格は、軀瘦せ幹高く、色黑く眸明らかに、顏に苦味が走り、擧止輕快、言語はキビ〳〵してゐて、相對すると何となく愉快を覺えしめるものがあつた。生粹の江戶ッ兒といふ風格は自然に備つてゐた。自分は社で交つたばかりで無く、山人の住した牛込の橫寺町の居へは幾十回か足を運んだ。自分が讀賣を去つてからも山人との交りは永く續いて、其の終焉に迄んだ。自分は前にも云うた通り文學に趣味があつたのではなく、趣味は寧ろ政治にあつたのだけれども、文學者と交ることを好んだ。山人は食物に頗る趣味があり、茶菓には別してやかまし屋であつたが、下戶であつた。その下戶の山人を上戶の自分が隨分たび〳〵連れ出して、方々飲み回つたものである。山谷の八百善へ出かけた時、膳部にあつた野菜の胡麻醬を丁寧に解剖して、これだけの中に七八種のものが混じてゐるなど云うて手帳に書きつけたり、或る鳥屋へ出かけて、女中にテバの注文をして女中が解しかねたので、料理番を呼出して通がつたこともある。山人は食通であると共に寫眞道樂もあつて、有名な料理屋の臺所を寫眞に取りたいと言出し、一二ケ所試みたこともあつた

が、臺所はどこも暗いので不成功であつた樣に覺える。なかなかの凝り性で趣味も甚だ廣かつた。自分が多少江戸趣味を解するのは山人に得た所が少くない樣に思ふ。

山人が筆を苟くもしなかつた一例は、「隣の女」を書いた時、編中に尺八の事が出てくる。山人は尺八の吹き方に心得が無いので、その研究に向島に居る知人佐藤某を泊りがけに訪うたことがある。それがため讀賣紙上に二日ばかり續稿が途切れた。其の際山人から私に寄せた手紙が今も手許に保存されてゐる。當時の讀賣社長本野盛亨氏（本野一郎氏の父）が編輯局へやつて來て、紅葉の時々ナマケルには困るというて、小説の續稿の途切れる事を頻りに攻撃するのであつた。自分は山人のために辯疏して、尺八の吹き方が分らんため向島に出かけて已むなく途切れたのだというても、社長はなかなか承知しない。全體あれの小説の途切れるのは今度に限らず度々ある。あの男の樣にスラ〳〵書けるものが何故に時々停頓するのかと詰るのを、私が制して、スラ〳〵讀めてもスラ〳〵書くのではない。山人の小説は一字一句も苟くもしない。なか〳〵毎日稿を續けるのは容易なことでない。是を御覽なさい、と山人の原稿を校正方から取寄せて社長に示した。此の原稿には數ケ所の貼紙があつて、中には一ケ所に三枚も四枚も重ねて貼紙をした所もある。私は一枚々々剝ぎ取つて社長に讀んで聞かせた。段々剝いで原作に戻つた時、自分の云ふには、一番初めの筆でも此の通り玲瓏珠の如き文章であるが、讀み較べると初度の貼紙での直しはいくらかよい、二度の直しは更に一段よい、最後のは最

もよいことが斯く歷々とわかるでありませうというた時、社長も始めて成るほど〳〵うなづいた。私はすかさず、實は小説というても長い詩である。あなたも漢詩を作らるゝが推敲に隨分苦心されるであらう。紅葉などの大家は名譽の爲にもナグリ書する事は出來ないので、尺八の吹き方を知らないからというて書けぬ譯もないが、大事を取つて吹き方までも研究するのだと説明した所が、社長も漸く文學者の苦心の容易でないことを悟つたらしく、其の後は餘り小言を云はなかつた。此の事を後日山人に語つた時、山人はひどく喜んで私を德とした。此の「隣の女」に就いて更に憶ひ出した事がある。あれには頗る際どい處まで筆が迫んでゐる。其の際前島密男から一封の書狀が到達した。その手紙は極めて簡單で、「隣の女危險迫る、請ふ隣の痴氣となす勿れ、注意注意」と三くだり許り書いてあつた。此の時分は新聞に對する取締が馬鹿に嚴重で、小説も風俗壞亂でやられることが頻繁であつたので、前島男はそれを注意されたのであつた。

山人が「金色夜叉」を書いた時、貫一の死處に苦心し、わざ〳〵鹽原まで出かけて、實地を探檢して死處を定めた。これは誰も知つてゐる事實だから委しく語るまでもない。此の事につき曾て坪内君と語り合つた事がある。西洋あたりの例に倣へば、貫一の死處に一碑を樹て、それを鹽原の一名所とするも面白いではないか、幾分か資を投じて計畫しようかと相談したことがあつた。無論山人歿後のことで、山人の爲の記念の意味もあつたのである。が、此のことを終に果さなかつた譯は、鹽原の某

寺の住職がほゞ類似の事を考へ、鹽原の宣傳者奥三郎兵衞(藍田と號す)、尾崎紅葉兩人の鹽原に關する事蹟を刻して碑を建てる企があると聞いた。そして撰文は私の友人松平康國氏の手に成つたとは事實であるから、自分共はそれがため建碑を見合はせたが、此の寺の住職が其の後他界したとかで終に沙汰止みとなつた。思へば吾等はコンナ他人の計畫に顧慮せず、初志を貫けばよかつたのだ。

坪内逍遙君と紅葉山人は互によく知り合つてもゐた。交りも深かつた。勿論兩人の間に疎隔があらう筈はなかつた。併し、兩頭領の末流の間には動もすると相軋つて反目する樣な事があつた。私は當時祕かに之を憂へた。と云ふのは、いつも末輩の疎隔反目から兩雄の爭の端を發し、ともすると意外の事を惹き起す事があるからだ。或る時牛込の吉熊に東京專門學校の幹部の寄合があつて、高田坪内兩君と自分も其の席にゐた。其の日偶〻階下に山人の率ゐる硯友社の集會があると聞いて、自分は祕かに案じた。得難い此の機會を利用して兩者の反目を解きたいものだ、とワザト坪内君には精しい事情を語らず、突然坪内君を誘うて階下の一室を明けて見ると、山人を初席にして硯友社の面々二十人許りが兩側に居並んでゐた。席が狹くて吾々の割込む處も無かつた。坪内君は何の意味で此の席に伴はれたかも解してゐないので一寸面喰つた樣であつたが、末席に坐して例の當意卽妙の詼諧を弄して滿座に挨拶をされたので、一同は覺えず吹出して拍手した。坪内君の此の態度と雅量は末流の頭腦に蟠る誤解を一掃し去つて、それからは甚だ釋然たるものがあつた樣である。

山人が食通であつたことは前にも云うたが、日本橋の中華亭の料理が氣に適つて、臨終の病中もそこから料理を取寄せたと聞いたが、この中華亭に就いて語るべき一笑話がある。この亭のお福と云ふ娘が大の紅葉崇拜で、山人の小說と云へば何でも精讀してゐる。私の亡友山田一郎といふが此の事を知つて、或る時ニセ紅葉を連れてこのお福に一杯喰はせた事がある。山田の知る人で靜岡縣の或る年若の醫師が俳句をやる所から思ひつき、伴うて中華亭に到り、今日は尾崎紅葉君を同伴したから、短册でも書いて貰へとお福を喜ばせた。ニセ物と知らないお福はひどく喜んで、酒席を斡旋し揮毫を請うたりした。コンナ事があつてから數日を經て私が行くと、お福は先日紅葉先生が山田さんと共においでになりました、とニコ〳〵して云ふから、自分は一寸不審に思うた、山田は尾崎を知らない筈だが、どうして連れ合つて來たかしらと。お福に紅葉さんはドンナ樣子の人であつたかと聞くと、色の青白い、丈の低い、鼻下に髭のある人だといふから、私は吹出した。お前、それは僞物だよ、紅葉は色が黑く丈が高く髭がない。お前は山田にハメられたのだというたら、お福はくやしがるから、私が慰めて近日本物を連れて來るというて終に其の約を果した。山人が中華亭の料理を愛するの端はこれから發してゐるのだ。

山人は下戸で、二三杯呑むと必ず其の席に横臥するのが例であつた。或る時柳橋で三四の妓を招き、二三杯傾け、例の如く横臥し、半睡半醒の境に入り、妓等の勝手に話し合ふ事が銘々愛讀の小說

に關してゐるので、山人もそれとなしに耳を傾けると、甲乙丙互に好む所を擧げて、その優劣を戰はしたが、皆三文小說ばかりで、一世に名の高い紅葉の小說に就いては一語も及ばなかつた。勿論そこに寢てゐる客が大小說家であるなどゝは彼等の夢にも知らなかつたことである。山人はあの時はをかしかつたと後に語つたが、中華亭とは全然逆の話であるので思ひ出した。

山人は不起の病を抱へて私の鄕國越後を經て佐渡へ渡つたことがある。「烟霞療養」と題する續きものが讀賣に出たのは其の時の作である。山人は佐渡の小木に暫く滯在して、日夕左右に侍した或る妓の爲に三絃の匣に字を題してやつたり、別れに臨んでは未刊の小說の稿本を贈つたりした。此の稿本を贈つた時山人は特に注意して、お前が或る場合に金に困る樣なことが起つたら、これを東京の本屋に賣れば相當の金になる。麁末にせず仕舞つて置け、決して人に欺かれて取られてはならぬ、と堅く言ひつげたといふことが、山人の歿後に知れた。山人は自身の口から此の事を誰にも話さなかつたらしく、いつぞや紅葉祭のあつた時、私は追懷談の一節として語つたことがあるが、硯友社の面々も皆初耳だといふた。此の未刊の原稿は何であつたらうか。自分はそれを知りたく、佐渡の知人に問合はせたこともあつたが、それは惜しむらくは火災に燒けて今は無く、其の女は或る寺の大黑となつてゐると聞いた。

山人に就てまだ思ひ出せばいろ〳〵の事があるが、餘りに長くなるから、一二雜事を錄して他の項

に移るとしよう。山人は多趣味であつたが、印癖もあつて、頻りに自用の印を作つた。足立嘯村氏の作が尤も氣に入つて、此の人の作が多かつた。不起の病に罹り覺悟をした時なども、其の意味の印を嘯村氏に刻させた。其の印文は確か「化及我」の三字であつた樣に記憶する。山人は時々私の家に來て、私の讀みふるしの隨筆を持ち去り、それを飜案して小說の種にしたことが一再ならずある。今は精確に記憶しないが、「破茶碗」といふ短篇小說は或る支那の隨筆から飜案したのであり、又「愼夏漫筆」といふ漢文で書いた日本人の隨筆に、或る幕府の役人が木蘇の旅宿にやどり、その家に鶉を籠に入れて飼つてあるのを見て私かに望をかけ、何とかして無心を云はん、とわざと多くの茶代を贈つて主人を喜ばせたのが却つて仇となり、主人は茶代に酬いる馳走の材料に窮し、鶉を屠つて膳部に供へ、客人の大失望を買つたといふ一話が山人の興味をそゝり、短篇小說となつたが、標題は今思ひ出せぬ。山人は私が長い間日誌を書き續けてゐるのを知つて、頻りに褒めるから私は山人に、自分などの日誌は何の役にも立たぬが、君の樣な文人こそ日誌を書くべきだと勸めたことがあつた。山人もそれから日誌を書き初めた樣である。不起の病に罹つても日誌を書いた事は誰も知る通りだが、山人の歿後日誌が出版されたのを見ると、ある年の元日の記事に、私と佐藤某とが、山人の横寺町の二階の書齋で、長時間酒を呑んで山人を困らせた。其の時の記には吾等兩人を新年の惡客と罵つてゐる。日誌を書く事を勸めたお蔭でトンデもない罵倒を受けた譯である。山人は江戸ッ兒氣質の率直で、日誌

には何でも赤裸々に書く流儀で、人から物を贈られても氣に喰はぬと、なんだコンナもの、人を馬鹿にしてゐると罵倒して憚らない。そこに山人の面目が現れてゐるのだが、此の日誌を公刊する際に、斯樣な記事は多く取り去られたから、いくらか膩が拔けた感じがする。

茲に山人に關する一事を書き添へる。

既刊の私の隨筆に、山人が不治の病を得たのを慰めるため友人が山人を迎へて會食したことを書いたが、頃日、明治三十六年三月、即ち山人が病中であつた際の、私の雜筆を調べて見ると、同月十八日私が山人を見舞つて、長時間に亙り談話を交へた委曲が錄されてゐた。此の訪問は尋常の見舞でなく、山人が病症を或る友人より知らされたと聞いたので、慰藉の爲の訪問であつた。私は此の訪問を幾回か躊躇した。不治の宣告を受けた山人を見るに忍びなかつたからだ。併し、終に決然起つて訪問し、山人の覺悟の程を聞いた。これが山人と談話を交へた最後のやうに思ふ。左に訪問當夜錄した記事を收め、山人を偲ぶの料とする。

自分は今日紅葉山人を訪うた。訪ふ前に幾度か躊躇した。不起を知る山人を見るに忍びなかつたからである。併し思ひ返した、吾とて重患に罹つた豫後である、健康のものならば遠慮あるべし、吾が病を知る山人に對して遠慮は無用であらうと。山人に對する私の同情は遂に私を勵まして訪問せしめ

たのである。

例のごとく二階の書齋に通された。（牛込横寺町の宅）かねて相識る河喜多某氏も座に在つたが、早く辭し去つた。山人は階下で來客に接見中だと聞いた。門生が階上へ茶を運んできた。自分は門生に私語して、細君は既に先生の病症を知つてゐるかと問うて見たら、門生は祕密になつてゐると云うた。門生はまだ先生も知らないと思つてゐる樣子であつたから、先生は既に知つてゐる、と長田秋濤から聽いたまゝを語ると、門生は一驚を喫した樣子であつた。

しばらくすると山人は階上へ登つて來た。この時自分は山人の面貌を見ることを躊躇した。併し遂に見た。山人の元氣は毫も平日と異なる所が無かつた。机邊に坐し、例の如く茶を啜りながら、頻りに語る。自分は大阪に出張中月ケ瀨の梅を觀たことや、大阪の博覽會を見たことなどを話した。山人の話の內に、今明日中芝新堀町廿五番地の細君の緣家樺島方へ引移り、靜養の積りであると云うた。他にも種々の談話があつたが、渠に死の覺悟があるか否やは搜るに由なかつた。自分は心窃かに誓つた、渠より漏らすでなければ、吾よりは斷じて之を誘ふ話をなすまじと。頗る談話に注意を拂つた。

漸く時刻が移り、山人の話頭は終に胃癌の事に及んだ。但し山人自身のことではなかつた。渠は某氏が胃癌にかゝり、其の臨終が甚だ美ごとであつたと語り、且つ一說を立てゝ云ふのに、癌症は危篤に瀕しても精神に毫も變りが無い。之に反し、肺を患ふ者は臨終にぼけるというて、その例として前

年歿した門人中村花瘦の事を語り出した。中村は危篤に瀕してゐても終に遺言を傳へなかつた。萬一の僥倖を冀つたことは確に精神に變狀を生じた一徵と見るべきであると。

山人の覺悟を窺ひ知るべき話の端緒は斯くして開かれた。僅に綻ぶれば、これを開くこと容易である。彼我の談は直ちに死の問題に入つた。自分は思ひ切つて云つた。死は恐る可からざるにあらず、併し、尤も恐るべきは死の宣告である。しかれども既に宣告を受ければおのづから覺悟が生ずる、臨終は安泰なるを得べしと。山人はこれに答へて實に然り、死は恐るべきでない。但だ周圍の繫累を思へばこそ悲痛の情が起るのだ。自分は更に云うた。知識階級に對し病症を匿すはよろしくないと。山人曰く、洵に然り、吾々に病症を匿すごときは確に侮辱であると。山人は終に宣告を受けた當時の感情を陳べ、其の夜だけはどうしても睡ることが出來なかつた。遂に一杯の葡萄酒を傾けて眠を得んと圖つた。僅に一杯の酒が非常に利いた。夢心地となつて、快感云ふ可からざるものがあつた。この夢心地の間に種々面白い考が浮んだ。實は平素も夜分寢臥中面白い考を得る習慣がある。その時ははね起きて枕頭に紙を探り、筆錄するのが常である。この夜もいろ〳〵の考を起した。第一、繪はがきの意匠を工夫した。それは內臟の圖を描き、患部に金粉を施し、死後それを黑色とするのが思ひついた意匠で、この繪はがきを作らんため、病院より內臟の圖を貰ひ受けてゐる。病中同人間の往復にこれを用ひて、記念にしたいと思ふ。今一つ考へたのは辭世百首を詠んで見ようと思うたが、百首の句を

詠ずるほどならば寧ろ文章を書く方がよからうとも思つて、まだ惑うてゐると語つた。山人は死の宣告を受けても趣味を忘るゝことが出來なかつたのである。自分は自家の經驗を陳べて、病に惱まされず、寧ろ病を樂しむことに勉めよと勸めた。山人はうなづき、君の顰に倣つて、これから日誌を書くことにしようと云うた。自分は山人に佛書を讀んだらどうかと云うたら、山人は、「碧巖錄」をたまに讀んで見ても、どうも面白く無い。且つ死期に臨み佛法の慰藉をかりたと云はれるのも口惜しいと云ふから自分は、如何にもさうだ、君は愉快に死ぬがよい。死の方法も江戸ッ兒風にありたいと云ふと山人は、最も吾が意を得た、實は其の方法の考案中だと云うた。自分は、君が無聊を慰するために書籍の入用あらば遠慮なく申されたいと云ふと、山人、それは最も希ふ所である。差向き面白い隨筆が讀みたい。劍掃體（明の陸紹珩の撰に醉古堂劍掃がある）の語錄も見たいとの注文があつたので、自分は快くこれを諾し、最後に訪問客に就て注意し、多くの知人に一々面接するも五月蠅いであらう。會心の友の外は面接を斷つてはどうか。山人曰く、その積りだ、新堀町へ移るのも客を謝するためである。「二六新報」の社長が、毎日同じことを繰返すのも厄介だから、君の談話を印刷して玄關で訪問者に頒つたらどうかと云うたが、新聞屋の工夫は到底活字を離れる事が出來かねると一笑した。私はこれを機會に辭し去つた。

山人は、死に就て覺悟は定めながら、それが二三月の近きに迫つてゐるとは思つてゐない樣子に見

受けたので、自分は窃かにこれを思うて黯然たらざるを得なかつた。（明治三十六年三月十八日夜記す）

山人が病中丸善で月賦の販賣法で頒つ「センチュリー・ヂクショナリー」に加入したなどは、死期が近づいてゐることを知らなかつたためであらう。山人は、話中にあるごとく、葬儀の方法までも自ら案じた。輿で舁かるゝのが嫌とあつて、駕籠を望み、配り物の饅頭の中は潰し餡でなければならぬと定め、容器も自らの好みで、表を黑、内を朱塗にして、源氏の紅葉の香の巢を蓋裏に黑漆で出すべしなどゝ遺言をしたので、すべてそれに從つた。山人はどこまでも趣味の人であつた。自分も趣味を以て山人と交り、山人の薫陶を受けたことも少くないが、今也則亡。噫。

三

自分の多少知つてゐた文人は今は多く故人となつてゐる。服部誠一といふ人などは故人となつて餘ほど久しいことである。此の人は撫松と號し、「東京繁昌記」の著者として知られてゐる。新橋近くの銀座の通りの角に九春社といふのがあつて、そこから「東京新誌」といふ雜誌を發行し、一時は盛んに行はれ、可なりの號を積んだものである。服部は此の雜誌に漢文體の戯作を掲げた。此の時分はまだ支那小說脈の文章が喜ばれた。服部の文は艶麗で頻りに綺語を弄した。成島柳北のに比べると文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた。隨分思ひ切つて淫褻の事を書いたものであつた。私

は此の頃九春社に看板をかけて、友人と共に「内外政黨事情」といふ隔日發刊の新聞を起してそれに從事してゐた。服部と同じ編輯局に机を並べてゐたから、服部の原稿を書くのを常に見てゐた。如何にも達者なものであつた。漢文には無論上り點をつけたが、書き〳〵上り點をつけてゆく。それが迅速で如何にも慣れたものであつた。アンナ綺語を弄する撫松其の人は意氣なしやれた人でゞもあるかのやうに人は想像するであらうが、顏には痘痕があり、辯舌は東北訛りのヅウ〳〵で、文章と打つて變つた人であつた。江戸の歷史を書きたいといふて材料を蒐めたと聞いたこともあつたが、遂に果さなかつたやうである。

森田思軒にも多少の交りがあつた。此の人は慶應義塾出身で、年は若かつたが、漢文を達者に書いた。矢野龍溪翁が、「經國美談」を著した時、精細な評を漢文で書いて、早く漢文の力を認められた。後には反譯殊に西洋小說の反譯に筆を專らにして、頗る自得の色があつた。早稻田大學の前身東京專門學校時代に、雜誌であつたか講義錄であつたか、思軒氏に譯筆を煩はしたことがあつた。其の頃何かの用で朝早く岡倉覺三氏を根岸邊の宅にたづねると、氏は、朝であるのに、杯盤を運ばせて、主客對酌するといふノンキな事であつた。そこへ一客の入り來たつたのを見ると思軒氏であつて、氏は主客に挨拶もせず上席に坐り込んで、それから挨拶をすると云ふやうな倨傲の態度で、私の席にあるのを見て、學校へ上げるべき草稿は既に書いてあるけれども、今日の樣な雨天に金玉の文を濡らしては

困るからワザト控へてゐますといふを聽き、私は此の男氣が狂つてゐないかと思つた位で、如何にも自負滿々たる人であつた。

櫻痴居士福地源一郎氏が銀座街頭に「太政官御用日報社」の看板を掲げ、「東京日々新聞」記者として名聲を馳せたのは、私どもの帝大にゐた頃であつた。此の人の文章は老熟して氣格が高かつた。その毎日の社說は大學生と雖も爭うて讀み、敬意を拂つた位である。後には官權新聞とあれば文章がよくとも輕蔑の念を以て讀んだものだが、福地の頃は官權新聞にまだ權威があつた。これには吾曹子の文品も與つて力があつたやうである。私などは、今になつて考へると何となく恥かしい樣な氣もするが、吾曹先生の聲欬に接し、一たび議論を戰はして見たいと思つた。實は崇拜の念もあつたのである。然る處議論を戰はす機會が生じた。その頃私は、亡友岡山兼吉、山田一郎の兩氏と共に元老院に向かつて官吏學生の政談演說を禁ずることを不可として建議をした事がある。大學生の身分でコンナ事をやつたのは、大學では前例のないことであつた。田中稻城氏が何か建議をしたことがあつたが、それは政治に關係したことではなかつた。此の私共の建議に對し福地氏は贊成が出來ぬと云つたと聞込んだので、當時日報社に橘村居士の號で西洋小說を反譯してゐた關直彥氏は、吾々の同窓でまだ在學中であつたから、此の人を介して福地氏に面會する事となり、三人連れ立つて日報社の樓上で顏を合はせたのが初對面であつた。福地氏は此の頃四十年配でゞもあつたであらうか、贅澤づくめの日本

服で袴はつけず、俳優でゞもあるかの如き身なりであつたが、流石に議論は老獪で、行詰まると逃げる事が巧妙であつた。併し、書生輩何かあらんの調子で吾々を輕んずる風が見えて癪に障つたが、いつまでたつても議論が盡きない。紹介者の關君が、社長はまだ社說を書き畢らんからと水を差したので、それを機會に別れた。コンナ事があつてから後、十年も會する機會が無かつたが、榮枯盛衰の變は儘ならぬ世の中の常で、一時飛ぶ鳥を落すほどの櫻痴居士も、劇場の經營などに失敗して哀な境遇に陷り、全く筆を新聞に絕ち、戲作者として糊口する樣のことになつた。私が居士に再會したのはその頃であつた。私は「讀賣新聞」の編輯を主宰して居つたが、ある日の編輯會議で居士の作を掲げたいとあつて、私は居士を訪問した。居士は、築地であつたかと思ふが裏通りの小屋、幾んど膝を容る許りの家を出張所とし、日々通つてこゝに筆を把つてゐた。刺を通じて面會して見ると、六疊程の一室に机と筆硯と僅ばかりの書物があるのみで、婢僕も見えず、如何にも孤茕蕭然たる有樣で、日報社樓上に會つた時とは全く異なつて、意氣も頗る衰へて見えた。私は「讀賣新聞」の爲に一作を願ひたいと請求に及ぶと、書きますが私の原稿料は高いかも知れませんが、それでよろしければ、と云うて机上の原稿紙を出して示し、これが一枚一圓ですといふ。當時としては高い原稿料であつたが、ほぼ覺悟を極めて行つたのだから、云はるゝ通り諾した。それから數十日間讀賣に連載したのが「豐島の嵐」であつた。

左の一篇は福地櫻痴居士が、角田竹冷に寄せて竹冷一派の俳句を批評した書簡である。書簡の原書は十二行の美濃紙罫紙四枚に細書したもので、往年竹冷が尾崎紅葉に轉送したのを、私が貰ひ受けて、今も藏してゐる。居士は書中にいふごとく、自ら俳句を作らなかつたが、併し其の評は皆要を得て、着々中つてゐる。先づ俳諧の季節を論じ、竹冷一派の俳諧を總論し、次に俳諧に忌むべき事を擧げ、終りに秀句を摘錄して一々評を下してゐる。居士は晩年論壇に筆を絶ち、脚本家となり小說家となつた。その豐富の才藻は往く所として可ならざるはなかつた。その天才的の負けず魂は、俳句に對しても默過は出來なかつたのである。但し居士の俳句に就ての說は恐らく此の外には無からうと思ふと、この書簡一通は頗る珍とすべきものである。竹冷一派の俳諧は明治の文藝史に逸す可からざるものたるは云ふ迄もない。其の俳社は秋聲會と云ひ、其の機關雜誌は「木太刀」といふた。社中には紅葉、小波を始め硯友社中の人も參加してゐる。櫻痴居士の批評は卽ち「木太刀」に載せた秋聲會員の句に就いてゞあつて、明治初頭の文藝にも屬するから、こゝに其の全文を揭げる。

俳諧「木太刀」特に面白う拜讀して候ひぬ。秋聲會員の御中にて、竹冷紅葉の兩大人の老手作家にておはす事は、劣生夙に詳知して候ひけるが、會員諸君打揃はせて、斯く名家の多く集らせて、此風流汲地の中に立ちて巍然俳諧の韻事を樂しませらるゝこと感服の至りと欣羨仕り候ふ。

劣生原來俳諧に於ては全くの門外漢、一句一吟も曾て仕りたる無し。されども其趣味は敢て解せずと云ふにも非ず。現時流行の批判家に倣ひて盲評を試んは、難事にも非ざる可きが、止なんく、今の評に從ふものは殆しと、身の程を省みて思ひ止りて候ふ。但し舊友の老兄にまで內々にて思ふ所を申述んは、仔細あるまじき歟。あな賢こ、劣生が云々言ふなりなんど人々に漫語り仕たまふな。

第一、劣生が老兄の御苦心に敬服し參らせたるは、春夏秋冬季節の定め方、その穩當を得たまひつる事で候ふなり。今日の太陽曆一月一日の大寒前より三月三十一日までをば、春と名くべきに非ず。去とて現に片田舍にて行はるゝ類ひ、一月送りも亦其實を得ず。詮ずる所は、春夏秋冬の季節は十二ヶ月に對して、きちりとはあてはまらぬもので候ふ。去れば劣生は、春分より夏至迄を春とし、夏至より立秋までを夏、立秋より冬至までを秋、冬至より春分までを冬と、大凡に定めなば、稍ゝ其當を得べしと存じて、常に筆とり候ふにも、其如く心得て獨り極いたし候ひぬるが、今や「木太刀」を閲するに、老兄にも同じ御考と見えて、大に同志を得たるを喜び、殊に其季候々々の選題に關して御用意の周密なるに服し、御苦心察し上たてまつり候ふ。御蔭にて劣生も頗る啓發の益を得て候ふ。

次に御選擇の句に、勿論巧拙は候ふべきが、纖巧に流れ、若くは奇矯に走るの二弊なきは敬服

なり。此二弊は獨り俳諧に限らず、現時は、和歌にも、漢詩にも、俗歌にも、淨瑠璃にも、文章にも、都て附纏ひつる弊風にて候ふが、夫を斷然擯斥ありて、奇想は奇想のまゝ、叙景抒情は叙景抒情のまゝと、別に罪深き剪裁を加へずして、天籟自然を全くするの高識、大に劣生の心を得たり。原來奇想雄思は求めて得べきに非ず。布置結構の妙想なき畫家が絖紙に臨みて俄かに筆を嘗め、何がな奇拔の繪を寫出さんと致ても、畫き上て見れば、岩が跳たり、樹が踊たりして見ゆるだけで、其山水は依然凡庸の山水にて、花卉人物みな其通なり。文章も亦然り、徒らに目新らしき語句を拈出し、甚しきは、自ら製造の語を弄して讀者の眼に新奇を映ぜしめんと謀るも、其立案趣向が平凡陳腐なる時は、更に其甲斐なきものぞかし。此理を達觀ありて、秋聲會員諸君の句々皆平易にして活氣あるは、實に世上俳諧の弊風を矯正するに足れりと云ふべし。「木太刀」の句々概ね蕉門の正風と見受らるゝが、偶ゝ談林の如きもあり、江戸座の如きもありて、敢て一派に僻せず、流風に拘泥せられざる所、識見の卓越なる、尤も面白く拜讀して、夜の深るをも覺えざりけり。

劣生が幼少の頃に先人石橋先生戒めて宣(のたまは)く、詩歌にまれ、文章にまれ、經典詩賦若くは古人の姓名典故などを戲謔に濫用すること勿れと、諄々に其非なるを誨へ玉ひき。劣生は此誨戒を記憶して、爾來詩歌文章を讀むに、成程この戲謔は一寸は面白さうで、其實は決して面白からず覺え

候ふ。今や「木太刀」中にて這般の戲謔あり、其一二を擧んに、

千早振卯月八日の野守哉

千早振卯月八日は吉日よの歌が原來俗歌也、典故とするに足らず。

子の内は世をうぢ山の鹿ならず

世をうぢ山と云へる喜撰法師の歌に、子鹿何の因緣かある。

新茶煮て喝破す聖諦(シヤウタイ)第一義

是れ聖諦第一義の問答を解せざるの作家たり。

木の下の藤吉も居る納涼哉

即ち古人を穢すもの。

の如きも劣生が敬服せざる所なり。然れども劣生は一概に此類を非とするものにあらず。

左の諸句

鳥一聲山靜かにて椿落つ

五畝の宅井戸も厠も柳かな

春雨や鳥啼て山客猶眠る

昔男ありけり今も杜若

夕立の來ぬべき雲のふるまひよ
長安に響けと打つか小夜砧
切干も三千丈や西ケ原

の如きは所謂善く戯謔して虐とせざることなれば、勿論集中にありて然るべき句なり。

次には、俳諧は悪口を旨とするに非ず。然るに奇警斬新の趣向を求るの餘り、識らず知らず悪口に陥ること、詩文の通弊にて、集中にて亦往々見掛け候ふ。

堇摘む中に紅毛の少女あり
春の夜や老道士書を枕にす
覗いたれば唯の女よ青簾
蝙蝠や金貸の女露地を出る
汽車の旅人誤つてラムネを浴ぶ
女客ラムネの泡の消えたるを飲む
順禮の道に産する清水かな
事じや〳〵納涼の女水にはまる
君が代や月の出て居る大晦日

の如きなり。中にも

漢方醫の書齋古りたる葭戸哉

の如きは實に奇趣奔逸の妙はあれども、悪口たるを免れざるは惜き事にて候ふ。

次に、無風流、所謂殺風景の句あり。是また奇拔の警句を吐かんと思ふ餘り、誰も踏迷ふ岐路にて候ふなれば、所謂風流の魔道に陥るものなり。

戀猫をいたく打たる女かな
佛頂に糞ひり掛ける乙鳥哉
權門に馬の嘶く牡丹かな
夜をこめて葬禮ゆきぬ時鳥
暗がりに小便すれば鳴く蚊哉
水音や團扇暫く尻に敷く
化粧して鼻に汗かく娘かな
名月や誰がふんどしぞ竿の先
升に落てしられし除夜の鼠哉

の如き、一吟すれば其意表の趣向面白きやうに候ふが、試に靜思して再三再四吟誦して見たま

へ。奇警にせよ、斬新にせよ、沒風流殺風景の譏は免れ難かるべきか。

斯いへば劣生が選擇のやかましき、「木太刀」集中一の完璧なしと云ふかと思召されんが、決して然らず。戯謔に陷らず、惡口に流れず、沒風流たらずして、しかも或は奇拔雄渾、或は溫藉典雅の名句いくらも見受けて候ふ。其中にて劣生が尤も感吟いたし候を左に選ぶべし。

狼の人食ひし野も若菜哉　紅葉

天地の妙觀收て一句の中にあり。

殘雪や如意輪堂の緣の下　竹冷

何等の感慨。

鶯や須磨の苫屋の古簾　馥一

清麗佳調。

涅槃像獅子の泣面哀なり　烏黑

奇想天外より來る。

金堂も跡ばかりなり壺菫　殘花

麥田よりも一層の妙あり。

雉子の尾に良狗の額飾らばや　紅葉

典故の活用是の如くにて實に妙。

牛も寐つ牛飼も寐つ日永ぶり　竹園

宛然畫を觀るが如し。

嘴の赤き鳥が浮くぞや霞むぞや　知十

光景を寫出す、何等の妙手ぞ。

ふうはりと三笠の山やおぼろ月　竹冷

巧を求めずして自ら巧。

苣の葉に酢を乞ふと書き送りけり　紅葉

巧妙極りて斧鑿の痕なし。

鳥部山の烟仇し野の露さくら哉　曲瀨

人生の無常觀。

斗酒ありや日暮て胡瓜刻む音　紅葉

常事を巧に弄して、以て風流の家事に轉化し來る。

つれ〴〵や雙が岡の五月雨　竹冷

劣生尤も此種の句を愛吟す。

篝火は小さく焚えて凉み舟　無黄

一幅の妙畫。

肌寒の身は國を出て十歳かな　蘆水

十年夜雨不二曾知一より脱化し來りて妙。

十六夜は御家來衆の月見哉　小波

貴紳の樂事見るが如し。

新米や馬に腹掛買てやる　黄雨

豐年の狀を寫し得て、以て神樂に挿入して可なり。

指貫（サシヌキ）の露打拂ふ嵯峨野かな　飯人

此風流、今は無いかな。

阿刺比亞の鬣剛し秋の風　無黄

新語是の如く用ひ來りて初て可。

秋の暮を心强くも寐る人よ　苔花

多情多恨の妙句。

阿字消て卒塔婆に秋の蝶一つ　殘花

愴然たる秋景。

後の月靑女房の寒げなり　竹冷

往時榮華の夢思ひやられて哀也。

凩の碓氷に掛る夜汽車哉　月人

實景自然。

風の落葉落葉の風と亂れ打つ　紅葉

此景物何處より得來れる、奇想々々。

香聞くや世は背にして投頭巾　殘花

自然の開悟。

夢の跡殘る蒲團のくぼみ哉　竹冷

一部の哀情史、一句の中にあり。

憂き人の音頭に踊る女かな　愚佛

生非二薄命一不レ爲レ花の佳人信に是の如し、情緒可レ想。

秋の蚊の物思ふ臂を繞りけり　紅葉

約レ臂黄金寛一寸、對レ人猶言不二相思一の趣向に勝る數等の妙思。

朝ぼらけあいぬの髯の氷柱哉　四丁

自から雄渾。

鉋借りて戸尻直すや冬の雨　無一

實況の妙致。

行雁や江口の君のうしろ影　竹冷

情意自から言外に在りて、眞に妙趣の上乘たり。

うかりける人の砧を聞く夜哉　秋琴

巧ならず奇ならず、意想の到る所發して句と成る。是卽ち風流の最上極致。

かく拜讀いたして候ひぬ。秋の夜の御つれ〴〵、御一笑玉はり候へかし。

十月二十一日夜　櫻痴居士拜

竹冷宗匠机下

幸田露伴氏の「風流佛」を私が讀んだのは、まだ氏と交りの無かつた頃であつた。私が鄕里でしきりに政治運動をやつてゐた時分、此の小說を携へ、數時間人力車で片田舍を乘り回つた其の折に、車上に讀んで、その筆致の妙にひどく感服した。この小說も吾等の同窓吉岡哲太郎の出版したものであ

つたことは先に記した。私は其の後鄕里を去つて「讀賣新聞」に入社したが、或る時私の一向知らない人が編輯所へやつてきて、頗る磊落な調子で、私の傍に傲然アグラをかき、社員と高い聲で談話を始めた。その應答が如何にも奇矯であつたので、自然露伴氏であることが知れた。何でも此の頃露伴氏は戯れに知人に書狀を寄せて自己の死亡を通知したことでもあつたらしく、社員は氏にカラカツて死んだ人が來た、幽靈ではあるまいかなどいうて皆々笑つたことを思ひ起すのである。露伴氏は或る時代に讀賣に筆を執つたこともあり、此の頃も社友であつたと思ふ。それからズツト後、私が早稻田大學の圖書館の館長であつた頃、いろ〳〵の名家を招請して趣味談を聽聞したことがある。其の頃露伴氏をも招き、氏の得意の釣の話を聽聞した。氏は釣に就ても該博の考證家で、古今東西にわたり釣の趣味家をいろ〳〵擧げられ、釣に關する希覯の書籍に就ての談もあつた。今でも記憶に存するのは、支那の唐代の詩人陸龜蒙が釣の達人であつたといふことや、釣の書物の稀本（まれほん）は「何羨錄」と「釣客傳」で、これが一番よい本であることなどは其の時に聞き得たことである。それから後、私が國書刊行會で「新群書類從」を編纂する時に、狂歌の部と外に二二の部門を露伴氏に賴みたいと思つて氏を向島の居に尋ねたが、氏は快諾されて、此の部門の編纂が間もなく出來た。氏の精力の絕倫であるのに驚いたのは、幾千の狂歌を寫字生などの手を藉りずに、悉く自筆で書かれたことであつた。堆い原稿の手許に達したときは實に驚いた。露伴氏の凝り性は周知の事實であるが、嘗て多くの一枚摺の

御和讃を幾百種と集められたことがある。丁度私が向島に氏を訪ねたところは其の蒐集に力を致して居られた時で、自然談は此の事に渉つた。氏のいふには、和讃を多く集めて見たら、いろいろ句法などの異なるものもあらうと研究的にやつて見たが、案外同調のものが多いので失望した。アンナ紙屑のやうなものは、價は無い程のものだが、捜し出すのに骨が折れたと一笑された。

以上の外、森鷗外氏や、饗庭篁村氏、川上眉山氏等、既に故人になつた人に就て語るべき追憶がないでもないが、それは他日を期するとして、これを斷落とする。

早稲田大學の回顧

創業期

早稲田大學が創立されてから既に半世紀餘を經た。創立當時の昔を語るに就いては、先づ早稲田がどんな處であつたかを語らねばならぬ。大學の所在地は校歌に歌はれてゐる如く、都の西北に當り、久しい間郡部に屬した僻地であつた。今の大學の前身、東京專門學校開校の當時は、校門の前は滿目水田で、界隈の畑地はみな茗荷畑であつた。此の地の附近には種々の古蹟があつて、芭蕉庵もあれば道灌の山吹の里もあり、堀部安兵衛の復仇の遺蹟もあり、杜鵑を聞く風流地とも云はれたが、早稲田といふ地名は、一向に知られず、僅が須田町の青物市場が茗荷の爲に知つた位に過ぎなかつた。

八荷故斯かる地に學校を建設したかと云ふと、第一は清閑の處で學徒の健康によく、教育に適してゐる事と、もう一つは大隈侯の別邸があつて、それに隣接して大隈侯所有の空地があつたからである。其の空地は即ち現在大學の所在地であるが、此處はもと井伊家の所有であつたと聞いたこともある

が、早稲田と云ふ所は、學校に因緣がないわけでもない。大隈侯の別邸は、もと讃岐高松の松平家（松平賴壽伯）の下屋敷であつて、とゝに維新の始め山東直砥が學校を開いたことがあり、其の後尺振八が英學を教授したこともあるのだ。

學校創立の當時學生を募集するに當り、學校の所在地を早稲田と廣告しても誰も知らない處だから、當時雉子橋附近に居られた大隈侯の本邸の長屋を假事務所として、入學願書を受附けた位であつた。當時の交通機關は、僅に人力車があるのみで、稍ゝ遠方から來る人は頗る不便を極め、多くは田圃道を往來した。學生のためには寄宿舍の必要があつたので、早くからそれが設けられた。諸方から教へに來る人は、僅に二時間教へるのに、往復二時間も費したやうな始末で、斯く交通不便のため、此の頃殁した高田氏などは、他の十二の僚友と共に、當時空家であつた大隈侯別邸の二階に三食を辨當で辨じ、しばらく寄宿することを餘儀なくされた。當時の早稲田には堀部安兵衛に由緒のある蕎麥屋一軒の外、飲食店などは絕對に無かつた。

當時開かれた學校は東京專門學校と云うた。多分專門學校を名乘つた始めであらう。各高等の專門科を極めて短時間に修得せしむると云ふのが本旨で、小むづかしい外國語で教へるより邦語で教へると云ふ一生面を開いた。そこで政治經濟法律の學科の外理科を開き、後に文科も起つた。理科は經費の都合で廢することが已むを得なかつたが、後年理工科の興つたのは、當初の意志を貫いたものであ

る。其の頃學問がやゝもすれば權力者の道具に使はれたり、官僚の左右する所となつたりする弊があつたので、開校早々學問の獨立を唱道し、今も變らない。

開校當時の校長は大隈侯の養子英麿氏であつた。此の人は外國で理科を修めた人で、開校と同時に理科を設けたのも此の人あるが故であつた。開校當時吾々が兄事した小野梓氏は、學校創立に參畫して大切な地位にあつたが、氏は高田氏を始め帝大卒業の八九名を率ゐて卒業前大隈參議に紹介した。それが機緣となつて開校と共に皆々入つて教鞭を執ることになつた。何れも二十二三歲の血氣の若者で、學生の或る者よりも教授の方が若かつた。當時は晩學の人が多く來たり學んだが、自分の教へた人には、岡山縣の縣會議長があつたことを思ひ出す。

最初の學生募集で來學したものは八十名ばかりであつたと記憶する。それが追々增加したと云うても、五百名位に達するまでには相當の年を經た。當時學校の月計はどうかと云ふと、正確に分らないが、開校當時何と云うても三百圓位は要つたであらう。當時教授方面は無給同樣で、方々から好意的に教へに來た人々には車代もロク〳〵拂ひ兼ねる貧乏所帶であつた。無論每月大隈家から補助があつたので僅に凌いだのである。然るに大隈家の補助が來たるべくして來なかつたことがあつて、其の都度今月分の給料を次月に延ばすやうな事もあつた。今日から思ふと每月二百圓位の補助は何でもないやうに考へられるが、十四年政府を引退された大隈侯の懷工合を考へると、決して輕微のものでは無

かつた。と云ふのは、當時侯の挂冠は侯一代の大事件で、侯が藩閥から嫉視を受けたことは非常のものであつた。藩閥連は、侯が吾等を出しぬいて國會開設を策したと云うて極度に怒り、例の陰險手段で、退官後の侯をどこまでも苦しめようと策し、侯の糧道を絶つにあらゆる手段を廻らし、銀行などへも手を廻して、大隈に金融してはならぬと威嚇した爲に、侯が非常に窮迫された事は事實である。此の魔の手の頻りに延びる時分恰も學校が生まれたのである。月額の補給のスラ〳〵支出されなかつたのも此の事情を考へれば無理もないことである。吾々は當時の事を追憶して、侯が斯かる難儀時代に、よくも他人の力を藉りずに學校を起されたことを考へない譯にゆかぬ。當時の學校は木造建築で、講堂事務所まで合はせても、其の規模今の稍〻大きな一講堂にも及ばないとしても、それでもなかなかの資を要したであらう。開校して數年の後ではあるが、煉瓦の大講堂を建てられたごときは、侯の手許の稍〻緩んだ時であつたらうが、當時に於ては堂々たる建築で、これに依つて學校は大なる美觀を添へ、卒業の式場其の他大集會には實に大切な建物であつたが、侯が私家の經濟を度外に置き、一意學校の繁榮を策された誠意に對しては感激に堪へないものがある。

當時侯に對する政權の壓迫は單に兵粮攻に止まらず、出來得べくば學校を潰さんとまで策したらしい形跡がある。多分彼等の眼には學校が謀叛人の養成所と映じたのであらうか。不平に滿ちた侯が野に下つて政治學校を建てたのは徒事ではない、或は薩州の私學校が西鄕に於ける二の舞ではあるまい

かと狼狽したのは、己の心事をもつて人を忖度した滑稽事ではあるが、當時學校の敎鞭を執つた面々の內には、改進黨の創立に與つたものもあり、學校の評議員の顏觸と云へば、小野梓、矢野文雄、前島密、島田三郎、沼間守一、尾崎行雄、犬養毅、成嶋柳北のごとき政界の有力者で、大隈侯に同情を寄する面々がぞろり名を列ねてゐるので、餘程藩閥家の神經を刺戟したに相違なかつた。侯は學問の獨立を唱道する人であるから、藩閥者流の考ふるごとき學校を政黨の機械にする如きケチな量見の人でないことは、爾後長い間の行動に就いて見ても明らかなことである。而るに當時藩閥者流の學校に對する陰險手段は、帝大の敎授に對し、私學に臨んで敎鞭を執つてはならぬと嚴達したことなども其の一例である。學校は經濟不如意のため帝大敎授から好意的に援助を受けてゐたが、玆に至つて其の援助が絶えた。

學校が種々困難を感じてゐる際に、一事件が起つた。それにも魔の手が潛んでゐると解されたが、その事件といふは、法科の存廢に關する事であつた。乃ち神田に法學院の前身英吉利法律學校が創立されたが、その機會に早稻田の法科をそこへ移してはどうかと云ふ交渉があつた。全體其の頃の法科の敎師は多く辯護士で、業務の傍ら敎鞭を執つたものである。早稻田のやうな不便の所へ繁忙な斯かる人々を煩はすことは困難で、爲に法科の維持にはいつも頭を惱まし、此の科は事實繁昌もしなかつた。然るに神田の如き四通八達の便利の地に、同じ英法の專門學校が出來るのだから、言ふまでもな

く有力な競爭者である。これが成立したら早稻田の法科が競爭負することは想像に難くなかつた。これが吾が校に對しての誘惑であつた。岡山兼吉と云ふ人は創立から早稻田の法科を擔當した人で、山田喜之助と云ふ人も同樣の僚友であつたが、共に英吉利法律學校の發起者で、切に吾々同人に法科の移轉を主張したので、これには頗る困つたが、流石に吾等同人は一人も同意する者が無かつた。實は折角設けた法科を英吉利法律學校に併せると、吾が學校の一角が崩れることにもなる。且つ、移轉とは云へ實は新設の學校に併呑さるゝ譯であるから、皆々反對して早稻田の法科を死守することを誓つた。此の移轉論に數月悶着を續けたが、實は岡山の背後に魔の手があり、岡山を手先につかつて、先づ學校の一角を崩し、追つて他に及ばんとした策謀が長派の某有力者であつたとは、大隈侯自身語られたことである。

藩閥者流の手段は如何にも陰險卑劣で、大隈侯の身邊や學校も實に物騷であつた。侯の邸内に其の頃スパイが潛入してゐたが、學校の寄宿舍にも始終學生らしく裝うた一二のスパイがあつたのも事實である。此の頃は言論の抑壓が今想像の出來ない程甚だしく、學生は政談を爲すことを禁ぜられたのみならず、政談演說を聽くことすら禁ぜられてゐた。學校でも大講堂で學術演說に託し往々政談にも亙つたこともあるが、多くの場合警部が臨監した。自分もある時政治に關することを演ぜんとして大講堂の演壇に立つてゐると、そこへ警部がやつてきて劍を按じて臨監したので、急に演題を變ずること

とが已むを得なかつた。其の頃自分は世界の烟草の歷史を讀んでゐたから、取敢へず烟草の叢談をやつて警官を烟に卷いたことを思ひ出す。當時は政治の二字を云へば忽ち政談と認めらるゝやうな始末であつた。

大隈侯が早稻田の別邸に引移り常住さるゝことになつたのは確か明治十七年であつたと思ふ。乃ち學校の設けられた二年後である。此の移轉は侯が兵粮攻にあつて家計を支へかねての結果であつた。其の後二十一年に雉子橋の邸は賣却されたことが大隈家の文書に存してゐる。それに據ると買人が澁澤榮一で價が五萬五千圓とあるが、當時は外人が買主となり得なかつたので、澁澤が名義人となり、其の實は佛蘭西公使が買入れたので、大震災までそれが佛蘭西の公使館であつたことは周知の事實である。侯の早稻田への移轉は學校に取つては此の上ない仕合はせであつた。否、學校の仕合はせであつたのみならず、早稻田附近の大幸であつた。世界の道の早稻田に通じたのも、滿目の田畑が埋められて鶴卷町の新市街が起つたのも、中學・實業學校の設けられたのも皆侯の此の地に住居せられたことに因るのである。尤もこれは後年の事に屬し、當時侯は來訪者の不便を思うて、京橋弓町に出張所を設け日を定めて、そこで訪客に接見されたが、前門にある學校へは、嘗て足を入れられなかつた。これは何故かと云ふに、藩閥者流の壓迫が餘りに甚だしいので、侯は累の學校に及ばんことを顧慮して特に遠慮されたのである。

大隈侯に對する兵粮攻に就いては前にも云うたが、藩閥者流は諸銀行に内命して大隈に金融する勿れと牽制したのみならず、侯の舊君鍋島家に對してすら同樣のことを申し入れたとは侯自ら語られたことであるが、鍋島家では流石にこれを一笑に付して應じなかつた。此の時分大隈侯はわれ〳〵親近者に對し、曾て耳にしたこともない弱音を吐かれたことを今思ひ出す。俺も兵粮攻には隨分困つた、自分の世襲的財産も實は投げ出してゐる、顧みれば自分は維新前の奔走時代でも、母が自分のために何物も惜しまず、巧みに家の經濟を賄つたので、嘗て手許の窮乏を感じたことは無かつた。併し御一新が今一年後れたら、家資が盡きたであらうに、幸ひに御一新に接したので馬脚を露すことも無かつたが、今度は隨分困らせられた、これから儉約をすればよいかも知れないが、自分は折角これまで相當の體面を維持してきたから、今更それをやることを好まん、此の困窮は一時の事だから、飽くまで從來の體面を持續すると例の樂觀論を吐かれた。侯は此の頃金融に窮して横濱の平沼專藏から借金をされたこともあつて、平沼はしば〳〵侯の邸に伺候した。學校が侯の口入で二千圓の金を借りたのも此の頃であつた。此の借金は高利でも無かつたが長く償還が出來ず、年一二回利子を携帶して平沼を横濱に訪ふのが學校幹事の務であつて、自分も幹事時代二三度平沼を訪うた事がある。平沼は其の都度食饌を設けて饗應し、己の起身の自慢話をやるのが例であつた。此の借金は前島男の斡旋で一千圓だけ學校に寄附させたが、平沼は實は學校へ寄附した第一號であると云ふべきだ。當時平沼は蛇蝎の

如く世に嫌はれ、事實平沼のため家を亡したものもあるが、大隈侯は曾て、世間では平沼を憎むが、俺に對しては彼は恩人である。あの當時無擔保で自分に金融してくれたものは彼一人だと云はれたことがある。

パトロンの困窮時代は即ち學校の困難時代で、當時學校で皆々頭を惱ましたのは毎月の經濟を如何に切りぬくべきやであつた。此の時に奮然起つたのは高田氏である。高田氏は當時一教授に過ぎなかつたが、同窓教授をリードしてゐたのは氏である。氏は思へらく、創立者たるパトロンが家計にすら困つて居らるゝのに、學校が其の補給を仰いでゐるなどはパトロンに對する道でない、宜しく補給を辭して學校は自給の計を立てねばならぬと、こゝに改革案を立てた。自分も其の際參加して高田氏の宅に徹夜して其の案を書いたことを思ひ出すが、其の案は十項に亙つてゐたが經濟獨立の事が其の骨子で、月謝の增額が最も大切な改革案であつた。當時の月謝はどこの學校でも一圓といふが通例で、それを八十錢增額して一圓八十錢にしようと云ふのが主眼であつた。僅に八十錢の增額は何でもないやうであるが、當時一圓と相場の決つてゐる月謝を幾んど二倍にするのだから、學生の利害上難件であつた。當時の學生には隨分理窟屋が多かつたので、唯一片の掲示で之を行ふ事が出來ず、學生個々に之を納得させる事はなか〳〵面倒で、時の幹事田原榮氏は學生に納得させるため、數日家にも歸らず、懇諭に大なる努力をやつた。漸く學生も事情已むなきを諒としたが、此の增額のためどれだけの

增收があつたかと云ふに、當時の學生の總數は、よくも記憶しないが、三百人位はあつたであらう。假りに三百人とすると、增收は僅に二百四十圓に過ぎぬ。此の僅かばかりの增收が大切であつた程、學校の經濟の規模が小さかつたのである。今日コンナ昔話をすると、人は多く不審を抱き、ナゼ一圓增額しなかつた、八十錢と一圓は五十步百步でないかといふものもあらうが、刻んで八十錢としたのは、學生に對して二十錢だけ遠慮したのである。當時の金は今よりも遙に貴かつたから、二十錢だけでも遠慮の趣意が立つた譯である。

些々たる八十錢の問題であるけれども、學校創立以來法科移轉問題にもましてこれが重大であつた譯は、八十錢の增額は實に學校の自立問題であつた。言ひ換へれば大隈家から補給を辭するの問題でもあつたのだ。學校建學の趣旨は「學問の獨立」であるのに、人より補給を受けて成り立つのでは、學校は獨立してゐるとは言へぬ。學問の獨立を期するには、學校それ自身が自立せねばならぬ。大隈侯は學校の創立者であらるゝ關係から、學校に補給せらるゝのも自然の因緣で、學校が其の補給を受けたからというて、其の體面を傷つけるとも云へないが、創立の際ならば兎も角も、いつまでも人に賴つて立つといふは意氣地のない譯である。且つ當時大隈侯の不如意を思ひやつては其の補給を辭することが恩人に對する道でもあつた。大隈侯の襟度は光風霽月の如く、微塵も學校を私有する念などはあられよう筈もないのだが、補給を受けてゐると何となく侯のものゝやうに世間から見られて、吾

吾は厭でたまらなかつた。萬難を冒しても侯の補給を辭したいと熱中したのは實は、學校の獨立が繫かつてゐたからである。兎に角此の改革は學校の創業史に特筆すべきことで、問題は八十錢だが、實は八十錢で學校の獨立を買つたやうなものである。やかましい學生連が增額を納得したのも學校の獨立を重しとしたからであつて、彼等が苦痛を忍んだればこそ、學校の收支が漸く償ふに至つたので、學生の愛校心も多とせねばならぬ。

學校は後年衆多の人の寄附で追々擴大し、社團法人となり、財團法人となり、學校の敷地も侯の寄附で學校の所有に歸し、天下晴れての獨立の體面を完うしたが、創立當時學校の不如意時代いくら大隈侯の襟度が公明正大でも、學校の當事者が一步を誤つたらどんなヘマを起したかも知れぬ。一事を云へば、學校創立頃にはお目付風な人が幹事として大隈侯から差遣はされてゐた。此の人の名は蔽ふが、佐賀出身で官僚肌の人で、吾々とはソリの合はぬ人であつた。此の人などは大隈家が資を投じた學校だから大隈家の私有であるやうに考へ、大隈家へ每日出入し、奥へ通つても忠義立に自分の思惑をほのめかした。その頃後年のやうに吾々が大隈家の奥へ遠慮なく通り、時々夫人に面接したら、聰明な夫人は我等の意を諒とされたに相違ないが、當時年壯氣鋭で何事にも潔癖が先に立ち、人に依賴することを陋とした吾々は、大隈侯には折々面會しても奥へ通ることや御馳走にあづかるやうなことを欲しなかつた。奥から折角呼ばれても事に託して應じなかつたことすらあつた。侯夫婦の吾々に對

する慈愛は晩年と異なる所なく、侯の雉子橋に居らるゝ頃吾等が無妻で所帶も持たず生計の不如意であつたことを顧念され、邸内の空家に住めとの好意もあつたが、吾々は已れの不如意を棚にあげて、それにも應じなかつた。高田や田原が侯の早稻田の別邸に起臥したことはあるが、當時別邸の空家に辨當生活で、大隈家の厄介になる譯でもないと云ふので、暫時居たに過ぎぬ。兎角吾々は我儘で公然の必要が無ければ大隈家へ出入しなかつたので、吾々の意思が通ぜず、佞物が夫丈に御爲ごかしを云うたことが吾等に對していくらか誤解があつたかも知れんが、實は偶然ながら、吾等が粗野無骨であつたため、公私の混亂を避け得たとも思ふ。若し私的情誼が濃厚にからんだとしたら、それが學校の獨立にも支障を及ぼしたかも知れん。これなどは云はゞ過ちの功名とも云ふべきであらう。

月謝の增額で大隈家の補給を辭し、學校は經濟上獨立したとは云へ、學校の内政はなか〳〵困難であつた。開校當時の帳簿に據ると、最高の給料を得たものは高田天野の兩人が三十圓に過ぎず、他は十五圓十圓の薄給であつた。それでゐて其の授業時間は、三十時間乃至四十時間と云ふ驚くべき受持時間であつた。兎角教師の數が充分でないので、銘々其の專門の學科を受持つと云ふ譯にはゆかず、教師萬能を事實に發揮して、高田は專門の憲法を受持つ外に貨幣論を受持つたり、天野は其の專攻の經濟を受持つ外に政治學を教へたり、坪内の來校當時はまだ文科が無かつたが西洋歷史政治學を教へると云ふやうな始末であつた。法科に就いては前に云ふが如く神田に英吉利法律學校が設けられて其

のため二三の教師を失つたのみならず、帝國大學で禁令が出たので大學に籍を有する教授の應援を得ることが出來なくなつて、此の方面には特に困難を感じたが、窮すれば通ずるで、大隈侯や學校の窮苦に同情して追々任俠的に來たり投ずる人があつた。即ち三宅雪嶺君の兄三宅恒德、平田讓衞、中橋德五郎、關直彦などの面々が來たり投じた。中にも平田の如きは長く法科の盛り立てに努力した。所謂棄てる神あれば助ける神もある譯だが、何分にも當時は一通りの俸給を拂ひ得なかつたので、中には自活のため心ならずも學校を去ることを餘儀なくされた人もある。乃ち砂川雄峻の如き、法科の中心であつた人も、大阪で辯護事務を開く爲に去るやうなことがあつた。當時教師連の生活難につけこみ、官職の香餌を以て誘ふことも頻々とあつたが、幸ひにして斯かる魔手にかゝることは無かつた。

學校の僅かなる報酬の外、何等他に收入の無かつた專屬の教師は、生活費の幾分を補ふに内職稼ぎをすることが止むを得なかつたが、實は他の學校をかけ持に教へる程の時間の餘裕が無かつた。たゞ坪内は其の頃から勉强家で二三の學校を教へたのみならず、著述に筆を馳せて若干の著書を出した。坪内が自ら舊惡全書と云うてゐる「小說神髓」「書生氣質」等の作は皆此の頃に出たものである。或は新聞や雜誌に執筆したものもあつたが、そんなことでは生活のたそくにはならなかつた。然るに小野梓氏は其の頃神田に書店を開いた。即ち富山房の前身で、主として洋書を販賣し、傍ら吾々の著書を出版するの計畫を立てた。これは吾等の爲の福音で、法律、政治、經濟、社會、文學等の書籍が出

版されたけれども、同人の生活を補足する程度のもので無かつた。但し執筆中の著述を擔保として前借をしたものが隨分あつて、或は此等の前貸が累をなして東洋館は潰れたと解するものもあつたが、實は此の書店に累を及ぼす程の金融を請ひ得なかつたのである。此の書店の閉店したのは、小野君の理想が餘りに高く、其の販賣の書物が高尚に過ぎ、時勢に先んずる學者商賣であつたからのことで、後身の冨山房の如く繁昌したら、同人の生活を救ふ銀行でもあつたらうが、如何せん、蕾の内に枯れて、充分華を發するに至らなかつたのである。

此の頃吾々同人に内職を與へる一事があつた。當時埼玉縣から横田敬太と云ふ人が若干の資金を齎して出京し高田氏と會して、あなた方が學校で講義をされる其の筆記を刊行して世に出したら、必ず多く行はれるであらう、不肖ながら刊行費は辨ずるから共同されないかと云ふ交渉があつたので、高田氏は諾して案を立て、幾種かの講義錄を發行せしめた。その講義錄は當時に在つては割合に調つたもので、一人づゝ一科の講義を一冊にして月刊した。確か政治經濟法律の三科であつたが、それが幾號繼續したか記憶にないが、經營が拙であつたため、横田は結局破産したのは氣の毒であつた。併し學校は後に之を繼承して、こゝに學校が今日の如く幾多の講義錄を發行するの端を發した。横田の計畫により同人の生活は格別惠まれもしなかつたが、當時學校の經濟が微弱で講義錄發行の力も無かつたのに、横田の計畫が學校の行末長き講義錄發刊の土臺となつたのは慶すべきことで、横田の功は沒

し難きものがある。

學校の創業期に寄宿舍のあつたことは前に云うたが、爰に聊か觸れねばならんと思ふのは、當時の學生の氣質を知るには寄宿舍生活が最も雄辯に語るからである。寄宿舍は今から考へると規模の小なるもので僅に五十人位を收容する小規模のものであつたが、當時早稻田附近に一軒の下宿屋もなかつたところ、遠方から來るものは多く寄宿舍に入つた。だから初期の得業生は多く入舍の人々で、後日立身したものも入舍生に多くあつた。當時は學校にまだ文科も商科の設けもなかつたので、時世の感化で政治的の人物が多く、さなきだに血氣の年配であるのに、政權の壓迫は前に述べたごとくであるから、悲歌慷慨の氣は舍内に漲り、隨分奇拔の人物が多く、賄征伐などは頻々とあり、隨分自分の趣味に偏して朝から晩まで一人演說をやるものがあり、體育のみを主として擊劍や角力腕押しなどで居室を震動するものがあり、宗教熱心で耶蘇教を說き廻るものがあると思へば、茶目的に人を笑はせる事を能事とするものがあり、放蕩者流の時に門限を外すものがあり、僅に三圓五十錢の舍費を拂はないものが甚だ多く、其の滯納者の内に他日世に名をなして居る人が幾人か交つてゐるなどは案外に思はせる。ある時は舍内に政府の間諜を發見して大騷動を起したり、ある時は巡査の不當亂入を憤つて之と對抗したり、其の元氣の旺盛であつたことは今の學生とは全く氣質を異にし、舍監となる人は餘程勇氣があるか舍生の信服を博してゐる人でなければ勤まらないやうな次第で、安部磯雄氏なども一た

び舍監であつた事もある。俣野時中の舍監の時には、門限を外して惡所通ひをした舍生を懲らす爲、棍棒を携へて門側に待伏して入り來るものに一擊を加へた椿事もあり、それが問題となつて舍監の職を解いたこともあつた。舍生が元氣よかつたのみでなく、舍監にも相當元氣ものがあつたのだ。當時の寄宿舍史を詳しく書けば頗る面白いのであるが、今はたゞ其の一端を擧ぐるに過ぎぬ。

以上は早大創業期の大略で、學校は大隈侯のごとき創立者として偉大なるパトロンを有したとは云へ、決して室育ちでなく、備さに艱苦を嘗めて生育した。所謂天の大任を下さんとするや、先づ窮苦に身を置き試煉すると云ふ古語の如く、早大の創業期は政權の壓迫下に苦悶しながら生育したのである。併し此の難澁の試煉を經たる早大は遂に大發展を見るに至つた。

發展期

早稻田大學の發展期は通例學校を大學組織に改めた時を云ふので、それは學校創立後二十年即ち明治三十五年で明治三十七年には商科大學が興り同四十一年には理工科が新設された。正しく此の頃は發展期であるが、併し其の發展が一時に現れたのではなく、小發展が積んでこゝに至つたのである。先づ大發展に至るまでの一發展として顯著なるは明治二十三年に文科の創立を見た事である。此の年は帝國議會が始めて開けて我が國史に一大光輝を添へた年だが、同じ年に我が校を飾る名花が發した

のである。實は我が帝國に純粹の文科の設けられたのは之が嚆矢である。東京大學の其の頃の文科は政治經濟哲學等を混合したものであつたからだ。全體一學科を開始する事は決して容易の業でない。我が校に餘裕の無かつた當時此の一科を開き得たのは意外の發展と云はねばならぬ。此の學科の創唱は言ふ迄もなく坪内博士である。氏は早稻田に此の學科を開く使命を帶びて來たり投じたとも云ふべき人であるが、此の科を開く迄は種々の學科を受持ち、氏の獨特の講義振りは學生を陶醉せしめた。

扨て文科を起した趣意は坪内氏が學んだ本地帝國大學の文科に倣つたものと何人も考へるであらうが、實はそんな模倣でなく、深く時事に感ずる所があつて起したものである。當時我が國の文學は最初の大過渡期に屬し、種々の思想と雜多の文體とが紛糾して、甚だしい歐化熱と其の反動の國粹論とが大衝突をした時であつた。言現す文體が大混亂を極めてゐたので敵も味方も其の是非を辨別し兼ねた。當時の文體は漢文崩しもあれば、飜譯體もあり、言文一致體もあつて、從來の文法を全く度外に置き、語格などには頓着せず、銘々思ひ〳〵に文體を創造することを競ふといふ風で、思想の混亂が彌々甚だしからんとする虞があるに氣がつき、先づ文體を統一し、之に依つて思想の健全を得んことを庶幾し、和漢洋三文學の調和といふことを標榜して、さてこそ文科を開くに至つたのである。

創立者の坪内は渾身の努力を拂ひ、自ら足を勞して、當時文學界の幾多明星を招致し、初めから立派な學者をゾロリ揃へた。氏は當時三十七時間乃至七十四時間の驚くべき時間を受持ち、勤勉の範を

示し、よく全科を統率し、氏獨特の教授振りは學徒を喜ばしたので、此の科は初めより評判がよく、追々卒業した面々は文科の諸講座を擔任することになり、文科は益ゝ繁昌した。年を累ぬるに隨ひ、學生卒業後の生活問題が起り、教師たるに必要の學科を設け、高等師範科も後に開けたが、創設の頃の學徒は衣食問題には頗る淡泊で、一意文藝家たらんとする外餘念が無かつたので、それが爲に多くの秀才が輩出し、早稲田の特色は政治學であつたのが、爰に大なる一名物が加はるに至つた。

文科の開ける前年大講堂が大隈侯に依つて建設された。これも侯獨自の經營で、學校に壯觀を添へたが、惜しむべし、大震災に崩壞した。侯は十四年挂冠後初めて入閣され外相として條約改正に執掌されたが遭難の不幸があつた。此の頃には創業期の如き政權の壓迫は漸く緩んだとは云へ、輕壓は尙續いた。當時は官學萬能で、私學に對しては何等政府の特典が無かつた。委しく云へば、徵兵猶豫も無ければ法科卒業生に判檢事辯護士となるにも少しも便利を與へられなかつた。これがひとり吾が學校のみならず私學の發展には非常の迷惑を與へた。當時私學は早稲田の外に法科の學校だけでも四大法律學校があり、國學院其の他もあつて、何れも政府の冷遇に閉口し、とゝに五大法律學校に國學院も加はり、各校の幹部が聯合して對策を講じ、數年に亙つて政府と折衝を重ね、漸く官立學校同樣の特典を得たが隨分骨が折れた。當時政府は官學と比して私學の不備を鳴らしたが、私學の發展を望むならば當然相當の援助を與ふべきである。徵兵猶豫の無きこと、判檢事辯護士となる便利を缺くこと

は、實は私學に取つては致命傷であつた。斯かる地位に置きながら、如何にして私學が發達し得ようか。私學の發達しなかつたのは政府の妨害に由つたと云ふも決して誣言ではない。五大法律學校が政府の潰れよがしの冷遇を受けながら、實は國家に大切な任務を行つた。それは何かと云ふと、當時新法典が發布されたが、此の法典は日本初めての複雜な法律で、之を說明し理解せしむる事が國家の急で、多くの法律學校の生まれたのもそれが爲であつた。其の教授法が假令官立學校のそれに比し精を得なかつたにしても、國內の津々浦々に及ぶまで多數の新法典の理解者を生じたのは全く五大法律學校のお蔭であつて、若し此等の學校が無かつたらば、あの新奇な且つ浩瀚な法典はどうであつたらうか、乃ち此の法典を少しも準備なくパツと發布したらばどんなにまごついた事であらう。法典の解釋は實に私立法律學校に於て擔當し、幾萬の學徒に理解せしめたればこそ新法典が支障なく行はれたことを思ふと、五大法律學校が政府の虐待を受けながら此の大任を果したと云ふも誣言であるまい。

學校の發展途上には種々の出來事があつたけれどもそれ等はすべて省略して、明治三十三年に高田氏が學監となるに迨んで、爰に大なる發展の端を發した。それを說く前に、學校創業以來の行政の大略を述べる必要がある。校長は大隈英麿、前島密、鳩山和夫の三氏の三代を重ねたが、當時の校長は今日の校長學長と違つてアクテーヴのもので無かつた。そこで創業頃には監督と云ふものを置き、校長と幹事の間に介立して、樞要の校務を處した。此の職名は規則に無かつたものだが、便宜上有力な

教授が輪番にこれを務めた。此の行政を當時監督政治と云うた。高田、天野、山田(一郎)などは皆一たびは監督をつとめた。高田は最初から職名の有無に拘らず、學校經營の中樞として重きをなし、すべての校員をリードした。氏の學監となつたのは學校創立十五年の後であるけれども、事實上常に學監であつたと云うてもよいのである。當時學校は相當發展したとは云へ、經濟は不相變困難で、幹事の最も大切な任務は經濟の不足を善處するにあつた。當時の事務は簡單であつたけれども、國會開設後の政治熱は少壯の吾々校員に禍し、學校の形勢は行詰まりの觀なきにしもあらずで、其の儘に推移したら或は學校を衰運に導いたかも知れなかつた。此の行詰まりを展開したのは高田氏である。氏は大隈侯の外相たりし時通商局長であつたが、辭職の後慨然として一意學校の衝に當らんと意を決し、茲に全身を投ずるに至つた。氏は先づ紛亂の校務を鋭意釐革するとともに積極的に邁進した。職名は學監であつても、事實校長に齊しい權能を以て縱横に切廻した。それがため六七年間に頗る見るべき發展を遂げた。即ち、大學組織となつたのも、圖書館が建設されたのも、商科の設けられたのも、みな此の間にあつた。

東京專門學校を改めて早稲田大學となすことが、高田學監が手初めの計畫であつた。それに就いては先づ豫科を設けねばならず、圖書館が備はらねばならず、先だつものは資金であつた。そこで基金募集を行ふことに決したのは、三十三年の末頃であつたと記憶するが、之が最初の募集である。これ

よりも前にしば〳〵基金募集の議があつたが、案が出來ても實行に至らず、いつも有耶無耶に推移したが、今度こそ敢然實行することになり、前島前校長を委員長に推し、高田學監始め自分などが專務委員となつて、三十四年一月から運動を開始した。此の時の募集額は三十萬圓を期したが、慣れぬ仕事で非常に骨が折れた。今想ひ出すが學監と共に自分の鄕國越後に運動したのは三伏炎暑の際で、約三十日に亙り越後の六分通りも遊說したが、案外成績が擧らなかつた。又學監は九州にも出張し、東京は勿論各地に運動したが、一年有半の努力は二十八萬圓を得るに過ぎなかつた。

東京專門學校を大學組織にした趣意は敢へて一躍現在の大學の如くしようとしたのでなく、當時の教育事情に鑑み、中學卒業生を收容し、それに簡易な大學教育を施さんとするに在つた。當時中學を卒業しても、大學の數が少い爲、前進することが出來なかつたのが、教育界の一缺點であつたので、それを補足せんとするのが一の目的であつた。それを爲すには從來の如く、邦語のみで教へることを主とせず、外國語をも併用し、豫科を設けて、大學に入るの階梯を作る必要があつた。但し帝大の豫科の三ケ年を長しとして一年半の豫科を設け、成るべく短期に高等の學問を修めしめ、官設大學の不足に對し手傳をなさんとするが趣旨であつた。要するに此の大學組織は官設の大學に倣つたのではなかつた。今日の早稲田大學は帝國大學と些しも違がないのであるが、此の時の大學組織は折衷的のものであり其の折衷を寧ろ特色とした。即ち專ら科目を選擇して最も必要のものを選び、虛を避け實を

取り、多くを貪らず充分學科の咀嚼につとめ、理論と實際との併行につとめ、實生活に適合する人物を造らんとするに在つた。此の階梯があつたので、後年大學令に依り、國立大學と同一地歩に立ち、綜合大學に移ることが案外容易であつたのである。

以上の大學組織の發表は、明治三十五年學校創立二十周年祝典を擧げた時であつた。此の祝典は吾等に大なる感動を與へたので其の狀況を少しく語らねばならぬ。此の式に大隈侯が主人側として臨み一場の演說をされた事は勿論、文相菊池大麓、日本銀行總裁山本達雄、帝國大學の舊總理加藤弘之、政界の大立物伊藤博文の諸氏が交ゝ演壇に立たれた。式場でこれ程の人物が揃つたことは本校には空前で、吾等をして最も感激せしめたのは、伊藤加藤の兩氏の演壇に立たれたことであつた、兩氏は實に珍客であつた。本校の創立後長い間、政府の誤解を受け、其の嫉視の的となつたもので、動もすると叛逆人の製造所の如く思惟せられ、伊藤加藤の如き事に理解のある人達も自然色眼鏡を以て見、學校創立後二十年の久しい間一たびも本校へ足を踏入れたことのないのに此の度は交ゝ祝辭を陳べるに吝かでなかつた。その祝辭を聽きながら、二十年間の事を追憶すると眞に今昔の感に堪へなかつた。吾等は坐ろに時勢の推移の驚くべきものあるにも想到を禁じ得なかつた。尙私の今も忘れない一事は、伊藤公がその演說中これ迄外賓が曾て氣付かないことに言及されたことである。公は本校を評して私學は多く營利的であるのに、此の學校はその選を異にしてゐると頌し、更に進んで私學の最も困

難とするは經濟の料理である。よく此の學校は百難を凌いでこゝに至つた。畢竟經濟の料理宜しきを得たからで、この點は官學の及びもつかぬことで、官學のよろしく學ぶべきことだと喝破した。流石に伊藤公の慧眼は學校經營家が最も困み、窃かに言つて貰ひたいと思うてゐる急所に言ひ及んだ。私などは此の演說を聽いて大いに溜飲を下げた。

なほ加藤男を壇上に見ても、多少の感なきを得なかつた。男は吾等を大學で生んだ校長であつた。吾等は此の校長の下に學得したものを此の學校に移したのである。それが年所を積んで、漸く大學となるまでに發展したことを舊校長は何と感じてゐるだらうかと、男の演說をソツチのけにして勝手な考に耽つた。學者肌の男は、例により感情を現さなかつたが、內心は必ず喜んでゐるであらう。否、喜ばざるを得ないと、勝手な感慨を馳せたことであつた。

此の式日の當夜盛んな提灯行列が行はれ、學園の學徒は早稻田を發して神田、日本橋、銀座通を練り歩き、宮城前に集合して陛下の萬歲を唱へた。これは空前の事であつて、市中は大いに賑はひ、日本橋、銀座通の大商店は特に店をひらき、通過の行列を歡呼して祝意を表した。自分は其の頃大患の後で行列に加はることが出來なかつたが、空しく家に籠居も成りがたく、九段下に佇立して行列の坂を下るのを傍觀したが、坂一杯に橫溢する提灯の火光は宛ら火の海の動くかと思はるゝ壯觀で、行列の先頭が坂を下る時、後列はまだ校門を出ないと注進された。二十年前には僅に百にも足らぬ學徒が

斯くまで殖えたかと思ふと、歡喜の感に打たれて涙ぐましくなり胸の塞がるを覺えた。此の頃學徒の數は三千二百、早稲田中學の生徒が一千、一年前に開校した早稲田實業學校の生徒が五六百、それに學苑の教職員を加へると、優に五千の行進であつた。

大學組織となすにつき諸般の設備に忙しかつたが、就中圖書館の設備を最も大切として先づこれに手を下し、大學組織を發表する前既に工を竣へた。實は東京專門學校創立のころから、不完全ながら圖書館らしいものがあつた。それは大震災に倒壞した大講堂の一室を書庫とし他の一室を閲覽室に充てたことはあるが、圖書の數も閲覽者の數も少く、當時はこれを圖書室と稱してゐた。吾が校に名實共に備はる圖書館の起つたのは、大學組織の前驅として起つたもので、初めて館長を置き、開館と共に自分は館長となり、それが十數年の長きに及んだ。此の館は後に現在の館の如く改造されたが、當時の閲覽室は木造で、書庫は煉瓦の三層であつた。現在の館とは比較にならぬものであつたが、それにしても私學には誇とさるべきものであつた。

圖書館の開館と共に忙しかつたのは圖書の蒐集であつた。當時はまだ和漢の書籍が坊間に澤山にあつて其の價もまだ安かつた。私が先づ和漢書の蒐集に偏したかの態度であつたのは、洋籍を集めることは末長い事業であるが、追々亡びゆく和漢書を今集めて置かないと、他日噬臍の悔があらうと鋭意此の方面に力を注いだ。斯く熱中した結果毎年豫算を超過した。そして其の超過が巨額に上つた事も

あるが、學監の諒解を得て特に若干の資金を募つて、收支を合はしたこともある。斯くして、開館後三四年を經て館務も追々整ひ、都下有數の圖書館となつた。自身の事を云ふでもないが、館長であつた十數年間は私には最も愉快の時で、私の趣味を培養向上せしむるに大なる助けをした。後に校務の都合から、初めて一人の理事を置くことになり、學監から、圖書館は既に整頓したから、最早君を煩はすまでもない、館長を他人に讓り君は經營の方に廻り、自分を輔けよと云はれた。其の時私は理事で館長を兼ねてよいなら受けもするが、然らざれば寧ろ理事を辭退したいと斷つた位圖書館長に執着があつた。實は館長の位置は幹事以下にあつたのであるが、私は位置には頓着がなかつた。自分の在職中二十萬册を藏し得べき書庫は早く狹隘を告ぐるに至つた。

早稲田大學と改稱した翌年、大學程度の商科を起すことゝなり、先づ一年半の豫科を設けることゝなつた。此の施設の動機は校友中實業界にあるものが、折に觸れ當局に勸めたからでもあるが、實は時勢の必要に鑑みての英斷であつた。これより先早稲田實業學校を創設して實業教育に多少の經驗もあり、又學理と實地を抱合し實務に當る人材を造就するのは建學の本旨でもあるので、大學に商科を置くことは頗る道理あることであつた。斯くして天下に率先して商科大學が出來た。高等商業學校が商科大學となつたのも、帝國大學で商科を設けたのも、皆其の後の事である。此の施設は吾が大學の爲に一生面を開いた。之に依り新たなる原野を開拓し早稲田の領域を甚だしく擴大した。從前は經濟

を修めた卒業生の内に實業界に投ずるものもあつたけれども、大體創立の時から學校は世間より政治學校と目され、事實も政治色が濃厚であつたので、出身者は多く政治の舞臺に立ち、新聞界では特に出身者を歡迎したが、實業畑には未だ卒業生が充分に認められず、相當の人材でも活躍が出來なかつたが、商科大學の開設は、早稲田に新しい實業趣味を加へた。それが恰も時勢に投じたから、追々大なる發展をなし、最も多くの學徒を收容し、隨つて尤も多數の卒業生を出し、實業界に後日の如く活躍するの端を發したのでもあり、亦早稲田が實業界に接觸したのも實に此の時からである。

以上の如く早大が實業界に接觸したことにつき、想ひ出ることは、幾回かの基金募集に、多數の實業家が其の募りに應ぜられたことである。之がやがて學校と實業家との提携となり、商科大學が起つてからは一層實業家の同情が濃やかになり、一たび募金に應ぜられた緣故から、二たびも三たびも應募を繰返さるゝことゝもなり、尙其の上に商科の得業生は多く寄附實業家の好意で就職の道を得ることにもなり、早稲田の商科の發展は種々の意味に於て世の實業家に負ふ所が少くないのである。

商科の開始に次いで想ひ起すことは、清國留學生部を設けて清國學生を教育するの道を開いたことで、校史に特筆すべき重要事件である。此の留學生部を開くに就いては、學監は支那の事情を取調べるため同國の視察に赴いた。それは明治三十八年の春で、歸朝後間もなく此の部が特設された。今その委曲を述べるに先だち、聊か支那の事情を語る必要がある。又本校と支那との教育關係は、此の留

學生部の開ける前、既に成り立つてゐたことも語らねばならぬ。

明治二十七八年の日清戰役に支那が脆くも敗れたので、支那の覺醒はこれから始つたのであるが、更に支那の覺醒を大いに促したものは、それから十年の後明治三十七八年日露の戰役に於て露國の敗れたことが、自國の敗北よりも、一段深刻の刺戟を支那に與へずにはおかなかつた。露國に對する日本の捷利は、どうしても君主獨裁の專制政治に對する、立憲政治の勝利であらねばならぬと支那人は考へた。そして其の考は當を得たのである。そこで支那の國民は立憲熱に燃出したが、就中有識階級は早く覺る所があつて、日本の立憲治下の制度を研究したり、或は日本の官私の學校に入つたものも少からずあつた。往年康有爲が吾が校に來て一場の講演をやつた後、吾等は此の人を紅葉館に迎へた席上、康有爲は吾等に告ぐるに、日本に來た第一番の留學生は自分であると云うた。それは戲れに言うたのであるが、事實日本研究を一番早くやつたのは此の人であるから、第一番の留學生とも云ひ得るのである。又湖廣總督張之洞が勅命を奉じて「奏定學堂章程」てふ、日本の教育制度に摸倣しての新教育制度を制定したのも日露戰役前であり、南洋大臣陳寶琛が西太后の忌諱に觸れて野に下り、その故山福州に全閩師範學堂を創設したのも亦同じ頃である、此の學堂の總教督として迎へられたのが校友桑田豐藏で、追々他の校友も支那に赴き教鞭を執つた。此の他日支を結びつける爲に支那に赴いた有力の校友は少くなかつた。柏原文太郎、井上雅二、青柳篤恒、大內暢三、神田正雄等がそれであ

つて、早稲田に支那通の多くあるのは此の故である。勿論背後には大隈侯があつて常に支那の維新に後援を與へられ、支那朝野の有力者が絶えず侯を訪うて指導を受けた事も亦知れ渡つてゐる事實で、張之洞が勅を奉じて教育制度を定むる時も主として侯の意見を叩き書信の往復は頻繁であつた。

右の如き因緣もあるので、支那の學生が吾が早稲田に來たり學んだのも、明治三十年頃から始つて居る。乃ち東京專門學校時代に早く、心ある支那學生は來學し、日本の學徒と伍をなして專門の學科を修めたものもあつて、此の卒業生の内には後に支那の要路に立つた秀才が少からずある。以上の如き事情であるから、清國留學生部が開けると、清國學生は潮の如く來たり、其の數は一千名乃至一千五百名の多きに達した。そして學科は、豫科一年、本科二年、補習科一年、師範科（物理化學科、博物學科、歷史地理科）政法理財科及び商科をも置いた。此の時に設けられた理化は他日理工大學を開くの先驅であつたのだが、勿論清國留學生に課する一時の設備であつた。

此の部の衝に當つたのは靑柳篤恒で、浮田博士始め數多の學者が教鞭を執り、松平康國が張之洞の顧問として支那に赴き、中島半次郎が天津の直隷師範學堂に、中桐確太郎が杭州の浙江師範學堂に迎へられた等、みな此の留學生部に因緣することであり、留學生に就いても語るべきことがあるが、今は唯彼等の内に少からず秀才のあつたことを言ふに止める。彼等の内理化學を修めたものが、卒業の際に或る實驗を試みて吾等に示したことがある。第一驚いたのは日本語の縱横であることで、實驗の

說明も頗る巧妙で、教授よりも却つて老練であるなど評するものもあつた。又ある時早稲田八景の題を設けて、選景と記文を校内一般學生に徵した時、甲乙丙共に皆清國生の占むる所となつた。此の樣の事は彼等のお手のものとは云へ、或るものは日本の古書を探つて地名の考證をしたものがあり、或るものは漢文の記文の外に和文の記を添へたものもあつた。

明治四十年學校の創立二十五周年の典を擧げたのは、理工學部計畫を發表するのが主であつて、此の時に大隈侯を名譽總長に戴き、久しく校長たりし鳩山氏退き、高田學監其の後を襲うて學長となつたのも、皆理工大學を開始する爲の準備であつた。又此の式典に大隈侯が學校の敷地全部を寄附されたのも、江湖に資金募集をなす範を先づ示されたものであつた。實は私學に理工學科を開くのは、何れかと云へば大膽なる計畫であつた。理工の學科は建設にも維持にも頗る多費を要し、到底月謝の收入などで償ひ得るものでない。本校の諸科は皆机と黑板だけで教授の出來る簡單のものであるが、理工科となると多般の機械を要し、藥品を要する。建物も講堂のみでなくラボラトリーや製圖室などを要する。其の經費の多端なる、私學に於て理工科の經營は到底不可能とされたものだ。併し如何に困難であつても、本校創立の際からの宿志でもあり、又既に本校を大學と稱するからには體面上これを缺く譯にゆかぬ。醫科も亦同樣備はらねばならぬが、その建設も私學に於て同じく困難である。本校は理工科醫科何れを先にすべきやにつき熟考もしたが、醫科の建設には多費を要すれども、病院が附

屬すれば經營維持は理工科よりも樂と知れたが、經營困難の理工科を先づ開くことにしたのは確に雄雄しき決心であつた。

今想ひ起すのは四十年の秋の頃、高田、田原(榮)と私が箱根の塔の澤の旅館に立て籠つて、三人分擔して趣意書や課程表や基金募集方法などを立案した。之が此の學科開始の發端で、明治四十一年の二月、機械、採鑛、電氣、土木、建築、應用化學の諸科を漸次開始することを公表し、同年四月、先づ機械電氣二科の豫科を開始した。此の計畫が天聽に達し、吾が大學の既往の功績を嘉賞あらせらるると共に、新學科設置の資金下賜の洪恩に浴した。之が基金募集を爲すに大なる先例をなしたので、眞に大幸であつて、深く皇恩に感激した。

差當り此の恩賜を永久に記念するため、恩賜記念館を建設することゝなり、皇恩を各學科に均霑する趣意を以て、館内に各科の研究室を設け、貴賓室、會議室等も備はり、煉瓦の新館は學校に大いに威容を添へた。此の館は後年左端に一翼を張るの增築を行ひ、大震災の禍をも免かれて、今現に壯觀を呈してゐる。

此の學科開設當時頗る思慮を要したことは學科の程度方針であつた。此の頃はまだ私設大學を大學令で律する事がなかつたので、成るべく必要の學科を選び、實際を旨とし、理論に馳せない事を方針とし、斯道に經驗のある手嶋精一氏より種々の指導を受け、氏の推薦で阪田貞一氏を科長に擧げた。

既に或る科の豫科を開き、一方には資金の募集を開始したが、さて困難を感じたことは、適當の教授を得ることであつた。然るに爰に意外の仕合はせを得たのは、一擧多數の教授の寄附を得たことである。これより先、現に本校の校賓である竹内明太郎氏は、自ら理工の學校を起さんとする企があつて、之に要する教授を諸外國に遊學せしめつゝあつた。氏は早稻田に此の學あるを聞き、基礎ある早稻田の學校に斯かる計畫があるからには、自分の企は全然見合はせて折角養成しつゝある學者を早稻田へ讓ると申出られ、且つ留學期の滿たざる人々に對して氏は留學費も支給をつゞけられた。之は實に創業の場合に於て金錢に換へられない仕合はせであつた。竹内氏が海外に遊學せしめた各科の人々は都合五名で、電氣工學では牧野賢吾氏、機械工學では遠藤政直氏、採鑛學では小池佐太郎氏、建築工學では佐藤功一氏、冶金學では岩井與助氏であつた。此等の人々は追々歸朝して此の科創設の際教鞭を執られたので、一大難關を突破し得たのは全く竹内氏の義俠に由るのであつた。

基金の募集は明治四十一年から開始し、百萬圓の資を得んとしたが、申込額は九十三萬四千圓に及んだが實收額は七十四萬圓であつた。此の資金で諸般の設備が悉く成つた譯でなく、追々增設の學科のため少からぬ費用を要したが、茲に特記を要するは、故森村市左衞門氏が、化學の實驗室を建てゝ寄附されたことである。此の實驗室は大震災の際實驗用の藥から火を發して燒失したが、森村家では復興の資を再度寄附された厚意は忘れ難いものがある。又此の學科開設のため、清國の大官十數人よ

り若干の寄附のあつたのは曩に清國留學生部を開いた緣故から謝恩の意を寓するものであつた。

理工科の完成までに五六年を費し大正二年の秋創立三十年に當るので、記念の式典を擧げ、六日間に亙り理工諸科の設備を開放して一般の觀覽に供したが、それまでの苦心は容易なものでなく、資金の募集もしば〳〵繰返された。顧みれば創立の際に力を致された人々の內、鬼籍に入つたものが少くないことを思ふと憯然たらざるを得ない。

理工科回顧を結ぶに當り附記を要することが二つある。それは大正九年に大學令が發布されて、吾が理工科もこれに據ることゝなり、學科の程度を高めたり、教授を入れ替へたり種々の經營があつたけれども、既に基礎のあるのを高度にするだけの事で、苦もなく理工大學の成つたのは眞に幸であつた。なほ簡易の工手學校を創設して夜學を開いたのは、理工科を設けてから一二年後の事であるが、これも理工大學の整備の敎場や器械を流用するので、工手學校の發展に大なる助けをなした。單に敎場器械が流用されたのみならず、敎授まで流用を得たのは夜學生には非常の仕合はせで、四千の學徒が來たり學ぶの盛況を呈したのも偶然でなかつた。多費を要する本科の經營が、此の副業とも云ふべき夜學の收入で、幾許裨補を得たことも洩らしてはならぬ。

早大の發展期の大略は以上の如くであるが、書き洩らした事が幾多ある。其の中御卽位記念に圖書

館を改造したことは補記を要する。此の改造は閱覽室書庫の外に各科の研究室を添設し二期に亙つて工事を完成したのである。振返つて考へるとよくも矢繼ぎばやに發展を續けたものと思ふ。早大の學府は遂にあらゆる學校を包有するに至つた。人或は曰く、早大は餘りに手を擴げ過ぎたと。これは私學の經營の要訣を知らない官學經營家の云ふことであつて、多般の學校を包有し互に相扶けて經濟の有無を通ずるのでなければ、全般の經營が出來ないのである。此の要訣は會計法に縛られてゐる官學經營家に理解されないのは無理もないが、實は私學經營の難も妙も亦こゝに存するのである。早大は百難に打克ち發展期を經て擴充期に入り、創業期から二十年間も尺寸の地さへ有せざりし學園が今有する土地のみでも千二三百萬圓を算するに至り、創立半世紀に出したあらゆる學科の卒業生を通算すれば十萬人にも達してゐる。

回顧錄 終

12772

昭和十六年三月二十日印刷
昭和十六年三月二十五日發行

回顧錄 定價二圓五十錢

著者 市嶋謙吉

發行者 木田開
東京市麹町區丸ノ内二丁目二番地

印刷者 堀修造
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 大日本印刷株式會社榎町工場
東京市牛込區榎町七番地

發行所 東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルディング五八八區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ内(23)五三五番
五五三六番
五五三七番
五五三八番

版權所有・中央公論社

3592
ette
cy

市嶋春城選集 刊行 内容

毎卷約三百五十頁
定價二圓五十錢

既刊

回顧錄

東西藝術の相違、茶人の趣味教育、玩香、作庭藝術、石を語る、鐘考、書齋六面觀、紅霞山房印話、水鳥漫談、酒趣百則等數十項。著者の該博なる趣味と造詣の發露である。近日發刊。

趣味談叢

出版の今昔、圖書館の不備と其補足私案、高麗藏經に就て、日本の僞書一斑、慕夏堂集、余の隨筆觀、大名の藏書家、ハンターと光悅、馬琴と北越雪譜、藏書家の耽溺、天平時代の紙、草双紙、書簡の趣味等大小數十項。

訪書餘錄

木戸孝允、田中光顯、大隈重信、近衞霞山、古河市兵衞、安田善次郎、津田仙後藤新平、兒玉源太郎、中村敬宇、尾崎紅葉、小野梓、高島呑象、坪内逍遙、樋口一葉等々語るは一世の英傑、文人豪賈、畫人碩學七十數家の人物、逸事。

人物雜觀

帝王文學の偉觀、戲號、僧雲華、豐太閤と宗湛、豪商の盛衰、先斗町の名の由來、元祿義擧の隱れた後援者、茶山鵬齋邂逅談、江戸兒趣味、大名の和菓子趣味、名人紋十郎、夜鷹蕎麥、百鬼夜譚、女帶、藝の祕訣、酒と勤王等百五十項。

雅俗相半錄

山陽の生活、文藝、趣味、雜事及び諸家との交游を細大洩らさず記述し、山陽の遺跡を隈なく訪ふ。追錄補遺の他に賴氏略譜、山陽年譜を附し、梨影夫人の詳傳を補ふ。著者畢生の快作として自他共に認むる好著。近日發刊。

隨筆賴山陽